福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1145集

香 椎 A 遺 跡 4

― 一般国道３号博多バイパス建設に伴う調査４ ―

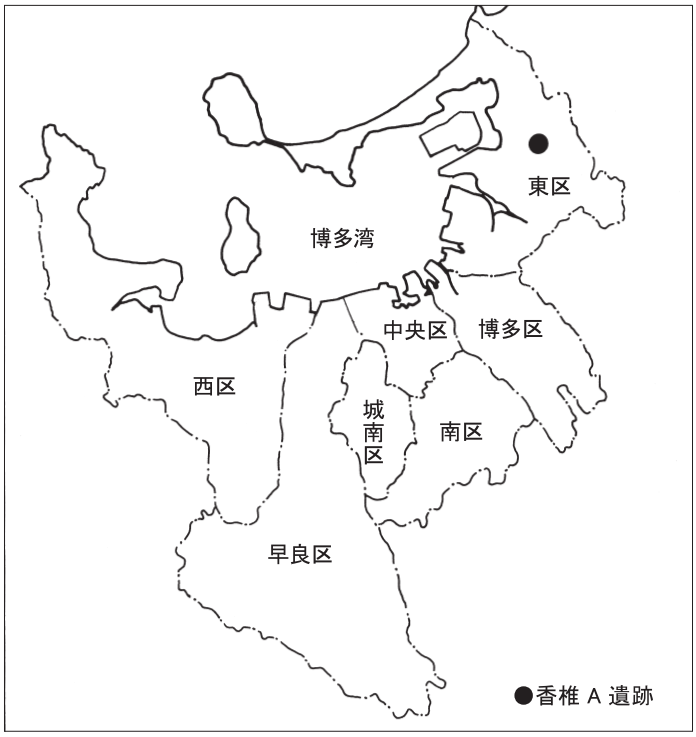
2012

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1145集

香 椎 A 遺 跡 4

― 一般国道３号博多バイパス建設に伴う調査４ ―



調査番号 0921・1009 **遺跡略号** KSA-6・7

2012

福岡市教育委員会

香椎Ａ遺跡第６・７次調査全景（上空から、デジタルモザイク）

巻頭図版２

香椎Ａ遺跡第６次調査　SD10下層出土　浅鉢

香椎Ａ遺跡第６次調査　SD10下層出土　深鉢

香椎Ａ遺跡第６次調査　SD10下層出土　深鉢

香椎Ａ遺跡第６次調査　SD11下層出土　浅鉢

巻頭図版４

香椎Ａ遺跡第７次調査　SD10　３層出土　深鉢

香椎Ａ遺跡第７次調査　Ⅶ区黄灰色粘質土層出土銅矛

序

福岡市には、豊かな自然とともに、多くの文化遺産がのこされており、地理的位置から、古くから対外交渉の拠点の一つとして大きな役割を担ってきました。

これら先人の遺産を保護し未来へと伝えていくことは、私たちの重要な務めです。

福岡市教育委員会では、開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存、出土遺物などの活用に努めています。

本書は、一般国道３号博多バイパス建設に伴い、発掘調査を実施した東区香椎Ａ遺跡の第６・７次調査の成果を報告するものです。遺跡のある香椎地区は福岡市東部の副都心として発展する一方、万葉集や記紀の伝承の舞台としても広く知られています。香椎Ａ遺跡の調査で得られた成果は、香椎地区の歴史を解明する上での一助になるものと考えます。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、福岡国道事務所、地元町内会を始めとする関係者の方々とのご理解とご協力を賜りましたことに対し、こころからの感謝の意を表する次第です。

平成24年３月16日

福岡市教育委員会

教育長　**酒　井　龍　彦**

例　言

1　本書は福岡市教育委員会が一般国道３号博多バイパス建設に伴い、福岡市東区香椎二丁目地内で発掘調査を実施した香椎Ａ遺跡第６・７次調査の報告である。

2　本書で報告する調査の細目は下表のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査対象面積	調査面積	調　査　期　間
0921	KSK－６	2,500㎡	1,429㎡	2009年８月25日～12月21日
1009	KSA－７	2,825㎡	1,548㎡	2010年５月６日～10月26日

3　本書に掲載した遺構の写真撮影は佐藤一郎（埋蔵文化財第２課主任文化財主事)、航空写真、空中写真撮影、デジタルモザイク写真作成は写測エンジニアリング株式会社に委託した。実測は佐藤の他、立石真二・藤野雅基（同課技能員）が行った。製図は佐藤・藤野が行なった。

4　遺物の写真撮影は佐藤、実測は土器を佐藤、旧石器は吉留秀敏（埋蔵文化財第２課主任文化財主事)、青銅器は宮井善朗（埋蔵文化財第１課事前審査係長）その他の石器・木製品は立石、製図は土器を佐藤、石器他は立石が行なった。

5　遺物の整理は整理作業員の泉川信子・佐々木涼子・平井宏美・古賀美江・執行恭子が行った。

6　本書に用いた方位は座標北である。

7　遺構は２桁の通し番号を用い、遺構の種類に応じてSD（河川・溝等)、SK（土坑）の略号を番号の前につけた。

8　本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

9　本書の執筆は、旧石器に関して吉留秀敏、付篇の自然分析についてパレオ・ラボ、土器圧痕の検討については山崎純男、他は佐藤が、編集は佐藤が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに…… 9
　1　調査に至る経緯…… 9
　2　調査の組織…… 10
Ⅱ　遺跡の位置と周辺の歴史環境…… 10
　1　遺跡の位置…… 10
　2　周辺の歴史環境…… 11
Ⅲ　調査の記録…… 15
　1　調査の概要…… 15
　　(1) 試掘調査…… 15
　　(2) 調査の経過…… 15
　2　第６次調査Ⅰ区の遺構と遺物…… 18
　　(1) 調査区の概要…… 18
　　(2) 河川・谷…… 19
　　(3) 土坑…… 34
　3　第６次調査Ⅱ区と第７次調査Ⅳ区の遺構と遺物…… 36
　　(1) 調査区の概要…… 36
　　(2) 河川…… 37
　　(3) 杭列…… 37
　4　第６次調査Ⅲ区と第７次調査Ⅴ区の遺構と遺物…… 43
　　(1) 調査区の概要…… 43
　　(2) 河川・谷…… 47
　5　第７次調査Ⅵ区の遺構と遺物…… 69
　　(1) 調査区の概要…… 69
　　(2) 溝（第50図）…… 69
　6　第７次調査Ⅶ区の遺構と遺物…… 74
　　(1) 調査区の概要…… 74
Ⅳ　調査のまとめ…… 74
　香椎Ａ遺跡第６・７次調査の旧石器資料（吉留秀敏）…… 85

付篇

　香椎Ａ遺跡第７次調査Ⅴ区の花粉分析（森将志　パレオ・ラボ）…… 89
　香椎Ａ遺跡第７次調査Ⅴ区の大型植物遺体
　　(佐々木由香・バンダリスダルシャン パレオ・ラボ）…… 95
　香椎Ａ遺跡第７次調査Ⅴ区の植物珪酸体（米田恭子　パレオ・ラボ）…… 99
　香椎Ａ遺跡出土土器胎土中の炭化種実同定（佐々木由香・バンダリスダルシャン）…… 103
　香椎Ａ遺跡の圧痕資料（山崎純男）…… 105

挿 図 目 次

第１図　香椎Ａ遺跡の位置と周辺の遺跡（縮尺 1/50000）…… 12
第２図　香椎Ａ遺跡周辺古地形図（縮尺 1/50000）…… 13
第３図　香椎Ａ遺跡周辺図（縮尺 1/5000）…… 14
第４図　香椎Ａ遺跡第６・７次調査発掘地（縮尺 1/1000）…… 16
第５図　第６次調査Ⅰ区遺構配置図（縮尺 1/200）…… 18
第６図　Ⅰ区土層図（縮尺 1/ 60）…… 19
第７図　SD01出土遺物実測図１（縮尺 1/3）…… 20
第８図　SD01出土遺物実測図２（縮尺 1/3）…… 22
第９図　SD01下層出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 23
第10図　SD01出土石器実測図１（縮尺 1/3・1/2）…… 24
第11図　SD02出土石器実測図２（縮尺 1/1）…… 25
第12図　SD02出土石器実測図３（縮尺 1/1）…… 26
第13図　SD02出土石器実測図４（縮尺 1/1）…… 27
第14図　SD02出土土器実測図１（縮尺 1/3）…… 29
第15図　SD02出土土器実測図２（縮尺 1/3）…… 30
第16図　SD02出土土器実測図３（縮尺 1/3）…… 31
第17図　SD02出土土器実測図４（縮尺 1/3）…… 33
第18図　SD02出土石器実測図（縮尺 1/1）…… 34
第19図　SK03実測図（縮尺 1/20）…… 35
第20図　SK03出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 35
第21図　第６次調査Ⅱ区・第７次調査Ⅳ区遺構配置図（縮尺 1/200）…… 36
第22図　Ⅳ区 SD05土層図（縮尺 1/ 60）…… 37
第23図　杭列実測図（縮尺 1/40）…… 38
第24図　Ⅱ・Ⅳ区 SD05出土土器実測図（縮尺 1/3）…… 39
第25図　Ⅳ区 SD05出土土器実測図（縮尺 1/3）…… 40
第26図　Ⅳ区 SD01出土石器・木製品実測図（縮尺 1/3）…… 41
第27図　SD21出土土器実測図（縮尺 1/3）…… 42
第28図　第６次調査Ⅲ区・第７次調査Ⅴ区遺構配置図（縮尺 1/250）…… 44
第29図　Ⅲ・Ⅴ区土層図１（縮尺 1/ 60）…… 45
第30図　Ⅲ・Ⅴ区土層図２（縮尺 1/ 60）…… 46
第31図　SD10上層出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 47
第32図　SD10下層出土土器実測図１（縮尺 1/3）…… 49
第33図　SD10下層出土土器実測図２（縮尺 1/3）…… 50
第34図　SD10下層出土土器実測図３（縮尺 1/3）…… 51
第35図　SD10下層出土土器実測図４（縮尺 1/3）…… 52
第36図　SD11下層出土土器実測図１（縮尺 1/3）…… 53
第37図　SD11下層出土土器実測図２（縮尺 1/3）…… 54

第38図　SD11下層出土土器実測図３（縮尺 1/3） …… 55
第39図　SD11下層出土土器実測図４（縮尺 1/3） …… 57
第40図　SD10・11出土石器実測図１（縮尺 1/3・1/2） …… 59
第41図　SD10・11出土石器実測図２（縮尺 1/1） …… 60
第42図　SD10・11出土石器実測図３（縮尺 1/1・1/2） …… 61
第43図　SD10 ３層出土土器実測図１（縮尺 1/3） …… 62
第44図　SD10 ３層出土土器実測図２（縮尺 1/3） …… 63
第45図　SD10 ３層出土土器実測図３（縮尺 1/3） …… 64
第46図　SD10 ３層出土土器実測図４（縮尺 1/3） …… 65
第47図　SD11 ３層出土土器実測図１（縮尺 1/3） …… 66
第48図　SD11 ３層出土土器実測図２（縮尺 1/3） …… 67
第49図　SD10・11出土石器実測図（縮尺 1/1・1/2・1/3） …… 68
第50図　第７次調査VI区遺構配置図（縮尺 1/200） …… 70
第51図　VI区土層図（縮尺 1/60） …… 71
第52図　SD36土層図（縮尺 1/60） …… 71
第53図　SD24～28出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4） …… 73
第54図　SD25～36出土石器実測図（縮尺 1/1・1/3） …… 75
第55図　第７次調査VII区遺構配置図（縮尺 1/100） …… 76
第56図　VII区土層図（縮尺 1/60） …… 77
第57図　VII区出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3） …… 77
第58図　香椎Ａ遺跡第６・７次調査出土旧石器時代資料Ⅰ（縮尺 1/1） …… 86
第59図　香椎Ａ遺跡第６・７次調査出土旧石器時代資料Ⅱ（縮尺 1/1） …… 87
第60図　香椎Ａ遺跡第６・７次調査出土旧石器時代資料Ⅲ（縮尺 1/1） …… 88

図 版 目 次

巻頭図版　1　香椎Ａ遺跡第６・７次調査全景（上空からデジタルモザイク）
　　2　香椎Ａ遺跡第６次調査SD10下層出土浅鉢・香椎Ａ遺跡第６次調査SD10下層出土深鉢
　　3　香椎Ａ遺跡第６次調査SD10下層出土深鉢・香椎Ａ遺跡第６次調査SD11下層出土深鉢
　　4　香椎Ａ遺跡第７次調査 SD10３層出土深鉢・Ⅶ区黄灰色粘質土出土銅矛

図版１　香椎地区空中写真
図版２　1　香椎Ａ遺跡第６次調査　Ⅰ区全景（南西から）
　　2　香椎Ａ遺跡第６次調査　Ⅰ区全景（北から）
図版３　1　SD02（南から）　2　SX03（北東から）
図版４　1　香椎Ａ遺跡第６次調査　Ⅰ・Ⅱ区全景（南西から）
　　2　香椎Ａ遺跡第６次調査　Ⅱ区全景（北東から）
図版５　1　杭列１（西から）　2　杭列３（北から）
図版６　1　香椎Ａ遺跡第６次調査　Ⅲ区全景（南東から）
　　2　香椎Ａ遺跡第６次調査　Ⅲ区全景（北東から）
図版７　1　香椎Ａ遺跡第６次調査　Ⅲ区全景（南西から）
　　2　香椎Ａ遺跡第６次調査　Ⅲ区全景（上空から）
図版８　1　SD10土層（北西から）　2　SD11土層（北西から）
図版９　1　SD10南東壁面土層（北西から）　2　SD10南東壁面土層（北西から）
　　3　SD11東半部（北東から）　4　SD11土層観察畦取払い（南東から）
　　5　SD10北西壁面土層（南東から）　6　SD11北西壁面土層（南東から）
図版10　1　SD10下層土器２出土状況　2　SD11下層土器１出土状況
　　3　SD11下層土器１出土状況　4　SK12（北から）
　　5　SD14（南から）　6　SD13（南西から）
図版11　1　香椎Ａ遺跡第７次調査　Ⅳ区全景（南西から）
　　2　香椎Ａ遺跡第７次調査　Ⅳ区西壁土層（東から）
図版12　1　香椎Ａ遺跡第７次調査　Ⅳ区全景（上空から）
　　2　SD21土器出土状況（北東から）　3　SD21（北東から）
図版13　1　杭列４（南東から）　2　杭列５RW01（北西から）
　　3　杭列５RW02（西から）
図版14　1　香椎Ａ遺跡第７次調査　Ⅴ区全景（上空から）
　　2　香椎Ａ遺跡第７次調査　Ⅴ区西壁土層（北東から）
図版15　1　SD11下層２群（北東から）　2　SD10下層１群（西から）
　　3　SD11下層１群（北東から）　4　SD11下層４群（北西から）
　　5　SD11下層３群（西から）　6　SD10下層２群（北東から）
図版16　1　香椎Ａ遺跡第７次調査　Ⅵ区全景（東から）
　　2　香椎Ａ遺跡第７次調査　Ⅵ区全景（南から）
図版17　1　SD36（北東から）　2　SD36南壁土層（南東から）

図版18　1　香椎A遺跡第７次調査 Ⅶ区北側（南東から）
　　2　細型銅矛出土状況（北東から）
図版19　1　香椎A遺跡第７次調査 Ⅶ区南側（南東から）
　　2　SD38（南東から）
図版20　SD01・02出土土器
図版21　SD02出土土器
図版22　SD02・05・SK03出土土器
図版23　SD10（Ⅲ区）下層出土土器１
図版24　SD10（Ⅲ区）下層出土土器２
図版25　SD10（Ⅲ区）下層出土土器３
図版26　SD10（Ⅲ区）下層出土土器４・SD11（Ⅲ区）下層出土土器１
図版27　SD11（Ⅲ区）下層出土土器２
図版28　SD11（Ⅲ区）下層出土土器３
図版29　SD11（Ⅲ区）下層出土土器４
図版30　SD11（Ⅲ区）下層出土土器５
図版31　SD11（Ⅲ区）下層出土土器６・SD05（Ⅱ区）出土土器
図版32　SD21（Ⅳ区）下層出土土器・SD26他出土土器
図版33　SD11（Ⅴ区）３層出土土器１・SD10（Ⅴ区）３層出土土器１
図版34　SD10（Ⅴ区）３層出土土器２
図版35　SD10（Ⅴ区）３層出土土器３
図版36　SD10（Ⅴ区）３層出土土器４・SD11（Ⅴ区）３層出土土器２
図版37　SD11（Ⅴ区）３層出土土器２
図版38　香椎A遺跡第６次調査出土石器１
図版39　香椎A遺跡第６次調査出土石器２・香椎A遺跡第７次調査出土石器１
図版40　香椎A遺跡第７次調査出土石器２

表　目　次

第１表　香椎Ａ遺跡第６・７次調査 土器一覧表１ …… 79
第２表　香椎Ａ遺跡第６・７次調査 土器一覧表２ …… 80
第３表　香椎Ａ遺跡第６・７次調査 土器一覧表３ …… 81
第４表　香椎Ａ遺跡第６・７次調査 土器一覧表４ …… 82
第５表　香椎Ａ遺跡第６・７次調査 土器一覧表５ …… 83
第６表　香椎Ａ遺跡第６・７次調査 土器一覧表６ …… 84
第７表　香椎Ａ遺跡第６・７次調査 土器計測表 …… 84
第８表　香椎Ａ遺跡第６・７次調査 石器一覧表 …… 85

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯

一般国道３号線は、北九州市を起点とし、福岡市、久留米市、熊本県を経由して、鹿児島に至る426.4㎞の路線である。福岡市においては、市東部地域と中心部の中央区や博多区を結ぶ重要な路線であるため、一日当たりの交通量は６万８千台～７万５千台と集中し、慢性的な交通渋滞をもたらしている。国道周辺を含めた交通混雑の緩和、流通センター、空港、港への効率的な物流活動の支援、都市基盤整備が進められている香椎地区の総合的な交通体系の構築などの効果を期すべく、東区下原から二又瀬に至る延長7.7km、幅員30～32mの一般国道博多バイパスが事業化された。そのうち現在までに二又瀬交差点から多々良中西交差点までの南側３～５工区4.44㎞が供用となり、北側の下原までの２工区3.28kmが残った。

平成３年10月、建設省（現国土交通省）九州地方建設局（現整備局）福岡国道事務所から福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対し、２工区のうち多々良中西交差点から香椎二丁目に至る路線内の埋蔵文化財事前審査依頼（事前審査番号3–1–143）があった。現在のＪＲ千早駅の東からＪＲ香椎線に至る狭隘な丘陵部で、埋蔵文化財包蔵地には含まれてはおらず、踏査においても遺跡の存在は認められなかった。

さらに北側の香椎二丁目の路線内の周知の埋蔵文化財包蔵地（香椎Ａ遺跡、香椎Ｅ遺跡）については両者で協議を行っていたが、平成17年４月に国道事務所から事前審査依頼（17–1–2）があり、８月と９月に、埋蔵文化財課がバックホーによる確認調査を行った。その結果、香椎Ａ遺跡内ではこれまでの周辺の調査成果と同様に中世を中心とした遺構が広く展開していることが確認された。香椎Ｅ遺跡内は厚く盛土が行われ、大型のバックホーは進入できず、遺構の確認はできなかった。これを受けて、香椎Ａ遺跡は発掘調査が必要、香椎Ｅ遺跡については再試掘調査が必要と回答した。

平成19年３月に香椎二丁目から北側終点の下原に至る事前審査依頼（19–1–1）が国道事務所から提出され、埋蔵文化財第１課では４月に、香椎駅東一丁目と三丁目で試掘調査を実施した。いずれも丘陵にはさまれた谷部に立地し、埋蔵文化財包蔵地外であった。そのうち一丁目の一部では7世紀の遺物が大量に出土し、坂堤遺跡として埋蔵文化財包蔵地に新規登録された。

２工区内では香椎Ａ遺跡、坂堤遺跡が発掘調査の対象となり、埋蔵文化財第１課は国道事務所と２遺跡について協議を重ねた結果、平成19年度から発掘調査を行うこととなった。平成19年７月発掘調査委託契約を締結し、同月には坂堤遺跡第1次調査に入った。10月からは香椎Ａ遺跡の第4次調査に入り、平成22年度の第７次調査まで継続して調査が行われた。

香椎二丁目地内北側の香椎Ａ遺跡隣接地については、福岡国道事務所からの平成19年３月26日付の事前審査依頼（同19–1–1）を受け、翌平成20年１月28日と２月９日の２日にわたる試掘調査で遺構を確認、遺跡の範囲を確定させて、発掘調査に至った。

2　調査の組織

発掘調査委託
　国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所
発掘調査受託
　福岡市

発掘調査（平成21年度）
　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第１課
　　課　　長　　濱石　哲也
　　調査係長　　米倉　秀紀
　　発掘調査　　佐藤　一郎(主任文化財主事)
　　事前審査係長　宮井　善朗
　　　　　　阿部　泰之(文化財主事)

発掘調査・資料整理（平成22・23年度）
　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第２課
　　課　　長　　田中　壽夫
　　第１係長　　米倉　秀紀
　　資料整理　　佐藤　一郎(主任文化財主事)
　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第１課
　　事前審査係長　宮井　善朗
　　平成22年度　　阿部　泰之(文化財主事)
　　平成23年度　　今井　隆博(文化財主事)

試掘調査は平成20年に埋蔵文化財第１課事前審査係長　吉留秀敏、同係主任文化財主事　宮井善朗、同係文化財主事　星野惠美（前任)、平成21年に同係文化財主事　阿部泰之が行った。

調査・整理の庶務は文化財部管理課管理係（平成21年度)・埋蔵文化財第１課管理係（平成22・23年度）の井上幸江が行った。

また、福岡国道事務所、地元香椎二丁目町内、発掘作業員、整理作業員の方々のご協力により、香椎Ａ遺跡第６・７次発掘調査、報告書作成にまで至ることができたことに対し心から謝意を表する。

Ⅱ　遺跡の位置と周辺の歴史環境

1　遺跡の位置

福岡市を中心に広がる広義の福岡平野は、東と南を三郡・脊振山地に囲まれ、北に突き出た山塊丘陵によって東から順に粕屋、福岡、早良の平野を形成している。香椎Ａ遺跡が所在する香椎は、粕屋平野の東北端、立花山（367m）西麓、博多湾を抱く陸繋砂州の海の中道の基部に位置し、西は博多湾内の埋め立てにより跡形もないが香椎潟を臨み、東は立花・三郡山塊に連なり、南は飯塚市に源を発する多々良川が流れる。多々良川は久原川や宇美川などと合流、名島海岸で博多湾に注ぐ。

香椎は福岡市東区の中央部に位置し、国道３号など幹線道路やＪＲ鹿児島本線など鉄道が交差する交通の要衝で、東は粕屋郡久山町、西は博多湾、南は千早、北は下原に接する。住宅地が広く展開し、千早とともに福岡市東部の副都心と呼ばれている。

香椎Ａ遺跡は福岡市東区香椎2・3丁目に所在し、老山から西の博多湾に向かって派生する丘陵上、および丘陵にはさまれた谷部に立地する。

2　周辺の歴史環境

香椎の歴史を述べていくと、古代では必然的に香椎宮を中心としたものとなる。

香椎宮の祭神は仲哀天皇・神功皇后で、応神天皇・住吉大神を配祀している。創建の時期は八幡宇佐宮御託宣集などによると、神亀元年（724）とされる。

『万葉集』巻6には、神亀5年（728）11月に大宰府長官帥大伴旅人、次官大弐小野老ら大宰府の官人たちが「香椎廟」に参拝し、香椎潟の景勝を愛でて詠じた歌が収められている。

いざ児等 香椎の潟に 白妙の 袖さへ濡れて 朝菜摘みてむ　　帥 大 伴 卿

時つ風 吹くべくなりぬ 香椎潟 潮干の浦に 玉藻刈りてな　　大弐 小野老 朝臣

往き還り 常にわが見し 香椎潟 明日ゆ後には 見むよしもなし　　豊前守宇努首男人

『万葉集』以降の和歌を類題別にまとめた延慶2年（1309）ごろ成立の『夫木和歌抄』にも、香椎潟を詠んだ歌が数首収められている。

かしひ潟 夕霧かくれ 漕ぎくれば あへのしまわに 千鳥しばなく　小侍従

現在は度重なる博多湾の埋め立てによって見る影もないが、当時は香椎潟が眼前にひろがり、先には志賀島、それに連なる海の中道を臨む。その砂丘上に位置する海の中道遺跡の発掘調査では漁村集落遺跡で通有な製塩土器・錘・釣り針などの漁撈具、魚骨・貝類に加え、越州窯系青磁、銙帯、皇朝十二銭の内4種8枚［万年通宝（鋳造760年）1枚、承和昌宝（835年）1枚、貞観永宝（870年）1枚、延喜通宝（907年）5枚］など官衙で多く見られる遺物が出土しており、大宰府の出先「津の御厨」との関連が指摘されている。『万葉集』では、香椎潟に加え、日常的に塩を焼き、志賀の浦で漁を行っていた「志賀の海人」が多く詠まれている。

『日本書紀』巻八 仲哀天皇 9年2月条には、熊襲平定の際に行宮「橿日宮」が置かれ、仲哀天皇が新羅征討の神託にそむいたためにその行宮で亡くなったこと、『日本書紀』巻九 摂政前紀には、神功皇后が新羅出征に先立ち、「橿日浦」の海水で髪をすすぎ、みずらに結ったことが記されている。

『続日本紀』には、天平9年（737）4月に朝廷の使を伊勢神宮、大神神社、筑紫の住吉神社、八幡神社の二社に加え、「香椎宮」に遣わして幣帛を奉じ、新羅の無礼を報告した記事が見える。

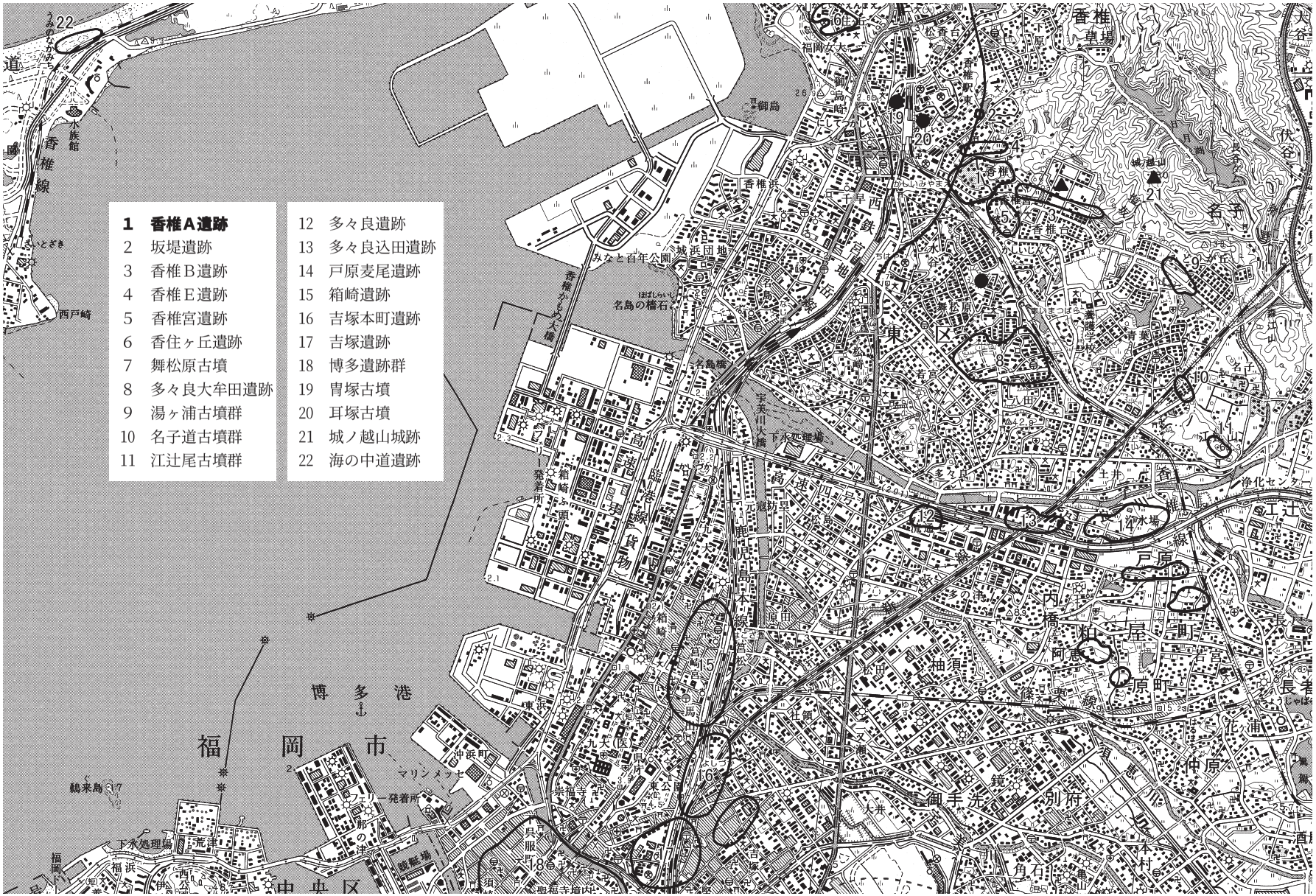
創建当初、朝廷の祭祀は対新羅外交に関するものが多く見られたが、天皇の即位や国内兵乱などに際しても勅使が差遣されるようになった。

承平年間（931–938）成立の百科事典『和名類聚抄』所載の粕屋郡九郷の一つ香椎郷は、現存する地名から香椎に比定されている。万葉仮名での訓は「加須比」とあてられている。郡名の粕屋が「加須也」と記されることから、語源を同じくするのであろうか。

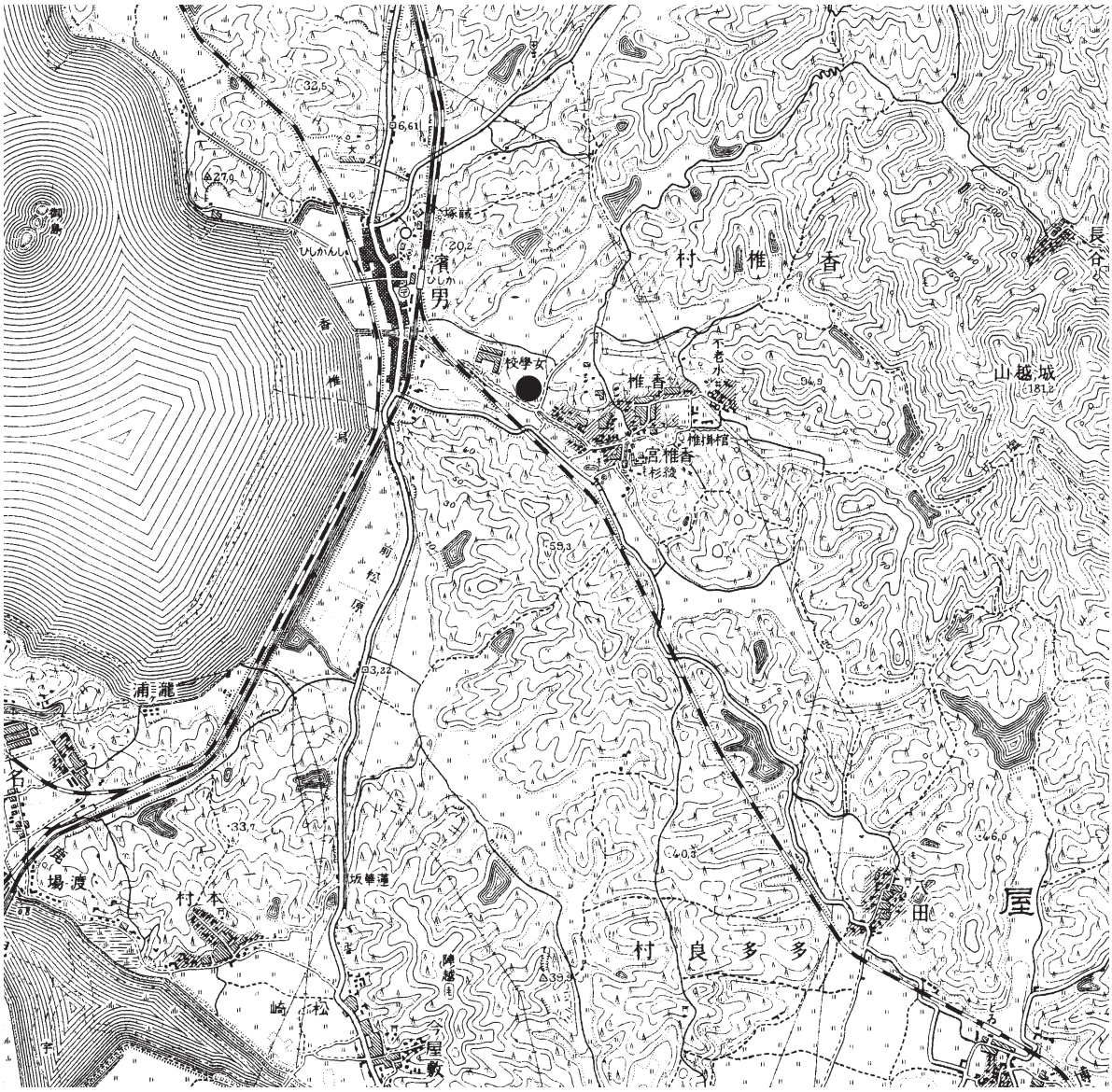
香椎宮は『延喜式』［延長5年（927）完成］神名帳にその名が見えず、式部省上に「橿日廟宮舎人」、民部省下に「香椎宮守戸一烟」とあるので、神社と山陵の取り扱いをかねていたようである。

平安時代前期には他の神社とは別格の扱いを受けていたが、やがて大宮司職が任命され、一般の神社と同様の性格をもつようになった。保延6年（1140）香椎宮神人らが大宰府と争い、香椎宮・筥崎宮は大宰府の管轄下に置かれ、府領となった。仁安元年（1166）平頼盛が大宰大弐に赴任すると香椎宮は頼盛の家領となるが、頼盛の死後、建久8年（1190）より長らく石清水八幡宮の管轄下におかれる。蒙古襲来に際して、豊後守護大友頼泰が異国警護番役として香椎・多々良を担当したことを契機に、戦国期に至るまで大友氏の支配を受けるようになる。

香椎地区では現在までに、香椎A遺跡で7次、香椎B遺跡で8次、坂堤遺跡で2次にわたって発掘調査が行われている。香椎A・B両遺跡では中世の居館、墳墓、B遺跡では山城（御飯ノ山）など、



第１図　香椎Ａ遺跡の位置と周辺の遺跡（縮尺 1/50000）



第２図　香椎Ａ遺跡周辺古地形図（縮尺 1/50000）　　●調査地

平安時代末から戦国時代にかけての遺構が主として検出されている(註1)。

引用・参考文献

川添昭二監修 重松敏彦編『大宰府古代史年表』吉川弘文館 2007、坂本太郎 他校注『日本書紀 上』日本古典文学大系 岩波書店 1967、佐佐木信綱編『新訂 新訓 万葉集 上巻』岩波書店 1927、直木孝次郎 他訳注『続日本紀2』東洋文庫489 平凡社 1988、黒板勝美 他編『新訂増補 国史大系 延喜式 中篇』吉川弘文館 1937

註１　調査報告書は以下の通り刊行されている。

香椎Ａ遺跡　「香椎Ａ遺跡第1次」『蒲田・水ヶ元遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第491集 1996
「香椎Ａ」同第317集 1993
「香椎Ａ遺跡２－香椎Ａ遺跡群第3次発掘調査概要－」同第622集 2000
「香椎Ａ遺跡3－ 一般国道3号博多バイパス建設に伴う調査2－」同第1072集 2010

香椎Ｂ遺跡　「香椎Ｂ遺跡－香椎住宅造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」同第621集 2000

坂堤遺跡　「坂堤1－ 一般国道3号博多バイパス建設に伴う調査1－」同第1030集 2009
「坂堤2－ 一般国道3号博多バイパス建設に伴う調査3－」同第1114集 2011

第３図　香椎Ａ遺跡周辺図（縮尺 1/5000）

Ⅲ　調査の記録

1　調査の概要

(1) 試掘調査

香椎A遺跡第6次調査は、福岡国道事務所からの平成19年3月26日付の事前審査依頼（受付番号19–1–1）を受けて、翌平成20年1月28日と2月9日の2日にわたる試掘調査で遺構を確認、遺跡の範囲を確定させて、発掘調査に至った。試掘調査は第4次調査地の北北西に延びる幅50m、延長120mの一部用地未買収地を除いた道路建設予定地内で行われた。現況は南側の香椎A遺跡隣接地が水田・畑地で、北側の香椎E遺跡に含まれる箇所には2m以上の盛土がなされている。

試掘トレンチは南側の水田・畑地に15本（トレンチ1～15)、北側盛土部分に3本（トレンチ16～18)設定された。

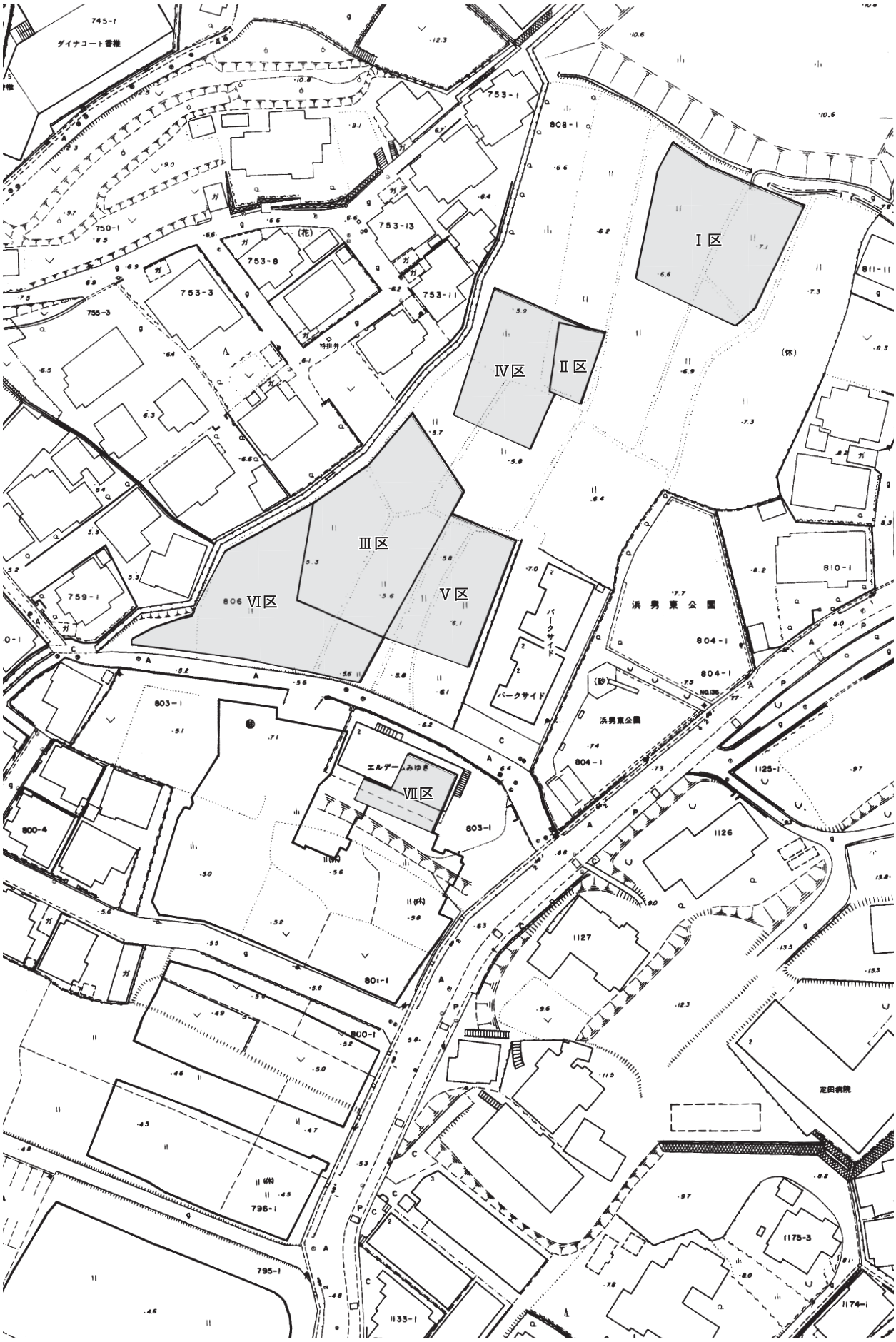
香椎A遺跡隣接地では水田・畑地部分は大きく改変され、丘陵部を削り、谷部は埋められていた。

南西のトレンチ1･2の南側、中央東側のトレンチ7･8、北端中央のトレンチ12では、耕作土・床土直下で地山が認められた。それ以外のトレンチは谷部に落ち込む斜面にあたり、床土の下に灰色・黄色粘質土が堆積していた。北東端のトレンチ11の床土直下、地表下25～30cmの地山（黄褐色粘質土）ではピット状遺構が確認された。また、南西端のトレンチ2～4では谷部に類似した堆積状況を呈し、埋土には木質を多量に含んでいた。トレンチ2の北側では、幅7m、深さ1.2mの溝状遺構が検出された。その東側のトレンチ3中央部では地表下60cmで地山が確認され、南北に落ち込んでいく状況が確認された。トレンチ1～3北側のトレンチ4ではトレンチ2へ向かう落ち込みが確認された。中央部のトレンチ14では、地表下90～95cmで須恵器・土師器小片を含む青灰色・黄褐色砂礫層が確認されたが、直下の黄褐色砂礫層では遺構は検出されなかったが、周辺の調査状況から発掘調対象とした。

試掘の成果から、北東端のトレンチ11・中央部のトレンチ14・南西端のトレンチ2北側・トレンチ3･4を含む3箇所を平成21年度調査の対象とした。

(2) 調査の経過

第6･7次調査地は遺跡の西端、香椎宮の北西約500m、JR香椎駅の南600m付近に位置する。調査地の南端に接して走る道路の南側は、同じ道路建設に伴い平成19（2007）年度から平成20（2008）年度にかけて発掘調査が行われている。現況は畑地で、南北約120m、幅約40mの国道バイパス計画用地の内、2009年度は試掘調査で絞り込まれた3か所（北側からそれぞれⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区）を、平成22（2010）年度には前年度に未買収等の事情で調査できなかった4か所（北側からⅣ区・Ⅴ区・Ⅵ区・Ⅶ区）を調査対象とし、順次調査を行った。現況では高低差がほとんどない平坦な畑地であったが、丘陵部を削り谷部を埋めて改変されたもので、削平を受けた部分には遺構は残存せず、床土直下で地山となる。谷部には床土の下に灰色・黄色粘質土が堆積し、落ち際の斜面では遺物が多量に出土した。



第４図　香椎Ａ遺跡第６・７次調査発掘地（縮尺 1/1000）

第６次調査

博多バイパス建設に伴う平成21（2009）年度の発掘調査は、4月16日から7月15日に坂堤遺跡第2次調査を実施し、引き続き8月25日から香椎Ａ遺跡第6次調査に着手した。重機を入れ北側のⅠ区から表土剥ぎを行った。翌26日から作業員を入れ遺構検出に着手した。南西に落ちる谷と西に開く谷、谷の落ち際では土器埋納土坑を検出した。9月9日には南西に落ちる谷部下層に堆積した黒色土から縄文晩期の土器片を確認した。10月21日に地形測量、10月28日空中写真撮影、10月30日土層実測を行った。11月18日数日前の降雨による冠水の影響の少ない東側から埋め戻し、降雨の影響で地盤が軟弱であったため、間を置きようやく乾燥し状態が好転した12月9日から填圧を行った。中央のⅡ区は、8月28日からⅠ区に引き続き表土剥ぎを行った。9月29日からは、北に向かって落ちる谷の斜面を掘り下げ、地山下層の岩盤、杭列を確認した。10月8日に肩部出しが終了し、10月21日に遺構実測（1/20）を行った。10月28日にⅠ区と同時に空中写真撮影を行った。11月2日に木杭の先端を出し、写真撮影、11月4日に追加実測、翌5日には木杭の取り上げを行った。11月17日に埋め戻しを行った。南側のⅢ区は、Ⅱ区に引き続き8月31日～9月7日に表土剥ぎを行った。試掘トレンチを浚い、更に一部延長し、遺構の確認を行い、古河川（流路跡）を2条確認した。上層から14世紀代の遺物が少量、下層（腐植土）からは縄文後晩期の遺物が出土した。11月20日には、古河川の落ち際で堅果類が出土した土坑を検出した。12月3日に空中写真撮影、12月4日・11日地形測量を行った。12月17日～21日に埋め戻し、平成21（2009）年度の第6次調査が終了した。

第７次調査

博多バイパス建設に伴う平成22（2010）年度の調査は、5月6日から着手した。重機を入れ北側のⅣ区から表土剥ぎを行った。同時に作業員を入れ遺構検出にかかった。Ⅳ区は前年度に行った第6次調査Ⅱ区西側に接し、その調査で検出された北に向かって落ちる谷SD05の斜面の延長と杭列を確認した。SD05の南側で8～9世紀の溝が2条検出され、調査区を南に拡張した。5月31日にほぼ掘り上がり、7月22日にⅤ区と同時に空中写真撮影を行った。追って杭列を構成する木杭先端を出し、写真撮影、実測を終えた。

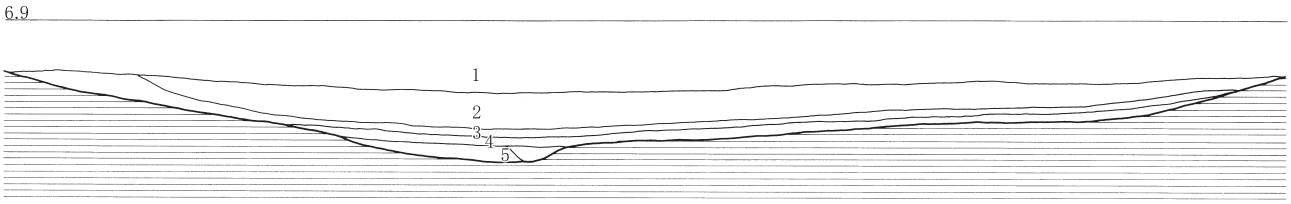
南側のⅤ区は、買収地と未買収地の境界にめぐらされていたフェンス解体後の5月31日から表土剥ぎを行った。前年度調査のⅢ区南東に接し、Ⅲ区検出の古河川（流路跡）SD10・SD11の延長を確認したが、調査区の中央部で谷頭を確認した。調査区の中央より丘陵側の南東部は後世の削平を受け、遺構は認められなかった。上層から14世紀代の遺物が少量、下層（腐植土）からは縄文晩期前半～中頃の遺物が出土した。7月22日に空中写真、追って地形測量を行った。Ⅵ区は第6次調査Ⅲ区西側に接し、7月22日から遺構検出に入った。調査区中央は後世の削平を受け、遺構は認められなかった。調査区の西辺縁に沿って8～11世紀の溝3条、東側で5世紀の溝1条を検出した。8月25日の空中写真に引き続き個別写真撮影、実測を行った。Ⅶ区は第4次調査の東北部、プレハブ事務所設置のため未調査の部分にあたり、事務所解体後の9月22日から既存の共同住宅のコンクリート基礎の間を縫うようにして調査を行った。第4次調査検出の谷の延長が確認された。10月12日の全景写真撮影に引き続き実測を行い、10月20日にはすべての調査区の埋め戻しを終え、10月26日の発掘機材撤収で平成22（2010）年度の第7次調査が終了した。

2　第６次調査 Ⅰ区の遺構と遺物

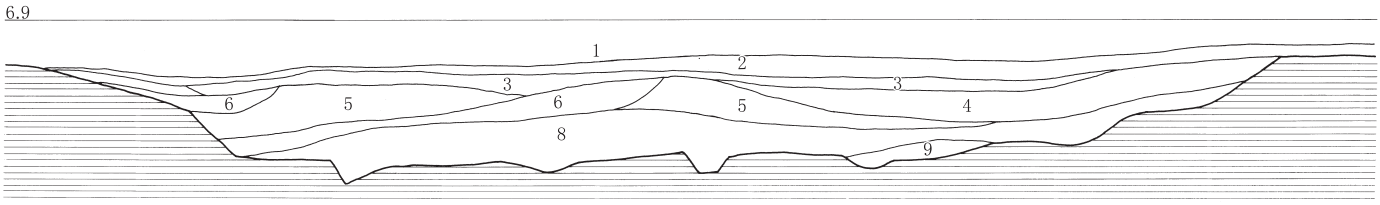
(1) 調査区の概要

試掘調査で絞り込まれた調査対象地3箇所の内、北側に位置する南北25m、東西27m の調査区である。削平を免れた南西部で、南西に落ちる谷 SD01と西に開く谷 SD02、SD01の落ち際では土器埋納土坑 SK03を検出した。出土した遺物は、5世紀の土師器が主で、全体で整理用コンテナ50箱に及ぶ。SD01下層からは縄文晩期の土器・石器が出土した。

第５図　第６次調査Ⅰ区遺構配置図（縮尺 1/200）



SD01南壁
1. 暗黄灰色粘質土 2.5Y 5/2 5mm 未満の砂礫を含む
2. 灰色粘質土 N4/2.5Y 5/2 5mm 未満の砂礫・木質を含む
3. 暗オリーブ灰色粘質土 2.5GY 3/1 5mm 未満の砂礫・木質・木炭を含む
4. 黒色粘質土 2.5GY 2/1 5mm 未満の砂礫・木質・木炭を含む 腐植土
5. オリーブ黒色土 7.5Y 3/1 5mm 未満の砂礫を含む 腐植土



SD02西壁
1. 暗灰黄色土 2.5Y 5/2
2. 粗砂
3. 黄灰色粘質土 2.5Y 5/1
3'. オリーブ灰色粘質土 2.5GY 6/1
4. 黒褐色粘質土 2.5Y 3/1 礫(5cm 未満)
5. 砂礫
6. 暗灰色粘質土 N 3/1
7. 暗オリーブ灰色粘質土 2.5GY 4/1 砂礫を多量に含む
8. 砂礫
9. 黒色粘質土 2.5GY 2/1 木質・木炭を含む
10. 暗灰色粘質土 N 3/

0 2m

第６図　Ⅰ区土層図（縮尺 1/ 60）

(2) 河川・谷

SD01 （第5･6図） 南西に落ちる谷で、上層から5世紀代の土師器、下層に堆積した黒色土（5層）からは縄文晩期の土器片を確認した。

出土遺物

土師器（第7･8図）

甕（1～8） 1～3は張った胴部に内湾する口縁部が開く。1･3の口縁端部は内側にやや突出する。4～7の口縁部は直線的に開く。8は二重口縁の甕で、口縁部内外面と胴部外面はハケ目、胴部内面はヘラ削り調整されている。

小型丸底壷（9～12･14） 9～11は短めの口縁部が内湾し、12は長めの口縁部が外反して立ち上がる。14は小型丸底壷に付く二重口縁とみられる。

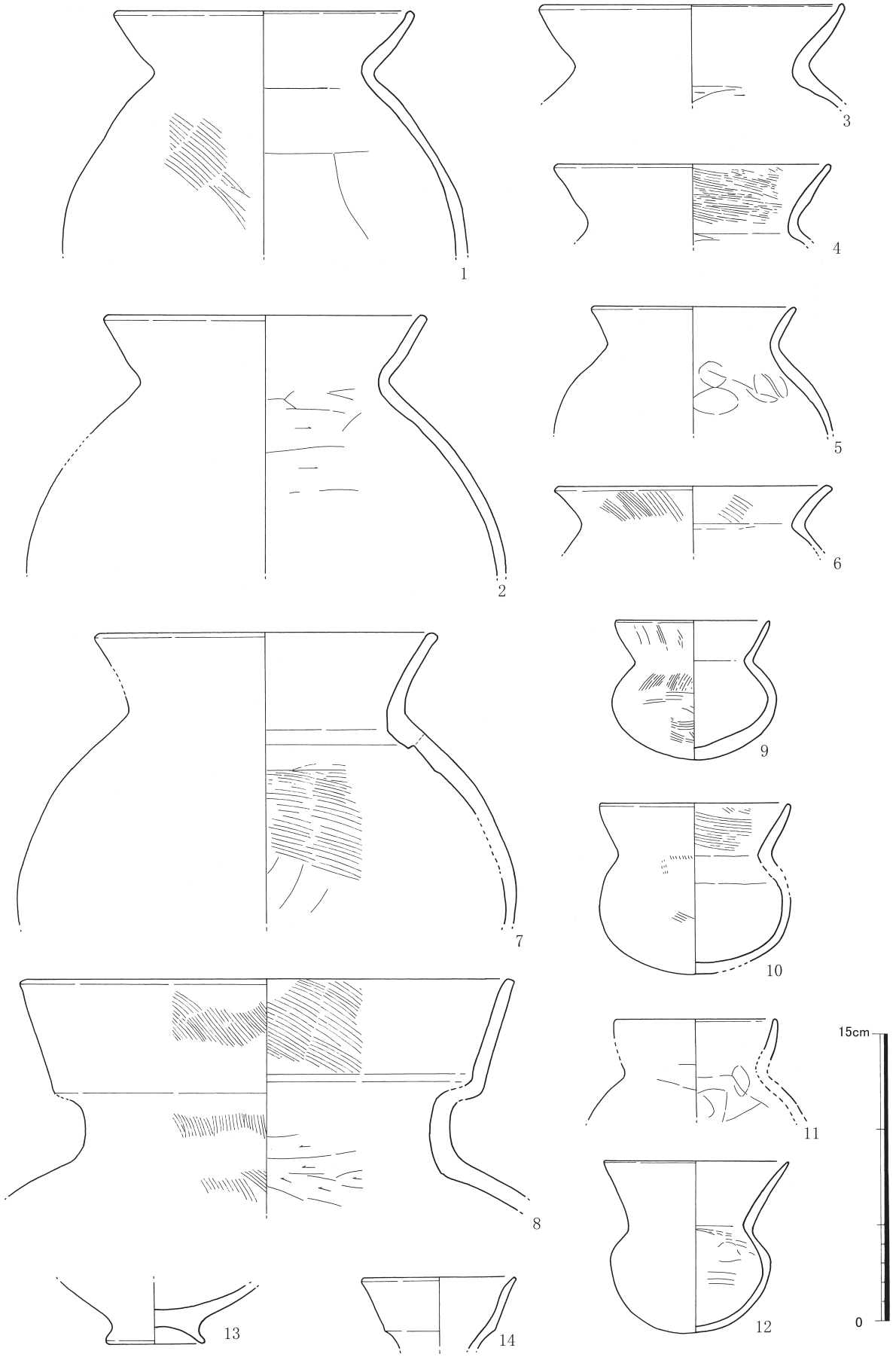
鉢（13･15） 13は台付鉢の底部片である。15は外反して短く開く「く」の字状口縁が付く。

杯（16）口縁部が内湾気味で端部は丸くおさめられている。

高杯（17～23） 17は外反する口縁部がのび、脚部の筒部と裾部の境は明瞭に屈曲し、鋭く稜を持つ。18～20は脚部が欠失し、平坦な内底から外反する口縁部がのびる。口縁部と底部の境は、18･19が明瞭に屈曲し鋭く稜を持つのに対し、20は屈曲が緩く、稜はみられない。19は口縁部の内外面ともハケ目を施す。21･22は杯部が欠失し、脚部の筒部と裾部の境は明瞭に屈曲し、鋭く稜を持つ。23は口縁部が欠失し、脚部は裾端まで一気に開き、円孔を穿つ。

蛸壺（24） 砲弾状のもので、残存している範囲では円孔は見られない。

弥生土器 壷（25） 口縁部が外反して開き、頸部には断面三角形の突帯をめぐらせる。胴部はやや肩が張った倒卵形を呈する。



第７図 SD**01出土土器実測図１(縮尺 1/3)**

縄文土器（第9図）

浅鉢（1〜3）　精製の黒色磨研土器で、内外面ともヘラ磨きを施す。

1は口縁部が内湾気味に大きく開き、波状をなす。頸部で小さくくびれ、内面に緩い稜を持つ。口縁部内面が肥厚し段が付くが、鋭さを欠く。2･3は波状口縁を呈し、口縁部が内湾気味に開く。口縁部内面が肥厚し、段が付く。2･3の口縁部外面には沈線文、3の肩部には凹点を施す。

深鉢（4〜6）　いずれも粗製の小片で、全体の器形は不明である。4は内湾してのび、ヘラナデを施す。5は内湾気味にのび、削りを施す。6は直線的にのび、条痕が残る。

底部（7〜14）　7〜9･11〜13は断面逆台形を呈し、8〜11は上げ底となる。

石器・石製品（第10〜13･18図）

石錘（第10図－1）　川原石の短軸二方向を打ち欠き抉りを入れる。Ⅰ区表採。長さ6.8cm、幅4.1cm、厚さ2.8m を測る。

砥石（第10図－2･6）　いずれも砂岩製で、使用面と直交して板状に剥離している。3についても砂岩製で砥石状の形状を呈するが、使用面はみられない。

方柱状片刃石斧（第10図－7）　頁岩製で、刃部のみ残存する。

磨製石斧（第10図－8）　一部欠損個所がみられるがほぼ完形で、長さ7.8cm、幅3.3cm、厚さ1.3cm を測る。 水滑石もしくは蛇紋岩製。

打製石斧（第10図－9･10）　9は蛇紋岩製の扁平打製石斧で、全体的に磨滅が著しいがほぼ完形である。長さ7.0cm、幅5.4cm、厚さ0.8cm を測る。10はサヌカイト製の石斧で、ほぼ完形である。長さ11.0cm、幅6.0cm、厚さ2.5cm を測る。

打製石鏃（第11図－1･2）　1は有脚鏃で、長さ2.5cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm を測る。白濁粒子を含む漆黒黒曜石製。2は長脚鏃で、漆黒黒曜石製。

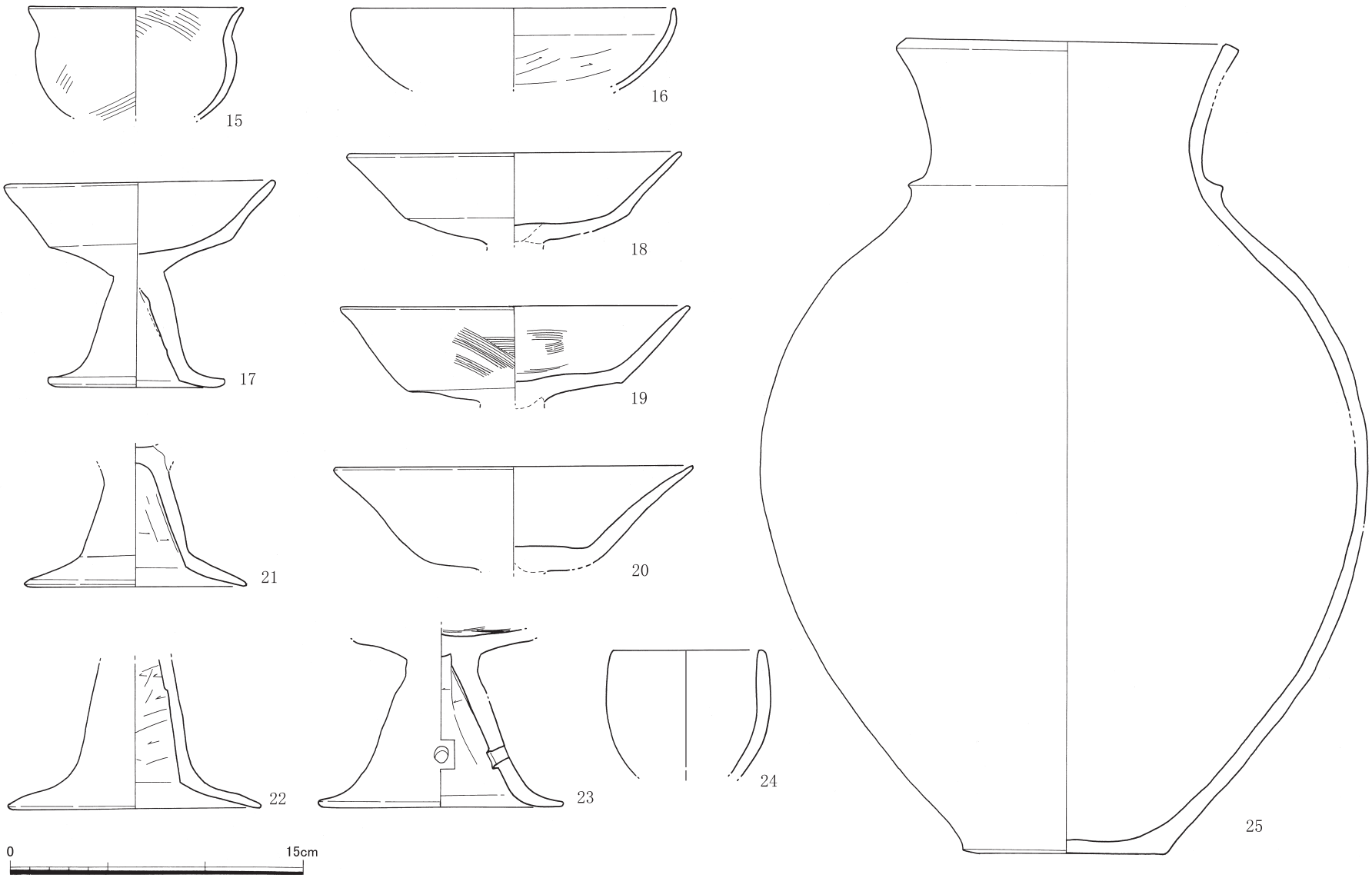
剥片類（第11図－3〜8・第12図－9〜25･第13図－26〜32･第18図－1）

二次使用剥片（3･5･7）

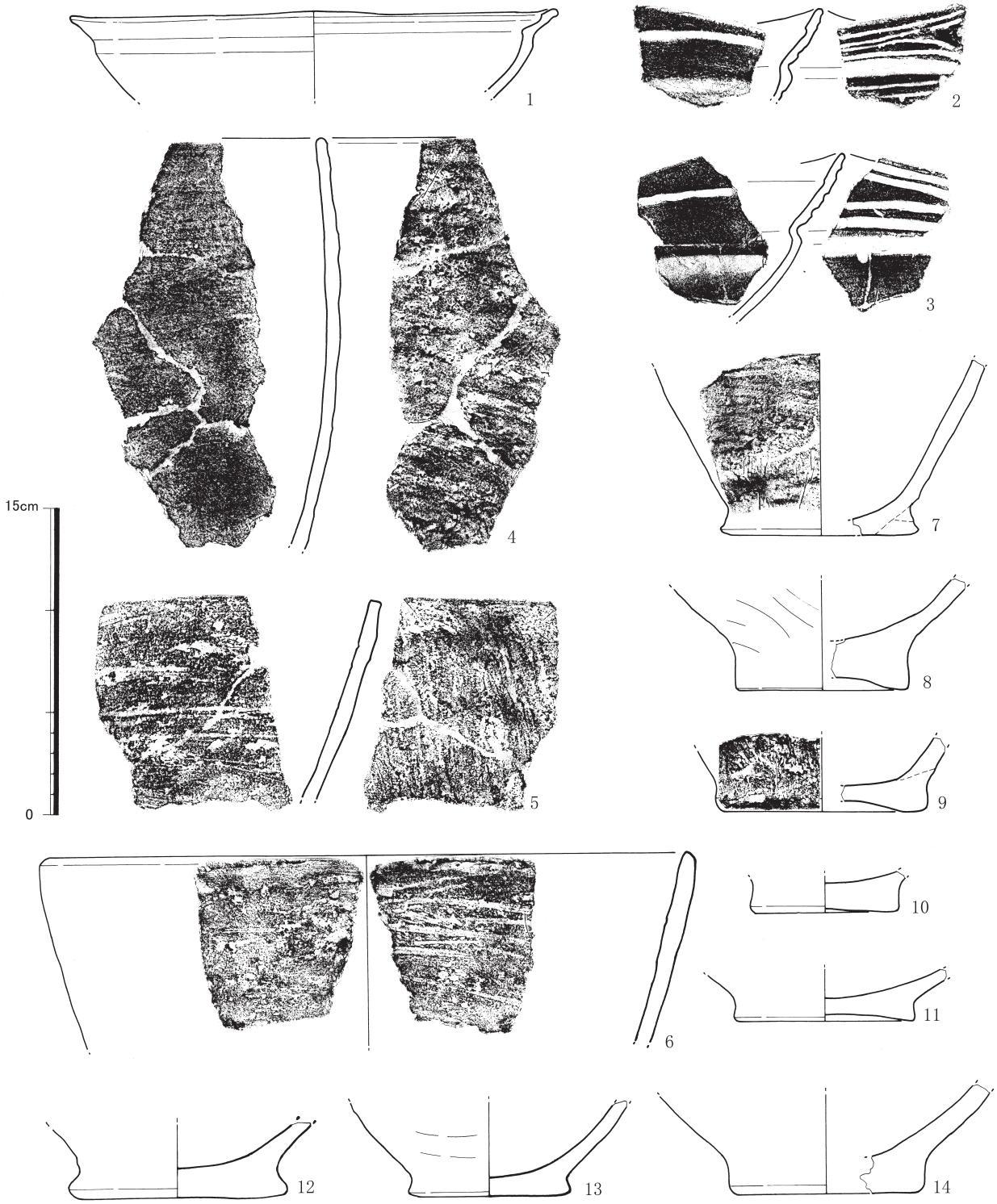
スクレイパー（4･6）

使用剥片（第13図－28）　縦長剥片の両側縁に刃こぼれがみられる。漆黒黒曜石製。

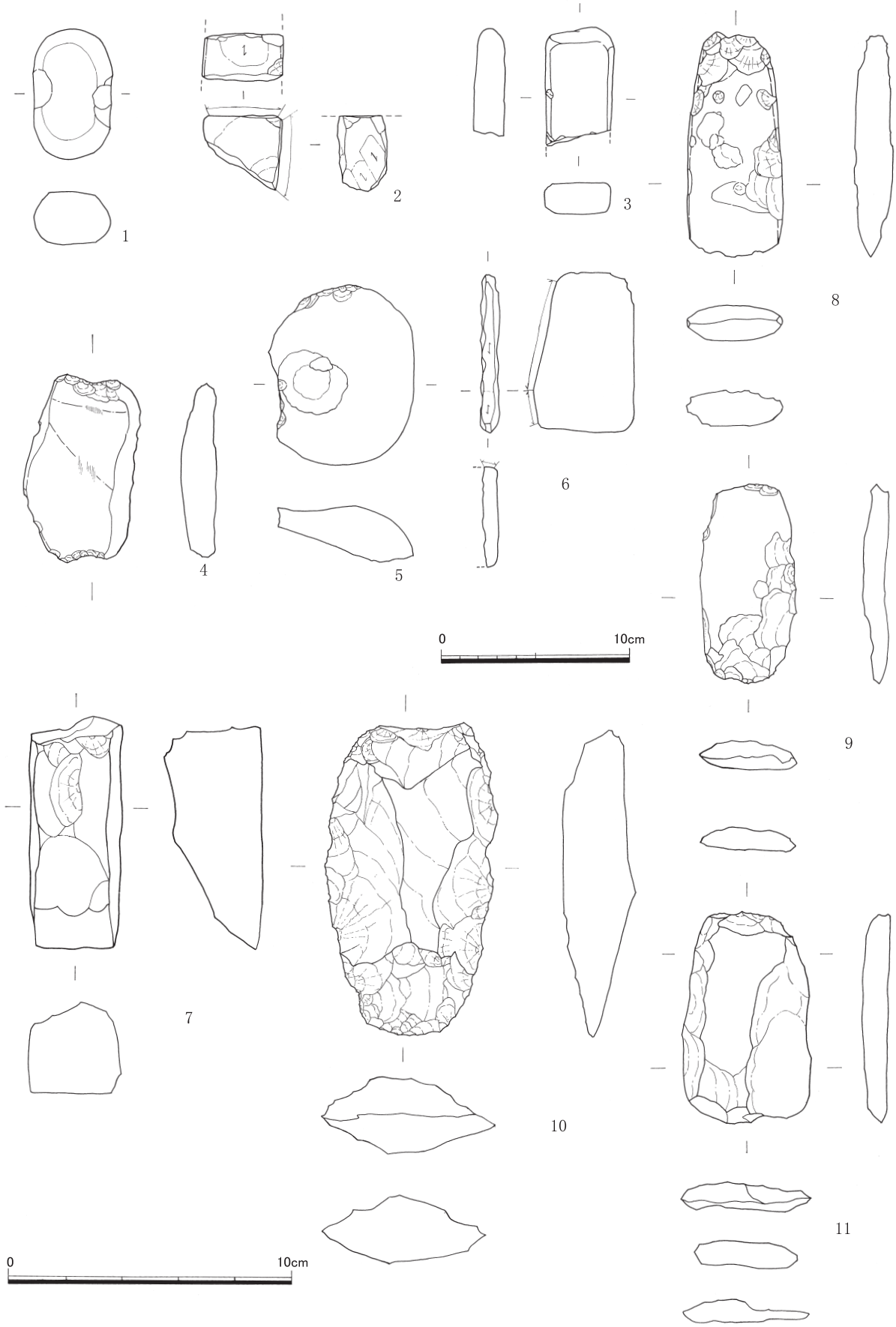
石核（第13図－32）　漆黒黒曜石製。



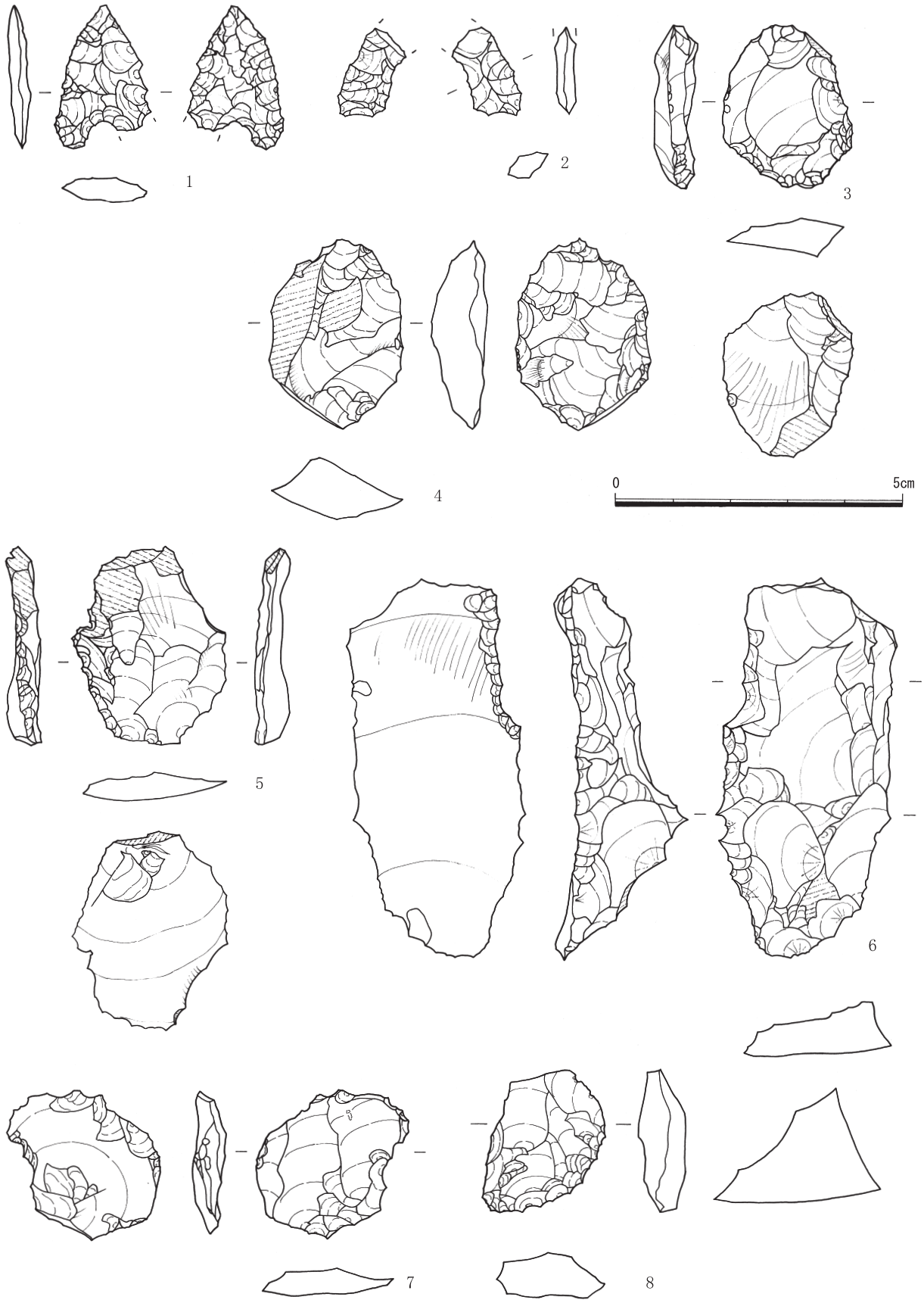
第８図 SD01出土土器実測図２（縮尺 1/3）



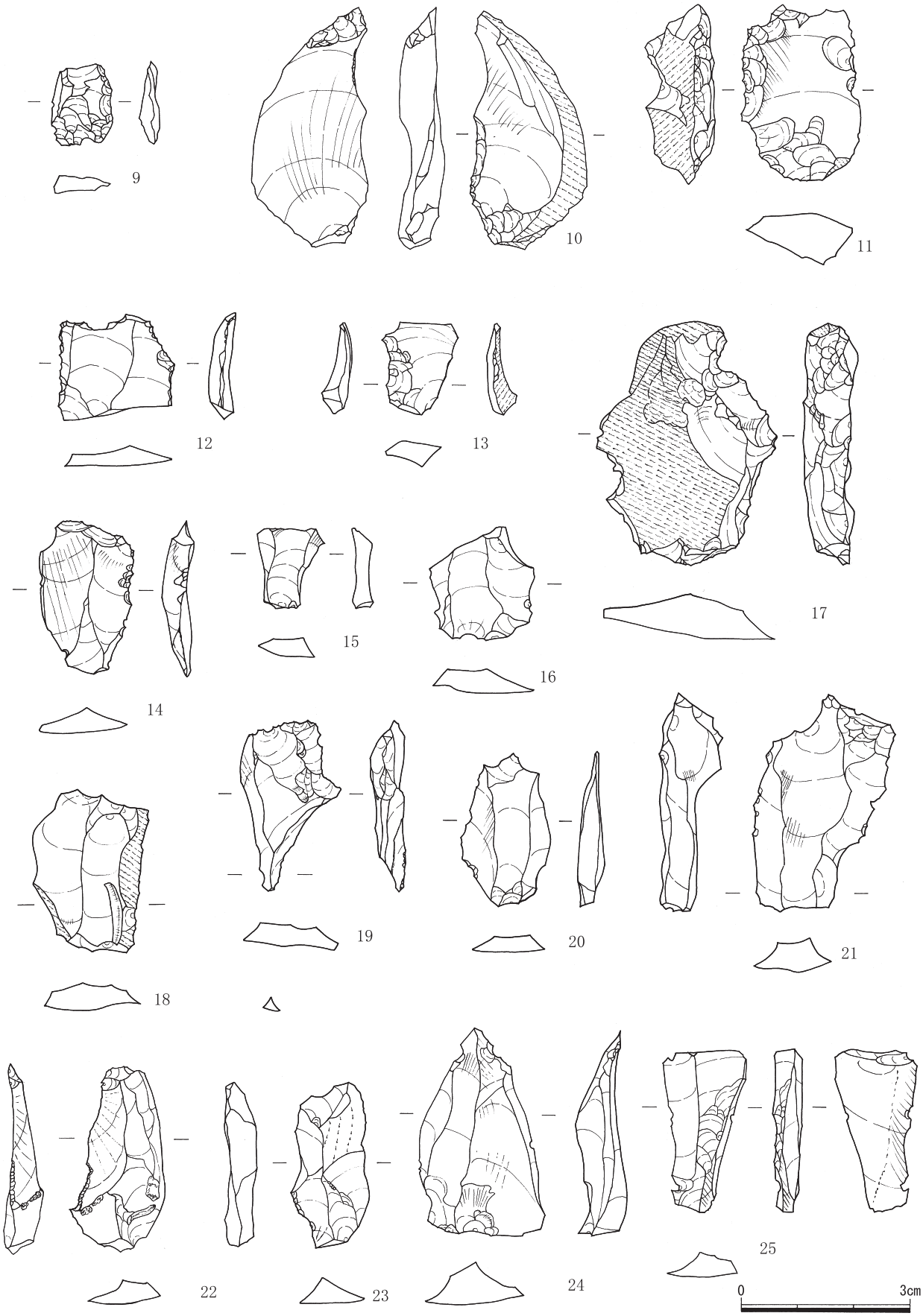
第９図　SD01下層出土土器実測図（縮尺 1/3）



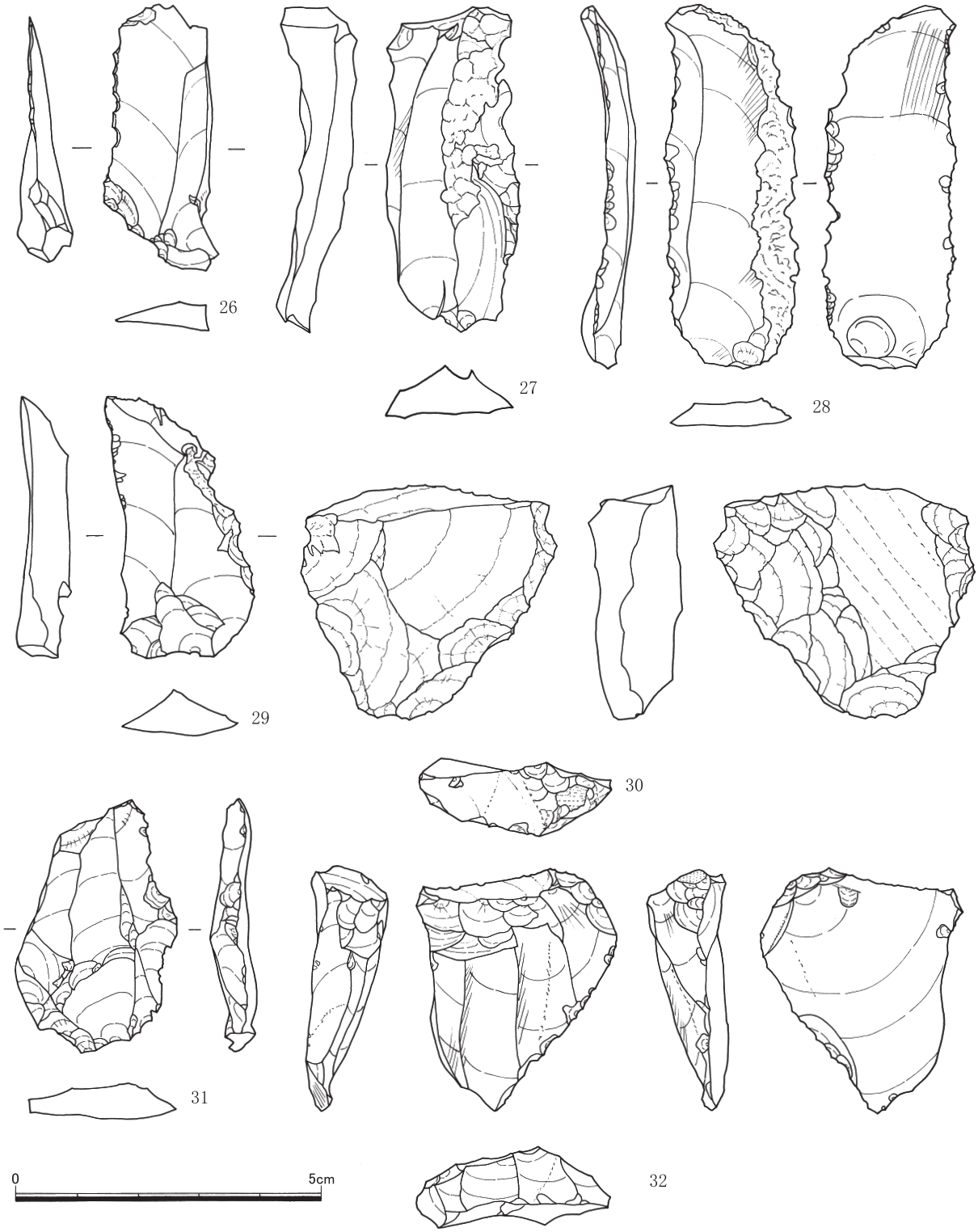
第10図　SD01出土石器実測図１（縮尺 1/3・1/2）



第11図　SD02出土石器実測図２（縮尺 1/1）



第12図　SD02出土石器実測図３（縮尺 1/1）



第13図　SD02出土石器実測図４（縮尺 1/1）

SD02（第5･6図）　調査区の北西端で検出した。西側が調査区外にかかるが、試掘調査では谷状の堆積が確認されたが遺構・遺物が認められなかったことから、河川（谷）の谷頭とみられる。埋土はほぼ水平な堆積を示す。東側から多量の土師器が出土した。小型丸底壷・高杯の比率が高く、水辺の祭祀に関連するものとみられる。

出土遺物

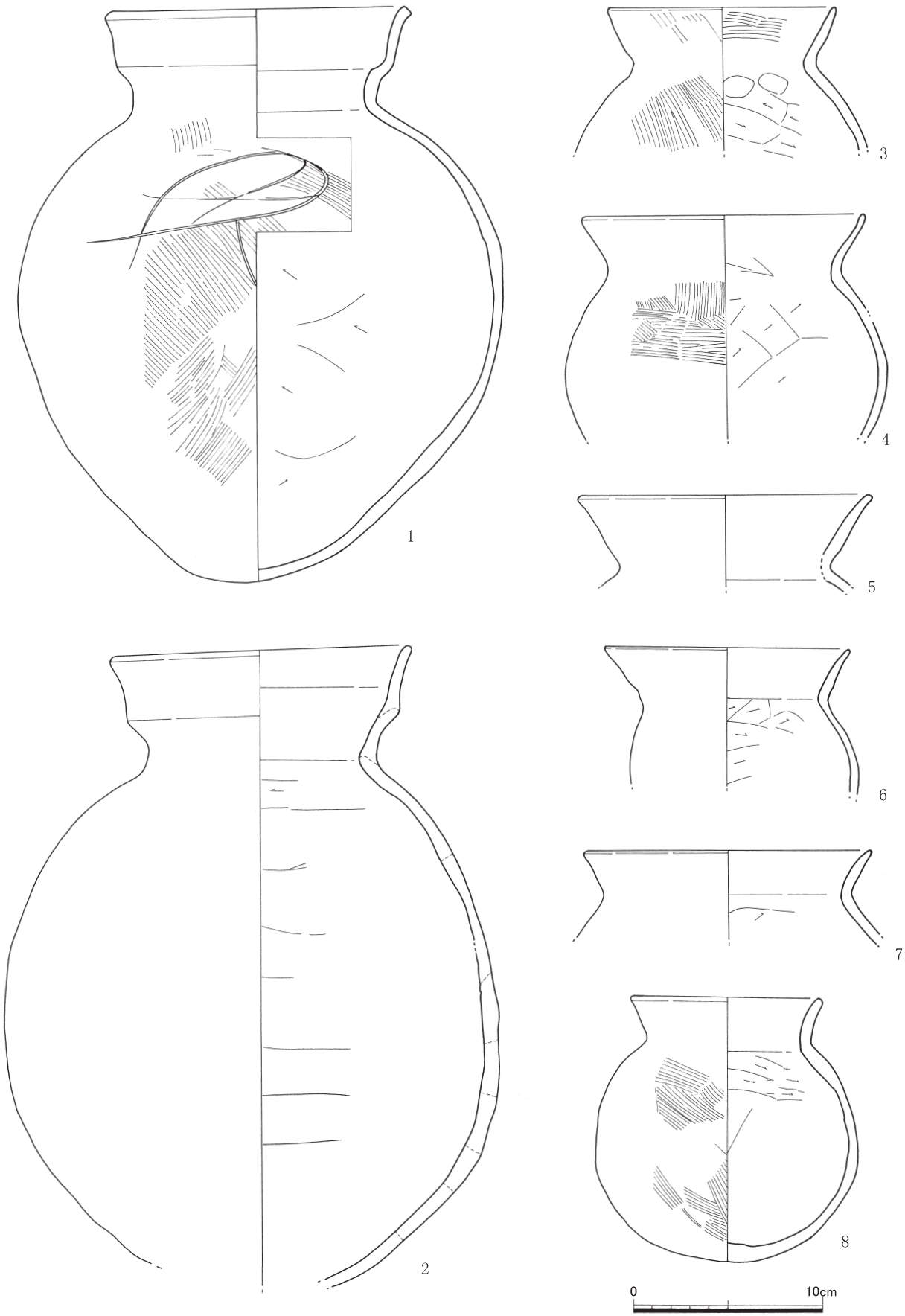
土師器（第14～17図）

二重口縁壷（1･2･9～11）　1･2は口縁部の段が鋭さを欠く。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りを施す。1は肩部外面に絵画か文様がヘラ描きされている。大型の9は口縁部上半が失われているが、二重口縁壷であろう。胴部内外面ともハケ目を施す。10は頸部が短く開き、口縁部が外へ屈曲した後、直立気味に外にのびる。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りを施す。11も同様に口縁部が直立気味の外にのびるが、屈曲は緩く丸味を帯びる。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面は被熱による器表の荒れが著しく調整について詳細は不明、内面はヘラ削りを施す。

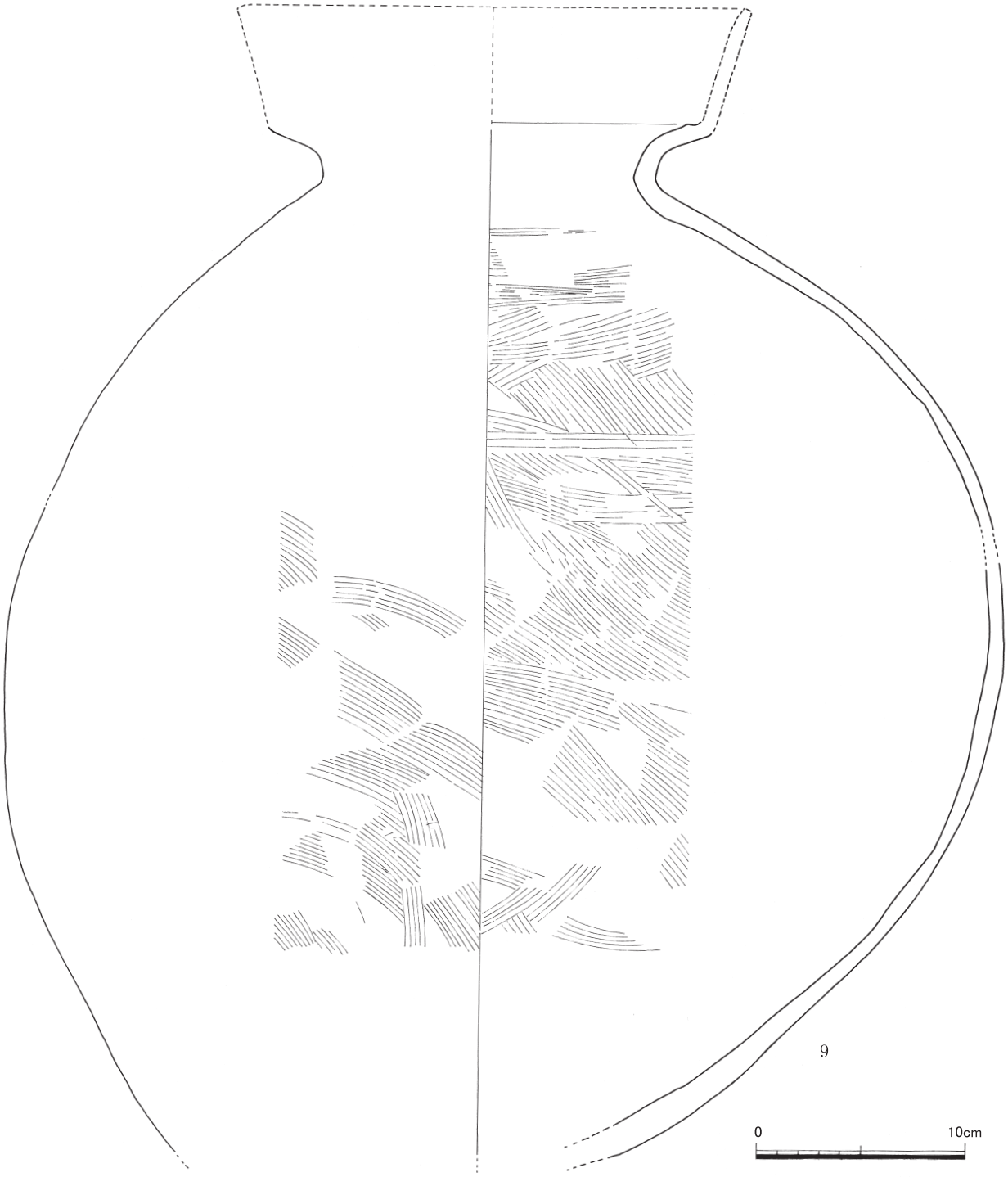
甕（3～8･12～15）　3は口縁部が直線的に開き、口縁部中位が外に肥厚する。口縁部外面が横ナデ、内面は横方向のハケ目、胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りを施す。4は内湾気味に外に開く。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りを施す。5～8は外反して開く。5は肩部より上部が残存し、口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りを施す。6は口縁部を内外面とも横ナデ、胴部外面は磨滅が著しく詳細不明、内面はヘラ削りを施す。7は口縁部内面から胴部外面にかけて磨滅が著しく詳細不明、内面はヘラ削りを施す。8は口縁部が内外面とも横ナデ、胴部外面はハケ目、内面は上半がヘラ削り、下半はナデを施す。12･13は口縁部が直線的に開き、口縁端部内面が肥厚し玉縁状を呈する。肩部より上部が残存し、口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りを施す。14･15は扁球形の胴部から口縁部が直線的に開く。14は口縁部内面から胴部外面にかけてハケ目、内面はナデを施す。15は全面的に磨滅が著しく詳細不明。

小型丸底壷（16～20）　胴部最大径10cm 未満の小型丸底壷で、口縁部が欠失している20以外は、口縁部が短く直線的に開く。16は口縁部内面から胴部外面にかけてハケ目、内面は上半がナデ、下半はヘラ削りを施す。17は口縁部が内外面とも横ナデ、胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りを施す。18は胴部下半以下が欠失し、口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面は磨滅が著しく詳細不明、内面はヘラ削りを施す。19は全面的に磨滅が著しく詳細不明。口縁部欠失の20は口縁部と胴部の境が内外面とも横ナデ、胴部外面は磨滅が著しく詳細不明、内面はナデを施す。

高杯（21～31）　21は杯部下位の屈曲部から約60°の直立気味の傾きで直線的に開く。脚部は欠失している。杯部は内外面とも横ナデを施す。22･23の杯部下位の屈曲は緩く丸味を帯びる。脚部は円錐形を呈し、裾部は欠失している。22は全面的に磨滅が著しく調整について詳細不明。23はややすぼまり、円孔を穿つ。口縁部は内外面とも横ナデ、内底はヘラナデを施す。24は杯部が浅く、中空の脚部となる。口縁部は外反し、脚部は筒部と裾部の内面に稜を持つ25は口縁部が欠失し、脚部は裾端まで一気に開く。全面的に磨滅が著しく詳細不明。26･27は脚部が欠失し、平坦な内底から外反する口縁部がのびる。底部と口縁部の接合部は明瞭に屈曲し、鋭く稜を持つ。26は口縁部外面が横ナデ、内面が横方向のハケ目を施す。27は全面的に磨滅が著しく詳細不明。28･29は口縁部が底部から内湾気味に、端部下で外反してのびる。脚部が欠失。28は全面敵に磨滅が著しいが、内底にハケ目が部分的に残る。29は口縁部外面がハケ目、内面が横ナデ、内底はハケ目の後、ナデを施す。30も脚部が欠失している。杯部は浅く、下位の屈曲は緩く丸味を帯びる。口縁部の内外面ともハケ目を施す。31は杯

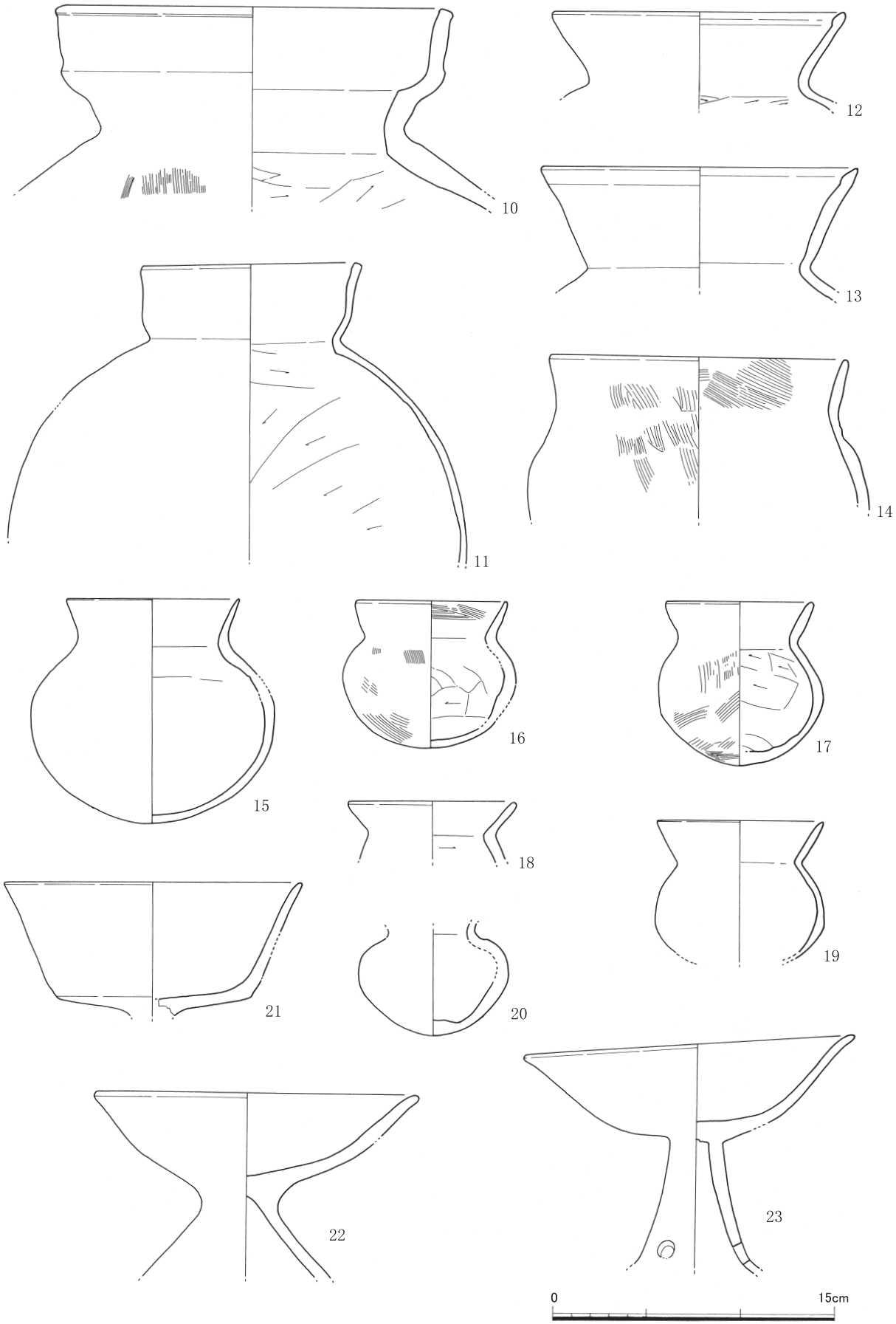


第14図　SD02出土土器実測図１（縮尺 1/3）



第15図　SD02出土土器実測図２（縮尺 1/3）

部が欠失し、脚部の筒部と裾部の境の屈曲が緩く、稜はみられない。筒部外面がナデ、内面はヘラ削り、裾部外面は横ナデ、内面はハケ目を施す。



第16図　SD02出土土器実測図３（縮尺 1/3）

杯（32･33）　32の口縁部は直線的にのびる。口縁部外面が横ナデ、内面は磨滅が著しく調整について不明、内底はヘラナデ、体部中位より下はヘラ削りを施す。33は口縁端部を外反させる。全面的に磨滅が著しく調整不明。

弥生土器（第17図）

壷（34）　袋状口縁が退化した口縁部片で、屈曲部に稜がつくが、その上部は内湾している。口縁部の屈曲より上部は内外面とも横ナデ、下部は内外面ともハケ目調整である。

甕（35）　逆Ｌ字状口縁の甕で、口縁下に断面三角形の突帯をめぐらせる。残存する部分は内外面とも横ナデ調整である。

SD02出土石器・石製品（第10･18図）

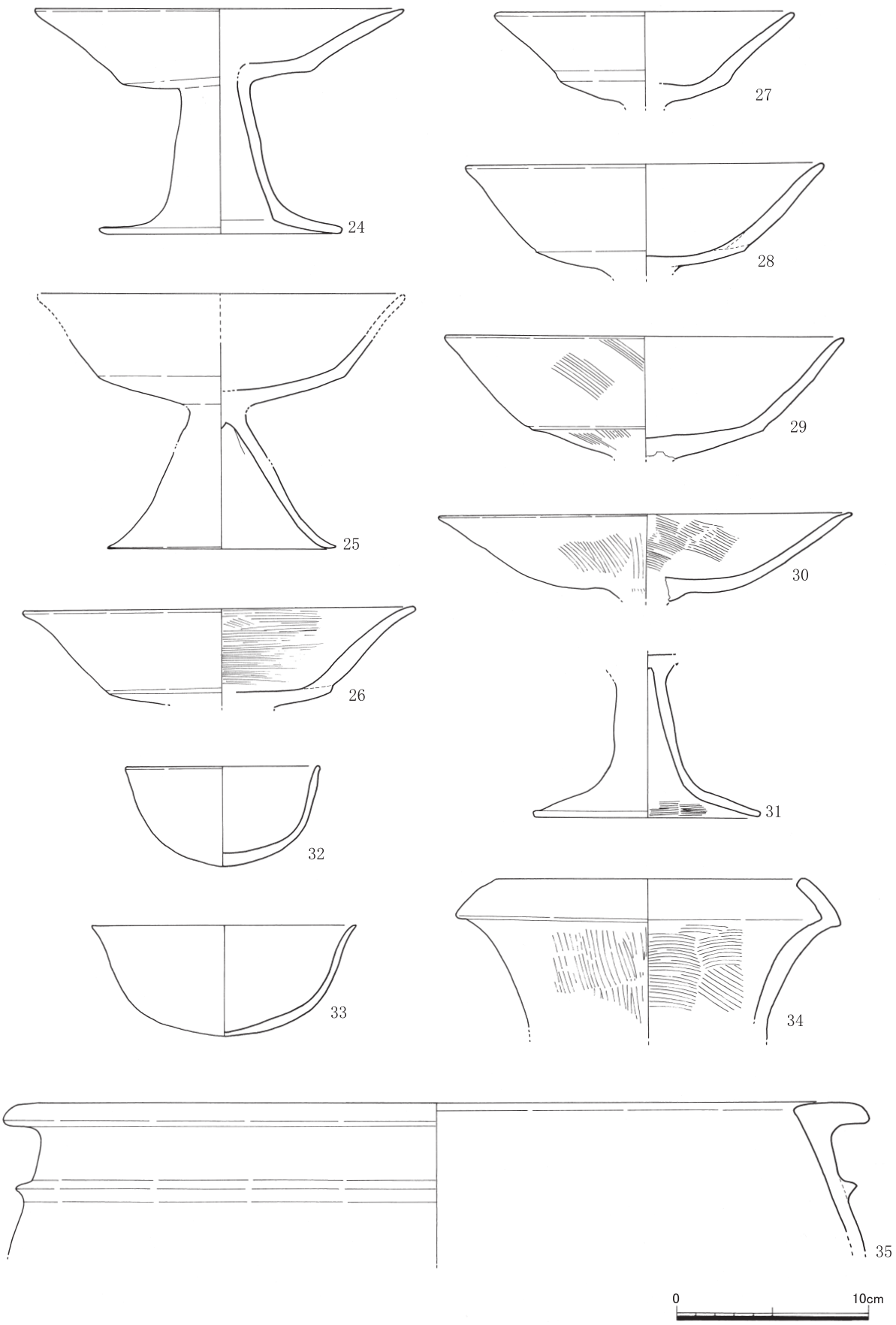
石錘（第10図－4）　板状の安山岩の長軸両端を打ち欠き、抉りを入れる。長さ9.9cm、幅5.7cm、厚さ1.9m を測る。

打製石斧（第10図－11）　粘板岩製の扁平打製石斧で、全体的に磨滅が著しいがほぼ完形である。長さ7.4cm、幅4.4cm、厚さ0.9cm を測る。

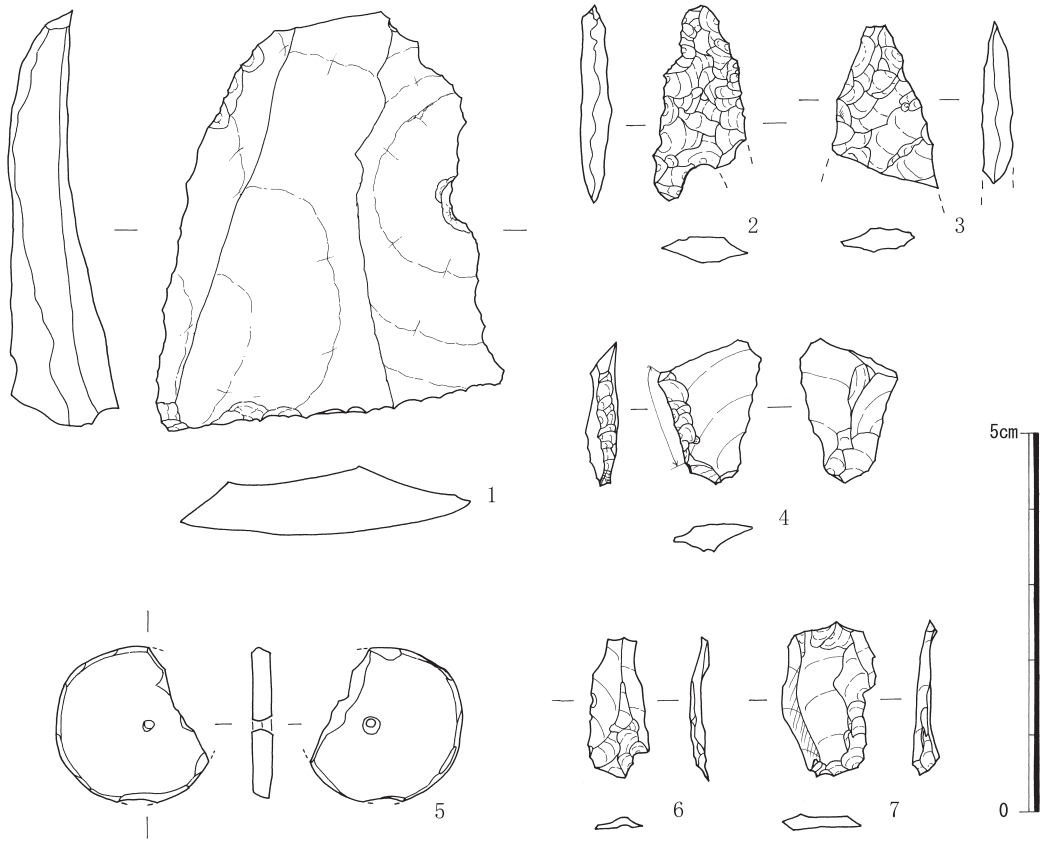
打製石鏃（第18図－2･3）　いずれも漆黒黒曜石製で、2は長さ2.6cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm、3は残存長2.2cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm を測る。

剥片類（第18図－4･6･7）4･7は縞文様のある半透明黒曜石、6は半透明黒曜石製である。

有孔円盤（第18図－5）緑色を帯びた滑石製で、径3.0cm、厚さ0.25cm を図る。中心に径1mm の円孔が両側から穿たれる。周囲1/3が欠失している。



第17図　SD02出土土器実測図４（縮尺 1/3）



第18図　SD02出土石器実測図（縮尺 1/1）

(3) 土坑

SK03（第19図）　谷の落ち際で検出した土器埋納土坑である。南北にやや長い径70～80cm の不整円形の土坑で、深さは15cm を測る。底面の北側がやや深くなっており、角材が倒れた状態で検出された。東側に土師器高杯の杯部、その上部に甕、中央のやや西側では小型丸底壷が底面に接して、そのすぐ南でも小型丸底壷が倒置して底面より10cm 浮いた状態で出土した。

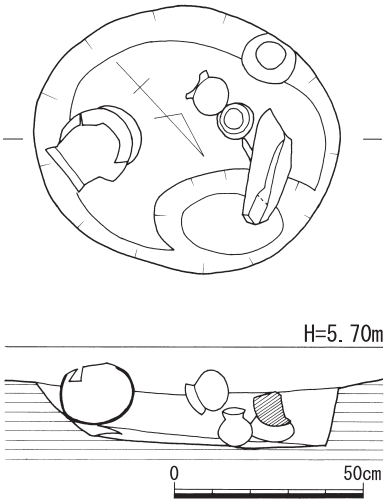
出土遺物（第20図）

土師器

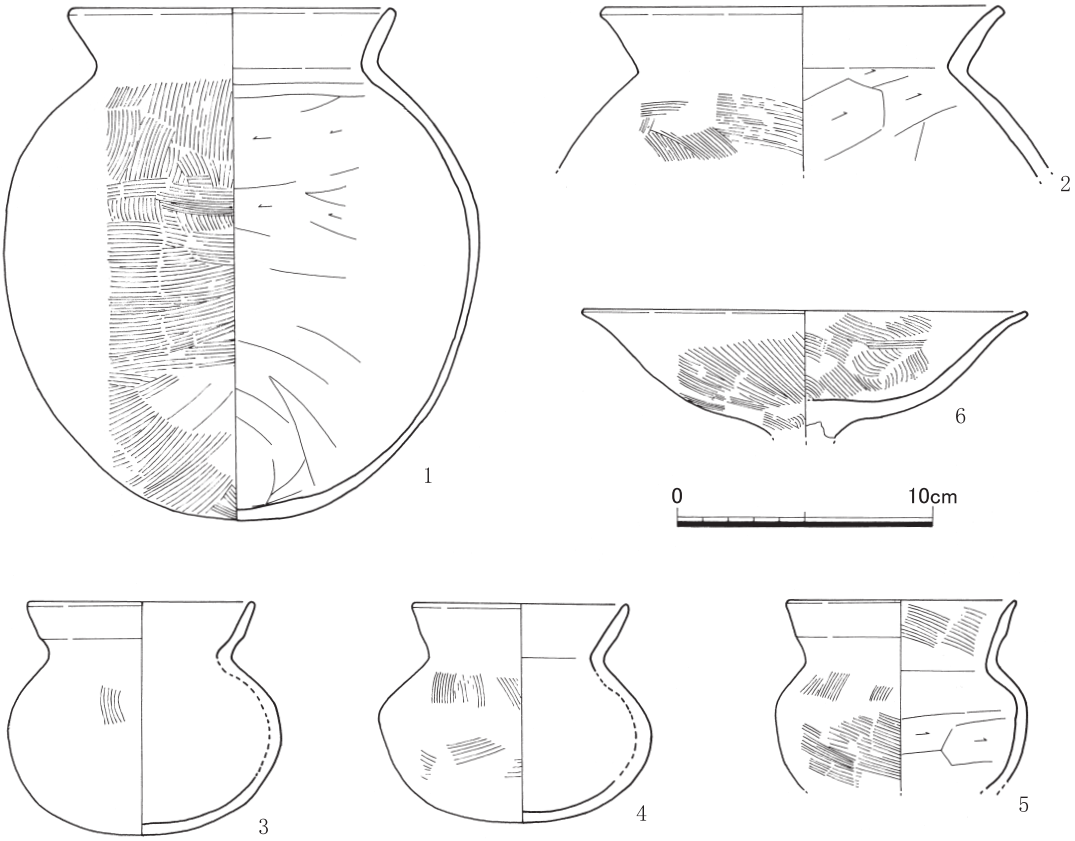
甕（1･2）　球形の胴部から口縁部が直線的にのびる。ほぼ完形の1は口縁部が内外面とも横ナデ、胴部外面はハケ目、内面は上半がヘラ削り、下半はナデを施す。胎土には砂粒を少量含み、浅黄橙色を呈する。

小型丸底壷（3～5）　いずれも短めの口縁部が直線的にのびる。3･5は口縁部下位外面にゆるく稜がめぐり、一見二重口縁状を呈する。3は口縁部が内外面とも横ナデ、胴部外面上半はハケ目の後、ナデ、下半はナデを施す。4は口縁部内面が横方向のハケ目の後、横ナデ、外面は横ナデ、胴部外面上半はハケ目、下半はハケ目の後、ヘラ削りを施す。5は口縁部内面がハケ目、口縁部外面は横ナデ、胴部外面はハケ目、内面は上半がナデ、下半はヘラ削りを施す。いずれも胎土には砂粒を多量に含み、にぶい黄橙色～橙色を呈する。

高杯（6）　口縁部が外反し、杯部下位の屈曲は緩い。内外面とも横ナデ、内底は平坦で、脚部が欠失している。胎土には砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。



第19図　SK03実測図（縮尺 1/20）



第20図　SK03出土土器実測図（縮尺 1/3）

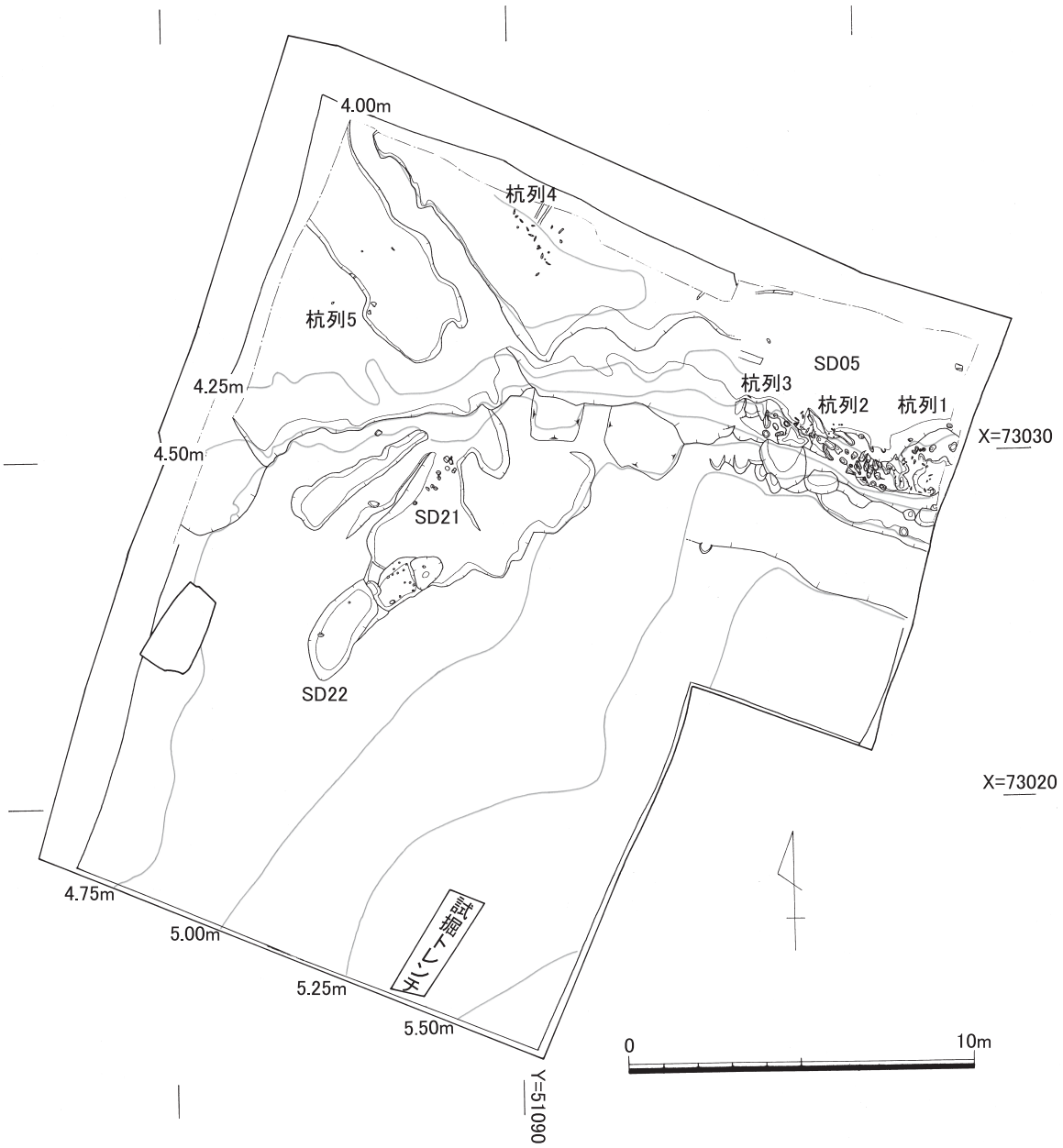
3　第６次調査 Ⅱ区と第７次調査 Ⅳ区の遺構と遺物

(1) 調査区の概要

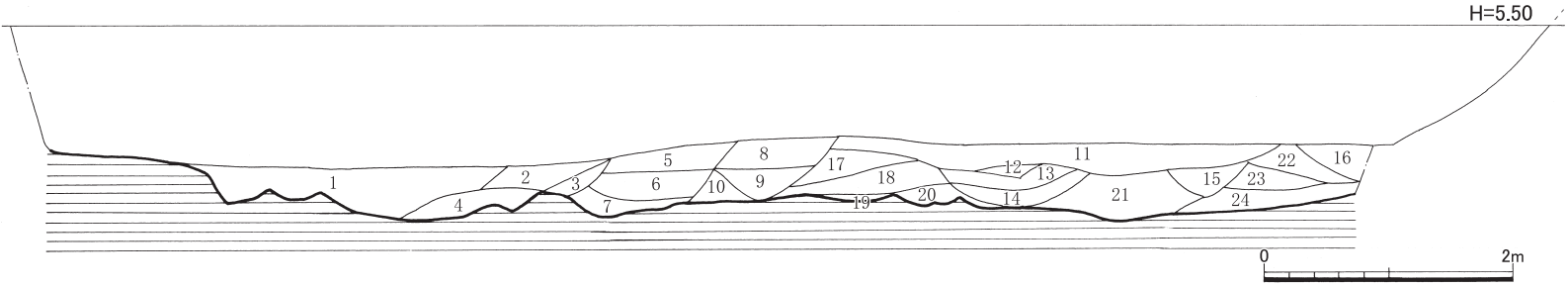
第6次調査における3箇所の調査対象地の内、中央に位置する南北14m、東西10m の調査区をⅡ区、翌年度の第７次調査で調査した南北25m、東西17m の西側隣接部分をⅣ区とし、合わせて報告する。

Ⅱ区は谷部で、約0.9m 盛土がされ、現地表下約1m で北に向かって落ちる谷 SD05の斜面を確認した。地山下層の岩盤、杭列を確認した。落ち込みの埋土からは弥生時代中期後半の土器が少量出土した。

Ⅳ区もⅡ区と同様に谷部で、盛土がされ、Ⅱ区検出の SD05斜面の延長、杭列を確認した。SD05の埋土からは弥生時代中期末の土器がコンテナ2箱、他に木製品の未成品が出土した。さらに、SD05の南側で8～9世紀の溝が2条検出され、調査区を南に拡張した。SD05上面と溝 SD21･22からはそれぞれ



第21図　第６次調査Ⅱ区・第７次調査Ⅳ区遺構配置図（縮尺 1/200）



Ⅳ区　西壁
1. 黄褐色土 2.5Y 5/4 灰色土 N 6/ブロック混じり
2. 黄灰色土 2.5Y 5/1 直径5mm 前後の砂粒を含む
3. 黄灰色粘質土 2.5Y 5/1 木質を含む
4. 黄褐色礫 2.5Y 5/4
5. 黄灰色土 2.5Y 4/1
6. 黒色土 2.5Y 2/1
7. にぶい黄色礫 2.5Y 6/4
8. 黄灰色土 2.5Y 5/1 直径5mm 前後の砂粒を多量に含む
9. 灰白色粘質土 2.5Y 7/1
10.灰黄色礫 2.5Y 6/2
11.灰白色粘質土 2.5Y 7/1 黄灰色粘土 2.5Y 4/1混じり
12.礫
13.明オリーブ灰色粘質土 N 7/1
14.灰黄色砂 2.5Y 7/2 暗灰色土(腐植土) N 3/1互層
15.黒褐色土 2.5Y 2/1
16.黄灰色シルト 2.5Y 5/1
17.黄灰色土 2.5Y 4/1 礫を含む
18.明黄褐色礫 2.5Y 6/6
19.暗灰色土 N 3/
20.浅黄色砂 2.5Y 7/3
21.明黄褐色礫 2.5Y 7/6
22.黄灰色土 2.5Y 5/1 礫・炭化物を多量に含む
23.にぶい黄色礫 2.5Y 6/4
24.黒色土 2.5Y 2/1

第22図　Ⅳ区 SD05土層図（縮尺 1/60）

コンテナ1箱の須恵器・土師器が出土した。SD05上面の遺物については、検出できなかったが SD21・22の延長部に伴う可能性が強い。9世紀の溝 SD21からは、在地の底部ヘラ切り離しの土師器杯に伴って底部糸切り離しの土師器杯が出土している。

(2) 河川

SD05（第21・22図）

Ⅱ区の北半、Ⅳ区の北1/3で確認した北に向かって落ちる谷の斜面で、南岸の延長22m 検出した。杭列が伴う。検出面のレベルでは、周囲の地山を削って埋め立てられた堆積状況を確認した。検出した岸から地山までの深さは最深部で0.6m を測る。SD05上面で出土した遺物については、検出できなかったが南側からのびる SD21・22の延長部に伴う可能性が強い。

SD21（第21図）

Ⅳ区の中央で検出した幅1.5m、検出長3.6m、深さ10cm の浅い溝である。方位は N-45°-E に取る。土師器杯が主軸に沿って、1.5m×0.3m の範囲に集中して出土した。

SD22（第21図）

Ⅳ区の中央、SD21の南西で検出した幅1.2m、検出長3.0m、深さ10cm を測る弧状の溝である。

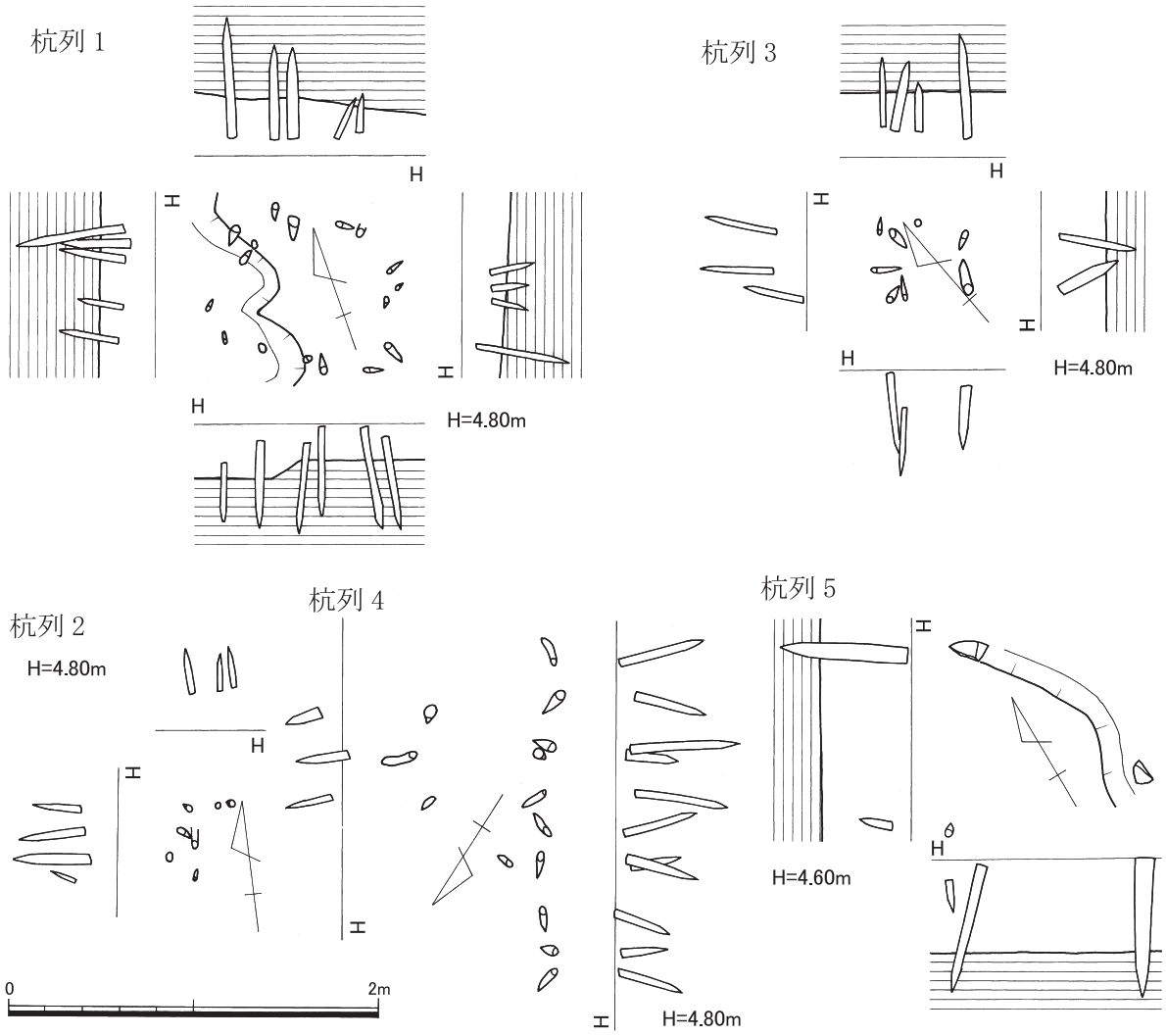
(3) 杭列

杭列1（第23図）　Ⅱ区 SD05東側の川岸で検出した長径1.0m、短径0.7m の不整方形にめぐる杭列である。杭の先端は客土直下で SD05を確認した高さと同じである。川岸に近い杭の上端はやや高い位置にある。杭は0.1～0.2m 間隔で、地山上面から深い杭で0.4m 打ち込まれている。

杭列2（第23図）　Ⅱ区 SD05中央の川岸で、杭列1の西2m で検出したＬ字の杭列で、東西長0.25m、南北長0.4m を測る。杭の上端は客土直下 SD05確認面と同じ高さである。方位はほぼ真北に取る。

杭列3（第23図）　Ⅱ区 SD05中央の川岸で、杭列2の西1m で検出した杭列で、径0.4m の範囲に乱雑に杭が打ち込まれている。杭の上端は客土直下の SD05確認面と同じ高さである。川岸に近い杭の下端はやや高い位置にある。

杭列4（第23図）　Ⅳ区 SD05北端中央で、検出した0.15～0.3m 間隔で打ち込まれた杭列が2列、0.6m の間隔を置いて配されている。杭列の北西端から0.6m の範囲では杭が見られないことから、調査



第23図　杭列実測図（縮尺 1/40）

区外には延びていないようである。杭の上端は客土直下のSD05確認面と同じ高さであるが、杭の下端は川岸に近づくにつれて高くなる。地山にはほとんど打ち込まれていない。SD05が埋没後に打ち込まれたと見られる。方位はN-30°-Wに取る。

杭列5（第23図）　Ⅳ区SD05北西端で検出した杭列であるが、杭は杭列1～5より太く、生木であることから近世以降のものとみられる。

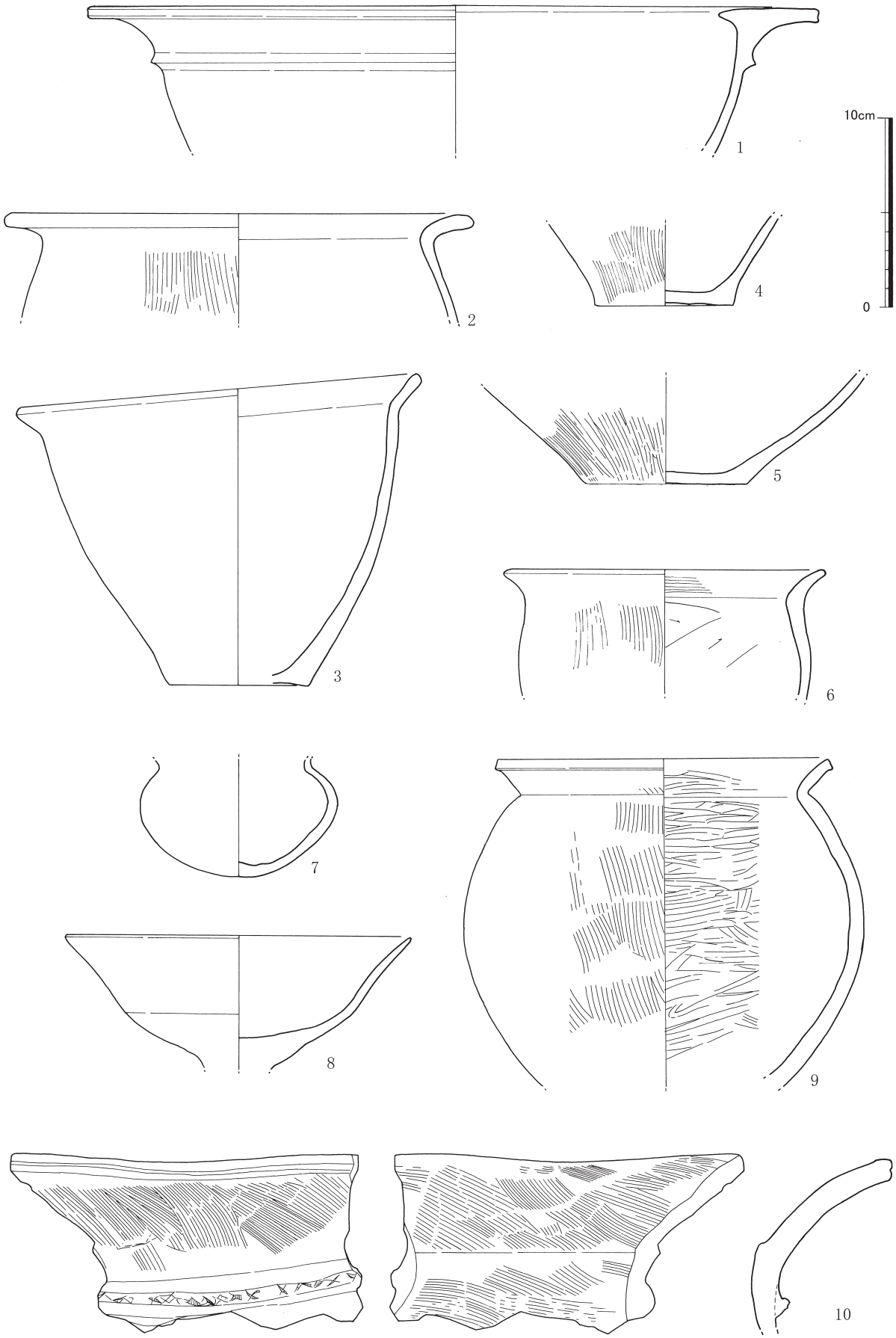
SD05出土遺物（第24～26図）

弥生土器（1～5･9～32）　1は鋤形口縁の鉢で、口縁下に断面三角形の突帯をめぐらせる。

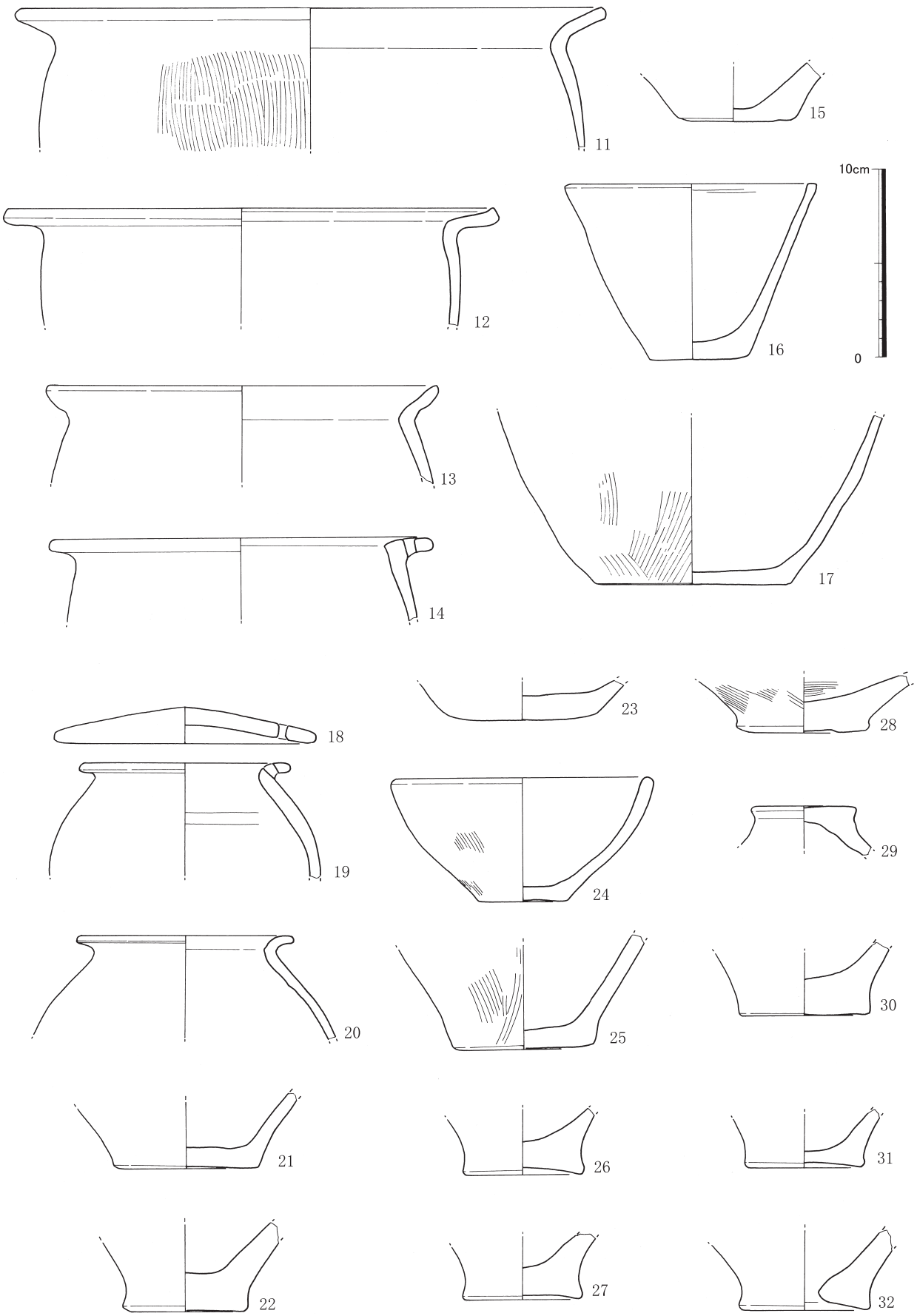
9は口縁部が短く外反し、端部は平坦で外下方に小さくつまみ出す。

10は大型の甕片で、頸部にX字状の刻目が入る断面「コ」の字形の突帯をめぐらせる。内外面とも粗いハケ目が施される。2･11～14は甕で、2･11は丸味をもった「く」の字口縁、3は口縁部内面に稜をつけて「く」の字状となす。12は端部をつまみ上げ跳ね上げ口縁にする。14の逆L字状を呈する口縁部には、焼成前の穿孔がある。19･20は無頸壷で、口縁部が「く」の字状に屈曲する。19の口縁部には焼成前の穿孔がある。18は無頸壷の蓋で、焼成前の穿孔がある。16･24は素口縁の鉢で、口縁部は16が直線的、24は内湾気味にのびる。

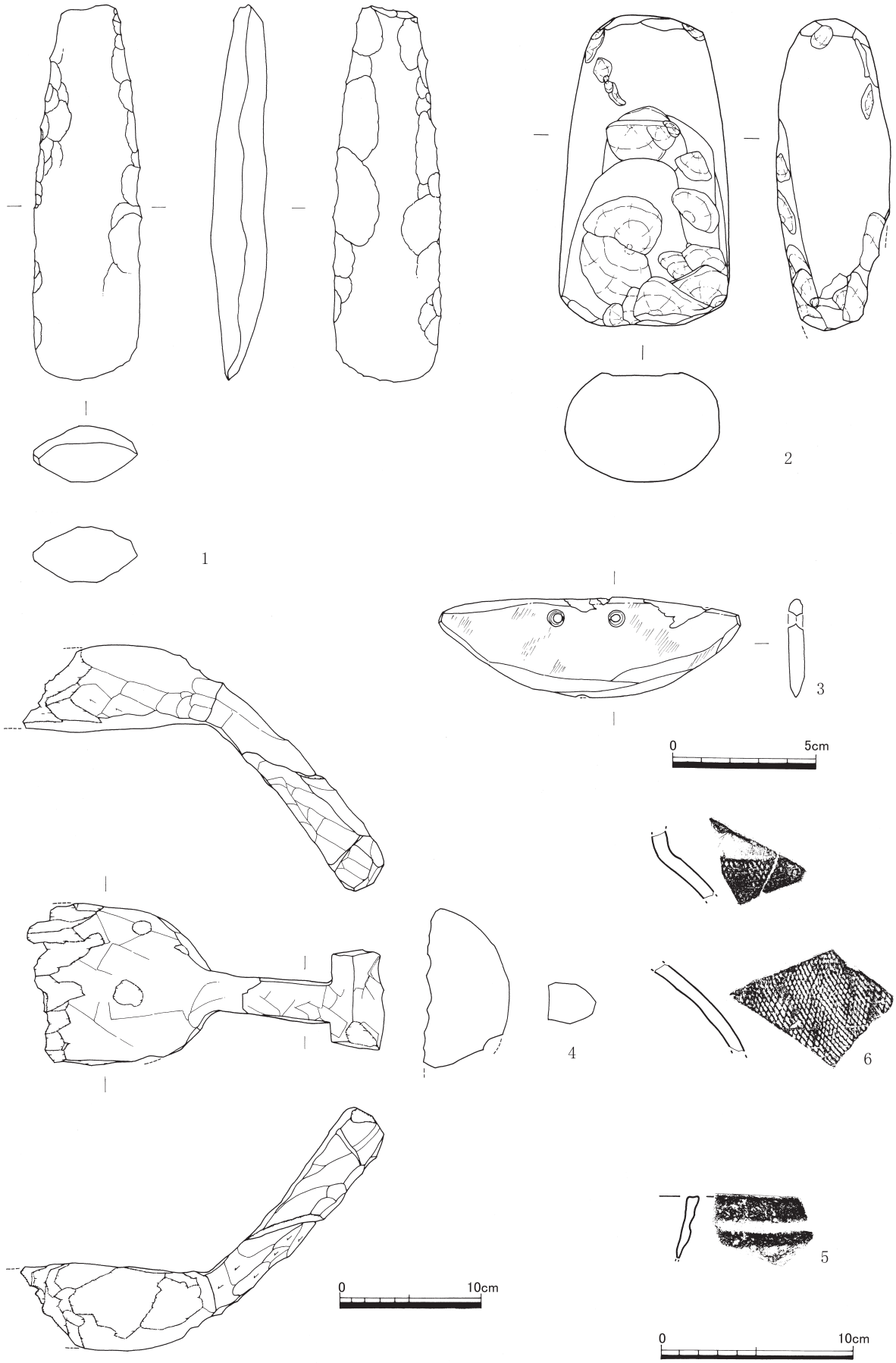
29は甕の蓋である。4･5･15･23･25～28･30･31は底部片で、その内26･27･31は上げ底である。32は底



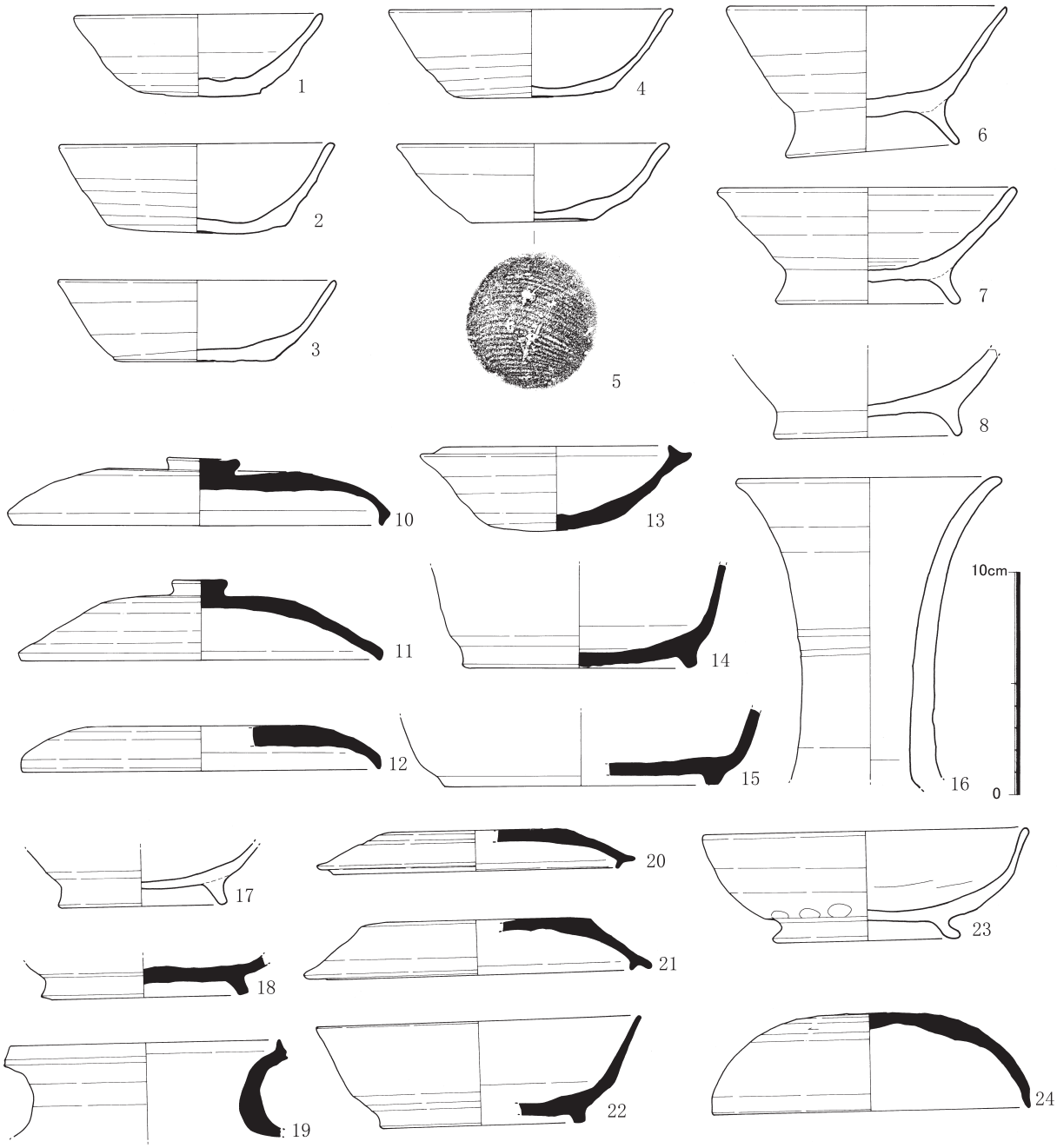
第24図　Ⅱ・Ⅳ区 SD05出土土器実測図（縮尺 1/3）



第25図　Ⅳ区 SD05出土土器実測図（縮尺 1/3）



第26図　Ⅳ区 SD05出土石器・木製品実測図（縮尺 1/3）



第27図　SD21出土土器実測図（縮尺 1/3）

部を焼成前に穿孔した甑片である。5は1と同一個体の可能性がある。

土師器（6～8）　6は甕の上半部片、7は小型丸底壷の胴部、8は高杯の杯部片である。

打製石斧(1)　頁岩製で、風化が著しいがほぼ完形である。長さ13.0cm、幅3.6cm、厚さ1.9cm を測る。

磨製石斧(2)　玄武岩製で、刃部は欠失している。長さ10.8cm、幅6.0cm、厚さ4.0cm を測る。

石包丁(3)　凝灰岩製の半月形石包丁で、ほぼ完形である。背部はやや外に反り、紐孔は両側から穿孔されている。片刃で、体面とも入念に研磨される。長さ10.5cm、幅3.5cm、厚さ0.5cm を測る。

木製品 把手付槽未成品(4)　平面形が楕円形を呈する容器部分の上面は平坦に削られ、先端は欠損している。T字状に削り出された柄が長軸の片側からのびる。

縄文土器(5)　阿高式の深鉢口縁部片であろう。滑石を多く含む。

瓦質土器(6)　外面に細かい格子目の叩きをもつ甕片で、にぶい赤褐色を呈する。

SD21出土遺物（第27図）

土師器

杯（1～5）　口径12.2～12.6cm、器高3.5～4.0cm、底径5.5～7.9cm を測る。底部の切り離しは1～4が回転ヘラ、5が静止糸による。体部は回転横ナデ、内底はナデを施す。3は外底に板状圧痕が残る。

高台付杯（6～8）　体部は直線的にのび、底端部に外に開く高台が付く。体部は回転横ナデ、内底はナデ、底部の切り離しは回転ヘラにより、板状圧痕が残る。8は口縁部が欠失している。

須恵器

杯蓋（10～12）　10の口縁端部は断面が三角形に近い形状を呈する。天井部は回転ヘラ削りされ、平坦で低い。扁平なボタン状のつまみが付く。11の天井部は丸味をもち高い。口縁部は退化し、内面の体部との境が不明瞭である。扁平なボタン状のつまみが付く。12の天井部は平坦で低く、内面の口縁部と体部の境は不明瞭である。つまみが付く部分は欠失している。

杯（13～15）　13は立ち上がりの高さは0.5cm を測り、基部から短く内頸する。立ち上がりと受け部の境は不明瞭である。14･15は口縁部が欠失している。体部と底部の境は丸味をもち、断面四角形の高台が底端部のやや内側に付く。14は高台の外側が跳ね上がる。

長頸壷（16）　肩部以下が欠失している。頸部は下半部ですぼまり、口縁部は上方へ外反してのびる。頸部外面中位に凹線を2条めぐらす。

土師器

高台付杯（17）　底部片で、底端部に外に開く高台が付く。

高台付椀（23）　体部下半は丸味をおび、口縁部は直線的に外上方へのびる。底部に外に開く高台が付く。体部は回転横ナデ、内底はナデ、底部の切り離しは回転ヘラによる。体部と底部の境には、指頭圧痕が残る。高台は接合部分を含め回転横ナデを施す。

須恵器

杯（18･22）　18は底部片で、底端部の内側に外側に跳ねた断面四角形の高台が付く。22の口縁部は直線的に外上方にのび、体部下位の底部との境には明瞭に稜が付く。断面四角形の高台が付く。

壷（19）　外反する口縁部で、端部は外傾し、内面が肥厚し断面三角形を呈する。

杯蓋（20･21･24）　20･21は口縁部に返りをもつ。天井部は回転ヘラ削りされ平坦になり、回転横ナデされた体部との境には稜が付く。つまみが付く部分は欠失している。24は天井部と体部の境に段や沈線はなく、丸くつくられている。口縁部はわずかに外反する。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ、その他の部位は横ナデを施す。

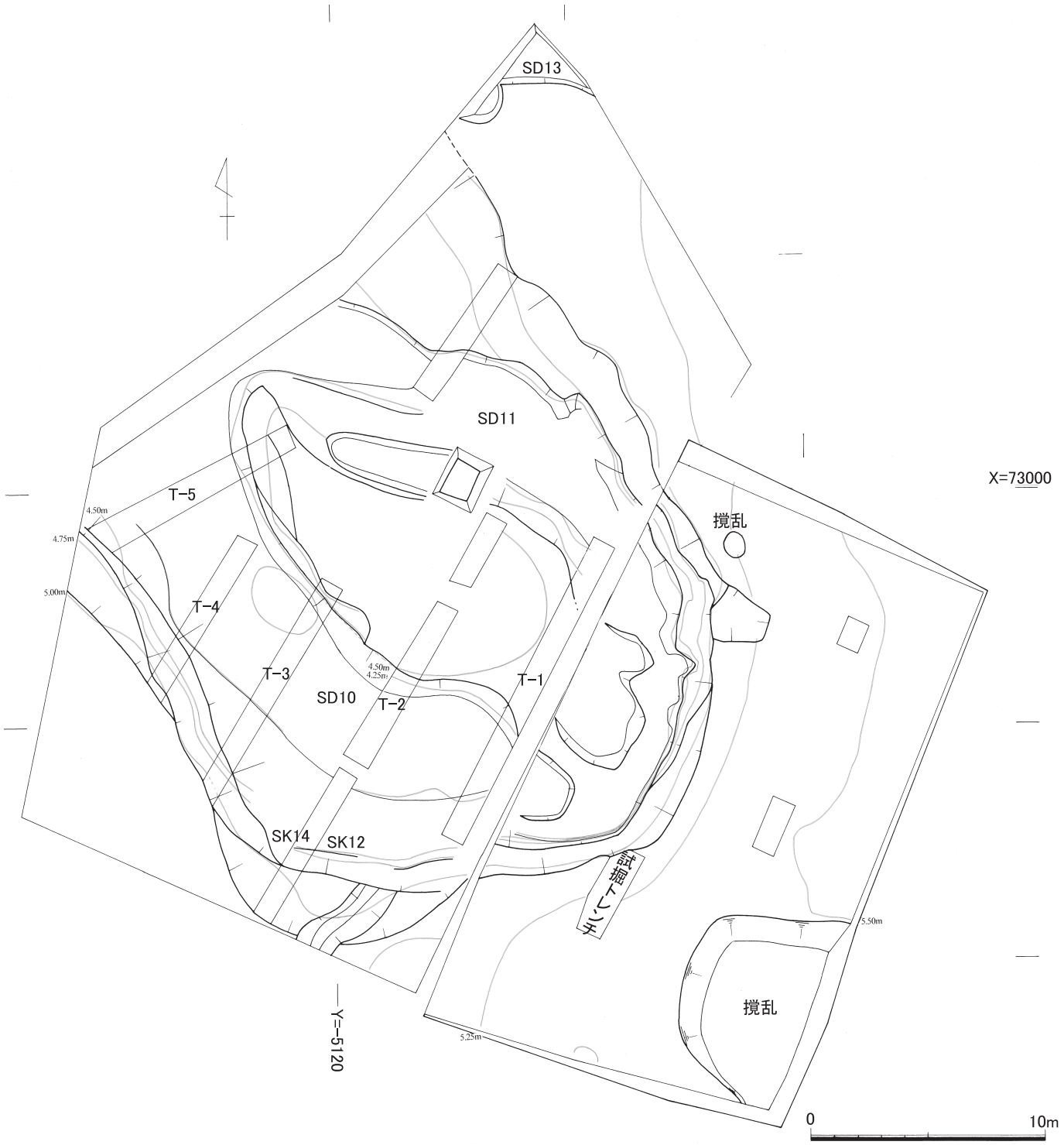
4 第６次調査 Ⅲ区と第７次調査 Ⅴ区の遺構と遺物

(1) 調査区の概要

第6次調査対象地南端に位置する南北40m、東西24m の調査区をⅢ区、用地未買収で翌年度に調査した南北26m、東西15m の南東隣接部分をⅤ区とし、合わせて報告する。

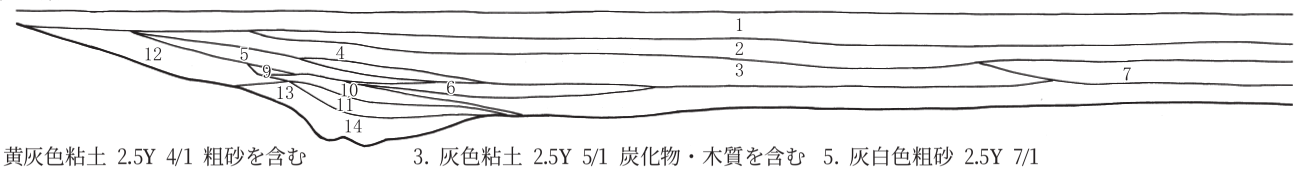
第4次調査地の道路を隔てた北側にあたる。Ⅲ区では、試掘調査のトレンチ2～4で確認された谷、トレンチ2の北側で確認された幅7m、深さ1.2m の古河川 SD10を検出した。トレンチ3中央部で確認された地表下60cm で地山から南北に落ち込んでいく状況は、東西に2条流れていた河川であった。SD10の北側の河川はSD11とする。SD10の上層(第29図1層)には14世紀代の遺物を少量含み、無遺物の層(第29図2層)を挟んで、下層(腐植土、第29図上3～8層)では縄文時代晩期前半の土器や石器が出土した。下層の腐植土層は河川の西側では見られなかった(第30図上)。試掘トレンチを含め5本のトレ

ンチを設定し、遺物の取り上げもトレンチとその間ごとに分けて、平面的な出土傾向の把握に努めた。SD11においても、下層(腐植土、第29図下3～8層)では縄文時代晩期の土器や石器が出土した。縄文晩期の遺物はSD10・11合わせてコンテナ30箱出土した。SD10の北側落ち際で堅果類が底面で出土した土坑 SK12・14を検出した。Ⅴ区では、Ⅲ区検出の古河川(流路跡)SD10・SD11の延長(30図下3～5層・31～33層)を確認したが、調査区の中央部で収束していた。Ⅴ区西壁面では土壌分析のための試料採取を行なった(付篇参照)。Ⅴ区の中央より丘陵側の南東部は後世の削平を受け、遺構は認められなかった。

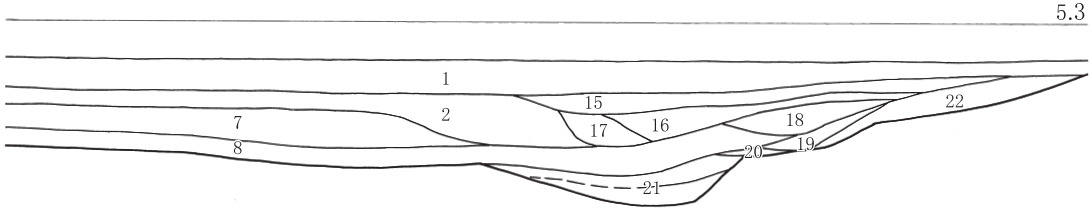


第28図　第６次調査Ⅲ区・第７次調査Ⅴ区遺構配置図（縮尺 1/250）

Ⅲ区　東壁

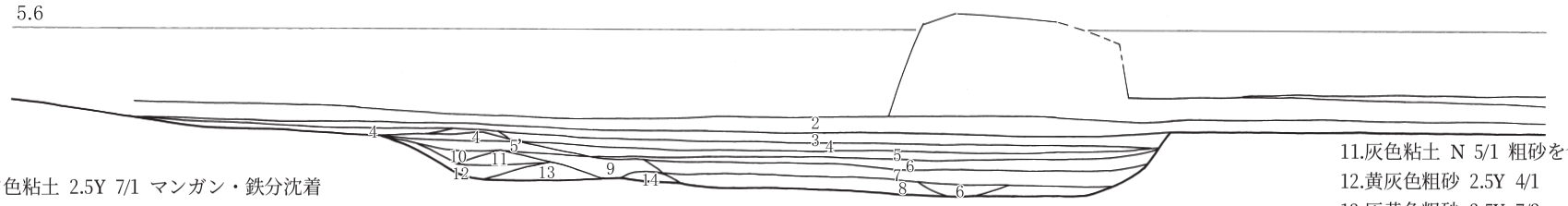


1. 黄灰色粘土 2.5Y 4/1 粗砂を含む
2. 灰白色粘土 2.5Y 7/1 マンガン・鉄分沈着
3. 灰色粘土 2.5Y 5/1 炭化物・木質を含む
4. 黒褐色粘土 2.5Y 3/1
5. 灰白色粗砂 2.5Y 7/1
6. 黄灰色土 2.5Y 4/1
7. 黄灰色粘土 2.5Y 4/1 炭化物・木質を含む
8. 黒褐色粘土 2.5Y 3/1 木質を含む
9. 黄灰色粘土 2.5Y 6/1
10.青灰色粘土 5B 5/1 炭化物を含む
11.暗青灰色粘土 5B 3/1 炭化物を多量に含む
12.にぶい黄色粘土 2.5Y 6/3 砂礫を含む
13.青灰色粘土 5B 6/1
14.暗青灰色粘土 5B 4/1 粗砂・炭化物を含む

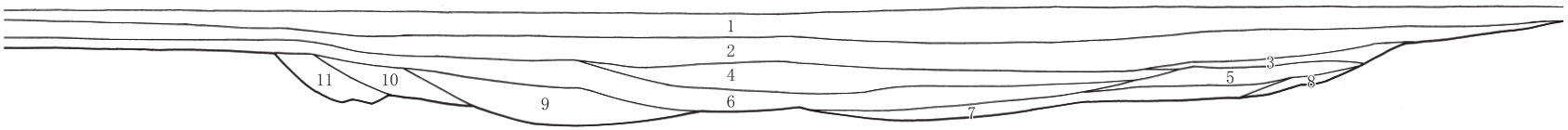


15.灰黄色粘土 2.5Y 7/2
16.黄灰色粘土 2.5Y 6/1
17.黄灰色土 2.5Y 4/1
18.灰黄色粗砂 2.5Y 6/2
19.黄灰色粗砂 2.5Y 6/1
20.青灰色粘土 5B 6/1
21.青灰色粗砂 5B 6/1
22.灰白色粗砂 2.5Y 7/1

Ⅲ区　中央畦西面



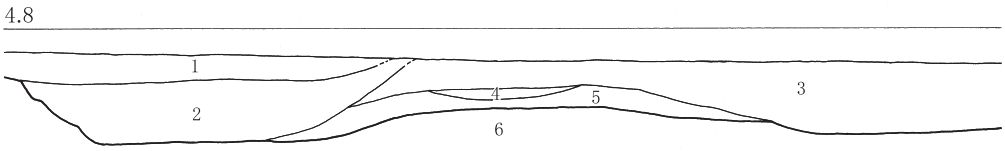
3. 灰白色粘土 2.5Y 7/1 マンガン・鉄分沈着
4. 黄灰色粘土 2.5Y 6/1 粗砂を含む
5. 黄灰色粘土 2.5Y 5/1 炭化物を含む
5'. 黄灰色粘土 2.5Y 5/1 粗砂を含む
6. 黄灰色粘土 2.5Y 6/1 木質を含む
7. 黒色粘質土 2.5Y 2/1 砂礫・木質を含む
8. 黄灰色砂粘質土 2.5Y 6/1 砂礫を含む
9. 灰色粘土 N 4/ 炭化物を含む
10.灰白色粘土 2.5Y 7/1 粗砂を含む
11.灰色粘土 N 5/1 粗砂を含む
12.黄灰色粗砂 2.5Y 4/1
13.灰黄色粗砂 2.5Y 7/2
14.灰白色砂粘質土 2.5Y 7/1



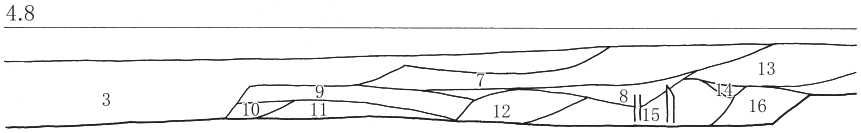
1. 黄灰色粘土 2.5Y 5/1 粗砂を含む マンガン・鉄分沈着
2. 淡黄灰色粘土 2.5Y 6/1
3. 灰白色粘土 2.5Y 7/1 粗砂を含む 腐植土
4. 黄灰色粘土 2.5Y 4/1 粗砂を含む 木質・木炭を含む 腐植土
5. 暗灰黄色土 2.5Y 5/2 木質を多量に含む 腐植土
6. 黄灰色粘土 2.5Y 5/1 木質を多量に含む 腐植土
7. 黒褐色粘土 2.5Y 3/1 木質を含む 腐植土
8. 暗灰色粘土 N 3/ 木質を含む 腐植土
9. 灰白色シルト 7.5Y 7/1 炭化物を含む
10.灰色粘土 7.5Y 6/1
11.灰黄色土 2.5Y 7/2 風化頁岩

第29図　Ⅲ・Ⅴ区土層図１(縮尺 1/60)

Ⅲ区　西壁

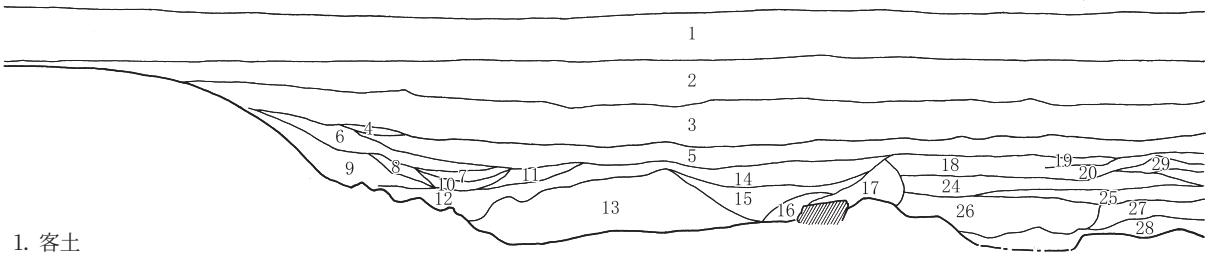


1. 灰白色粘土 N 7/ マンガン・鉄分沈着
2. 青灰色粘土 5B 6/1
3. 黄灰色粘土 2.5Y 5/1
4. 粗砂(黄色土 2.5Y 8/6ブロックを含む)
5. 黄灰色粘土 2.5Y 6/1
6. 黄灰色粘土 2.5Y 4/1

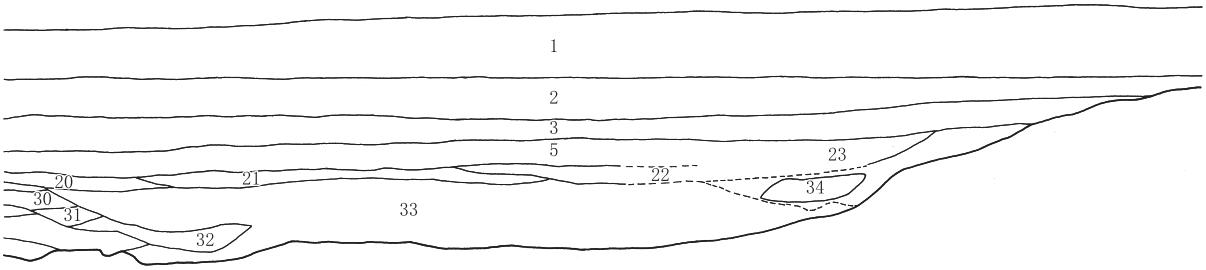


7. 灰黄色砂質土 2.5Y 6/2
8. 暗オリーブ灰色粘土 2.5GY 4/1
9. 粗砂
10.暗オリーブ灰色粘土 2.5GY 4/1
11.灰色粘土 N 5/
12.緑灰色砂粘質土 5G 6/1
13.黄灰色粘土 2.5Y 6/1
14.木質 腐植土
15.緑灰色砂・粘土の互層 5G 6/1
16.緑灰色砂粘土 5G 6/1
17.黄色岩盤 2.5Y 8/6

Ⅴ区　西壁



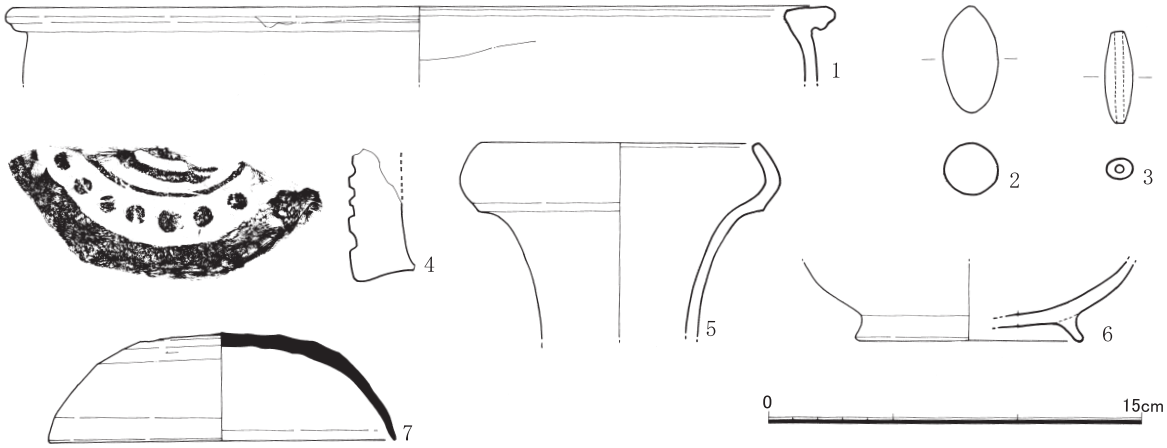
1. 客土
2. 黄灰色粘土 2.5Y 4/1 粗砂を含む
3. 黒褐色粘質土 2.5Y 3/2 炭化物を含む 腐植土
4. 灰黄褐色砂粘質土 10YR 4/2 礫を含む
5. 黒褐色粘質土 2.5Y 3/2 炭化物を含む 腐植土
6. 黄灰色粘土 2.5Y 5/1
7. 褐灰色粘質土 10YR 4/1
8. にぶい黄褐色砂粘質土 10YR 5/4
9. 灰色礫 10Y 6/1
10.黄灰色砂粘質土 2.5Y 5/1



0　2m

11.褐灰色粘質土 10YR 4/1
12.黒褐色粘質土 2.5Y 3/1～3/2 木質を含む
13.暗灰黄色礫～粗砂 2.5Y 5/2 岩盤と同質の石を含む
14.灰白色シルト～粗砂 10Y 7/1
15.浅黄色粗砂 2.5Y 7/3 灰白色シルトが混ざる
16.灰白色シルト 10Y 7/1
17.灰黄褐色粗砂 10YR 6/2
18.灰白色シルト 10Y 7/1
19.明青灰色シルト 5BG 7/1
20.灰白色シルト 10Y 7/1
21.黒褐色土 10YR 3/1
22.黒褐色土 2.5Y 3/1
23.褐灰色土 10YR 4/1
24.灰色シルト 10Y 5/1
25.褐灰色粘質土 10YR 4/1
26.黒色粘質土 10YR 2/1 木質を含む
27.明緑灰色シルト 7.5GY 7/1
28.明黄褐色礫～粗砂 10YR 6/6
29.灰白色シルト 10Y 8/1
30.灰色粘質土 7.5Y 4/1
31.褐灰色粘質土 10YR 4/1
32.黒褐色粘質土 10YR 3/1 木質を含む
33.灰白色礫～粗砂 10Y 8/1
34.黒褐色粘質土 10YR 3/1 炭化物を含む

第30図　Ⅲ・Ⅴ区土層図２（縮尺 1/60）



第31図　SD10上層出土遺物実測図（縮尺 1/3）

(2) 河川・谷

SD10（第28図）　南東から北西へ蛇行して流れる古河川で、幅6～8m、深さ1m 前後を測る。西側は調査区域外にのび、延長24m 検出した。第7次調査Ⅴ区では谷頭を検出した。

SD11（第28図）　SD10の北を蛇行して流れる古河川で、幅8～10m、深さ1m 前後を測る。西側は調査区域外にのび、延長27m 検出した。土層観察から SD10に先行する。SD10と同様に第7次調査Ⅴ区では谷頭を検出した。

出土遺物

SD10上層（第31図）

陶器 盤（1）　短くＬ字に折り返し、端部上面がやや内傾する口縁部片である。胎土には砂粒を含み、灰白色を呈する。灰オリーブ色の釉が外面折り返し直下から内面にかけてかけられている。釉下には灰白色の化粧土がかけられている。

投弾（2）　胎土には細かい砂粒を少量含み、焼成は良好で、灰白色を呈する。

土錘（3）　紡錘形の土錘で、胎土は精良、焼成は良好で、灰褐色を呈する。

軒丸瓦（4）　外区と内区を境は圏線で画され、わずかに残る内区は三つ巴とみられ、外区には珠文を密に配する。周縁の幅は1.4cm を測る。

弥生土器 壷（5）　袋状の口縁をもつ壷で、口縁下に退化した断面三角形の突帯をめぐらせる。磨滅が著しく調整不明。胎土には細かい砂粒を含み、焼成は良好で、橙色を呈する。

土師器 高台付椀（6）　口縁部が欠失している。体部と底部の境は丸味をもち、やや外に開く低い高台が底端部のやや内側に付く。体部は回転横ナデ、内底はナデを施す。磨滅が著しく、胎土には細かい砂粒を少量含み、焼成は少しよくなく、橙色を呈する。

須恵器 杯蓋（7）　天井部と体部の境に段や沈線はなく、丸くつくられている。口縁部はわずかに外に開き、端部内面には稜が付く。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ、その他の部位は横ナデを施す。

第6次調査 SD10下層出土土器（第32～35図）

浅鉢（1～15）　精製の黒色磨研土器で、内外面ともヘラ磨きを施す。

1は口縁部が長く内湾気味に大きく開き、波状をなす。頸部で小さくくびれ、内面に稜を持つ。

2～5は波状口縁を呈し、口縁部が内湾気味に開く。口縁部内面が肥厚し、段が付く。2･3の口縁部外面には沈線文、4･5の波頂部下、 5の肩部には凹点を施す。

6～12は口縁部が短く開き、内面には沈線状の段が付く。12は頸部と胴部の境にある屈曲が丸みを帯び、明瞭でなくなっている。

13は短い口縁部から直角に屈折する。

14･15は同一個体とみられる。口縁部が長く外反して開き、胴部で屈曲し丸底の底部へと続く。口縁部には補修孔が穿たれている。

深鉢（16～28）　16～24は半精製深鉢、25～29は粗製深鉢である。

16～19は口縁部が長く外反して開き、肩部の屈曲は明瞭に稜をなす。16は口縁部外面に連続する縦方向の弧状の沈線文を施す。17～19の口縁端部は内面に肥厚し、段が付く。20は口縁部が短く直立し、外面には3条の沈線をめぐらす。

21は口縁部が緩く屈曲し、波状を呈する。口縁部外面には2～3条の沈線文をめぐらし、波頂部下に垂下沈線を施す。内面に肥厚し、段が付く。22は口縁部が「く」の字形に屈曲して開き、波状を呈する。口縁部外面に4条の沈線をめぐらせ、波頂下と屈曲部に凹点を施す。胴部の屈曲部の上位にも2条の沈線をめぐらす。

23･24は頸部が長く内湾気味に立ち上がり、口縁部が外へ屈曲した後、内傾気味に立ち上がる。器面にナデを施す。

25～27は頸部と肩部が明瞭に稜をなして屈曲する。25･26の口縁部は外反して長くのび、25は口縁上に突起を貼付し、外面には炭化物が付着している。27は口縁部が欠失している。器面は条痕、ナデを施す。23～25･27は粗い砂粒を多量に含む。

28は直線的に長くのびる。外面は斜め方向、内面は横方向の条痕を施す。

29は外反して長くのびる。外面は横方向の条痕、内面はナデを施す。

30は肩部から屈曲して短くのびる頸部がそのまま口縁部となる浅鉢である。植物質破片を含み多孔質で、砂粒を多量に含む。

31は頸部が直線的に内傾してのび、口縁部が外に屈曲後、内傾気味に短く開く。頸部外面には格子目文、内面には横方向の板ナデが施される。胎土には粗い砂粒を含み、にぶい橙色を呈する。

底部（32～46）　32･33は円盤貼り付けの底部片で、34～41は断面逆台形を呈し、37･41は上げ底となる。35は植物質破片を含み多孔質で、粗い砂粒を多量に含む。46は粗い砂粒を多量に含み、さらに砕いた貝殻片を含む。

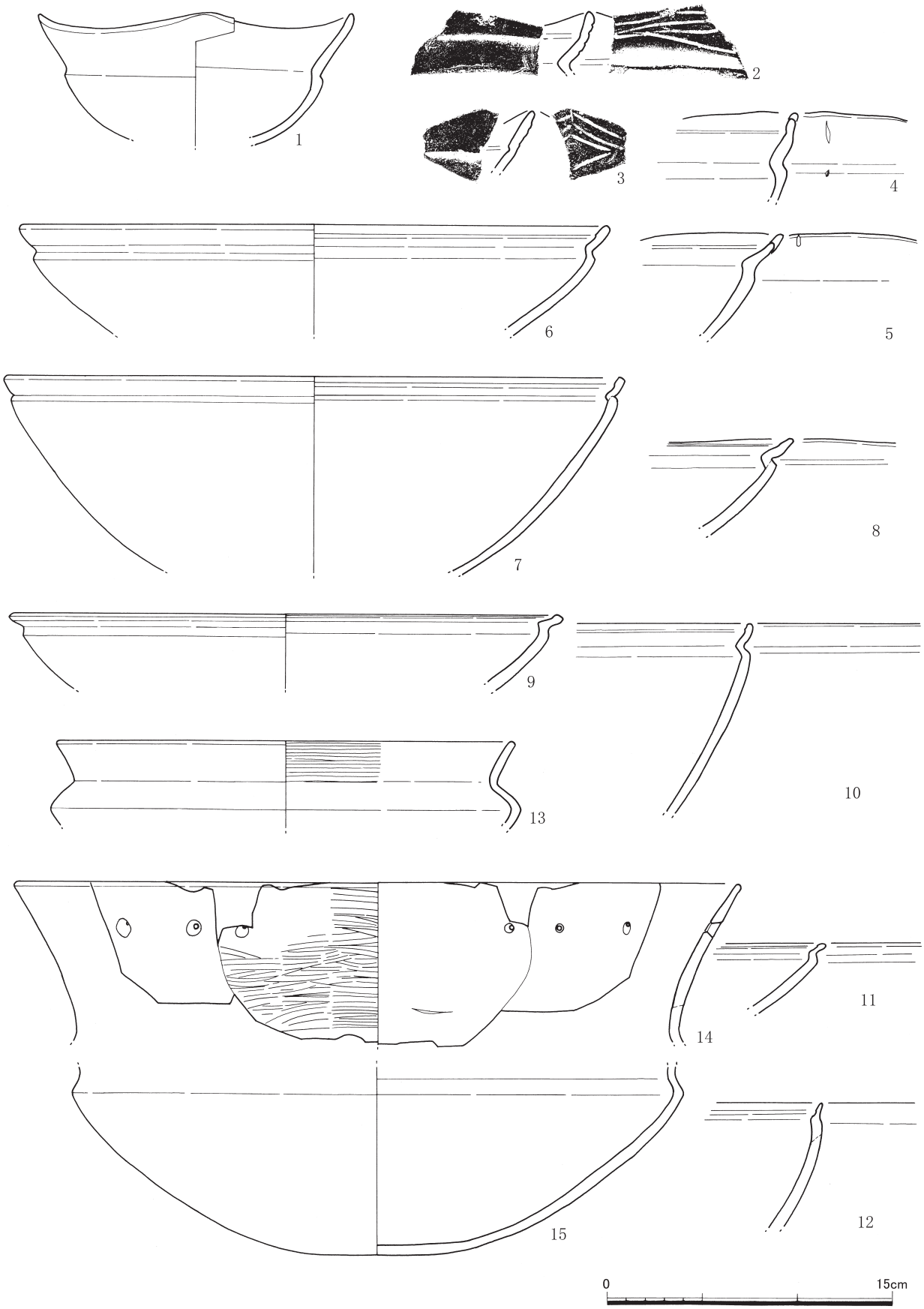
第6次調査 SD11下層出土土器（第36～39図）

浅鉢（1～12）　精製の黒色磨研土器で、内外面ともヘラ磨きを施す。胎土は細かい砂粒を含み、精良である。

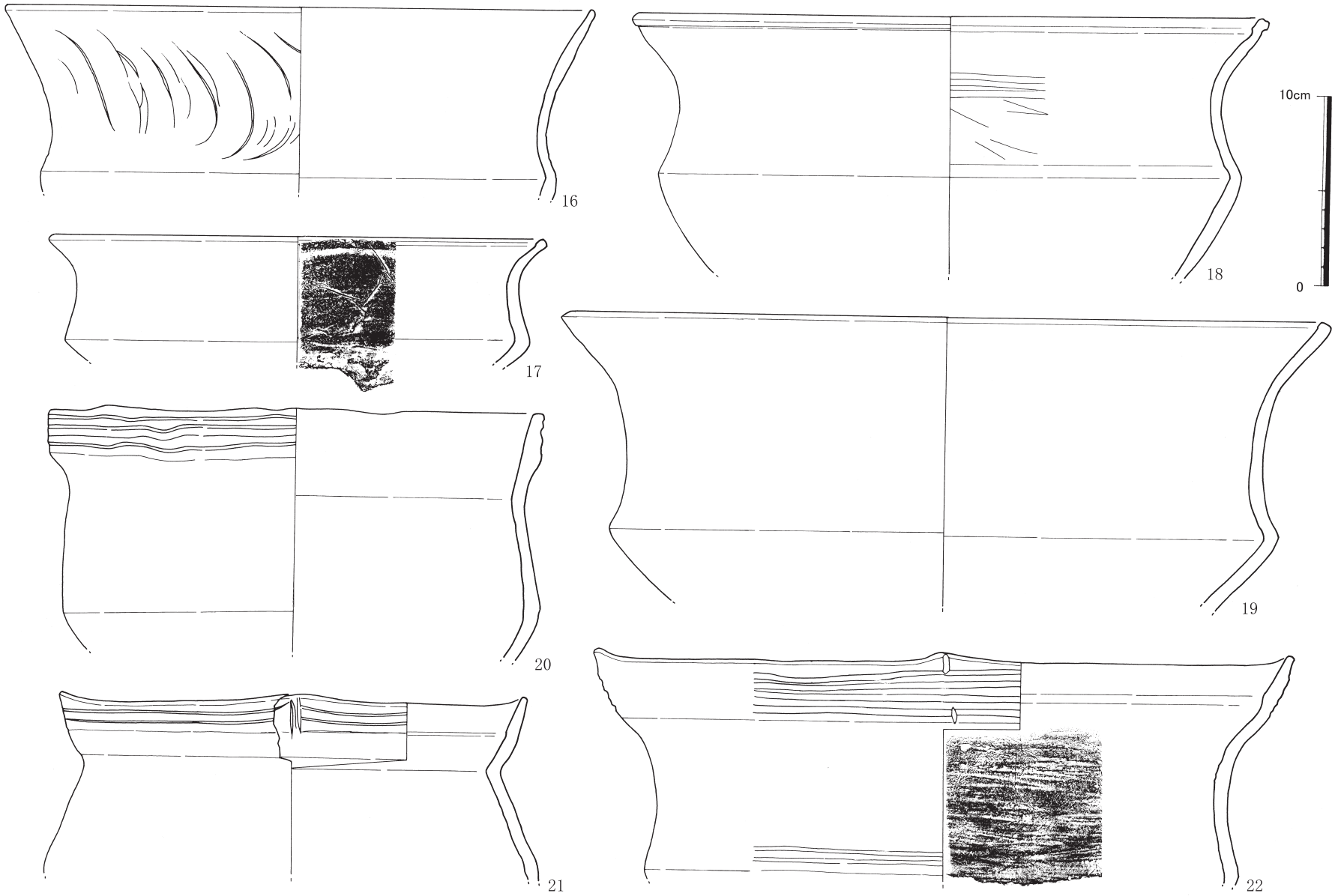
1は口縁部が長く内湾気味に大きく開き、波状をなす。口縁部内面が肥厚し、段が付く。頸部で小さくくびれ、内面に稜を持つ。波頂部下と肩部に凹点が施される。色調は黒褐色～黒色を呈する。

2は波状口縁を呈し、口縁部が短く内湾気味に開く。口縁部内面が肥厚し、段が付く。胎土はにぶい褐色、器表は黒色を呈する。

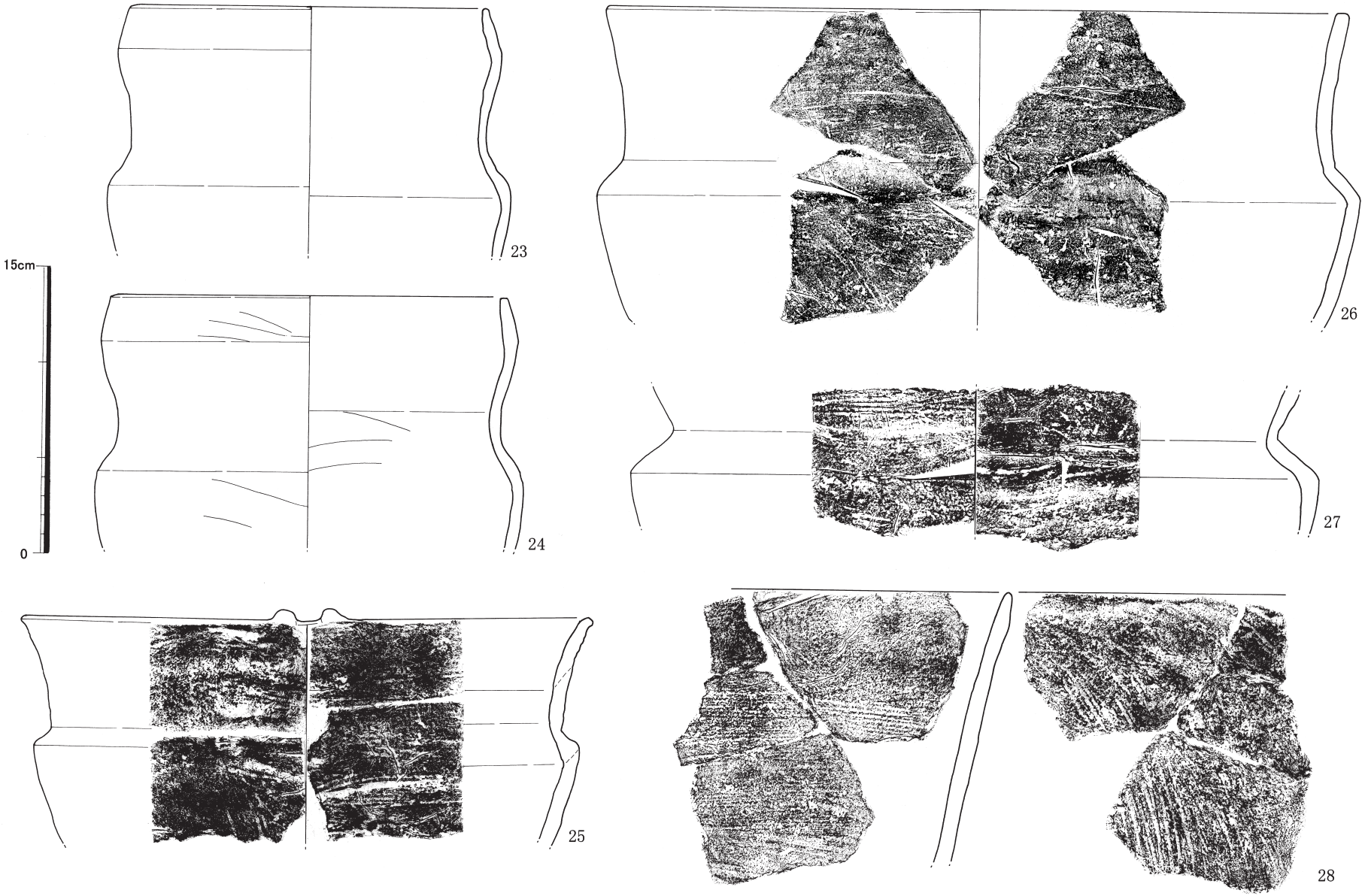
3～5は口縁部が短く開き、内面には沈線状の段が付く。波状口縁の4は外面波頂下と屈曲部に凹点



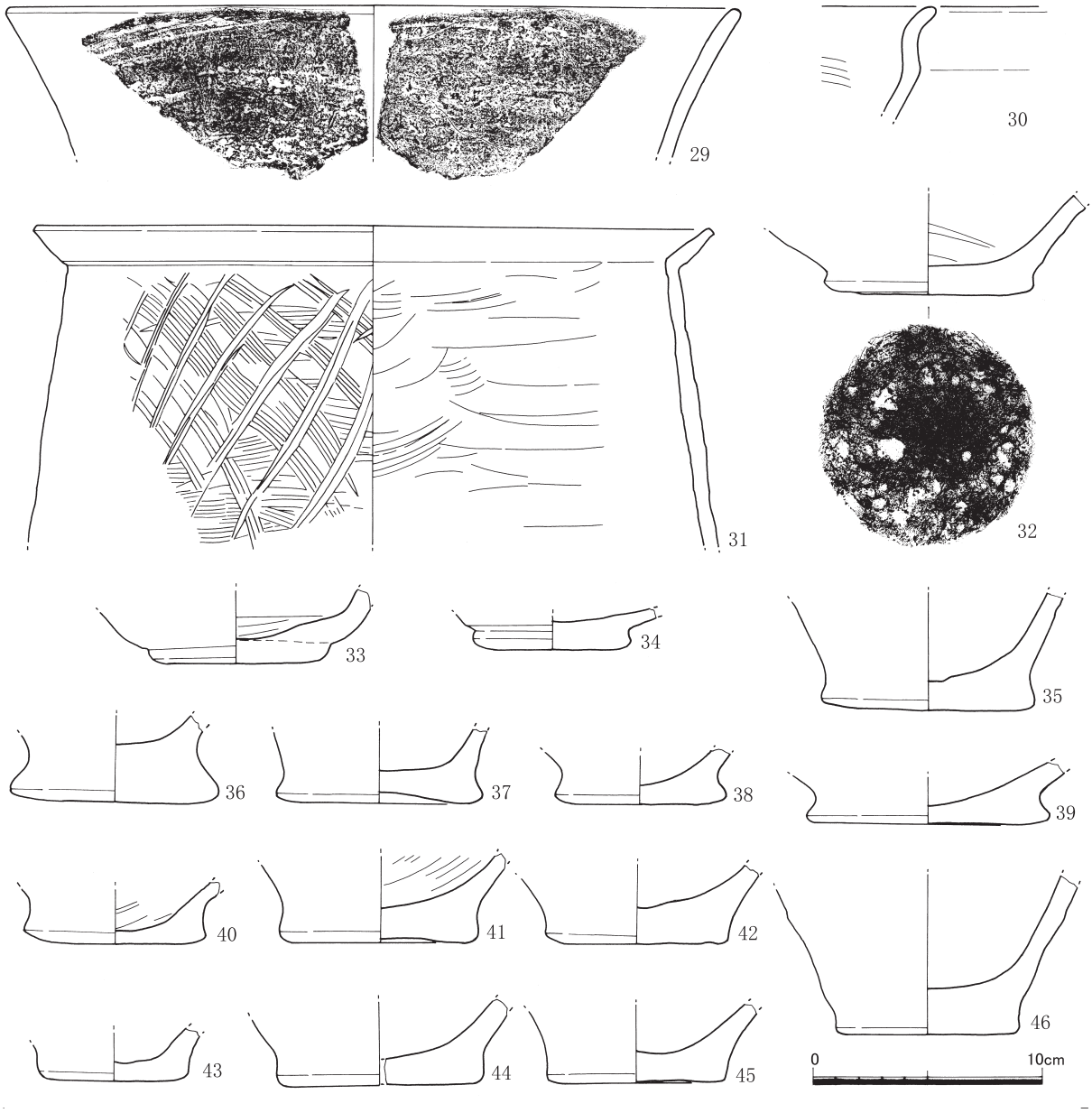
第32図　SD10下層出土土器実測図１(縮尺 1/3)



第33図　SD10下層出土土器実測図２（縮尺 1/3）



第34図　SD10下層出土土器実測図３（縮尺 1/3）



第35図　SD10下層出土土器実測図４（縮尺 1/3）

を施す。色調は3が灰黄褐色～黒色、4が黒色、5は黒褐色を呈する。

6は長く湾曲して外反する口縁部に短い口縁帯を付ける。色調は黒色を呈する。

7は口縁部が短く開き、端部内面が肥厚し、段が付く。色調は灰褐色～黒褐色を呈する。

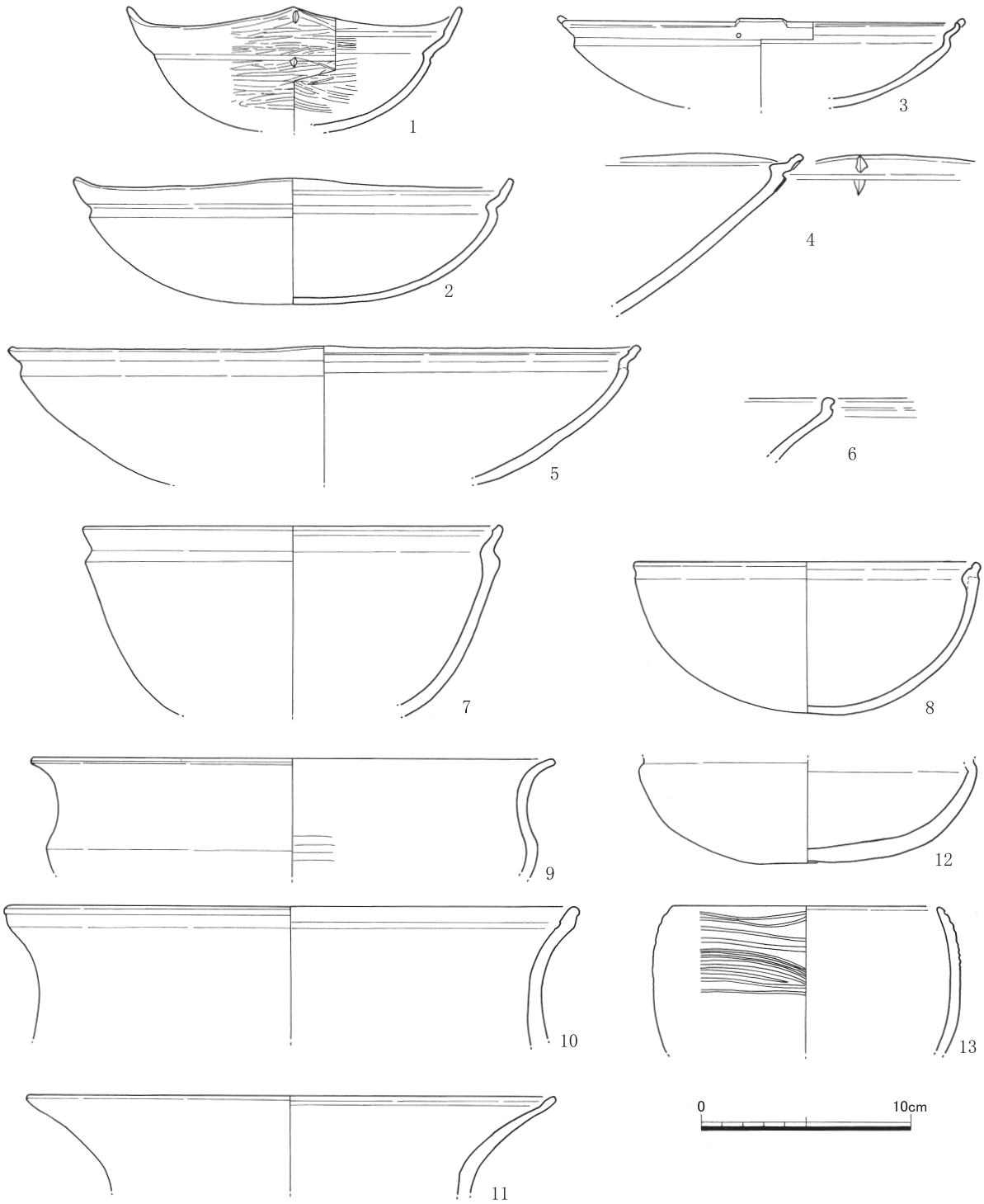
8は口縁部がさらに短く開き、端部内面には沈線をめぐらす。色調は灰黄褐色～黒褐色を呈する。12は口縁部が欠失しているが、1～5･7･8のいずれかのタイプの口縁が付くとみられる。灰黄褐色～黒色を呈する。

9は肩部から屈曲して短くのびる頸部がそのまま口縁部となる。色調はにぶい褐色を呈する。

10は長く外反して開く頸部から、口縁部が短く屈曲して開く。口縁帯は退化し、口縁部内面に沈線をめぐらす。色調は灰褐色を呈する。

11は口縁部が大きく外反して開き、端部は内面に肥厚し、段が付く。色調は灰褐色を呈する。

13は無頸のボウル状の鉢で、口縁部外面に重弧文を主とした沈線文様「滋賀里式文様」が施されて



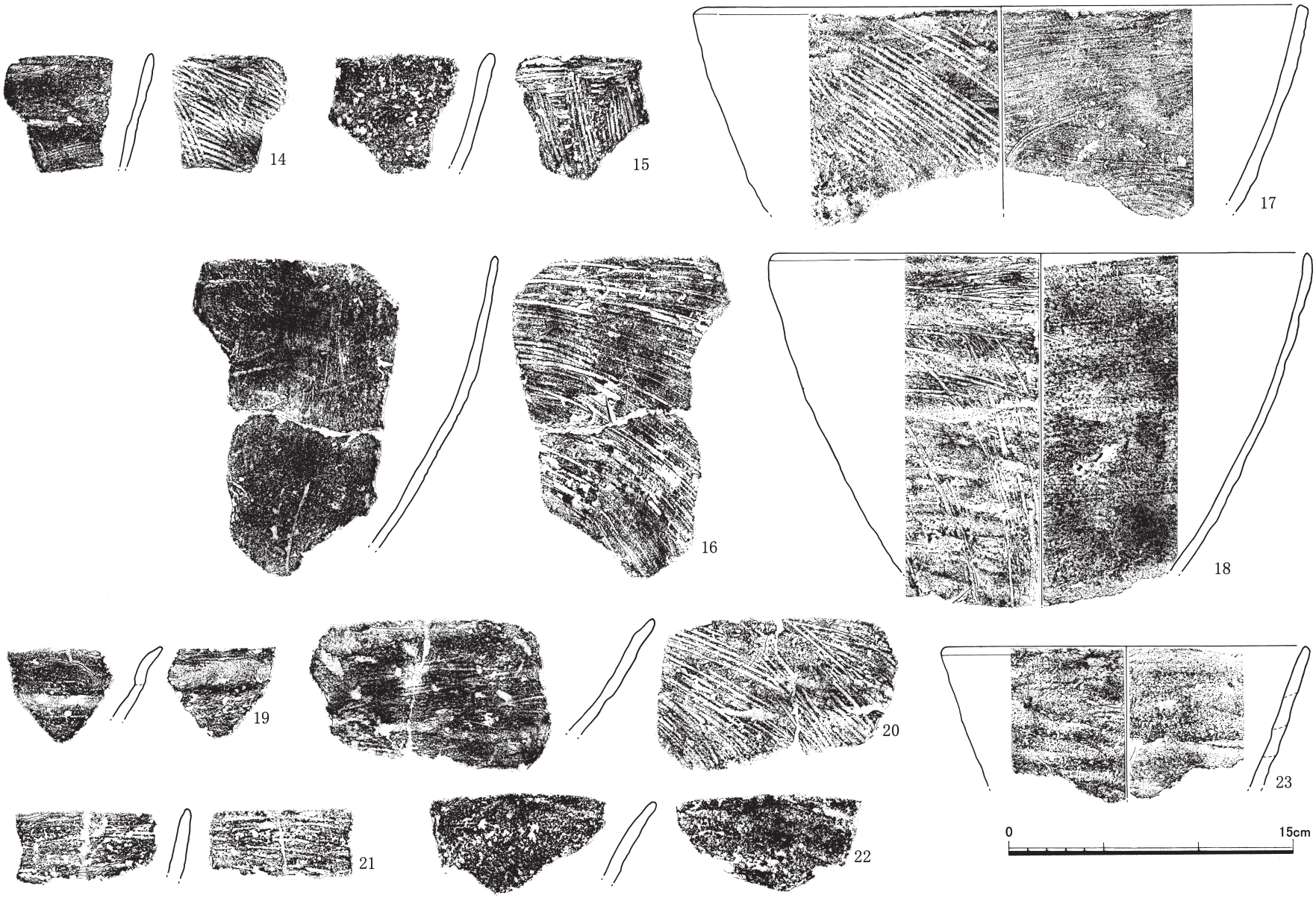
第36図　SD11下層出土土器実測図１（縮尺 1/3）

いる。胎土は褐灰色、器表は黒色を呈する。

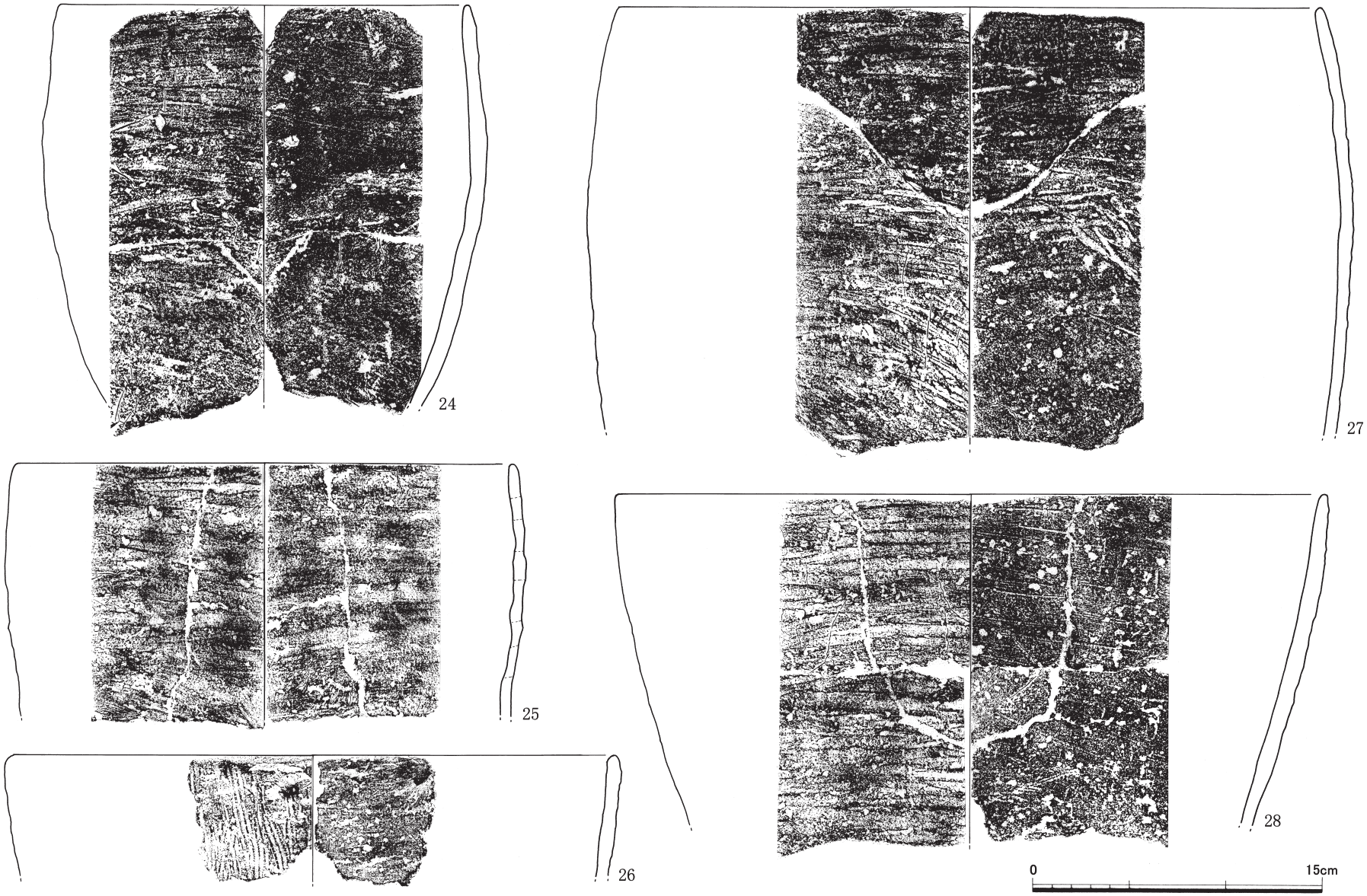
粗製深鉢（14～32）

14･15･17は直線的にのびる。外面は斜め方向の貝殻条痕を施す。15は粗い砂粒、植物質破片を含み多孔質である。色調は14･17が灰褐色、15がにぶい橙色を呈する。

16･18は内湾気味に開く。外面は斜め方向の条痕、内面はナデを施す。色調は16がにぶい橙色、18は褐灰色を呈する。



第37図　SD11下層出土土器実測図２(縮尺 1/3)



第38図　SD11下層出土土器実測図３(縮尺 1/3)

19・20は直線的にのび、口縁直下で屈曲し短く開く。20の外面は斜め方向の条痕、内面はナデを施す。色調は19がにぶい橙色、20は灰褐色を呈する。

23は直線的に開く。外面は条痕の後、ナデ、内面はナデを施す。色調はにぶい褐色を呈する。

24・25・27は内湾してのびる砲弾形のタイプで、内外面とも横方向の条痕を施す。24・27は粗い砂粒・植物質破片を含む。色調は24が明褐灰色、25が灰黄褐色、27は褐灰色～にぶい褐色を呈する。

26は直立気味に開く。外面は縦方向の貝殻条痕、内面はナデを施す。色調は褐灰色を呈する。

28は内湾気味に開く。内外面とも横方向の条痕を施す。粗い砂粒・植物質破片を含む。色調はにぶい褐色～黒色を呈する。

29は内湾気味にのび、口縁直下で屈曲し短く開く。色調は灰褐色を呈する。

30は口縁部が「く」の字形に屈曲し、内湾気味に開く。波状を呈する。色調は灰黄褐色を呈する。31・32は口縁部が外へ屈曲した後、内傾気味に立ち上がる。色調は灰褐色を呈する。

底部（33～50）　いずれも断面逆台形を呈する。34は植物質破片を多量に含み、多孔質である。37は粗い砂粒・植物質破片を多量に含む。38・48は粗い砂粒・植物質破片を含み、48は多孔質である。41は砂粒・植物質破片を多量に含む。44・48は粗い砂粒・植物質破片を多量に含み、多孔質である。45は砂粒・植物質破片を含み、多孔質である。47は砂粒を少量、植物質破片を多量に含み、多孔質である。49は砂粒を多量、植物質破片を含み、多孔質である。

第6次調査Ⅲ区出土石器・石製品（第40～42図）

石錘（第40図－1～3）　1は二方向を打ち欠き、抉りを入れる。多孔質の安山岩製で、長さ9.7cm、幅7.5cm、厚さ1.4cm を測る。SD10上層3・4トレ間出土。2は砂岩製で、長さ8.0cm、幅6.0cm、厚さ3.3cm を測る。SD11下層1・2トレンチ間出土。3は目の細やかな砂岩製で、長さ6.8cm、幅3.0cm、厚さ1.1cm を測る。SK12出土。

叩き石（第40図－4・5）　4は安山岩製で、長さ6.2cm、幅4.8cm、厚さ2.1cm を測る。SD11下層1・2トレ間出土。5は花崗閃緑岩製で、長さ10.6cm、幅8.3cm、厚さ3.9cm を測る。SD10下層3・4トレンチ間出土。

磨り石（第40図－6）　花崗閃緑岩の川原石の表裏を使用し、長さ14.2cm、幅8.6cm、厚さ4.2cm を測る。SD10下層1・2トレンチ間出土。

石剣（第40図－7）　粘板岩製か。SD10 1トレンチ出土。

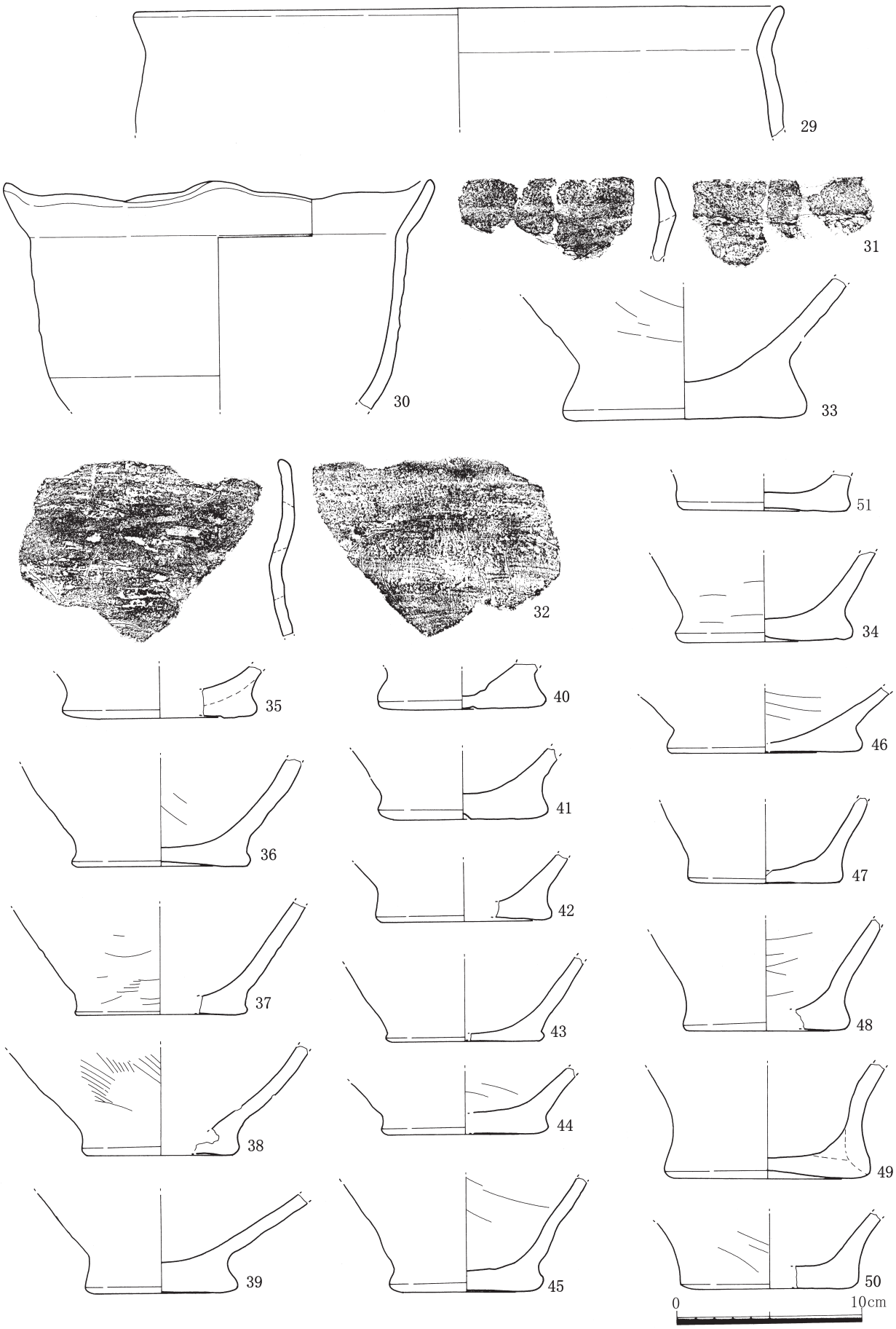
磨製石斧（第40図－8～10、第42図－8・9）　40－8は蛇紋岩製で、刃部が欠失している。SD10下層4トレ西側出土。9・10は SD11下層1・2トレンチ出土。40－9が蛇紋岩製で、40－10は蛇紋岩が変質した水滑石製。42－8は蛇紋岩製で、刃部が欠失する。SD10下層3・4トレンチ間出土。42－9は安山岩製で、刃部および基部先端が欠失する。SD10下層1・2トレンチ間出土。

打製石鏃（第41図－1～3・13）　1・2は有脚鏃で、1は長さ1.8cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm を測る。漆黒黒曜石製。SD11下層1・2トレンチ間出土。2は長さ2.6cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm を測る。縞模様のある黒曜石製。SD11下層3・4トレンチ間出土。3は有脚三角鏃で、長さ2.5cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm を測る。漆黒黒曜石製。SD11下層1・2トレンチ間出土。13は三角鏃で、長さ2.5cm、幅1.7cm、厚さ0.6cm を測る。漆黒黒曜石製。Ⅲ区表採。

剥片類（第41図－5～11）、石刃（第42図－3～6）

石匙（第42図－1）　片面に稜線を持ち、断面三角形を呈する。サヌカイト製で、SD10 4トレンチ西側出土。

ラウンド・スクレイパー（第42図－2）　緑泥片岩製で、ほぼ完形で、長さ5.5～5.8mm、厚さ1.3cm



第39図　SD11下層出土土器実測図４(縮尺 1/3)

を測る。SD11下層1･2トレンチ間出土。

小玉（第42図－7）　緑色軟玉製の算盤玉形小玉で、双方向から穿孔されている。完存し、長さ3.5mm、径0.5mm を測る。SD10下層3トレ西側出土。

第7次調査 SD10 3層出土土器（第43～46図）

浅鉢（1～21･23）　1～14･16は精製の黒色磨研土器で、内外面ともヘラ磨きを施す。胎土は細かい砂粒を含み、精良である。18～20についても精製、15･17･21は半精製、23は粗製である。

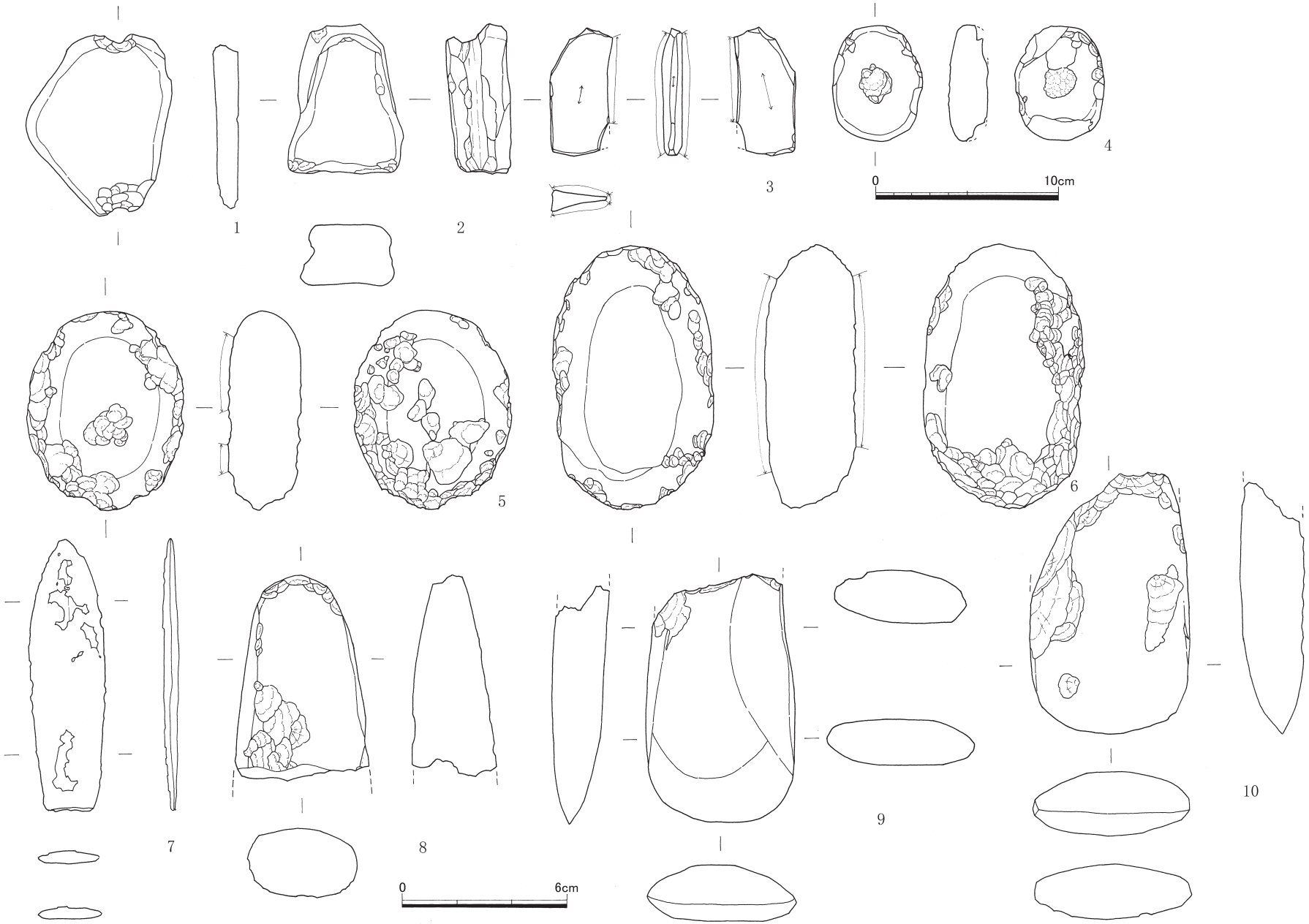
1～4は口縁部が長く内湾気味に大きく開き、波状をなす。口縁部内面が肥厚し、段が付く。1の波頂部口縁端、 3の波頂部下と肩部には凹点が施される。色調は1～3が黒色、4は胎土が灰褐色、器表が黒色を呈する。5～11は口縁部がやや短く開き、内面には沈線状の段が付く。11の肩部内面の屈曲は緩く丸味を帯びる。色調は5･7･8･11が黒色、6･9が黒褐色、10が灰褐色を呈する。12･13は口縁部が短く外反し、内面の屈曲は緩く丸味を帯びる。口縁端部内面に沈線をめぐらす。12の胎土はにぶい橙色、器表は黒褐色、13の色調はにぶい褐色を呈する。14は口縁端部を細くおさめ、頸部と胴部の境の屈曲が丸味を帯びる。色調は灰褐色を呈する。15は口縁部が短く開き、内面には沈線状の段が付く。頸部と胴部の境にある屈曲は明瞭で稜が付く。口縁部外面には雑に数条の沈線をめぐらす。色調は黒褐色を呈する。16は口縁部が短く内湾気味に開く。端部内面が肥厚し段が付く。口縁部外面に3条の沈線をめぐらす。色調は黒色を呈する。17は無頸の鉢で、口縁部内面が肥厚し段が付く。色調はにぶい褐色を呈する。18～20は半精製の同一個体とみられる無頸の鉢で、波状口縁とみられる。口縁部には補修孔が穿たれている。粘土紐を貼り付け、渦巻き文を施す。色調は灰褐色を呈する。21は内傾する頸部から口縁部が緩く屈曲した後、内湾気味に開く半精製の浅鉢で、色調はにぶい褐色を呈する。23はミニチュアの粗製浅鉢で、植物質片を含み、にぶい褐色を呈する。

粗製深鉢 22は長く外反して開く口縁部片で、内面に肥厚し段が付く。砂粒･植物質破片を含み、多孔質である。色調は外面が明褐灰色、内面は黒色を呈する。24は口縁部が長く内湾気味に開き、肩部の屈曲はやや丸味を帯びる。色調はにぶい橙色を呈する。25･26は口縁部が「く」の字形に屈曲し、内湾気味に開く。植物質破片を多量に含み、多孔質である。色調はにぶい褐色を呈する。25は外面に貝殻条痕を施し、胴部中位は緩やかに屈曲する。27･29は内湾気味に開く。27は外面が横方向の条痕、内面は横方向の板ナデを施す。植物質破片を多量に含み、灰褐色を呈する。29は器面に条痕を施す。植物質破片・貝殻片を含み多孔質で、灰褐色を呈する。28・44は直線的に開く。器面に条痕を施し、にぶい褐色を呈する。30は外へ屈曲した後、内傾気味に立ち上がる口縁部片である。植物質破片を含み多孔質で、灰褐色を呈する。31･45は直立気味に開く。外面が横方向の条痕、内面は横方向の板ナデを施し、褐灰色を呈する。45は口縁端部が平坦で外傾する。外面の条痕は貝殻によるものである。32～40･42は断面逆台形を呈する底部、41は円盤貼り付けの底部である。

第7次調査 SD11 3層出土土器（第47･48図）

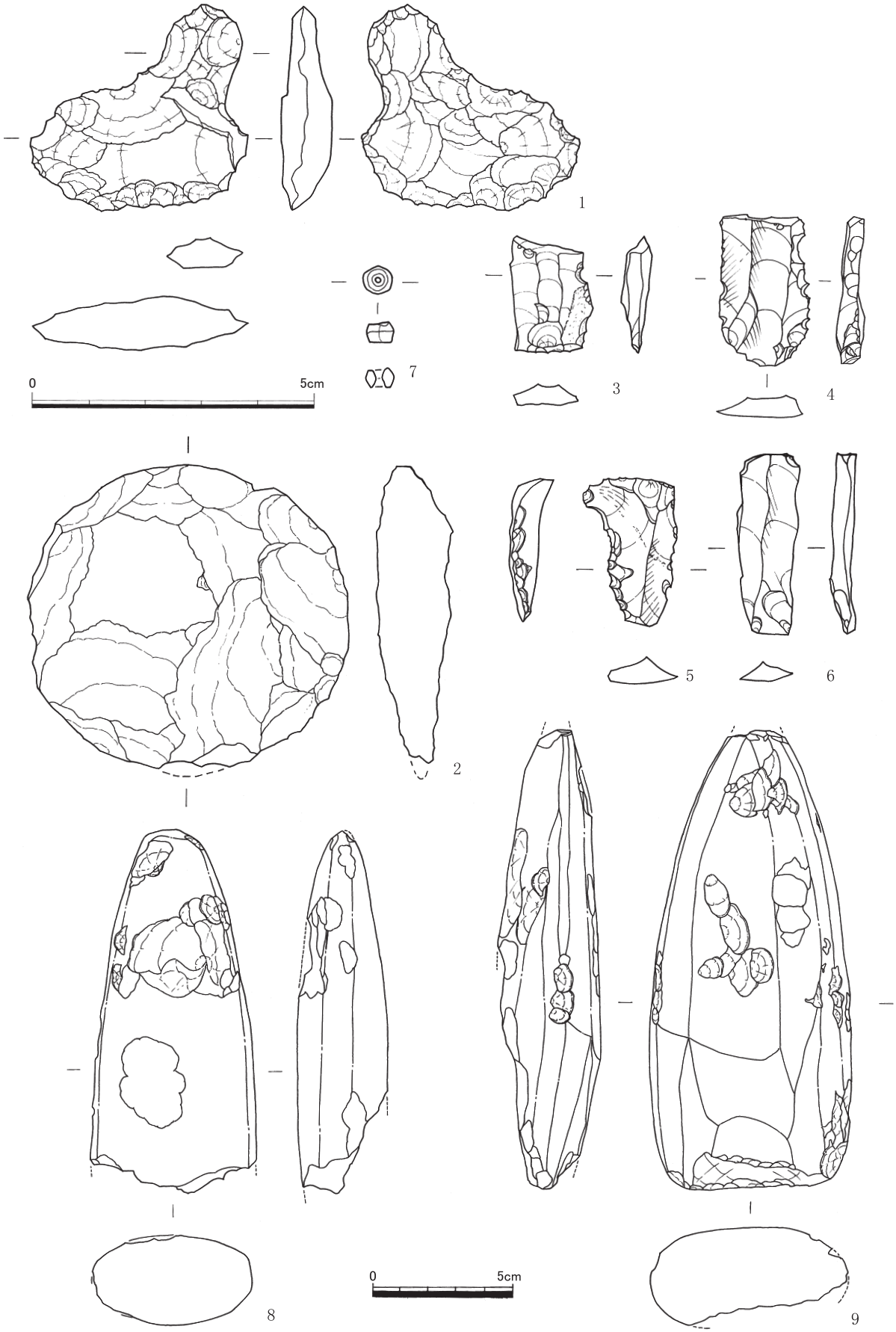
浅鉢（1～16）　精製の黒色磨研土器で、内外面ともヘラ磨きを施す。細かい砂粒を含む精良な胎土である。

1･2は大型の浅鉢で、口縁部が長く内湾気味に大きく開き、波状をなす。口縁部内面が肥厚し、段が付く。頸部で小さくくびれ、内面に稜を持つ。2の波頂部下と肩部には凹点が施される。色調は1が灰褐色、2は黒褐色を呈する。3は中型の浅鉢で、口縁部が長く内湾気味に開く。口縁端部内面が肥厚し、段が付く。色調は黒色を呈する。6･7は口縁部が短く開き、内面には沈線状の段が付く。6は波状口縁で、口縁端の波頂部に凹点を刻む。色調は6が黒色、7は黒褐色を呈する。4･5･8～11は口縁部がやや短く開き、内面には沈線状の段が付く。波状口縁の4･5の波頂部下、5の肩部には凹点を施す。色

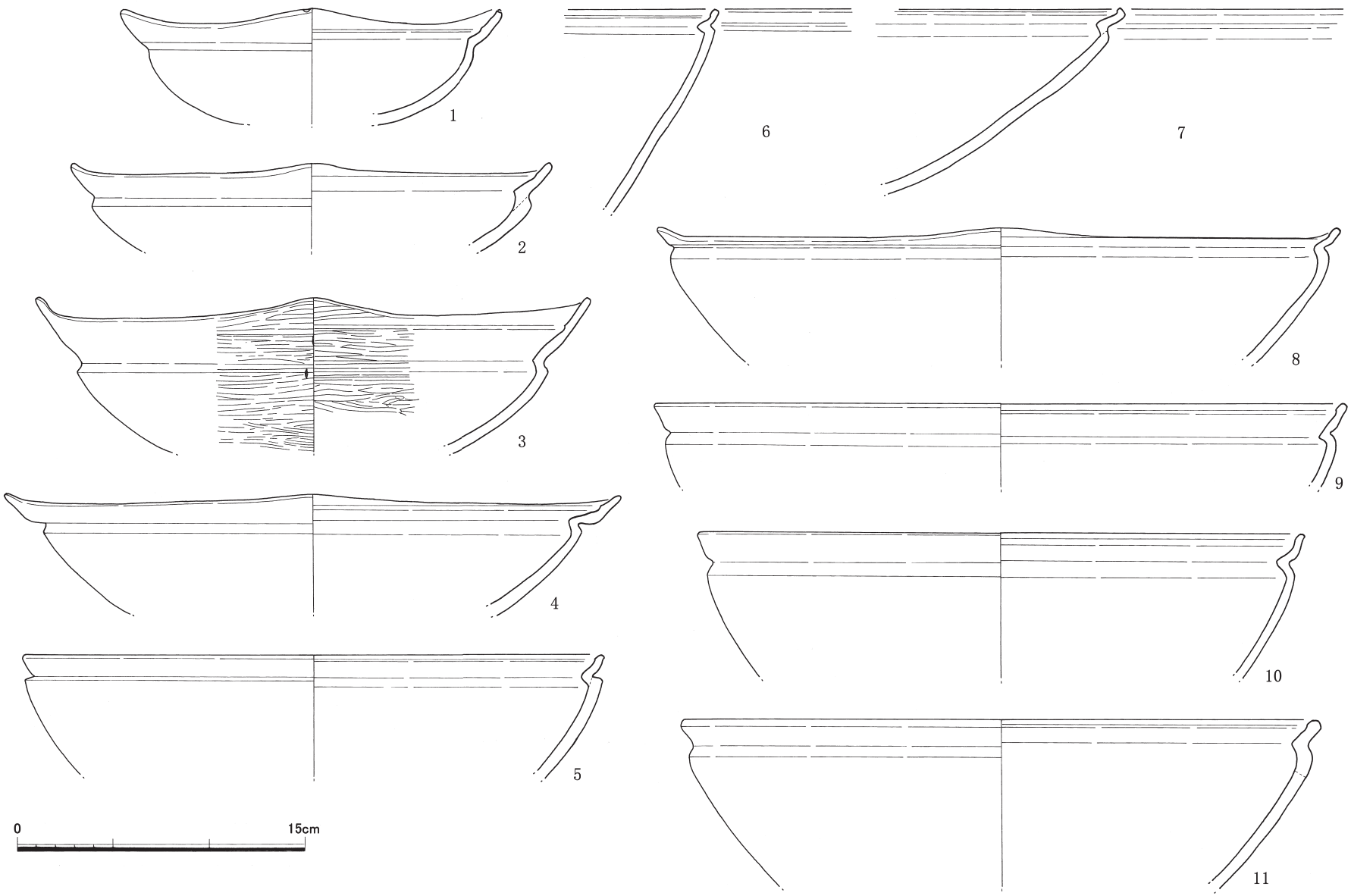


第40図　SD10・11出土石器実測図１(縮尺 1/3・1/2)

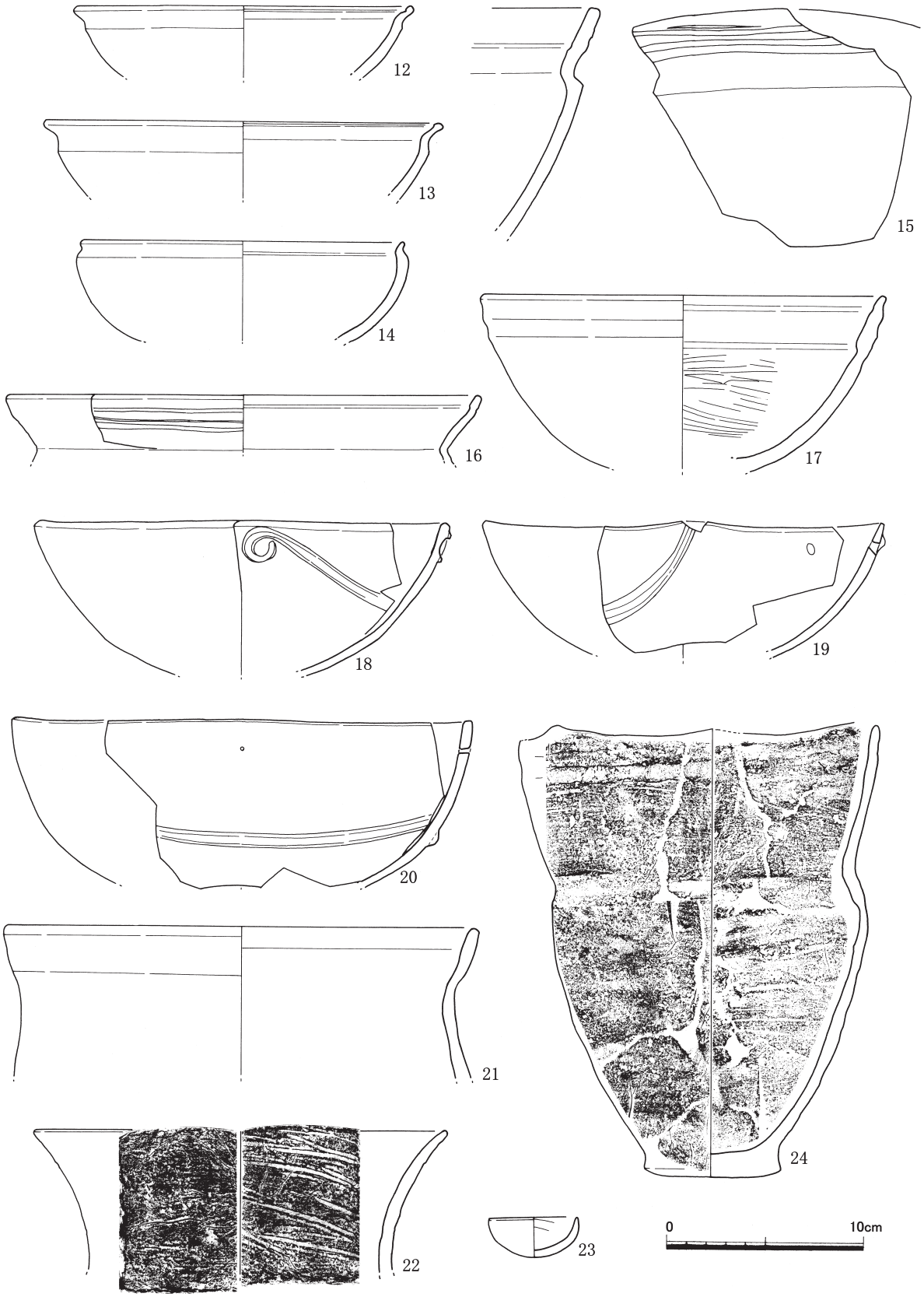
第41図　SD10・11出土石器実測図２(縮尺 1/1)



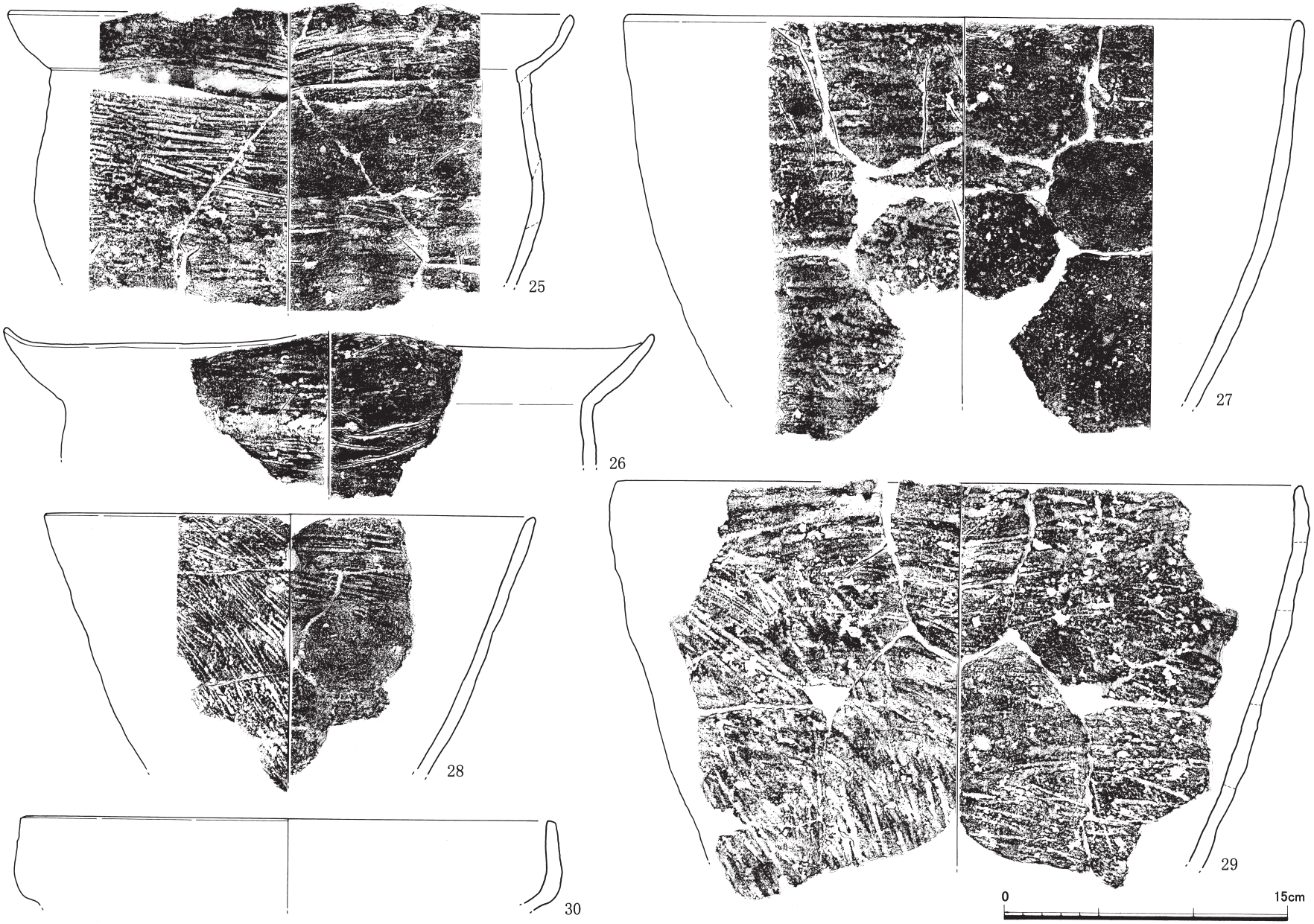
第42図　SD10・11出土石器実測図３(縮尺 1/1･1/2)



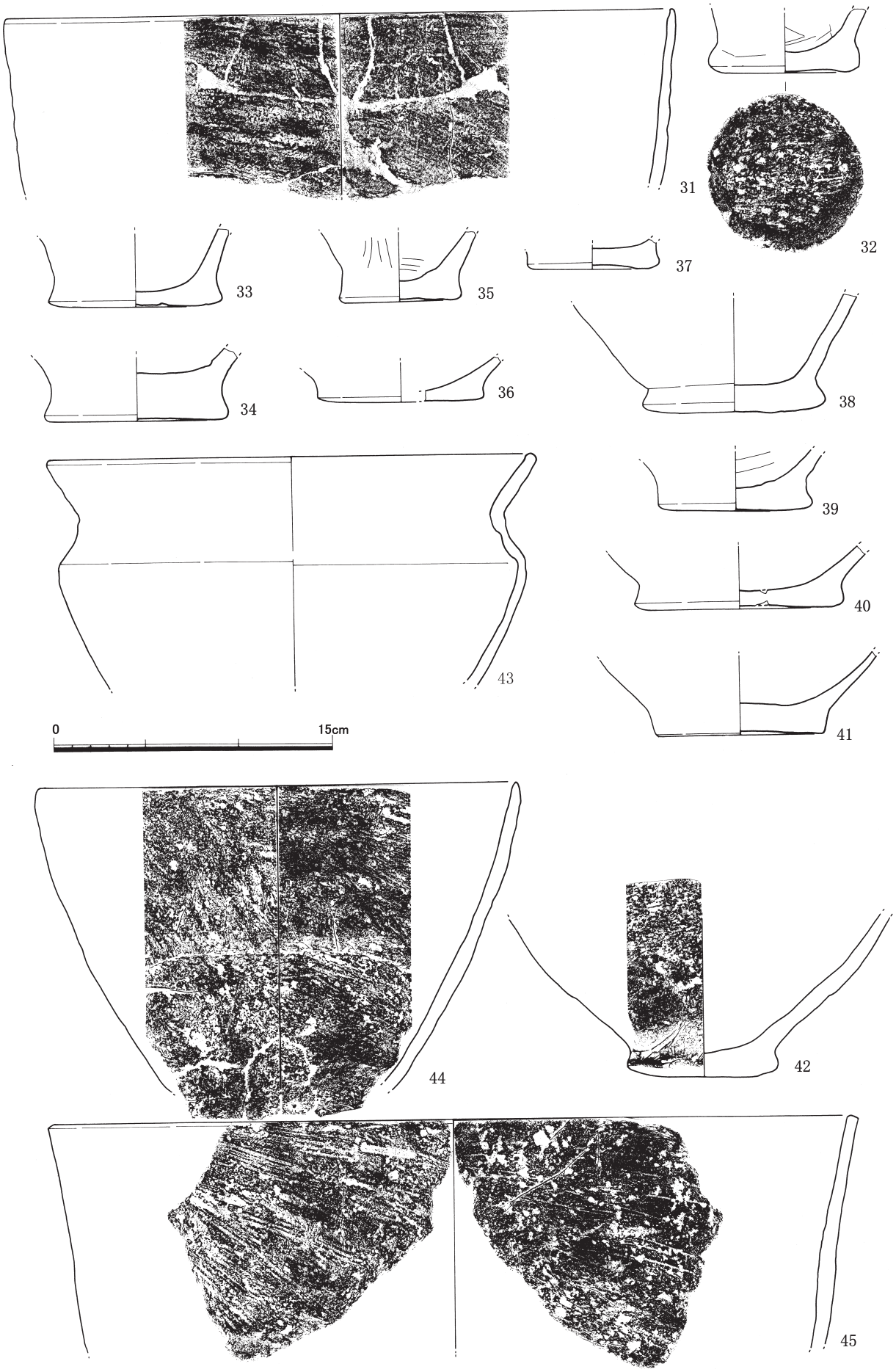
第43図　SD10 3層出土土器実測図１(縮尺 1/3)



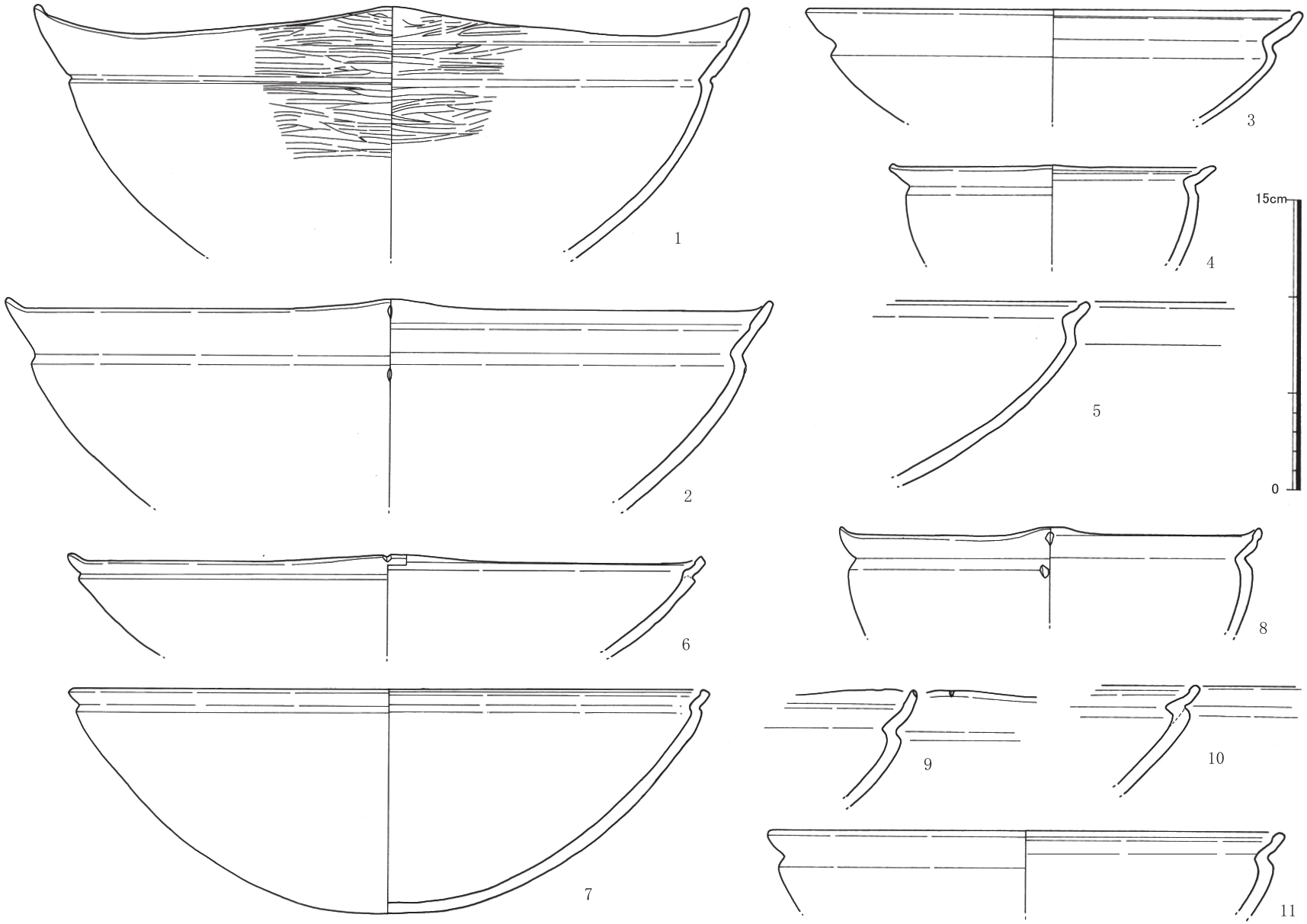
第44図　SD10 3層出土土器実測図２(縮尺 1/3)



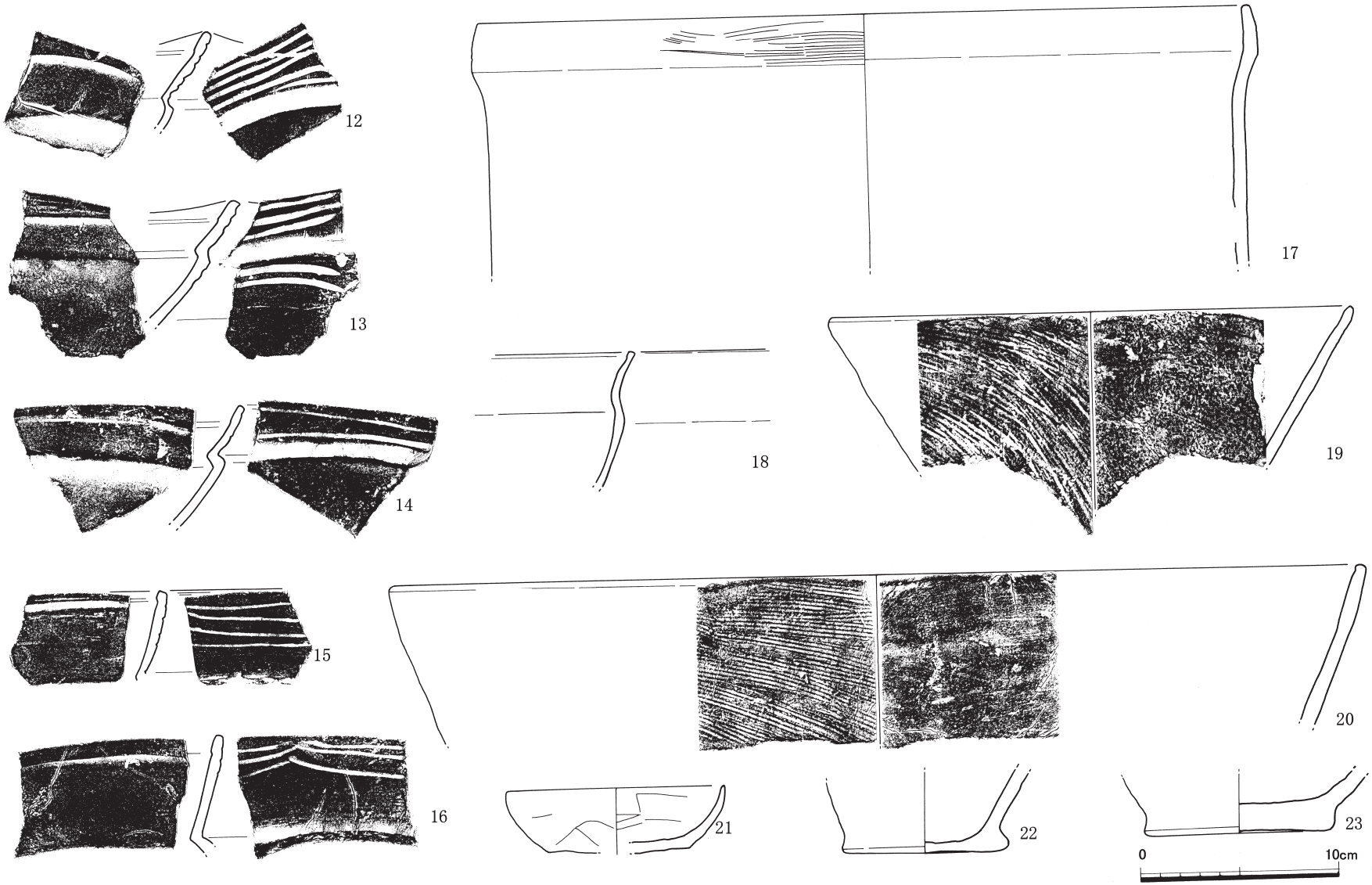
第45図　SD10 3層出土土器実測図３(縮尺 1/3)



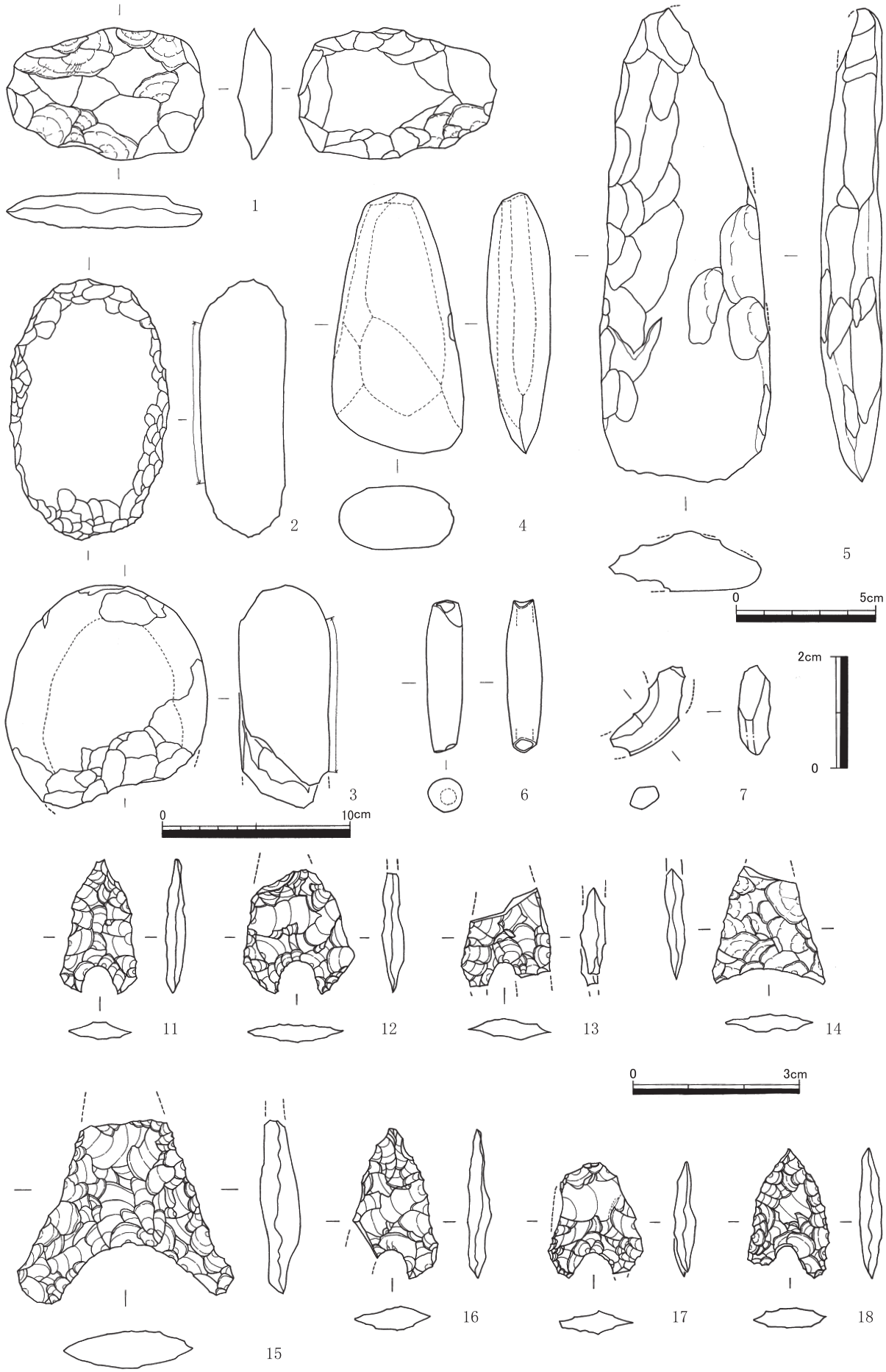
第46図　SD10 3層出土土器実測図４(縮尺 1/3)



第47図　SD11 3層出土土器実測図１(縮尺 1/3)



第48図　SD11 3層出土土器実測図２(縮尺 1/3)



第49図　SD10・11出土石器実測図（縮尺 1/1･1/2･1/3）

調は4･8～10が黒色、5が黒褐色、11は褐灰色を呈する。12～14は波状口縁を呈し、口縁部が内湾気味に開く。口縁部内面が肥厚し、段が付く。口縁部外面には沈線文、13の肩部には凹点を施す。色調は12･14が黒色、13は灰褐色を呈する。15･16は口縁部が長めに直線的に開く。口縁端部内面が肥厚し段が付く。口縁部外面には沈線文、弧線文を施す。色調は黒色を呈する。

深鉢（17～20）　17は頸部が直に立ち上がり、口縁部は外に屈曲後、内傾気味に立ち上がる。色調はにぶい褐色を呈する。

18は口縁部が短く外反して開き、胴部で緩く屈曲する。口縁端部下内面をくぼませ段が付く。色調は黒色を呈する。19･20は直線的に外に開く。20の外面には貝殻条痕が明瞭に残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。

21はミニチュアの粗製浅鉢で、植物質片を含み、にぶい褐色を呈する。22は断面逆台形の底部片、23は円盤貼り付けの底部片である。

第7次調査Ⅴ区出土石器・石製品（第49図）

スクレイパー（1）　安山岩製で、SD10 3層北端出土。

叩き石（2）　花崗岩製で、長さ13.8cm、幅8.4cm、厚さ5.6cm を測る。SD10 4層出土。

磨り石（3）　安山岩の川原石の1面を使用する。約1/3欠損し、残存長11.9cm、幅10.7cm、厚さ4.9cm を測る。SD11 3層出土。

磨製石斧（4･5）　5は安山岩製の完形品で、長さ9.3cm、幅4.8cm、厚さ2.3cm を測る。Ⅴ区東側出土。4は頁岩製で、基部側で約1/5欠損している。長さ16.9cm、幅6.1cm、厚さ2.2cm を測る。穿孔の工具痕がみられ、石錘としても利用されているが、前後関係は不明。SD10 1層出土。

管玉（6）　緑色軟玉製で、双方向から穿孔されている。ほぼ完存し、長さ2.7cm、径0.6cm を測る。SD11 3層出土。

勾玉（7）　頁岩製で、頭と尾の両端は欠失している。SD11 3層出土。

打製石鏃（11～18）　11～15は SD10 3層出土。11～13は有脚鏃で、11は長さ2.4cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm を測る。縞模様のある黒曜石製。12は残存長2.2cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm を測る。漆黒黒曜石製。13は残存長1.8cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm を測る。漆黒黒曜石製。14は三角鏃で、残存長2.1cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm を測る。安山岩製。15は石銛で、残存長3.3cm、幅3.8cm、厚さ0.7cm を測る。漆黒黒曜石製。16･17は SD11 3層出土の有脚鏃で、16は長さ2.7cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm を測る。漆黒黒曜石製。17は残存長2.1cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm を測る。白濁粒子の混入している黒曜石製。18はⅤ区表採の有脚鏃で、長さ2.3cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm を測る。縞状に細かな粒子が入る黒曜石製。

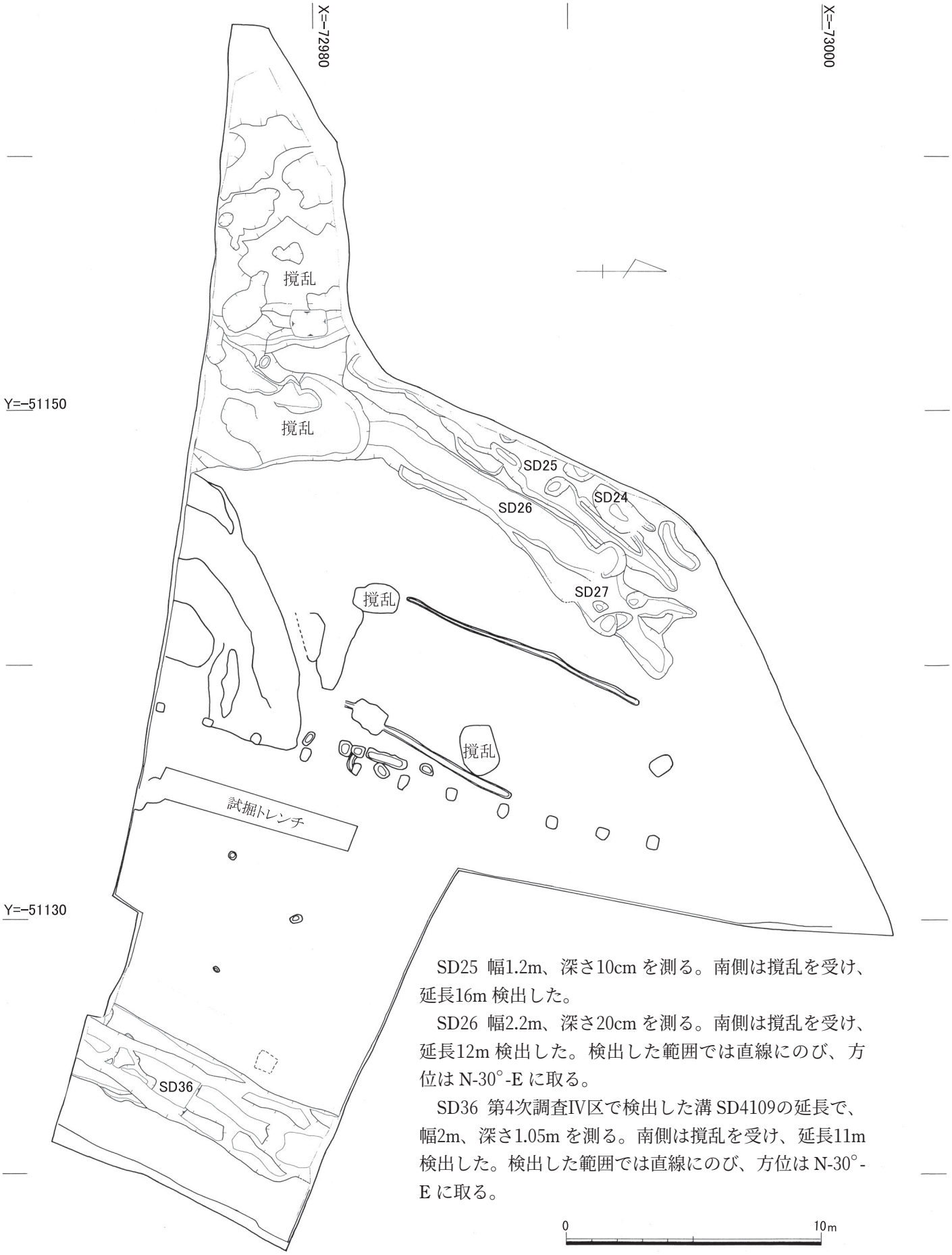
5　第７次調査 Ⅵ区の遺構と遺物

(1) 調査区の概要

第6次調査Ⅲ区西側に接し、調査区中央は後世の削平により遺構は認められなかった。調査区西辺縁に沿って8～11世紀の溝3条、東側で5世紀の溝1条（第4次調査Ⅳ区検出の溝 SD4109の延長）を検出した。遺構の時期は出土した土器から西側の SD24・中央の SD25が8世紀後半から9世紀初頭、東側の SD26が11世紀前半とみられる。

(2) 溝（第50図）

SD24 西岸が調査区域外にかかり、幅1.2m 以上、深さ15cm を測る。SD25に切られる。南側は撹乱を受け、延長12m 検出した。



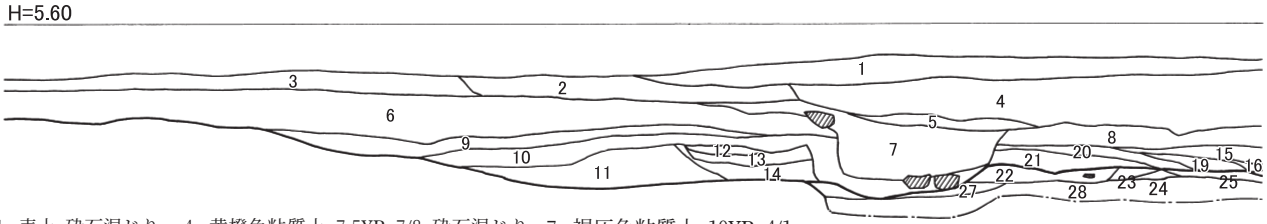
SD25 幅1.2m、深さ10cm を測る。南側は撹乱を受け、延長16m 検出した。

SD26 幅2.2m、深さ20cm を測る。南側は撹乱を受け、延長12m 検出した。検出した範囲では直線にのび、方位は N-30°-E に取る。

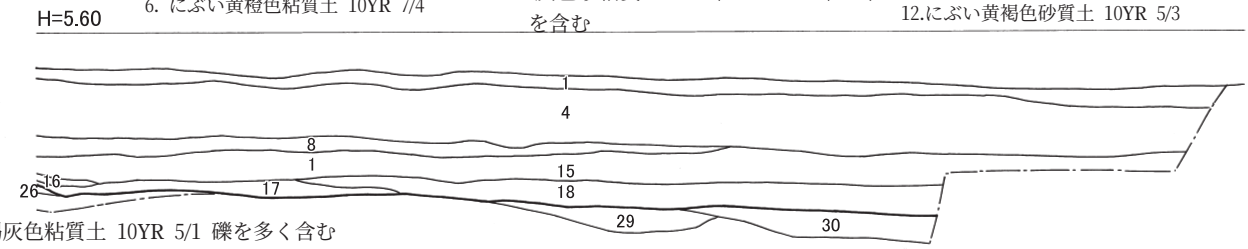
SD36 第4次調査Ⅳ区で検出した溝 SD4109の延長で、幅2m、深さ1.05m を測る。南側は撹乱を受け、延長11m 検出した。検出した範囲では直線にのび、方位は N-30°-E に取る。

第50図　第７次調査Ⅵ区遺構配置図（縮尺 1/200）

VI区　南壁



1. 表土 砕石混じり
2. 表土 現代埋土
3. 表土
4. 黄橙色粘質土 7.5YR 7/8 砕石混じり 現代埋土
5. 黄灰色粘質土 2.5Y 4/1
6. にぶい黄橙色粘質土 10YR 7/4
7. 褐灰色粘質土 10YR 4/1
8. 褐灰色粘質土 10YR 4/1～5/1
9. 灰色砂粘質土 5Y 7/2～10YR 7/4 礫を含む
10.灰白色～にぶい黄橙砂土 5Y 7/2～10YR 7/4 礫を多く含む
11.にぶい黄褐色砂粘質土 10YR 6/4 礫を含む
12.にぶい黄褐色砂質土 10YR 5/3

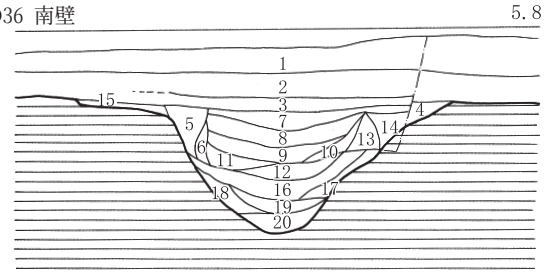


13.褐灰色粘質土 10YR 5/1 礫を多く含む
14.にぶい黄褐色砂粘質土 10YR 5/3 礫を含む
15.にぶい褐色粘質土 7.5YR 5/4
16.にぶい黄橙色粘質土 10YR 6/4
17.明オリーブ灰色～にぶい黄褐色砂粘質土 2.5GY 7/1～10YR 3/4
18.にぶい褐色～褐灰色粘質土 7.5YR 5/4～10YR 5/1
19.にぶい黄橙色粘質土 10YR 6/3
20.褐灰色粘質土 10YR 5/1
21.にぶい黄橙色粘質土 10YR 6/3
22.灰白色砂粘質土 10Y 7/1
23.灰黄褐色土 10YR 4/2
24.明オリーブ灰色粘質土 5GY 7/1
25.浅黄色砂粘質土 2.5Y 7/3
26.浅黄色粘質土 2.5Y 7/4
27.灰白色粘質土 7.5TR 7/2
28.灰黄褐色砂粘質土 10YR 5/2 礫を含む
29.オリーブ灰色砂粘質土 5GY 6/1 礫を含む
30.灰色～黄橙色粘質土 10Y 5/1～7.5YR 7/8
31.明黄褐色粘質土 10YR 7/6

0　2m

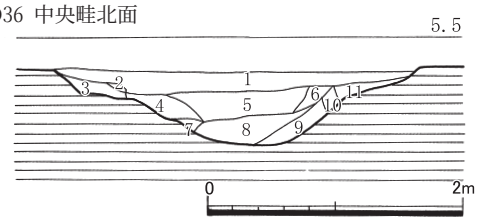
第51図　VI区土層図（縮尺 1/60）

SD36 南壁



1. 表土
2. 橙色粘質土 7.5Y 6/6
3. にぶい黄橙色粘質土 10YR 7/6
4. 灰黄色粘質土 2.5Y 7/2
5. 明黄褐色粘質土 2.5Y 7/6
6. 暗灰黄色粘質土 2.5Y 5/2
7. 褐灰色粘質土 10YR 6/1
8. 褐灰色粘質土10YR 4/1～灰黄褐色粘質土10YR 4/2粘質土 土器を含む
9. 褐灰色粘質土10YR 5/1～にぶい黄褐色粘質土10YR 5/4粘質土
10.黄橙色粘質土10YR 7/8～明黄褐色粘質土10YR 6/8
11.褐灰色粘質土 10YR 5/1
12.褐灰色砂 10YR 5/1
13.明黄褐色粘質土 10YR 6/6
14.明黄褐色砂 10YR 6/8
15.褐灰色砂粘質土 10YR 6/1
16.褐灰色砂粘質土 10YR 5/1
17.明黄褐色粗砂 10YR 6/6
18.にぶい黄褐色砂粘質土 10YR 6/3
19.黄灰色粘質土 2.5Y 5/1
20.黄灰色砂粘質土 2.5Y 5/1

SD36 中央畦北面



1. 橙色粘質土 7.5YR 6/6～褐灰色 7.5YR 5/1
2. 橙色粘質土 7.5YR 7/6
3. 橙色砂粘質土 7.5YR 7/6
4. にぶい橙色粘質土 7.5YR 6/4
5. 橙色粘質土 7.5YR 6/6～褐灰色7.5YR 5/1
6. 橙色粘質土 7.5YR 6/6
7. 橙色粘質土 7.5YR 6/6
8. 明褐色砂粘質土 7.5YR 5/6 直径1～3mm の砂粒を含む
9. 橙色粘質土 7.5YR 6/8
10.褐灰色粘質土 7.5YR 6/1
11.橙色粘質土 7.5YR 6/6

第52図　SD36土層図（縮尺 1/60）

出土遺物（第53図）

SD24出土遺物

須恵器 杯（1･2）　1･2の口縁部は直線的に外上方にのび、1の体部と底部の境は丸味をもち、断面四角形の高台が底端部のやや内側に付く。2の体部と底部の境は明瞭で、鋭く稜が付く。断面逆台形の高台が底端部に付く。

須恵器 壷（4） 外反する口縁部で、端部は外傾し、口縁下に突帯をめぐらす。

須恵器 把手（5） 小型で折れ曲がった舌状の把手で、有鉤短頸壷に付いていたとみられる。胎土は精良で、赤焼に焼成され、橙色を呈する。

土師器 杯（3） 器周残存1/6からの復元口径15.4cm、器高3.0cm、底径8.8cm を測る。底部は回転ヘラ切り離しされ、体部内面は回転横ナデ痕が残るが、他の部位は磨滅により調整については不明である。

SD25出土遺物

土師器 杯蓋（6） 天井部は丸味を帯び、低い。口縁部は退化し、内面の体部との境が不明瞭である。口縁端部内面には凹線をめぐらす。

土師器 杯（7・9） 7は器周残存1/3からの復元口径13.6cm、器高3.3cm、底径9.0cm を測る。器表の磨滅が著しいが、内面に研磨され滑らかな面が一部残る。9は口径11.9cm、器高4.8cm、底径7.3cm を測る深めの杯で、底部は回転ヘラ切り離し、体部外面から内底まで回転横ナデされる。

土師器 丸底杯（8） 復元口径13.6cm、器高3.8cm を測る。底部は回転ヘラ切り離しされ、板状圧痕が残る。体部外面は回転横ナデ、内面は研磨され滑らかである。

土師器 高台付椀（10） 口縁部が欠失している。体部と底部の境は丸味をもち、やや外に開く低い高台が底端部のやや内側に付く。体部は回転横ナデ、内底はナデを施す。外低は磨滅が著しい。

黒色土器 椀（11） 口縁部は直線的に外上方にのび、体部と底部の境は緩く屈曲する。外に開く高台が底端部のやや内側に付く。底部は回転ヘラ切り離しされ、板状圧痕が残る。内面の口縁端部より下からはヘラ磨き、口縁端部から外面の高台内まで回転横ナデされる。胎土は細かい砂粒を含み、精良で、良好に焼成され、内面は黒色、その他の部位は浅黄橙色を呈する。

SD26出土遺物

土師器 小皿（12） 口径10.5cm、器高1.5cm、底径8.1cm を測る。底部の切り離しは回転ヘラにより、体部は回転横ナデ、内底はナデを施す。

土師器 托（13） 小皿の部分は復元口径10.7cm、器高0.7cm と浅い。やや開き気味の径6.5cm、高さ0.8mm の高台が付き、総高1.5mm を測る。

土師器 杯（15） 口径14.0cm、器高2.8cm、底径9.1cm を測る。底部の切り離しは回転ヘラにより、体部は回転横ナデ、内底はナデを施し、外底には板状圧痕が残る。

土師器 高台付椀（14・16・17） 16・17は体部から底部にかけて丸味をもつ椀で、外反する口縁部と体部の境には稜が付く。口縁端部外面から内底にかけて、研磨され滑らかである。外面の口縁端部下から体部上半にかけて回転横ナデされる。体部下位には回転ヘラ切り離し痕が残る。16は外に開いた径6.1cm、高さ1.1mm の高台が付く。17は底部が欠失している。14は底部片で、外に開いた高台が付く。

平瓦（24） 凹面に粗い布目、凸面には斜格子の叩き目が残る。

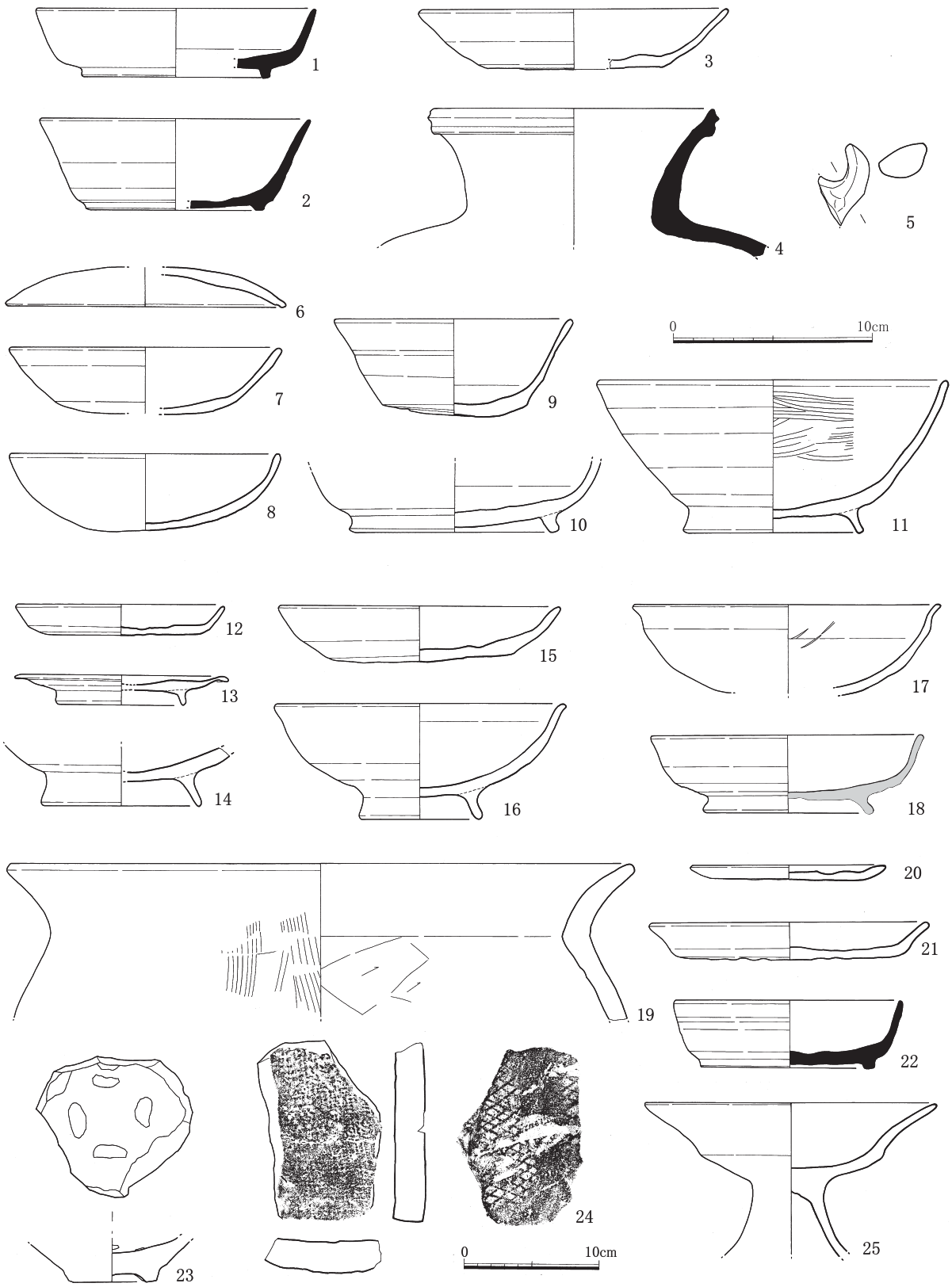
SD27出土遺物

土師器 甕（19） 口縁部は内外面とも横ナデ、胴部は外面に粗い縦方向のハケ目、内面はヘラ削り調整。

土師器 小皿（20） 口径9.8cm、器高0.7cm、底径8.0cm を測る。底部の切り離しは回転ヘラにより、体部は回転横ナデ、内底はナデを施す。

SD28出土遺物

須恵器 杯（18） 口縁部は外反気味に外上方にのび、体部と底部の境は明瞭で、鋭く稜が付く。外に開いた高台が底端部の内側に付く。体部と高台は回転横ナデ、内底はナデ、外底の高台より外側は回転ヘラ削り、内側は未調整である。



第53図　SD24～28出土遺物実測図（縮尺 1/3）

南西端包含層

土師器 皿（21） 器周残存1/3からの復元口径14.0cm、器高1.9cm、底径11.4cm を測る。底部は回転ヘラ切り離しされ、体部には回転横ナデを施す。

須恵器 杯（22） 口縁部は直線的に外上方にのび、体部と底部の境は丸味をもち、断面四角形の高台が底端部のやや内側に付く。

唐津焼 皿（23） 底部片で、内底見込みと高台内に砂目が4ヶ所残る。内面に貫入が入った灰オリーブ色の透明釉がかけられ、外面は残存する範囲は露胎である。

SD36出土遺物

土師器 高杯（25） 外反する口縁部がのびる。口縁部と底部の境は、外面が明瞭に屈曲し鋭く稜を持つのに対し、内面は屈曲が緩く稜は見られない。脚部の筒部は外反して外に開く、裾部は欠失している。

第7次調査VI区出土石器（第54図）

打製石鏃（1～4） 1はSD25出土の三角鏃で、残存長1.9cm、幅2.2cm、厚さ0.5cmを測る。白濁部分のある黒曜石製。2はSD26出土の有脚鏃で、残存長1.9cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmを測る。漆黒黒曜石製。2はSD27出土の有脚鏃で、残存長1.9cm、幅1.6cm、厚さ0.5cmを測る。漆黒黒曜石製。4はSD36出土の有脚鏃で、残存長1.9cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを測る。漆黒黒曜石製。

凹み石（5） 安山岩製で、全長1.9cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを測る。SD36出土。

6 第７次調査 Ⅶ区の遺構と遺物

（1）調査区の概要

第4次調査Ⅳ区の東北部、プレハブ事務所設置のため未調査の部分にあたり、事務所解体後に調査を行った。第4次調査検出の河川（谷）SD4107の延長が確認された。北西に向かって下がる谷落ちである。時期を示す遺物がほとんど出土しなかったため第4次調査の土層堆積の所見を参考とすると、3～7層が中世の堆積、13･14層が弥生時代後期の堆積となろう。調査区西端の地山直上から細形銅矛の下半部が出土した。

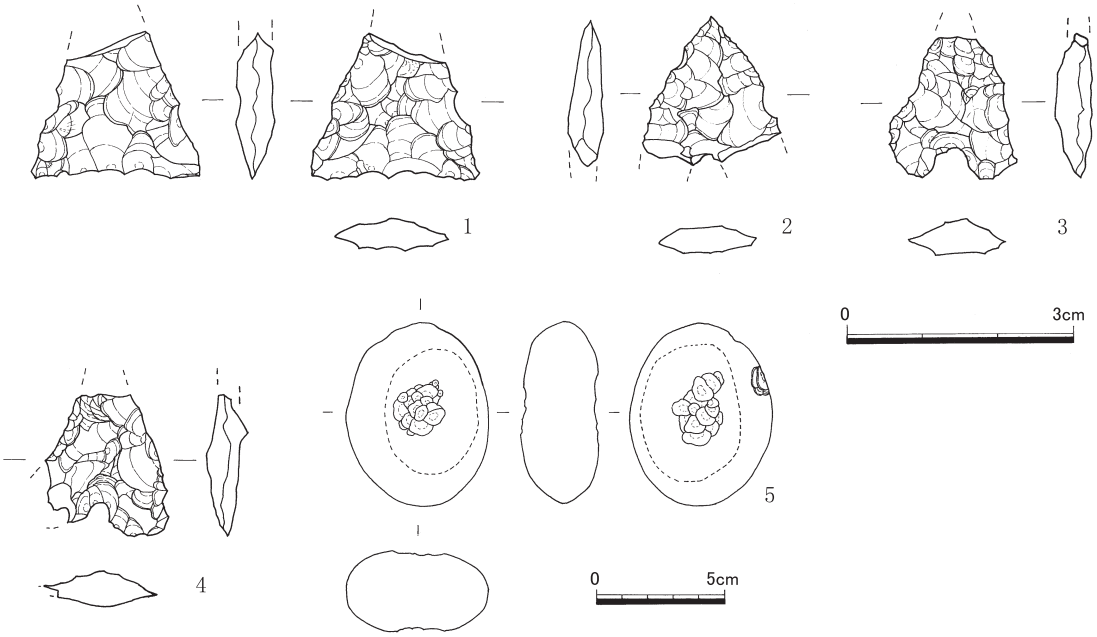
細形銅矛（第57図－1） 先端部が折れ、現存長15.2cmであるが、復元全長 25cm前後となろうか。袋部は長さ6.4cmを測り、端部に幅8mmの節帯がめぐる。節帯の稜は鋭さを欠く。耳は節帯にはかからず、上に付く。刃部の研ぎ直しがかなりあり、翼部及び関にも縦方向の研ぎ痕がある。吉武大石遺跡K67号甕棺墓出土銅矛に近い形状・寸法を取る。墳墓に伴ったものか。周辺調査では弥生中期初頭～前半の土器は見られない。

青磁 碗（第57図－2） 無文劃花の碗の底部で、中世の堆積層からの出土。

Ⅳ 調査のまとめ

今回の調査は削平を免れた谷部が対象で、第6次調査Ⅰ区では谷の落ち際で、土器埋納土坑を検出した他、谷頭ではまとまった量の土師器が出土した。いずれも水辺の祭祀に関連するものとみられる。

第6次調査Ⅲ区と第7次調査Ⅴ区では、SD10･11流路跡下層から縄文時代晩期前半の土器が大振りな破片の良好な遺存状態でまとまった量出土した。ほぼ黒川式古段階におさまる一括資料で、玄界灘沿岸部の一様相を窺う上で意義深いものである。浅鉢は精製の黒色磨研土器が主で、短（無）頸もしくは波状口縁のものからなり、内面の屈曲部が明瞭に稜をなす特徴を持つ。長頸のものは極少数である。香椎A遺跡の東南東5.5km久山町上久原に位置する堀田遺跡においても同時期の資料が出土してい

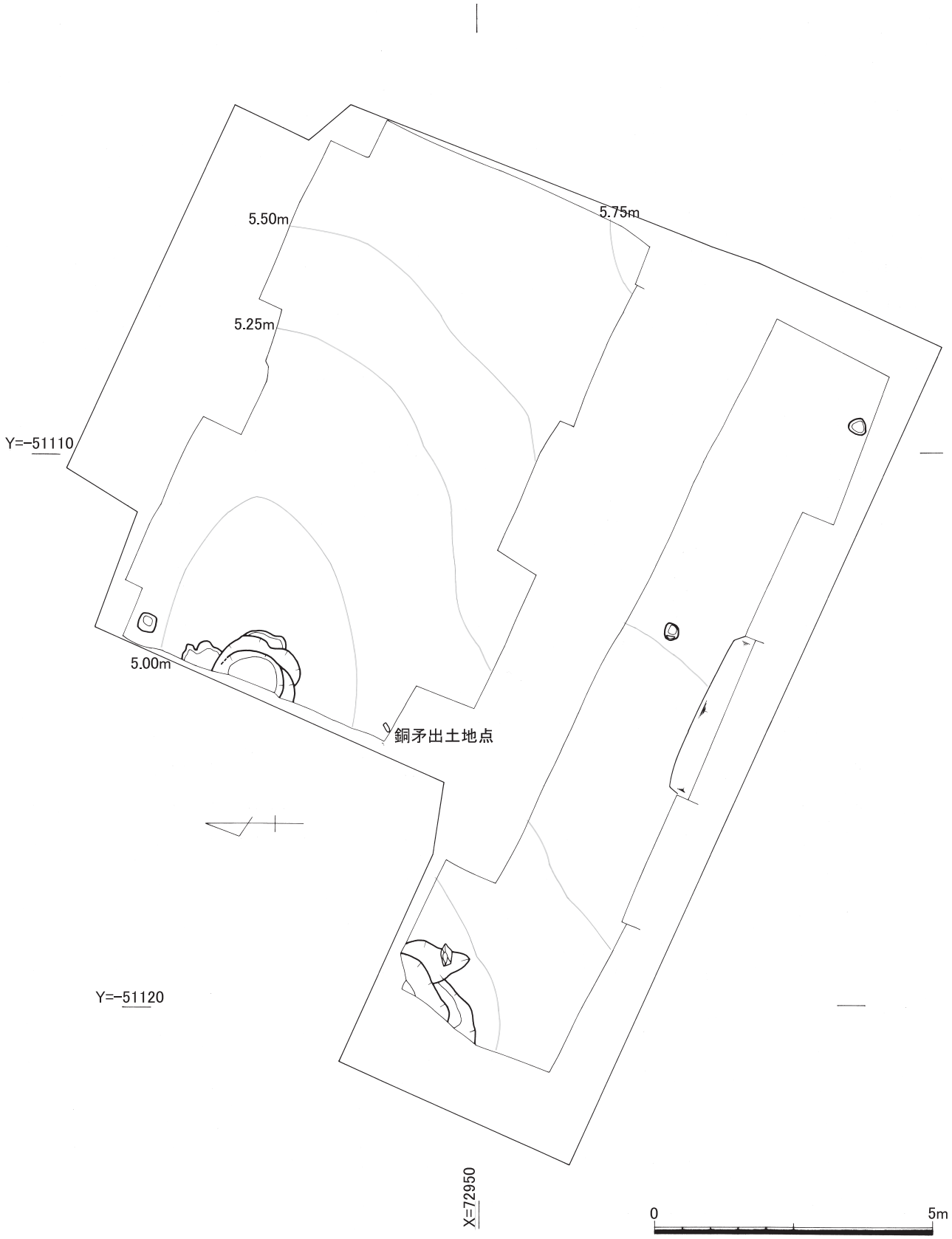


第54図　SD25～36出土石器実測図（縮尺 1/1・1/3）

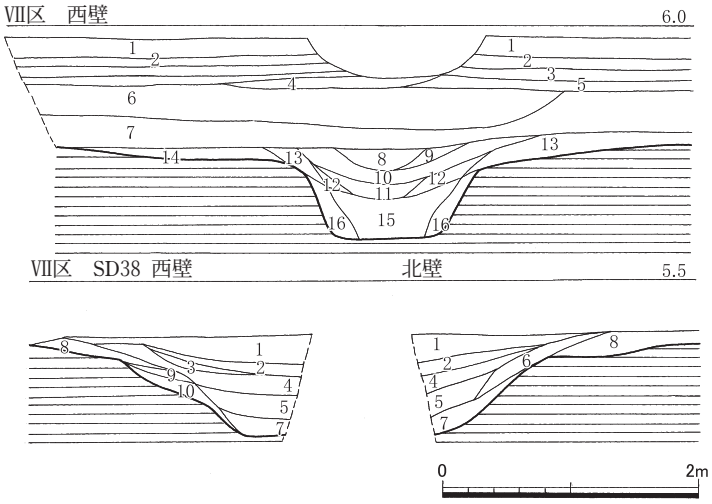
る。堀田遺跡Ⅲ区包含層出土の浅鉢は口縁部内面に肥厚し沈線状の段ができ、頸部は内面に胴部は外面に強く短く屈曲して明瞭な稜が付く特徴を持つ特徴を持ち、これら一群の資料は堀田Ⅰ式に設定され、同じ玄界灘沿岸部の糸島市（旧二丈町）広田遺跡で設定された広田式に続く資料として位置づけられている(註1)。それに対して深鉢は粗製が主で、屈曲が1段と2段のもの、砲弾形のものからなる。精製・半精製の2段に屈曲する深鉢には、波状口縁浅鉢の口縁形態を取るものも見られる。広田式では深鉢の口縁帯の縮小による無文化が進むとされるが、香椎A遺跡で出土した深鉢では外傾する口縁部外面に多条の沈線文が施された例が波状口縁に限らず見られた。粗製では砲弾形深鉢の中に貝殻条痕が施されたものが見られるが、少数である。

第7次調査Ⅳ・Ⅵ区では香椎A遺跡の調査では初めて、古代の遺物が少量ながらまとまりをもって出土した。Ⅳ区SD21から出土した口径12.2～12.6cm、器高3.5～4.0cmを測る土師器杯5点の内、4点がヘラ切り離し、1点が静止糸切り離しであった。糸切り離しの杯は器高が3.5cmと低く、底径も5.5cmと小さい。器形も他と異なり、体部中位で屈曲し外反気味に開く。豊前地方でみられるタイプで、10世紀後半頃と考えられている(註2)。他のヘラ切りの杯や高台付杯が示す年代は、大宰府の土師器編年によると9世紀前半～中頃である(註3)。

豊前、瀬戸内方面との交渉は、滋賀里系文様を施す波状口縁浅鉢など縄文晩期の土器についても窺うことができた。『万葉集』に見られる「香椎廟」、記紀伝承の「橿日宮」など香椎と中央と密接な関係あった記事が生ずるに至った背景には、香椎A遺跡の南2.8kmを流れる多々良川を遡り、筑豊地方を経て瀬戸内へと至る大動脈とでも言い得るルートが早くから確立していたことが大きいのではないだろうか。今回の調査報告では離れた2つの時期についての指摘にとどまったが、多々良川流域では古代では多々良込田遺跡、中世では箱崎遺跡のように中央や豊前、瀬戸内との密接な関係を示す遺物の出土が目立つ遺跡が多々見られる。



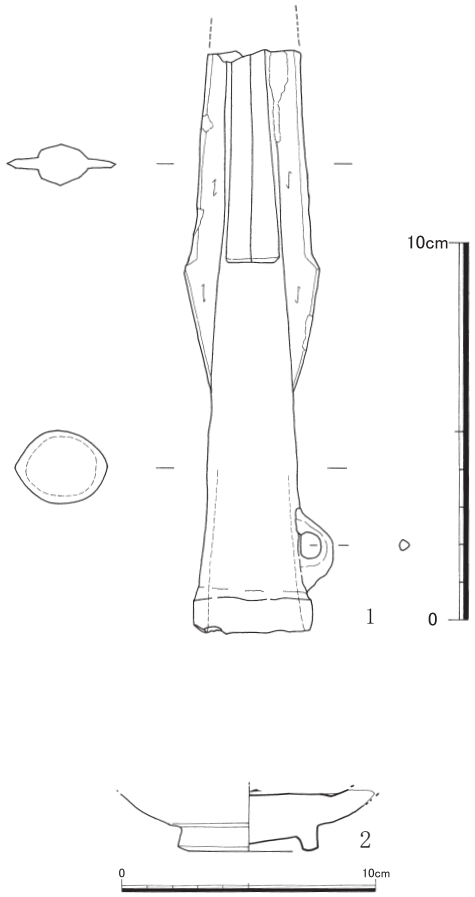
第55図　第７次調査Ⅶ区遺構配置図（縮尺 1/100）



1. 黄灰色土 2.5Y 6/1 耕作土
2. 明黄褐色粘質土 2.5Y 6/6 床土
3. 黄灰色粘質土 2.5Y 5/1
4. 黄灰色粘質土 2.5Y 6/1
5. 黄灰色粘質土 2.5Y 6/2
6. 黄灰色粘質土 2.5Y 6/2 マンガン沈着
7. 黄灰色粘土 2.5Y 6/1
8. 暗オリーブ灰色粘土 2.5GY 4/1
9. 灰色粘土 N 6/ 明黄褐色粘土(2.5Y 7/6)ブロックを含む
10.暗灰色粘土 N 3/
11.灰色粘土 N 6/ 暗灰色粘土 N 3/を含む
12.灰白色粘土 2.5Y 7/2 明黄褐色粘土(2.5Y 7/6)ブロックを含む
13.灰黄色粘質土 2.5Y 6/2 黄褐色粘土 2.5Y 7/6（地山）ブロックを含む
14.黄灰色粘質土 2.5Y 5/1
15.灰色粘土 N 6/ 炭化物を含む
16.灰色粘土 N 6/と灰白色シルト N7/の互層

1. にぶい黄色土 2.5Y 6/3 粗砂を含む
2. 黒色土 2.5Y 2/1 粗砂を含む
3. 暗灰黄色土 2.5Y 5/2 粗砂を含む
4. 褐灰色土 2.5Y 4/1
5. 灰色粘土 N6/
6. 黄灰色粘土 2.5Y 6/1 褐灰色土(2.5Y4/1)ブロック・粗砂を含む
7. 灰色砂粘質土 N 4/
8. 黄灰色粘土 2.5Y 5/1
9. 黄灰色粘土 2.5Y 6/1 褐灰色土
10. 灰色粘土 N 6/ 粗砂を含む

第56図　Ⅶ区土層図（縮尺 1/60）



註１　水ノ江和同「北部九州の縄紋後・晩期土器ー三万田式から刻目突帯文土器の直前まで一」縄文時代8 1997
　縄文時代晩期土器については、他に以下の文献を参考とした。
「古保山・古閑・天城」熊本県文化財調査報告47集 1980、小池史哲「広田遺跡0区の調査」『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』 福岡県教育委員会 1980、山崎純男・島津義昭「晩期の土器 九州の土器」『縄文文化の研究4』 1981、小池史哲「福岡県二丈町広田遺跡の縄文土器ー晩期初頭広田式の設定ー」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』 1982、「山田西遺跡ー福岡県筑紫郡那珂川大字山田字西所在遺跡の調査ー」那珂川町文化財調査報告書第28集 1991、「脇山Ⅳー県営圃場整備事業に伴う脇山Ａ遺跡第5次調査報告ー」福岡市埋蔵文化財調査報告書第312集 1992、「久原遺跡群Ⅲー福岡県糟屋郡久山町所在遺跡の上久原地区農村総合整備事業に伴う発掘調査報告書ー」久山町文化財調査報告第3集 1996、「大原Ｄ遺跡群1ー新西部埋立て場建設に伴う埋蔵文化財調査ー」福岡市埋蔵文化財調査報告書第481集 1996
註２　佐藤浩司「平安時代の土師器編年試案と地域相の解明にむけてー豊前北部地域とその周辺ー」『寺田遺跡』 北九州市埋蔵文化財調査報告書第70集 1988
註３　福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集（下）』 1978

第57図　Ⅶ区出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3）

第１表　香椎Ａ遺跡第6･7次調査 土器一覧表１

挿図番号	番号	器　種	出土遺構	色　調	胎　土	外面調整	内面調整	備　考
第7図	1	土師器 甕	SD01	にぶい褐色 7.5YR 5/3	粗い砂粒を含む	横ナデ ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
(6次)	2	土師器 甕		橙色 2.5YR 6/6	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	ヘラ削り	
	3	土師器 甕		浅黄橙色 7.5YR 8/4(外面) 橙色 5YR 7/8(内面)	細かい砂粒を多量に含む	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	
	4	土師器 甕		にぶい黄橙色 10YR 7/4	細かい砂粒を含む	横ナデ	ハケ目 ヘラ削り	
	5	土師器 甕		にぶい赤褐色 2.5YR 5/4	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	6	土師器 甕		にぶい黄橙色 10YR 7/3	砂粒を含む	ハケ目	ハケ目 ヘラ削り	
	7	土師器 甕		にぶい橙色 5YR 7/4	粗い砂粒を多量に含む	横ナデ	横ナデ ハケ目	
	8	土師器 壷		にぶい褐色 7.5YR 6/3	粗い砂粒を多量に含む	ハケ目 横ナデ	ハケ目 横ナデ	内面黒変
	9	土師器 小型丸底壷		橙色 7.5YR 5/6	砂粒を含む	ハケ目 横ナデ	ハケ目 横ナデ	
	10	土師器 小型丸底壷		にぶい橙色 7.5YR 7/4	細かい砂粒を少量含む	ハケ目 横ナデ	ハケ目 ナデ	胴部内面黒変
	11	土師器 甕		にぶい黄橙色 10YR 7/3	細かい砂粒を含む	横ナデ ハケ目	横ナデ 指頭圧痕	頸部内面黒変
	12	土師器 小型丸底壷		にぶい褐～黄橙色 7.5YR 7/3～6/3	粗い砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	13	土師器 高杯		橙色 5YR 7/6(外面) 明褐灰色 5YR 7/2(内面)	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	14	土師器 小型丸底壷		橙色 5YR 6/6	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	SK03出土片と結合
第8図	15	土師器 甕		にぶい橙色 5YR 7/4	粗い砂粒を含む	横ナデ ハケ目	横ナデ ハケ目	
(6次)	16	土師器 杯		にぶい橙色 5YR 7/4	細かい砂粒を多量に含む	磨滅著しい	横方向 板ナデ	
	17	土師器 高杯		にぶい橙色 5YR 6/4	粗い砂粒を含む	横ナデ ナデ	横ナデ ヘラ削り	
	18	土師器 高杯		にぶい黄橙色 10YR7/3	砂粒を多量に含む	横ナデ	横ナデ	内底部黒変
	19	土師器 高杯		にぶい黄橙色 10YR7/3	砂粒を多量に含む	ハケ目	ハケ目	
	20	土師器 高杯		浅黄橙色 7.5YR 8/3	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	21	土師器 高杯		浅黄橙色 7.5YR 7/4	砂粒を多量に含む	ナデ 横ナデ	横ナデ ヘラ削り	
	22	土師器 高杯		にぶい橙色 5YR 6/4	砂粒を含む	ナデ 横ナデ	ヘラ削り 横ナデ	
	23	土師器 高杯		橙色 5YR 6/6	砂粒を含む	横ナデ	ヘラ削り 横ナデ	
	24	土師器 タコ壷		にぶい橙色 7.5YR 7/3	細かい砂粒を少量含む	ナデ	ナデ	
	25	弥生土器 壷		橙色 5YR 6/6･6/8	粗い砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
第9図	1	縄文土器 浅鉢	SD01 下層	黒色 7.5YR 1.7/1(外面) 黒褐色 7.5YR 3/1(内面)	砂粒を少量含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
(6次)	2	縄文土器 浅鉢		にぶい褐色 7.5YR 7/3	細かい砂粒を含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	3	縄文土器 浅鉢		褐灰色 7.5YR 4/1(内面) 黒色 7.5YR 1.7/1(外面)	細かい砂粒を含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	4	縄文土器 深鉢		橙色 7.5YR 6/6(外面) 黒色 7.5YR 1.7/1(内面)	粗い砂粒を多量に含む			
	5	縄文土器 深鉢		灰褐色 7.5YR 5/2(外面) 黒色 7.5YR 2/1(内面)	砂粒を多量に含む	横ナデ 斜方向板ナデ	横方向板ナデ	
	6	縄文土器 深鉢		にぶい橙色 5YR 6/4	粗い砂粒を多量に含む	横方向条痕	横方向板ナデ	
	7	縄文土器 深鉢		灰褐色 5YR 6/2	粗い砂粒を多量に含む	横方向板ナデ	縦方向板ナデ	
	8	縄文土器 底部		にぶい褐色 7.5YR 6/3	粗い砂粒を多量に含む	横ナデ 斜方向板ナデ	ナデ	
	9	縄文土器 底部		にぶい褐色 7.5YR 6/3	粗い砂粒を含む	横方向板ナデ		炭化物付着
	10	縄文土器 底部		にぶい褐色 7.5YR 5/3	砂粒（1mm 以下）を多量に含む			
	11	縄文土器 鉢		にぶい橙色 7.5YR 7/3	砂粒を含む			
	12	縄文土器 鉢		にぶい褐色 7.5YR 6/3	粗い砂粒を多量に含む			
	13	縄文土器 鉢		にぶい橙色 7.5YR 6/4	砂粒･砕いた貝殻を含む	横方向板ナデ	横ナデ	
	14	縄文土器 鉢		にぶい橙色 7.5YR 7/3	粗い砂粒を含む			
第14図	1	土師器 壷	SD02	にぶい橙色 7.5YR 8/3	粗い砂粒を多量に含む			胴部内外面下半に黒変
(6次)	2	土師器 壷		橙色 5YR 7/6･7/8	粗い砂粒を多量に含む	横ナデ ナデ	横ナデ ヘラ削り	底部黒変
	3	土師器 甕		にぶい橙色 7.5YR 6/3	砂粒を多量に含む	ハケ目	ハケ目 ヘラ削り	
	4	土師器 甕		灰黄褐色 10YR 5/2	砂粒を多量に含む	横ナデ ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
	5	土師器 甕		橙色 7.5YR 7/6	砂粒を含む	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	
	6	土師器 甕		橙色 2.5YR 6/6	砂粒を含む	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	
	7	土師器 甕		橙色 5YR 7/8	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	8	土師器 甕		にぶい黄橙色 10YR 7/3	砂粒を含む	横ナデ ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
第15図	9	土師器 壷		にぶい橙色 5YR 7/4	粗い砂粒を含む	横ナデ ハケ目	横ナデ ハケ目	胴部内外面に黒変部位
第16図	10	土師器 壷		にぶい橙色 7.5YR 7/4	砂粒を多量に含む	横ナデ ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
(6次)	11	土師器 甕		にぶい黄橙色 10YR 7/3	粗い砂粒を含む	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	外面黒変
	12	土師器 甕		にぶい橙色 5YR 7/4	砂粒を多量に含む	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	
	13	土師器 壷		浅黄橙色 10YR 8/4	砂粒を多量に含む	横ナデ	横ナデ	
	14	土師器 壷		にぶい橙色 7.5YR 7/3	砂粒を含む	ハケ目	ハケ目	

第２表　香椎Ａ遺跡第6･7次調査 土器一覧表２

挿図番号	番号	器　種	出土遺構	色　調	胎　土	外面調整	内面調整	備　考
第16図	15	土師器 壷	SD02	橙色 7.5YR 6/6	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
(6次)	16	土師器 小型丸底壷		にぶい黄橙色 10YR 7/3	砂粒を多量に含む	横ナデ ハケ目	ハケ目 ヘラ削り	
	17	土師器 小型丸底壷		にぶい黄橙色 10YR 7/3	砂粒を含む	横ナデ ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
	18	土師器 小型丸底壷		にぶい橙色 7.5YR 7/4	砂粒を多量に含む	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	
	19	土師器 小型丸底壷		橙色 2.5YR 7/8	粗い砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	20	土師器 小型丸底壷		にぶい橙色 5YR 6/4	砂粒を多量に含む	横ナデ	横ナデ	
	21	土師器 高杯		にぶい橙色 5YR 7/4	砂粒を多量に含む	横ナデ	横ナデ	
	22	土師器 高杯		にぶい橙色 5YR 7/4	粗い砂粒を含み、精良	磨滅著しい	磨滅著しい	
	23	土師器 高杯		浅黄色 2.5YR 7/3	砂粒を多量に含む	横ナデ	横ナデ	
第17図	24	土師器 高杯		にぶい橙色 5YR 7/4	砂粒を含む			
(6次)	25	土師器 高杯		橙色 2.5YR 6/8	粗い砂粒を含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	26	土師器 高杯		橙色 5YR 6/6	砂粒を多量に含む	横ナデ	横ナデ ハケ目	
	27	土師器 高杯		橙色 5YR 7/6	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	28	土師器 高杯		にぶい黄橙色 10YR 6/4	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	29	土師器 高杯		橙色 5YR 7/6	砂粒を含む	ハケ目	ハケ目→ナデ	
	30	土師器 高杯		橙色 5YR 7/8	砂粒を含む	ハケ目	ハケ目	
	31	土師器 高杯		にぶい褐色 7.5YR 6/3	砂粒を多量に含む	横ナデ ハケ目	ハケ目 ヘラ削り	
	32	土師器 杯		にぶい橙色 5YR 7/4	粗い砂粒を含む	横ナデ ヘラ削り	横ナデ	
	33	土師器 杯		橙色 5YR 7/6	砂粒を少量含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	34	弥生土器 壷		明黄褐色 10YR 6/6	粗い砂粒を多量に含む	横ナデ ハケ目	横ナデ ハケ目	
	35	弥生土器 甕		にぶい橙色 5YR.6/4	砂粒を多量に含む	横ナデ	横ナデ	
第20図	1	土師器 甕	SK03	浅黄橙色 10YR 8/3	砂粒を少量含む	横ナデ ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
(6次)	2	土師器 甕		にぶい橙色 7.5YR 7/3	細かい砂粒を多量に含む	横ナデ ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
	3	土師器 小型丸底壷		にぶい黄橙色 10YR 7/3	砂粒を多量に含む	横ナデ ハケ目	横ナデ	
	4	土師器 小型丸底壷		にぶい黄橙色 10YR 7/3	砂粒を多量に含む	横ナデ ハケ目	横ナデ	
	5	土師器 小型丸底壷		にぶい橙色 7.5YR 6/4	砂粒を多量に含む	横ナデ ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
	6	土師器 高杯		にぶい黄橙色 10YR 7/4	砂粒を含む	横ナデ ハケ目	横ナデ ハケ目	
第24図	1	弥生土器 鉢	SD05	橙色2.5YR 6/8（器表） 淡橙色 5YR 8/4（胎土）	細かい砂粒を含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
(6次)	2	弥生土器 甕		にぶい黄橙色 10YR 6/3	砂粒を多量に含む	横ナデ ハケ目	横ナデ ナデ	
	3	弥生土器 甕		にぶい橙色 2.5YR 6/3	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	ナデ	
	4	弥生土器 甕		にぶい黄橙色 10YR 6/3	粗い砂粒を含む	ハケ目	ナデ	内面煤付着
	5	弥生土器 甕		橙色2.5YR 6/8（器表） にぶい橙色 5YR 7/3(胎土)	砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ナデ	
(7次)	6	土師器 甕		橙色 5YR 6/8	粗い砂粒を多量に含む	横ナデ ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
	7	土師器 小型丸底壷		橙色 5YR 7/6･7/8	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	8	土師器 高杯		橙色 5YR 6/8	砂粒を含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	9	弥生土器 甕		灰褐色 7.5YR 6/2	粗い砂粒を多量に含む	横ナデ ハケ目	横ナデ･ハケ目 →ヘラ磨き	
	10	弥生土器 甕		灰褐色 7.5YR 6/2	粗い砂粒を多量に含む	横ナデ ハケ目		
第25図	11	弥生土器 甕		にぶい黄橙色 10YR 7/3	砂粒を多量に含む	横ナデ ハケ目	横ナデ	
(7次)	12	弥生土器 甕		浅黄橙色 7.5YR 8/4	粗い砂粒を含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	13	弥生土器 甕		浅黄橙色 7.5YR 8/3	粗い砂粒を多量に含む	横ナデ	横ナデ	
	14	弥生土器 甕		淡橙色 5Y 8/3	粗い砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	15	弥生土器 甕		にぶい橙色 7.5YR 7/4	粗い砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	外面黒変
	16	弥生土器 甕		灰黄褐色 10YR 6/2	粗い砂粒を含む	ヘラナデ	ヘラナデ	
	17	弥生土器 甕		にぶい黄橙色 10YR 6/3	砂粒を多量に含む	ハケ目	ナデ	
	18	壷蓋		橙色 5YR 7/6	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	19	壷蓋		にぶい黄橙色 10YR 7/3	粗い砂粒を多量に含む	横ナデ	横ナデ	
	20	壷		淡橙色 5YR 8/4 橙色 2.5YR 6/8	砂粒を含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	21	壷		橙色 7.5YR 7/8	粗い砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	22	弥生土器 甕		にぶい橙色 7.5YR 7/3	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	23	弥生土器 甕		にぶい橙色 5YR 7/3	粗い砂粒を多量に含む		ナデ	
	24	鉢		灰黄色 2.5Y 7/2	砂粒を多量に含む	横ナデ ハケ目	横ナデ	
	25	弥生土器 甕		浅橙色 7.5YR 8/3	粗い砂粒を多量に含む	ハケ目	磨滅著しい	
	26	弥生土器 甕		淡橙色 5RY 8/3	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	

第３表　香椎Ａ遺跡第6･7次調査 土器一覧表３

挿図番号	番号	器　種	出土遺構	色　調	胎　土	外面調整	内面調整	備　考
第25図	27	弥生土器 甕	SD05	灰白色 10YR 8/2	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
(7次)	28	弥生土器 甕		褐灰色 7.5YR 6/1	砂粒を多量に含む	ハケ目	ハケ目	外面黒変部位あり
	29	蓋		明褐灰色 7.5YR 7/2	砂粒を多量に含む			
	30	弥生土器 甕		橙色 5YR 6/8	粗い砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	31	弥生土器 甕		浅黄橙色 10YR 8/3	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	34	弥生土器 甕		にぶい黄橙色 10YR 7/2	粗い砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
第32図	1	縄文土器 浅鉢	SD10 下層 2トレ	灰褐色 10YR 6/2	粗い砂粒を多量に含む			
(6次)	2	縄文土器 浅鉢	SD10 下層 中央ベルト南側	黒色 7.5YR 1.7/1(外面) 黒褐色 7.5YR 3/1(内面)	砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	3	縄文土器 浅鉢	SD10 下層 中央ベルト南側	褐灰色 7.5YR 4/1	細かい砂粒を少量含み、精良	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	4	縄文土器 浅鉢	SD10下層1･2トレ間	黒色 5YR 7/1	細かい砂粒を少量含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	5	縄文土器 浅鉢	SD10下層1･2トレ間	褐灰色 5YR 4/1	砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	6	縄文土器 浅鉢	SD10下層1･2トレ間	にぶい褐色 7.5YR 6/3	細かい砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	内面黒変
	7	縄文土器 浅鉢	SD10下層 東壁	にぶい褐色 7.5YR 5/3	砂粒を含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	8	縄文土器 浅鉢	SD10下層1･2トレ間	灰褐色 7.5YR 5/2 にぶい褐色 7.5YR 6/3	砂粒を少量含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	9	縄文土器 浅鉢	SD10下層 東壁	黒色 7.5YR 1.7/1	細かい砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	10	縄文土器 浅鉢	SD10下層3トレ	黒色 7.5YR 1.7/1	細かい砂粒を多量に含む	横方向ヘラ磨き	横方向ヘラ磨き	
	11	縄文土器 浅鉢	SD10下層 東壁	にぶい褐色 7.5YR 6/3	細かい砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	12	縄文土器 浅鉢	SD10下層4トレ西側	褐灰色 7.5YR 4/1	砂粒を少量含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	13	縄文土器 浅鉢	SD10下層3トレ西側	褐灰色 10YR 4/1	細かい砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	黒色磨研
	14	縄文土器 浅鉢	SD10下層3トレ西側	褐灰色 10YR 5/1	細かい砂粒を含む			
	15	縄文土器 浅鉢	SD10下層 4トレ 4トレ西側	黒色 7.5YR 1.7/1(外面) 褐灰色 7.5YR 4/1(内面)	細かい砂粒を少量含み、精良	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
第33図	16	縄文土器 深鉢	SD10下層1･2トレ間	灰褐色 7.5YR 5/2	粗い砂粒を多量に含む	横ナデ 横方向板ナデ	横方向板ナデ	黒変
(6次)	17	縄文土器 深鉢	SD10 下層 中央ベルト南側	赤黒色 2.5YR 2/1	砂粒を多量に含む		ヘラ磨き	
	18	縄文土器 深鉢	SD10下層1･2トレ間	灰褐色 7.5YR 5/2	粗い砂粒を多量に含む	横ナデ 斜方向貝殻条痕	横ナデ 横方向板ナデ	
	19	縄文土器 深鉢	SD10下層 3トレ	暗灰黄色 2.5YR 5/2	細かい砂粒を多量に含む	横方向板ナデ 横方向ヘラ磨き	横方向ヘラ磨き 斜方向板ナデ	
	20	縄文土器 深鉢	SD10下層 3トレ	灰黄褐色 10YR 6/2	細かい砂粒を多量に含む			
	21	縄文土器 深鉢	SD10下層 東壁	にぶい褐色 7.5YR 6/3	粗い砂粒を含む	横ナデ	横ナデ・横方向板ナデ･横方向ヘラ磨き	
	22	縄文土器 深鉢	SD10下層 2トレ	灰黄褐色 10YR 6/2 黒色 10YR 1.7/1	砂粒を多量に含む	横方向板ナデ・横ナデ	横ナデ・横方向条痕→横ナデ	
第34図	23	縄文土器 深鉢	SD10 下層 中央ベルト南側	灰黄褐色 10YR 5/2	粗い砂粒を多量に含む	横方ヘラ削り→ナデ･横方向条痕	横方向板ナデ・横方向条痕→横ナデ	
(6次)	24	縄文土器 深鉢	SD10下層3トレ 3トレ東側	灰褐色 7.5YR 5/2	粗い砂粒を多量に含む	横ナデ・横方向ナデ 横ナデ･横方向板ナデ	横ナデ 横方向板ナデ	
	25	縄文土器 深鉢	SD10下層3･4トレ間	灰黄褐色 10YR 4/2	粗い砂粒を多量に含む	横ナデ 横方向板ナデ	横方向板ナデ	外面炭化物付着
	26	縄文土器 深鉢	SD10下層 1･2トレ間/3･4トレ間/4トレ/4･5トレ間	にぶい橙色7.5YR.7/3(外面) 灰褐色 7.5YR 6/2(内面)	粗い砂粒を含む	横方向板ナデ 横ナデ･斜方向板ナデ	横方向板ナデ 横ナデ	
	27	縄文土器 深鉢	SD10下層4･5トレ間	灰褐色 7.5YR 6/2～にぶい褐色 7.5YR 6/3	粗い砂粒を多量に含む	横方向条痕 横方向板ナデ	横方向板ナデ 横方向ヘラ削り	
	28	縄文土器 深鉢	SD10下層 中央ベルト南側	灰褐色 7.5YR 6/2	砂粒を多量に含む	ナデ 斜方向貝殻条痕	ナデ 横方向条痕	内面～口縁部外面黒変
第35図	29	縄文土器 深鉢	SD10下層3トレ東側	灰黄褐色 10YR 6/2	粗い砂粒を多量に含む	ヘラ削り→横ナデ ヘラ削り	ヘラ削り→横ナデ	
(6次)	30	縄文土器 深鉢	SD10下層1･2トレ間	灰褐色 7.5YR 5/2	植物質破片を含み、多孔質砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	31	縄文土器 深鉢	SD10下層 2トレ SD11 3層	にぶい橙色 7.5YR 6/4	粗い砂粒を含む	横ナデ 横方向板ナデ	横ナデ･横方向板ナデ →斜方向貝殻条痕	
	32	縄文土器 底部	SD10下層 中央ベルト南側	にぶい褐色 7.5YR 6/3	粗い砂粒を多量に含む	斜方向板ナデ	横方向板ナデ	
	33	縄文土器 底部	SD10下層 1トレ	にぶい褐色 7.5YR 5/3	粗い砂粒を多量に含む		ナデ	
	34	縄文土器 底部	SD10 下層 中央ベルト南側	にぶい褐色 7.5YR 5/4 ～明褐色 7.5YR 5/6	砂粒・植物質破片を含む		板ナデ	黒変
	35	縄文土器 底部	SD10下層1･2トレ間	にぶい褐色7.5YR.6/3(外面) 黒褐色 7.5YR 3/1(内面)	植物質破片を含み、多孔質粗い砂粒を多量に含む	横方向条痕	横方向条痕	
	36	縄文土器 底部	SD10下層3･4トレ間	にぶい褐色 7.5YR 6/3	粗い砂粒を多量に含む			内面黒変
	37	縄文土器 底部	SD10 下層 中央ベルト南側	褐灰色 7.5YR 4/1	φ0.5mm 前後の砂粒を多量に含む	横方向板ナデ		内面炭化物付着
	38	縄文土器 底部	SD10下層3トレ東側	にぶい褐色 7.5YR 6/3	粗い砂粒を多量に含む	条痕		内面黒変
	39	縄文土器 底部	SD10下層 4トレ	にぶい褐色 7.5YR 5/3	砂粒を多量に含む	横方向板ナデ	ナデ	
	40	縄文土器 底部	SD10下層 1トレ	にぶい褐色 7.5YR 6/3	粗い砂粒を多量に含む		ナデ	
	41	縄文土器 底部	SD10下層4トレ西側	灰褐色 7.5YR 6/2	粗い砂粒を多量に含む		斜方向板ナデ	
	42	縄文土器 底部	SD10下層 中央ベルト南側	にぶい褐色 7.5YR 6/3	砂粒を多量に含む	斜方向板ナデ	斜方向板ナデ	

※中央ベルト＝2･3トレ間

第４表　香椎Ａ遺跡第6･7次調査 土器一覧表４

挿図番号	番号	器　種	出土遺構	色　調	胎　土	外面調整	内面調整	備　考
	43	縄文土器 底部	SD10下層 1トレ	灰褐色 7.5YR 5/2	砂粒を多量に含む	横方向板ナデ	ナデ	
	44	縄文土器 底部	SD10下層3トレ東側	にぶい橙色 7.5YR 7/3	砂粒を多量に含む	ナデ	ナデ	
	45	縄文土器 底部	SD10下層 3トレ	にぶい橙色 7.5YR 7/4	砂粒を多量に含む		ナデ	内面黒変
	46	縄文土器 底部	SD10下層1･2トレ間	にぶい褐色 7.5YR 6/3	粗い砂粒を多量に含み、砕いた貝殻を含む	横方向条痕		内面炭化物付着
第36図	1	縄文土器 浅鉢	SD11下層1･2トレ間	黒褐色 10YR 3/1 ～黒色 10YR 1.7/1	細かい砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
(6次)	2	縄文土器 浅鉢	SD11下層1･2トレ間	にぶい褐色7.5YR6/3(胎土) 黒色 10YR 1.7/1(器表)	細かい砂粒を含み、精良	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	3	縄文土器 浅鉢	SD11下層1･2トレ間	灰黄褐色 10YR 6/2 ～黒色 10YR 1.7/1	細かい砂粒を多量に含む			
	4	縄文土器 浅鉢	SD11下層 東壁	黒色 7.5YR 1.7/1	細かい砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	5	縄文土器 浅鉢	SD11下層1･2トレ間	黒褐色 7.5YR 3/1	細かい砂粒を含み、精良	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	6	縄文土器 浅鉢	SD11下層 1トレ	黒色 7.5YR 1.7/1	砂粒を少量含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	7	縄文土器 浅鉢	SD11下層1･2トレ間	灰褐色 10YR 6/2 ～黒褐色 10YR 3/1	砂粒を多量に含む			
	8	縄文土器 浅鉢	SD11下層 1トレ	灰黄褐色 10YR 5/2 黒褐色 10YR 2/2	φ1～2mm の砂粒を含む			
	9	縄文土器 浅鉢	SD11灰褐色砂 1･2トレ間	にぶい褐色 7.5YR 5/3	φ5mm 前後の砂粒を多量に含む	横ナデ	横方向板ナデ	
	10	縄文土器 深鉢	SD11下層 4トレ	灰褐色 7.5YR 5/2	細かい砂粒を含む			
	11	縄文土器 深鉢	SD11黒色土ベルト西側	灰褐色 7.5YR 5/2	砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	12	縄文土器 浅鉢	SD11下層 1トレ	灰黄褐色 10YR 6/2 ～黒色 10YR 2/1	粗い砂粒を多量に含む			
	13	縄文土器 鉢	SD11下層1･2トレ間	褐灰色 10YR 6/1(胎土) 黒色 10YR 1.7/1(器表)	砂粒を含む			
第37図	14	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	灰褐色 7.5YR 6/2	砂粒を含む	横方向板ナデ 斜方向貝殻条痕	横方向板ナデ	黒変の部位あり
(6次)	15	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	にぶい橙色 7.5YR 7/3	粗い砂粒を含む 植物質破片を含み、多孔質	貝殻条痕･条痕	横ナデ	
	16	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	にぶい橙色 7.5YR 6/4	粗い砂粒を含み、多孔質	条痕	横方向の条痕→ナデ	
	17	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	灰褐色 7.5YR 5/2	粗い砂粒･貝殻片･植物質破片を含む	横ナデ 斜方向貝殻条痕	横ナデ 横方向板ナデ	
	18	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	褐灰色 7.5YR 6/1	粗い砂粒を含む	横ナデ 横→斜方向板ナデ	横ナデ	
	19	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	にぶい橙色 7.5YR 6/4	粗い砂粒を含む 植物質破片を含み、多孔質	横ナデ 横方向板ナデ	横ナデ 横方向板ナデ	
	20	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	灰褐色 7.5YR 5/2	粗い砂粒を含む	横ナデ 斜方向貝殻条痕	横ナデ 横方向板ナデ	
	21	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	灰褐色 7.5YR 5/2	植物質破片を含み、多孔質	横方向条痕	横方向板ナデ	外面黒変
	22	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	灰褐色 7.5YR 4/2	φ1mm 前後の砂粒･雲母･植物質破片を含み、多孔質			
	23	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	にぶい褐色 7.5YR 6/3	砂粒を多量に含む	横ナデ	横ナデ	煤付着
第38図	24	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	明褐灰色 7.5YR 7/2	粗い砂粒を少量、植物質破片を含む	横方向条痕	横方向板ナデ	
(6次)	25	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	灰黄褐色 10YR 6/2	粗い砂粒を多量に含む			
	26	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	褐灰色 7.5YR 6/1		横ナデ 縦方向貝殻条痕	横ナデ	煤付着
	27	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ	褐灰色･にぶい褐色 7.5YR 6/2･6/3	粗い砂粒・植物質片を含む	横方向条痕 斜方向条痕	横方向板ナデ 斜方向条痕	口縁部内外面炭化物付着
	28	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	にぶい褐色 7.5YR 6/3 ～黒色 10YR 1.7/1	粗い砂粒・植物質片を含む		横ナデ	
第39図	29	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	灰褐色 7.5YR 5/2	φ2mm 前後の粗い砂粒を多量に含む	横ナデ 横方向板ナデ	横ナデ 横方向板ナデ	
(6次)	30	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	灰黄褐色 10YR 6/2	粗い砂粒を多量に含む			
	31	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	灰褐色 7.5YR 4/2	φ1mm 前後の砂粒を多量に含む	横ナデ 横方向板ナデ	横ナデ 横方向板ナデ	
	32	縄文土器 深鉢	SD11下層1･2トレ間	灰褐色 7.5YR 6/2	砂粒を多量に含む	横ナデ 横方向板ナデ	横方向ヘラ削り 横方向板ナデ	
	33	縄文土器 底部	SD11 下層 中央ベルト南側	にぶい橙色 7.5YR 6/4	粗い砂粒を多量に含む	斜方向板ナデ	器表に亀裂	
	34	縄文土器 底部	SD11下層1･2トレ間	にぶい橙色 5YR 7/3	植物質破片を多量に含み、多孔質	横方向板ナデ	ナデ	
	35	縄文土器 底部	SD11下層1･2トレ間	灰褐色 7.5YR 6/2	φ1mm 前後の砂粒を多量に含む			
	36	縄文土器 底部	SD11下層1･2トレ間	にぶい黄橙色 10YR 7/6	粗い砂粒を多量に含む	斜方向板ナデ･横ナデ	斜方向板ナデ	
	37	縄文土器 底部	SD11下層 トレ	にぶい褐色 7.5YR 6/3	粗い砂粒･植物質破片を多量に含む	横方向板ナデ	ナデ	内面黒変
	38	縄文土器 底部	SD11下層1･2トレ間	褐灰色 7.5YR 6/2	植物質破片を多量に含む	斜方向板ナデ	ナデ	
	39	縄文土器 底部	SD11下層1･2トレ間	にぶい褐色 7.5YR 7/3 ～褐灰色 7.5YR 4/1	φ1mm 未満の砂粒を多量に含む	横方向板ナデ	ナデ	内面黒変
	40	縄文土器 底部	SD11下層1･2トレ間	にぶい褐色 7.5YR 5/3	粗い砂粒を多量に含む	横ナデ		
	41	縄文土器 底部	SD11黒色土ベルト西側	灰褐色 7.5YR 5/2	砂粒･植物質破片を多量に含む	横方向板ナデ	器表に亀裂	
	42	縄文土器 底部	SD11 下層 3トレ･3トレ東	灰褐色 7.5YR 6/2	φ2～3mm の粗い砂粒を多量に含む	横ナデ	板ナデ	
	43	縄文土器 底部	SD11下層1･2トレ間	明褐灰色7.5YR 7/2(外面) 黒色 10YR 1.7/1(内面)	砂粒を多量に含む	横ナデ	横ナデ	炭化物付着

第５表　香椎Ａ遺跡第6･7次調査 土器一覧表５

挿図番号	番号	器　種	出土遺構	色　調	胎　土	外面調整	内面調整	備　考
	44	縄文土器 底部	SD11下層1･2トレ間	にぶい橙色 7.5YR 6/4	粗い砂粒を含む 植物質破片を含み、多孔質	磨滅著しい	斜方向板ナデ	
	45	縄文土器 底部	SD11下層1･2トレ間	にぶい橙色 7.5YR 6/4	砂粒を含む 植物質破片を含み、多孔質	ナデ	斜方向板ナデ	
	46	縄文土器 底部	SD11下層1･2トレ間	にぶい橙色 7.5YR 6/3	砂粒を多量に含む	ナデ	斜方向板ナデ	一部黒変
	47	縄文土器 底部	SD11下層1･2トレ間	にぶい黄橙色 10YR 7/2	砂粒を少量含む 植物質破片を多量に含み、多孔質	板ナデ	斜方向板ナデ	
	48	縄文土器 底部	SD11下層1･2トレ間	明褐灰色 5YR 7/2	粗い砂粒を含む 植物質破片を含み、多孔質	ナデ・横ナデ	斜方向板ナデ	内面黒変
	49	縄文土器 底部	SD11下層1トレ	にぶい赤褐色 5YR 5/3	砂粒を多量に含む 植物質破片を含み、多孔質	横方向板ナデ	横方向板ナデ	
	50	縄文土器 底部	SD11下層1･2トレ間	明赤褐色 5YR 5/8	細かい砂粒を多量に含む	斜方向板ナデ	ナデ	内面黒変
第43図	1	縄文土器 浅鉢	SD10 3層	黒色 7.5YR 2/1	細かい砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
(7次)	2	縄文土器 浅鉢	SD10 4層	にぶい褐色 7.5YR 6/3	細かい砂粒を少量含む	横方向ヘラ磨き	横方向ヘラ磨き	
	3	縄文土器 浅鉢	SD10 3層	黒色 10YR 2/1	細かい砂粒を含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	4	縄文土器 浅鉢	SD10 3層	黒色7.5YR 1.7/1(器表) 灰褐色 7.5YR 5/2(胎土)	細かい雲母粒子を含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	5	縄文土器 浅鉢	SD10 3層 北端	黒色 7.5YR 1.7/1	細かい砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	6	縄文土器 浅鉢	SD10 3層	黒褐色 7.5YR 3/1	細かい砂粒を含み、精良	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	7	縄文土器 浅鉢	SD10 3層 南端	黒色 7.5YR 1.7/1	細かい砂粒を含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	8	縄文土器 浅鉢	SD10 3層	黒色 7.5YR 2/1	細かい砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	9	縄文土器 浅鉢	SD10 3層	黒褐色 7.5YR 3/1	細かい砂粒を多量に含み、精良	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	10	縄文土器 浅鉢	SD10 3層	灰褐色 7.5YR 5/2	φ1mm 未満の砂粒を多量に含む	磨滅著しい	ヘラ磨き	
	11	縄文土器 浅鉢	SD10 3層 南端	黒色 7.5YR 1.7/1	細かい砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
第44図	12	縄文土器 浅鉢	SD10 3層	黒褐色7.5YR 3/1(器表) にぶい橙色7.5YR 6/3(胎土)	砂粒を多量に含む	磨滅著しいが、部分的にヘラ磨き痕が残る	磨滅著しいが、部分的にヘラ磨き痕が残る	
(7次)	13	縄文土器 浅鉢	SD10 3層	にぶい褐色 7.5YR 6/3	砂粒･植物質破片を含む	磨滅著しいが、部分的にヘラ磨き痕が残る	磨滅著しいが、部分的にヘラ磨き痕が残る	
	14	縄文土器 浅鉢	SD10 3層	灰褐色 7.5YR 5/2	細かい砂粒を多量に含む	磨滅著しい	磨滅著しい	
	15	縄文土器 浅鉢	SD10 3層	黒褐色 7.5YR 3/1	砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	16	縄文土器 浅鉢	SD10 3層	黒色 7.5YR 2/1	砂粒･植物質破片を含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	17	縄文土器 浅鉢	SD10 3層	にぶい褐色7.5YR 6/3(黒褐色 7.5YR 7/1の部位あり)	砂粒･雲母･植物質片を含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	18	縄文土器 椀	SD10 3層	灰褐色 7.5YR 6/2	φ0.5mm 前後の砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	19	縄文土器 浅鉢	SD10 3層	灰褐色 7.5YR 6/2	φ0.5mm 前後の砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	20	縄文土器 浅鉢	SD10 3層	褐灰色 7.5YR 4/1	細かい砂粒を多量に含む	磨滅著しいが、部分的にヘラ磨き痕が残る	磨滅著しいが、部分的にヘラ磨き痕が残る	
	21	縄文土器 深鉢	SD10 3･4層	にぶい褐色 7.5YR 6/3	細かい砂粒･雲母を多量に含む	横方向板ナデ 横方向ヘラ磨き	横方向板ナデ 横方向ヘラ磨き	
	22	縄文土器 深鉢	SD10 3層	明褐灰色7.5YR 7/2(外面) 黒色 N 2/(内面)	砂粒を多量に含む 植物質破片を含み、多孔質	斜方向の条痕	横方向板ナデ	
	23	縄文土器 小椀	SD10 3層	にぶい褐色 7.5YR 5/4	植物質破片を含む	ナデ	横方向板ナデ	
	24	縄文土器 深鉢	SD10 3層	にぶい橙色～橙色 7.5YR 7/3～7/6	粗い石英等を含む	斜方向の条痕		
第45図	25	縄文土器 深鉢	SD10 3層	にぶい褐色 7.5YR 5/3	砂粒・植物質破片を含み、多孔質	貝殻条痕	横方向板ナデ	広範囲に煤付着
(7次)	26	縄文土器 深鉢	SD10 3層 南端	にぶい褐色 7.5YR 5/3	植物質破片を多量に含む	横方向板ナデ･条痕	横ナデ	
	27	縄文土器 深鉢	SD10 4層	灰褐色 7.5YR 6/2	砂粒を含む 植物質破片を多量に含む	横方向条痕	横方向板ナデ	
	28	縄文土器 深鉢	SD10 4層	にぶい褐色 7.5YR 6/3	粗い砂粒を多量に含む	横ナデ 斜方向条痕	横方向条痕･板ナデ	
	29	縄文土器 深鉢	SD10 3層	灰褐色 7.5YR 4/2	植物質破片・貝殻片を含み、多孔質	横方向板ナデ 斜・縦方向条痕	横方向板ナデ	
	30	縄文土器 深鉢	SD10 3層	灰褐色 7.5YR 5/2	植物質破片を含み、多孔質	横方向板ナデ	横方向板ナデ	
第46図	31	縄文土器 深鉢	SD10 3層 南端	褐灰色 7.5YR 4/1	砂粒を多量に含む	横ナデ 横方向板ナデ	横ナデ 斜方向板ナデ	
(7次)	32	縄文土器 底部	SD10 3層	にぶい褐色 7.5YR 6/3	粗い砂粒を多量に含む	横方向板ナデ	横方向板ナデ	
	33	縄文土器 底部	SD10 3層 南端	にぶい褐色 7.5YR 5/3	植物質破片･粗い砂粒を多量に含む	横ナデ	ナデ	
	34	縄文土器 底部	SD10 3層 南端	にぶい橙色 7.5YR 7/4	植物質片･砂粒を多量に含む	横方向板ナデ	横方向板ナデ	
	35	縄文土器 底部	SD10 3層	にぶい褐色 7.5YR 6/3	植物質破片を含む	縦方向板ナデ	縦方向板ナデ	
	36	縄文土器 底部	SD10 3層	にぶい褐色 7.5YR 6/3	植物質片･砂粒多量に含む	横方向板ナデ	磨滅著しい	
	37	縄文土器 底部	SD10 3層	にぶい橙色 7.5YR 7/4	植物質片･砂粒多量に含む	横ナデ	ナデ	
	38	縄文土器 底部	SD10 3層 南端	にぶい橙色7.5YR 6/4(外面) 灰褐色 5YR 5/2(内面)	植物質片･粗い砂粒を含む	斜方向板ナデ	横方向板ナデ	
	39	縄文土器 底部	SD10 4層	にぶい橙色 10YR 7/3	植物質片･砂粒を多量に含む	横ナデ	板ナデ	
	40	縄文土器 底部	SD10 3層 南端	にぶい褐色 7.5YR 5/3	植物質破片･粗い砂粒を多量に含む	横ナデ	ナデ	
	41	縄文土器 底部	SD10 3層 南端	橙色5YR 6/6(外面) 灰褐色 5YR 5/2(内面)	植物質破片･粗砂粒を含む	横方向板ナデ	横方向板ナデ	
	42	縄文土器 底部	SD10 3層 南端	にぶい橙色 7.5YR 7/4	粗い砂粒･植物質破片を多量に含み、多孔質	板ナデ	板ナデ	内面煤付着

第６表　香椎Ａ遺跡第6･7次調査 土器一覧表６

挿図番号	番号	器　種	出土遺構	色　調	胎　土	外面調整	内面調整	備　考
第46図	43	縄文土器 底部	SD10 3層	にぶい黄橙色 10YR 7/3	砂粒を少量、植物質破片を多量に含む	横方向板ナデ	横方向板ナデ	口縁部外面・胴部内面煤付着
(7次)	44	縄文土器 深鉢	SD11 3層	にぶい橙色7.5YR 5/1(外面) 黒褐色 7.5YR 3/1(内面)	粗い砂粒･植物質破片を多量に含み、多孔質	横方向板ナデ→ナデ	横方向板ナデ	
	45	縄文土器 深鉢	SD11 3層	にぶい黄橙色 10YR 7/2	細かい砂粒･植物質破片を多量に含み、多孔質	斜方向貝殻条痕	横方向板ナデ	
第47図	1	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	灰褐色 7.5YR 6/2	砂粒を少量含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
(7次)	2	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	黒褐色 7.5YR 3/1	砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	3	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	黒色 7.5YR 2/1	砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	4	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	黒色 7.5YR 1.7/1	細砂粒･雲母を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	5	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	黒褐色 7.5YR 3/1	細かい砂粒を含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	6	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	黒色 7.5YR 2/1	砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	7	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	黒褐色 7.5YR 5/3	細かい砂粒を少量含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	8	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	黒色 7.5YR 1.7/1	砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	9	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	黒色 7.5YR 2/1	細かい砂粒を含み、精良	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	10	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	黒色 7.5YR 1.7/1	細かい砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	11	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	褐灰色 7.5YR 4/1	砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
第48図	12	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	黒色 7.5YR 1.7/1	細かい砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
(7次)	13	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	灰褐色 7.5YR 5/2	砂粒を少量含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	14	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	黒色 10YR 2/1	細かい砂粒を含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	15	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	黒色 7.5YR 1.7/1	細かい砂粒を多量に含む			
	16	縄文土器 浅鉢	SD11 3層	黒色 7.5YR 1.7/1	細かい砂粒を多量に含む	ヘラ磨き		
	17	縄文土器 深鉢	SD11 3層	にぶい褐色 7.5YR 5/3	細かい砂粒を多量に含む	横方向条痕 斜方向板ナデ	横ナデ・斜方向板ナデ	
	18	縄文土器 深鉢	SD11 3層	黒色 7.5YR 2/1	細かい砂粒を多量に含む	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	19	縄文土器 深鉢	SD11 3層	黒褐色 7.5YR 3/1	砂粒を含む	斜方向条痕	横方向板ナデ	
	20	縄文土器 深鉢	SD11 3層	にぶい黄橙色 10YR 7/3	砂粒を多量に含む	貝殻条痕か	横ナデ	
	21	縄文土器 深鉢	SD11 3層	にぶい褐色 5YR 6/3	植物質破片･砂粒を含む	ナデ	横方向板ナデ	
	22	縄文土器 底部	SD11 3層	にぶい橙色 5YR 7/3	植物質破片･粗い砂粒を多量に含む	横方向板ナデ	板ナデ	
	23	縄文土器 底部	SD11 3層	にぶい橙色 5YR 7/3	植物質破片･φ1mm 前後の砂粒を多量に含む	板ナデ	ナデ	

第７表 香椎Ａ遺跡第6･7次調査 土器計測表

挿図番号	番号	器　種	出土遺構	口径	器高	底径	挿図番号	番号	器　種	出土遺構	口径	器高	底径
第27図	1	土師器 杯	SD21	11.2	3.6	5.5	第53図	1	須恵器 杯	SD24	14.0	3.4	9.4
	2	土師器 杯	SD21	12.3	4	7.9		2	須恵器 杯	SD24	13.6	4.5	8.9
	3	土師器 杯	SD21	12.4	3.6	7.2		3	土師器 杯	SD24	15.4	3.0	8.8
	4	土師器 杯	SD21	12.6	4.0	7.1		4	須恵器 壷	SD24	14.0		
	5	土師器 杯	SD21	12.2	3.5	5.5		5	須恵器 把手	SD24			
	6	土師器 杯	SD21	12.5	6.4	7.8		6	土師器 杯蓋	SD25	14.1		
	7	土師器 杯	SD21	13.3	5.1	8.3		7	土師器 杯	SD25	13.6	3.3	9.0
	8	土師器 杯	SD21	14.5	4.9	8.4		8	土師器 丸底杯	SD25	13.6	3.8	
	10	須恵器 杯蓋	SD22	17.0	3.0			9	土師器 杯	SD25	11.9	4.8	7.3
	11	須恵器 杯蓋	SD05	16.0	3.5	8.5(天井部)		10	土師器 椀	SD25			10.4
	12	土師器 杯蓋	SD05 上層	16.0				11	黒色土器 椀	SD25	17.5	7.6	9.0
	13	須恵器 杯	SD22	10.0	3.7	12.0		12	土師器 小皿	SD26	10.5	1.5	8.1
	14	須恵器 杯	SD05 上層			10.5		13	土師器 托	SD26	10.7	1.5	6.5
	15	須恵器 杯				12.2		14	土師器 椀	SD26南・SD27			8.0
	16	須恵器 長頸壷	IV区 包含層	11.8				15	土師器 杯	SD26	14.0	2.8	9.1
	17	土師器 杯	SD05			7.5		16	土師器 椀	SD26	14.6	5.7	6.2
	18	須恵器 杯	IV区 包含層			9.2		17	土師器 椀	SD25 南側	13.4		
	19	須恵器 壷	SD05 上層	12.0				18	須恵器 杯	SD28	13.6	3.9	8.5
	20	須恵器 蓋杯	IV区 包含層	14.2				19	土師器 甕	SD27	31.2		
	21	須恵器 蓋杯	IV区 包含層	15.5	2.4	10.2		20	土師器 小皿	SD27	9.8	0.7	8.0
	22	須恵器 杯	IV区 包含層	14.5	4.6	9.2		21	土師器 皿	VI区 包含層	14.0	1.9	11.4
	23	須恵器 杯	IV区 包含層	14.5	4.9	8.4		22	須恵器 杯	VI区 包含層	11.5	3.4	8.7
	24	須恵器 蓋杯	IV区 包含層	14.2	4.4								

第８表　香椎Ａ遺跡第6･7次調査 石器一覧表

挿図番号	番号	種　類	出土遺構	石　材	法　量
第10図	1	石錘	Ⅰ区		6.8×4.1×2.8
	2	砥石	SD01	緻密な中程度の砂目砂岩	2.5×4.1×4.0
	3	不明石製品	SD01	砂岩	6.2×3.5×1.6
	4	石錘	SD02	安山岩	9.9×5.7×1.9
	5	砥石	SD02	安山岩？	9.4×7.5×3.1
	6	砥石	SD01	砂岩	8.4×1.0×5.2
	7	石鑿	SD01	頁岩	8.2×3.2×3.2
	8	磨製石斧	SD01	水滑石か蛇紋岩	7.8×3.3×1.3
	9	打製石斧	RS04	蛇紋岩	7.0×5.4×0.8
	10	打製石斧	SD01	サヌカイト	11.0×6.0×2.5
	11	打製石斧	SD02	粘板岩	7.4×4.4×0.9
第11図	1	有脚鏃	SD01 下層	白濁粒子含む漆黒黒曜石	2.5×1.7×0.4
	2	長脚鏃	SD01	漆黒黒曜石	1.5×0.9×0.5
	3	二次加工剥片	SD01 下層	漆黒黒曜石	2.2×2.8×0.7
	4	スクレイパー	SD01	漆黒黒曜石	3.3×2.8×1.1
	5	二次加工剥片	SD01 下層	白濁粒子含む漆黒黒曜石	2.7×3.4×0.5
	6	スクレイパー	SD01	黒曜石	3.0×6.6×1.9
	7	二次加工剥片	SD01	白濁粒子含む漆黒黒曜石	2.6×2.6×0.5
	8	加工剥片	SD01 下層	漆黒黒曜石	2.5×2.1×0.8
第12図	9	加工剥片	SD01 下層	白濁粒子含む漆黒黒曜石	1.5×1.1×0.4
	10	二次加工剥片	SD01	白濁粒子含む漆黒黒曜石	4.2×2.0×0.7
	11	二次加工剥片	SD01	漆黒黒曜石	2.1×3.1×1.2
	12	二次加工剥片	SD01	漆黒黒曜石	1.8×2.0×0.4
	13	二次加工剥片	SD01	漆黒黒曜石	1.6×1.4×0.5
	14	剥片	SD01	半透明黒曜石	2.7×1.7×0.5
	15	剥片	SD01	漆黒黒曜石	1.5×1.2×0.3
	16	剥片	SD01	漆黒黒曜石	2.0×1.8×0.4
	17	加工剥片	SD01	漆黒黒曜石	4.3×3.2×0.7
	18	剥片	SD01	漆黒黒曜石	2.8×1.9×0.4
	19	剥片	SD01	漆黒黒曜石	2.8×1.7×0.4
	20	剥片	SD01 下層	漆黒黒曜石	2.7×1.5×0.3
	21	剥片	SD01	漆黒黒曜石	3.8×2.3×1.0
	22	剥片	SD01	漆黒黒曜石	3.3×1.7×0.6
	23	剥片	SD01	白濁粒子含む漆黒黒曜石	2.9×1.4×0.5
	24	剥片	SD01 下層	漆黒黒曜石	3.6×2.0×0.7
	25	剥片	SD01	漆黒黒曜石	2.8×1.4×0.5
第13図	26	剥片	SD01 下層	白濁粒子含む漆黒黒曜石	4.3×1.5×0.5
	27	剥片	SD01	漆黒黒曜石	5.2×2.7×0.8
	28	使用剥片	SD01 下層	漆黒黒曜石	5.9×3.0×0.4
	29	剥片	SD01 下層	白濁粒子含む漆黒黒曜石	4.3×2.8×0.7
	30	剥片	SD01	安山岩	3.8×4.2×1.5
	31	剥片	SD01 下層	白濁粒子含む漆黒黒曜石	4.1×2.4×0.6
	32	石核	SD01	漆黒黒曜石	4.5×3.3×1.1
第18図	1	剥片	SD01	サヌカイト	4.5×5.5×1.5
	2	石鏃	SD02	漆黒黒曜石	2.6×1.2×0.4
	3	打製石鏃	SD02	漆黒黒曜石	2.2×1.3×0.4
	4	剥片	SD02	縞文様ある半透明黒曜石	1.9×1.2×0.4
	5	有孔円盤	SD02	緑色を帯びた滑石	3.0×2.0×0.25
	6	細石	SD02	半透明黒曜石	1.8×0.8×0.2
	7	剥片	SD02	縞文様ある半透明黒曜石	2.0×1.2×0.2
第26図	1	打製石斧	SD05	堆積岩	13.0×3.6×1.9
	2	磨製石斧	SD05	玄武岩	10.8×6.0×4.0
第26図	3	石包丁	SD05	凝灰岩	10.5×3.5×0.5
第40図	1	石錘	SD10上層3･4トレ間	多孔質の安山岩	9.7×7.5×1.4
	2	石錘	SD11下層1･2トレ間	砂岩	8.0×6.0×3.3
	3	石錘	SK12	目の細かな砂岩	6.8×3.0×1.1
	4	叩き石	SD11下層1･2トレ間	安山岩	6.2×4.8×2.1
	5	叩き石	SD10下層3･4トレ間	花崗閃緑岩	10.6×8.3×3.9
	6	磨り石	SD11下層1･2トレ間	花崗閃緑岩	14.2×8.6×4.9
	7	石剣	SD10 1トレ	粘板岩？	9.7×2.7×0.5
	8	磨製石斧	SD10下層4トレ西側	蛇紋岩？	7.3×4.8×3.1
	9	磨製石斧	SD11下層1･2トレ間	蛇紋岩	8.9×5.3×2.0
	10	磨製石斧	SD11下層1･2トレ間	水滑石(蛇紋岩が変質)	9.4×5.8×2.3
第41図	1	有脚鏃	SD11下層1･2トレ間	漆黒黒曜石	1.8×1.3×0.3
	2	有脚鏃	SD11下層2･3トレ間	縞文様のある黒曜石	2.6×1.5×0.4
	3	有脚三角鏃	SD11下層1･2トレ間	漆黒黒曜石	2.5×1.5×0.5
	4	スクレイパー	SD11下層1･2トレ間	縞文様のある黒曜石	2.8×4.0×1.0
	5	二次使用剥片	SD11下層1･2トレ間	半透明黒曜石	3.3×1.7×0.3
	6	剥片	SD11下層1･2トレ間	白濁粒含む半透明黒曜石	3.0×1.8×0.6
	7	剥片	SD11下層1･2トレ間	漆黒黒曜石	2.4×1.4×0.6
	8	剥片	SD11下層1･2トレ間	漆黒黒曜石	1.3×1.4×0.6
	9	剥片	SD11下層1･2トレ間	白濁粒含む漆黒黒曜石	2.2×1.8×0.6
	10	剥片	SD11下層1･2トレ間	漆黒黒曜石	2.9×0.9×0.4
	11	剥片	SD11下層1･2トレ間	漆黒黒曜石	2.2×0.8×0.3
	12	ナイフ型石器	SD12	漆黒黒曜石	4.5×1.5×0.4
	13	三角鏃	Ⅲ区	漆黒黒曜石	2.5×1.7×0.6
第42図	1	石匙	SD10 4トレ西	サヌカイト	3.6×3.8×1.0
	2	ラウンドスクレイパー	SD11下層1･2トレ間	緑泥片岩	5.5×5.8×1.3
	3	石刃	SD10下層1･2トレ間	漆黒黒曜石	2.0×1.4×0.4
	4	二次加工剥片	SD10 3トレ西側	漆黒黒曜石	1.7×2.6×0.5
	5	石刃	SD10下層3トレ西側	漆黒黒曜石	2.2×1.1×0.4
	6	石刃	SD11下層ベルト西側	漆黒黒曜石	2.6×1.5×0.4
	7	小玉	SD10下層3トレ西側		3.5×5.0
	8	磨製石斧	SD10下層3･4トレ間	蛇紋岩	12.8×5.8×3.2
	9	磨製石斧	SD11下層1･2トレ間	安山岩	16.1×7.2×3.6
第49図	1	スクレイパー	SD10 3層 北端	安山岩	4.7×6.1×1.2
	2	叩き石	SD10 4層	花崗岩	13.8×8.4×5.6
	3	磨り石	SD11 3層	安山岩	11.9×10.7×4.9
	4	磨製石斧	SD10 1層	頁岩	16.9×6.2×2.2
	5	磨製石斧	Ⅴ区	安山岩	9.3×4.8×2.3
	6	管玉	SD11 3層		2.7×0.6×0.6
	11	有脚鏃	SD10 3層	縞文様のある黒曜石	2.4×1.4×0.3
	12	有脚鏃	SD10 3層	漆黒黒曜石	2.2×2.0×0.3
	13	有脚鏃	SD10 3層	漆黒黒曜石	1.8×1.6×0.3
	14	三角鏃	SD10 3層	安山岩	2.1×2.0×0.3
	15	石鋸	SD10 3層	漆黒黒曜石	3.3×3.8×0.7
	16	有脚鏃	SD11 3層	漆黒黒曜石	2.7×1.3×0.4
	17	有脚鏃	SD11 3層	白濁粒混入している黒曜石	2.1×1.7×0.4
	18	有脚鏃	Ⅴ区	縞状に細かな粒の入る黒曜石	2.3×1.4×0.4
第54図	1	三角鏃	SD25	白濁部分ある黒曜石	1.9×2.2×0.5
	2	有脚鏃	SD26	漆黒黒曜石	1.9×1.8×0.4
	3	有脚鏃	SD27	漆黒黒曜石	1.9×1.6×0.5
	4	有脚鏃	SD36	漆黒黒曜石	1.9×1.6×0.4
	5	凹み石	SD36	安山岩	7.2×5.6×3.1

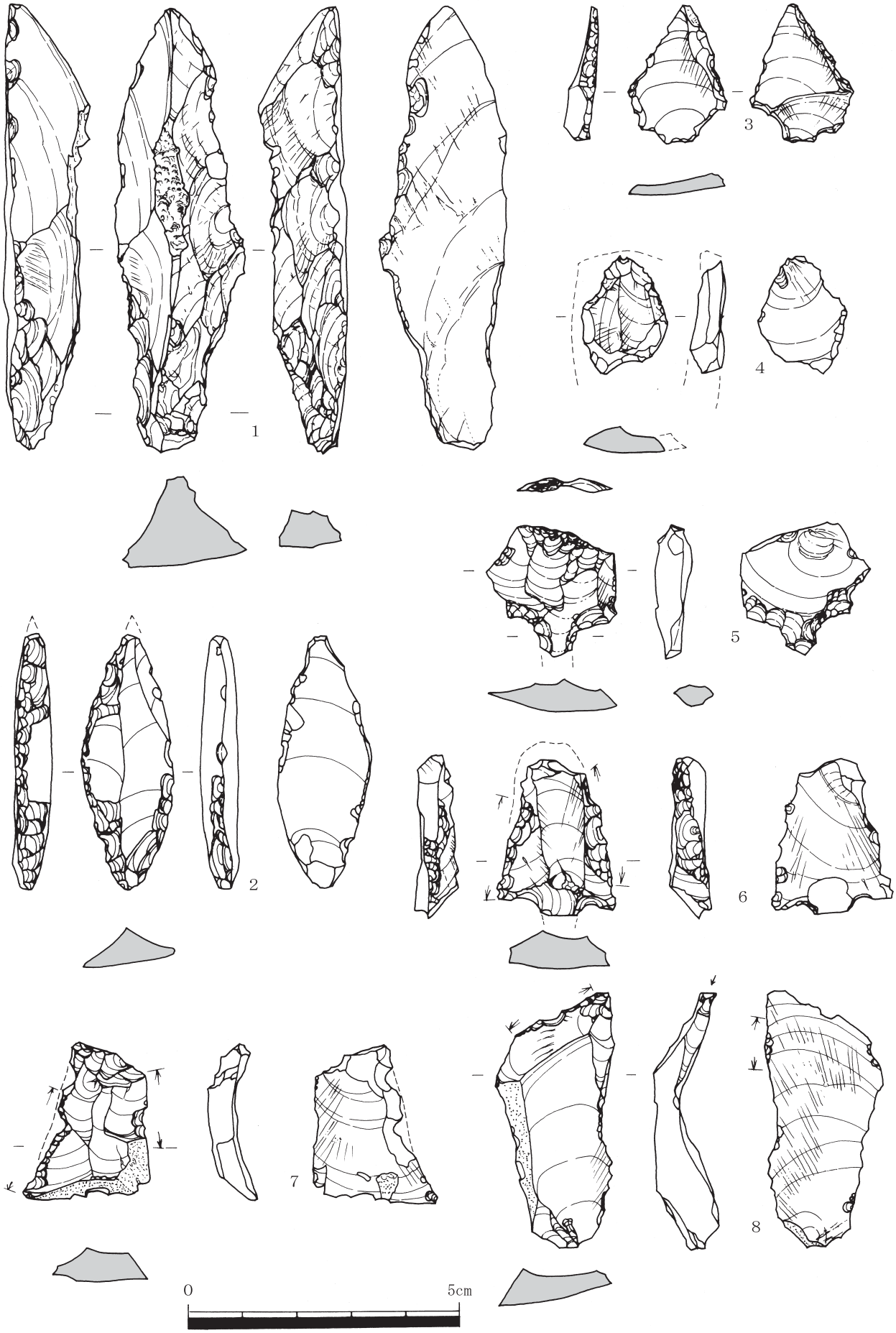
香椎６，７次調査の旧石器時代資料について

１は三稜尖頭器である。全長8cm、幅2cm を超える大型品である。唯一の安山岩（サヌカイト）素材であり、背面に礫面を残す横長剥片を素材とし、主に両側縁の調整で両端を尖らせ基部調整を入念におこなう。稜上調整は基部に僅かに認められる。２はナイフ形石器であり、摩滅が著しい。復元長5cm を超える端正な縦長剥片の二側縁調整である。3,4は尖頭石器、5,6はドリル、6は両側縁にブランティング状の調整があり、ナイフ形石器の基部転用品か。7,9は削器、8は彫器である。彫器は削片剥離後の縁部に微細剥離が認められる。10～15は縦長剥片であり、そのうち14,15は幅約1cm 程度で細石刃に近い。16～23は幅広、不定形で背面に礫面を有する16,20,21があり石核調整剥片とみられる。このうち20,21～23には二次調整や微細剥離があり、何らかの使用が想定される。24,25は幅広の縦長剥片であり、何れもⅦ区から出土した二次調整を有する剥片であるが、この二点は接合することが判明した。接合状況から復元すると作業面の高さ約5cm、幅約3cm で片方に傾斜する打面を有する石核から入念な作業面調整後、同様の剥片を連続して剥離する工程が伺える。

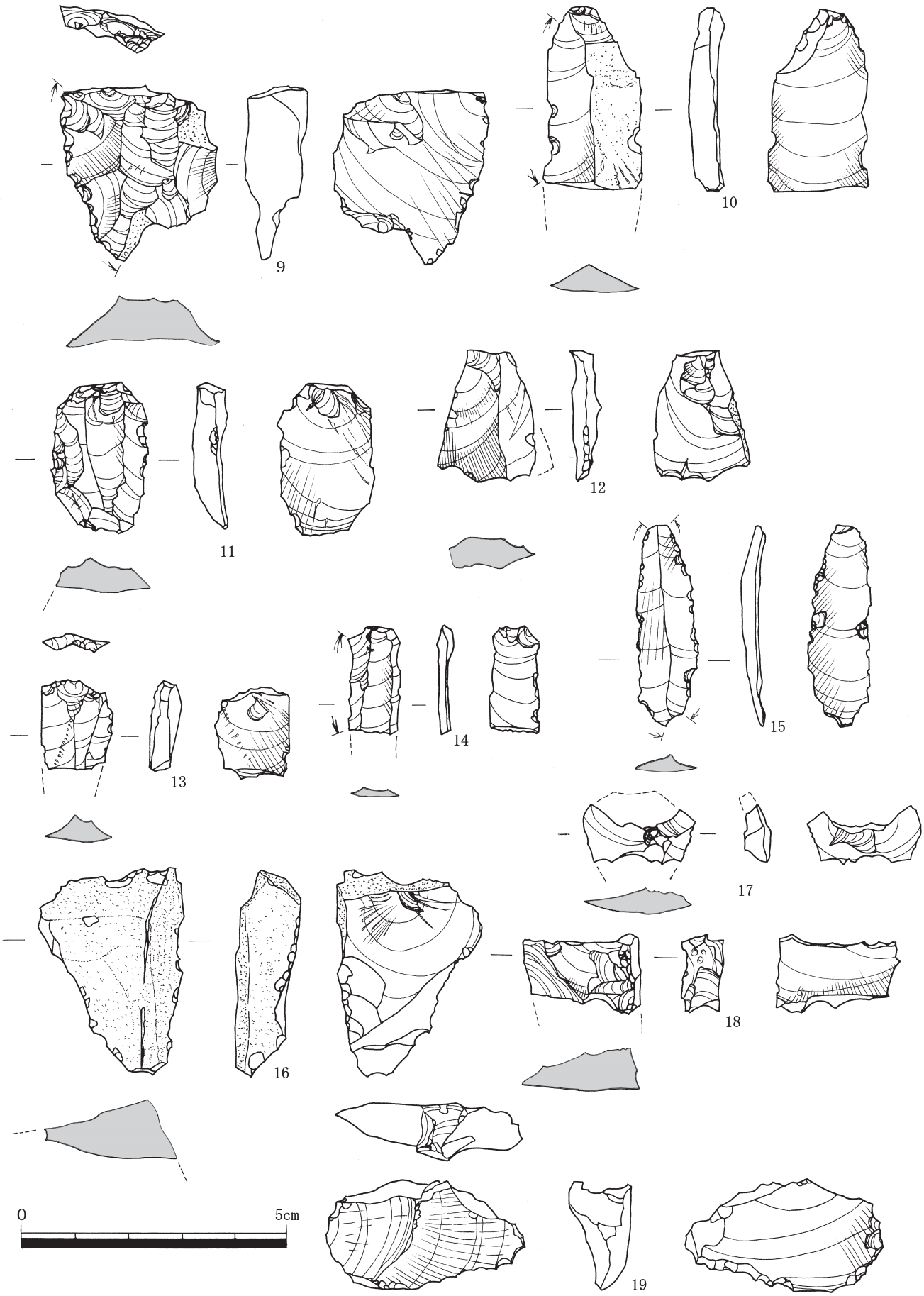
今次調査では少量の旧石器時代の石器類が出土した。何れも更新世堆積物内に安定して包含されたものではなく、後世の遺構内や包含層内、また縄文時代以降の自然流路に混入しての出土であった。そのため石器群の一括性については十分検討する必要がある。

まず、6、7次調査はおおよそ南北140m、東西50m の範囲であり、地形では東側の市道や浜男東公園付近が南北に連なる丘陵の裾部となり、西側の低地に下がる地形にあたる。市道と東側の病院施設の間が高さ数mの造成段となっていることから、丘陵尾根部と低地部は本来比高差数～十数mあったとみられる。そして調査区付近で段丘形成などの地形傾斜の緩和があったとみられる。また、市道の屈曲は平面地形を反映しており、調査区でみると浜男東公園付近を境に段丘は一旦東へ広がるようである。調査区との対応では、北側のⅠ、Ⅱ、Ⅳ区と、南側のⅢ、Ⅴ～Ⅶ区に区分できる。今回の石器出土量は、北側がⅠ区14、Ⅱ区0、Ⅳ区１点の計15点であり、南側はⅢ区4、Ⅳ区1、Ⅴ区1、Ⅵ区3、Ⅶ区2点の計10点である。Ⅱ区からⅣ区付近は遺物の少ない緩衝地帯となっている。このように本来少ない遺物量ではあるが、平面的に出土遺物量に差異があり、無遺物地帯を挟むことから、こうした出土状況は二次的埋没とはいえけっして偶然ではなく、本来の人為活動の一面を反映している可能性があろう。

以上の点から見れば、旧石器時代の資料はⅠ、Ⅳ区を中心とする北群と、Ⅲ～Ⅶ区の南群に区分される。北群は三陵尖頭器、ナイフ形石器、彫器、尖頭石器、削器、縦長剥片、二次調整剥片、剥片、砕片からなる。南群はドリル、二次調整剥片、縦長剥片、横長剥片、砕片、幅広縦長剥片からなる。何れも後期旧石器段階後半期に位置づけられるが、北群の三陵尖頭器とナイフ形石器の形態と組成はAT 降灰後でも比較的古段階であり、福岡平野周辺でも特に東部を中心として類例を探すなら、東区下和白Ⅲ区、博多区井相田 C1,3次、雑餉隈14次、南区野多目 C1次の石器群との併行関係が想定される。南群は定型石器や資料総数が少なく、明確でないが、端正な縦長剥片の不在などから北群より後出する段階となろう。



第58図　香椎Ａ遺跡第６・７次調査出土旧石器時代資料Ⅰ(縮尺 1/1)



第59図　香椎Ａ遺跡第６・７次調査出土旧石器時代資料Ⅱ(縮尺 1/1)

第60図　香椎Ａ遺跡第６・７次調査出土旧石器時代資料Ⅲ(縮尺 1/1)

付　篇

香椎Ａ遺跡第７次調査Ｖ区の花粉分析

森　　将　志（パレオ・ラボ）

１.はじめに

香椎Ａ遺跡で行われた第7次調査で谷部より採取された土壌試料について、遺跡周辺の当時の植生やその変遷、土地の利用状況などを検討するために、花粉分析を行った。以下に、分析の結果および考察を記す。

２．試料と方法

試料は、Ｖ区のSD10より採取された試料No.1～4（1～4層）、とSD11より採取された試料No.5（3層）の計5試料である。SD10とSD11は「谷」で、互いにそれほど離れていない。SD10では上位から、パミス混じりの灰オリーブ色粘土（1層）、パミス混じりのやや砂質な黒褐色粘土（2層）、炭化植物片が混じる黒色粘土（3層）、パミス混じりのやや砂質な灰色粘土（4層）の順に堆積しており、各層から分析試料を採取した。SD10の1層は中世（14世紀）、2層は弥生時代、3，4層は縄文時代晩期前葉～中葉と考えられている。SD11ではパミス混じりの暗オリーブ色粘土（3層）から分析試料を採取した。SD11の3層はSD10の3層（縄文時代晩期前葉～中葉）と同時期の堆積物であると考えられている。以上の土壌試料から次の手順で花粉化石を抽出した。

試料（湿重量約3～4g）を遠沈管にとり、10％水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後46％フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の割合の混酸を加え10分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行った。各プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる花粉・胞子を全て数えた。図版に示した分類群ごとの単体標本（PLC.217～222）はパレオ・ラボに保管されている。

３．結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉35、草本花粉20、形態分類を含むシダ植物胞子3の総計58である。これらの花粉・胞子の一覧を表1に、分布図を図1に示した。分布図において樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉、胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。図および表においてハイフン(－)で結んだ分類群はそれらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科、マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

今回分析した試料は、いずれにおいてもコナラ属アカガシ亜属とシイノキ属－マテバシイ属が大多数を占め、アカガシ亜属は22～63％、シイノキ属–マテバシイ属は19～34％の産出率を示す。なかでもSD10の3層においてはアカガシ亜属が63％、シイノキ属–マテバシイ属が21％の産出率を示し、産出花粉胞子のほとんどを樹木花粉が優占する。また、二次林要素のマツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、クリなどの樹木花粉がすべての試料から産出しており、数％～数十％の産出率を示す。スギ属花粉はSD10の4層では産出が稀で、3層では産出が見られないが、SD10の1，2層とSD11の3層で

は数%の産出率を示し高くなる。草本花粉をみると、イネ科花粉がSD10の3, 4層では産出が稀であるが、SD10の1, 2層とSD11の3層においては23〜34%となり、最も高い産出率を示す。また、SD10の1, 2層では水田雑草を含む分類群であるサジオモダカ属やオモダカ属、ミズアオイ属などのわずかな産出が見られる。さらに、抽水植物であるガマ属がSD11の3層から、浮葉植物のヒルムシロ属がSD10の1層からわずかに産出する。

4．古植生変遷について

以下では、連続的に試料が採取されたSD10において、各時代の古植生とその変遷を検討した。

縄文時代晩期前葉〜中葉と考えられるSD10の3層と4層で最も多く産出している花粉は、コナラ属アカガシ亜属とシイノキ属ーマテバシイ属である。また、産出する花粉のほとんどが樹木花粉であり、草本花粉が極端に少ない。このことから、カシ、シイ類の照葉樹が鬱蒼と茂る森林が遺跡周辺に広がっていたと思われる。しかし、大型植物遺体分析やプラント・オパール分析の結果では、谷筋や林縁部など開けた場所に生育している分類群が産出しており、森林の一部には開けた場所もあった。こうした明るい開けた場所に生育する分類群が花粉化石ではほとんど確認できないため、今回得られた花粉化石群集は広範囲の森林の一般的な樹木組成を反映させている可能性がある。また、4層では二次林要素として知られるマツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類)、コナラ属コナラ亜属、クリなどの花粉がある程度の産出率を示すため、照葉樹林の一部が人為的な活動や、あるいは自然現象によって失われ、そこに二次林が形成していた可能性がある。しかし、4層から3層にかけてアカガシ亜属が増加し、二次林要素の樹木が減少していることから、縄文時代晩期前葉〜中葉でも新しい時期になると、森林の一部の二次林が潜在植生に戻っていた可能性が考えられる。こうした森林の二次林の変化については大型植物遺体分析やプラント・オパール分析では確認されていない。この変化は主に森林の一部の二次林が変化したもので、森林の構成種全体が変わるものではないと考えられるため、主に谷周辺など分析採取地点の植生を反映させている大型植物遺体やプラント・オパールでは確認できなかった可能性がある。なお、3層において産出花粉のほとんどが樹木花粉であるという結果は、プラント・オパール分析で3層から最も多くの樹木起源の珪酸体が検出されたという結果と同調的である。

弥生時代と考えられるSD10の2層の花粉組成は、アカガシ亜属やシイノキ属ーマテバシイ属などの照葉樹林要素の花粉を主体とし、再び二次林要素の樹木花粉が増加している。さらに、この時期の特徴としてイネ科花粉が増加している点が挙げられる。花粉形態でイネを特定するのは難しいが、イネ科花粉とともに水田雑草を含むサジオモダカ属やオモダカ属などが産出していることや、プラント・オパール分析で大量のイネが確認されているといったことから、この時期に周辺で稲作が行われていたのは間違いない。以上のことから、弥生時代には遺跡周辺において水田稲作が行われ、それに伴い照葉樹林の一部が開拓され、開けた場所には二次林が形成されていたという古植生が推測される。

14世紀と考えられるSD10の1層では、浮葉植物のヒルムシロ属や抽水植物でもあるサジオモダカ属やオモダカ属、ミズアオイ属などの産出が見られるため、遺跡周辺には水田とともに湖沼地が存在していたことが考えられる。さらに、その他の産出花粉をみても、SD10の2層の花粉化石群集とほぼ同じ組成を示しているため、弥生時代から少なくとも14世紀までの遺跡周辺の植生環境には、顕著な変化がなかったものと思われる。

ところで、畑中ほか（1998）によると、弥生時代中期〜古墳時代には九州地方各地の遺跡や沖積平野でアカガシ亜属とシイノキ属が衰退し、マツ属やイネ科花粉が急増するとされている。本遺跡においては弥生時代に、アカガシ亜属が減少し、イネ科花粉が増加する点においては広域の傾向と一致す

るが、シイノキ属の減少がなく、マツ属の産出率も縄文時代晩期の一時期と変わらない点で異なる。よって、九州地方の広い範囲の植生史の中で考えると、シイノキ属やマツ属の比率の高さは本遺跡の特徴を表しているのかもしれない。

５．SD11の花粉組成について

SD11（3層）の樹木花粉はアカガシ亜属とシイノキ属－マテバシイ属を主体とし、二次林要素の樹木花粉を伴う。また、スギ属やイネ科花粉の産出率が高く、抽水植物のガマ属やサジオモダカ属、オモダカ属などの花粉を伴う。こうした花粉組成から推測される古植生は、SD10の2層以降の古植生と類似する。そのため、花粉組成から判断すると、SD11（3層）は弥生時代以降の堆積物である可能性がうかがえるが、SD11（3層）からは縄文時代晩期の土器が出土しており、考古学的所見と花粉分析結果が異なる。また、プラント・オパール分析においても、SD11の3層ではイネが多量に産出しており、SD10の3，4層よりも、SD10の1，2層の組成と類似する点では、花粉分析結果と共通している(プラント・オパール分析の項参照)。SD11（3層）の堆積時期については、土器の混入の可能性も含めて、遺物出土状況などとも合わせた慎重な検討が必要であろう。

引用文献

畑中健一・野井英明・岩内明子（1998）九州地方の植生史．安田喜憲・三好教夫編「図説日本列島植生史」：151-161，朝倉書店．

表１　産出花粉化石一覧表

学　　名	和　　名	試料番号				
		SD10 1層	SD10 2層	SD10 3層	SD10 4層	SD11 3層
樹木						
Podocarpus	マキ属	1	1	—	—	—
Abies	モミ属	1	1	—	—	—
Tsuga	ツガ属	—	1	—	—	—
Picea	トウヒ属	2	1	—	—	—
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	27	25	7	25	33
Pinus subgen. *Haploxylon*	マツ属単維管束亜属	4	1	—	1	1
Cryptomeria	スギ属	7	7	—	2	14
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	3	—	—	—	—
Salix	ヤナギ属	—	1	—	—	3
Myrica	ヤマモモ属	2	2	2	—	4
Platycarya	ノグルミ属	—	—	—	—	1
Pterocarya-Juglans	サワグルミ属－クルミ属	1	—	—	1	1
Carpinus-Ostrya	クマシデ属－アサダ属	1	—	1	—	1
Corylus	ハシバミ属	1	—	—	—	1
Betula	カバノキ属	2	1	—	2	1
Alnus	ハンノキ属	—	—	—	2	—
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	15	13	8	20	14
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	44	53	130	68	60
Castanea	クリ属	16	15	9	26	19
Castanopsis-Pasania	シイノキ属－マテバシイ属	56	68	44	54	39
Ulmus-Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	—	—	1	—	—
Celtis-Aphananthe	エノキ属－ムクノキ属	2	1	—	—	1
Euptelea	フサザクラ属	1	—	—	—	—
Distylium	イスノキ属	—	—	—	4	4
Ilex	モチノキ属	2	2	—	1	2
Celastraceae	ニシキギ科	—	—	—	1	—
Acer	カエデ属	—	—	—	—	1
Aesculus	トチノキ属	4	2	—	4	2
Vitis	ブドウ属	—	—	—	—	1
Elaeagunus	グミ属	2	—	—	—	—
Lagerstroemia	サルスベリ属	—	1	—	—	—
Symplocos	ハイノキ属	—	1	—	—	1
Ligustrum	イボタノキ属	—	—	—	1	—
Fraxinus	トネリコ属	6	2	2	3	—
Viburnum	ガマズミ属	—	1	1	—	—
草本						
Typha	ガマ属	—	—	—	—	2
Potamogeton	ヒルムシロ属	1	—	—	—	—
Alisma	サジオモダカ属	1	1	—	—	3
Sagittaria	オモダカ属	6	4	—	—	1
Gramineae	イネ科	107	88	1	3	190
Cyperaceae	カヤツリグサ科	18	12	—	—	26
Eriocaulon	ホシクサ属	1	3	—	—	1
Monochoria	ミズアオイ属	1	—	—	—	—
Moraceae	クワ科	3	—	1	4	4
Polygonum sect. *Persicaria-Echinocaulon*	サナエタデ節－ウナギツカミ節	—	—	—	—	5
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	1	—	—	—	—
Caryophyllaceae	ナデシコ科	—	—	—	—	3
Ranunculaceae	キンポウゲ科	—	—	—	1	—
Brassicaceae	アブラナ科	1	2	—	1	12
Dunbaria	ノアズキ属	—	—	—	—	1
Leguminosae	マメ科	1	1	1	4	4
Lamiaceae	シソ科	—	2	—	—	—
Artemisia	ヨモギ属	6	6	1	—	11
Tubuliflorae	キク亜科	6	7	—	—	3
Liguliflorae	タンポポ亜科	—	1	—	—	—
シダ植物		—	—	—	—	—
Osmunda	ゼンマイ属	4	3	—	—	5
Monolete type spore	単条型胞子	20	21	1	1	38
Trilete type spore	三条型胞子	22	31	—	2	42
Arboreal pollen	樹木花粉	200	200	205	215	204
Nonarboreal pollen	草本花粉	153	127	4	13	266
Spores	シダ植物胞子	46	55	1	3	85
Total Pollen＆Spores	花粉・胞子総数	399	382	210	231	555
Unknown pollen	不明花粉	10	4	12	18	16

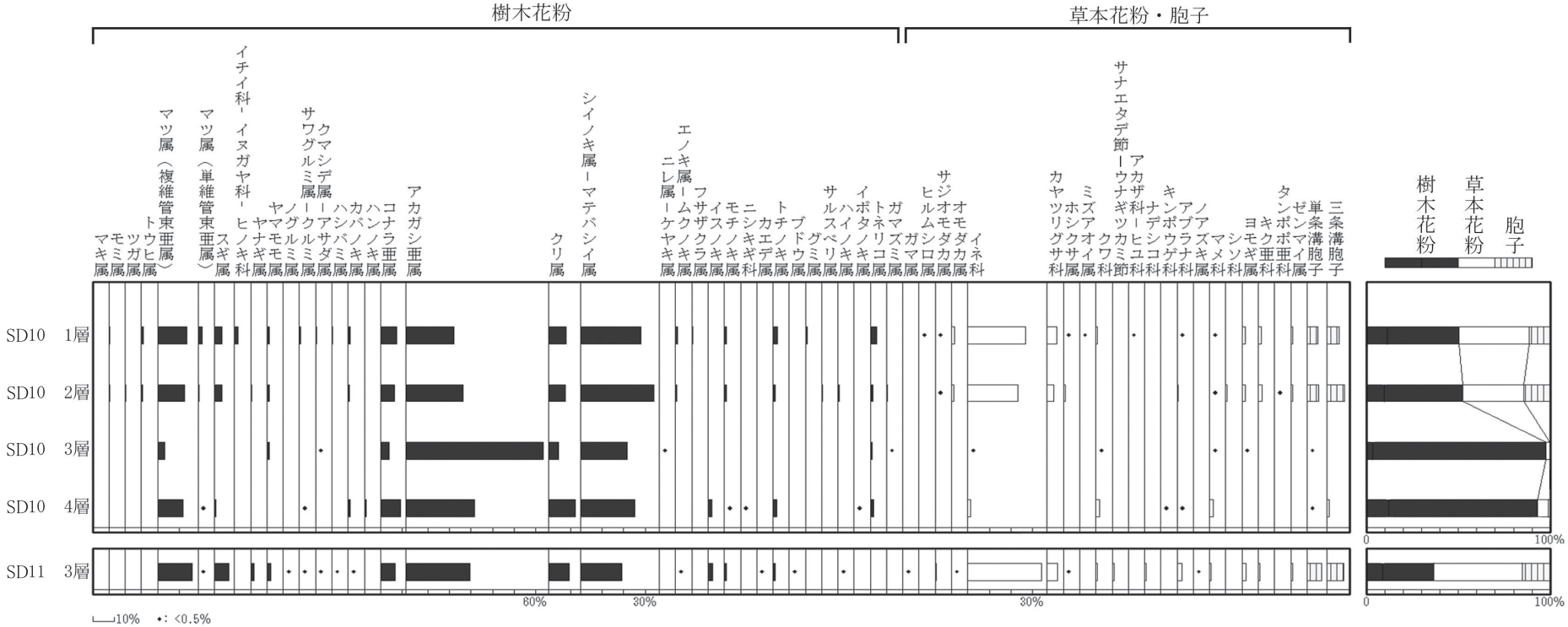
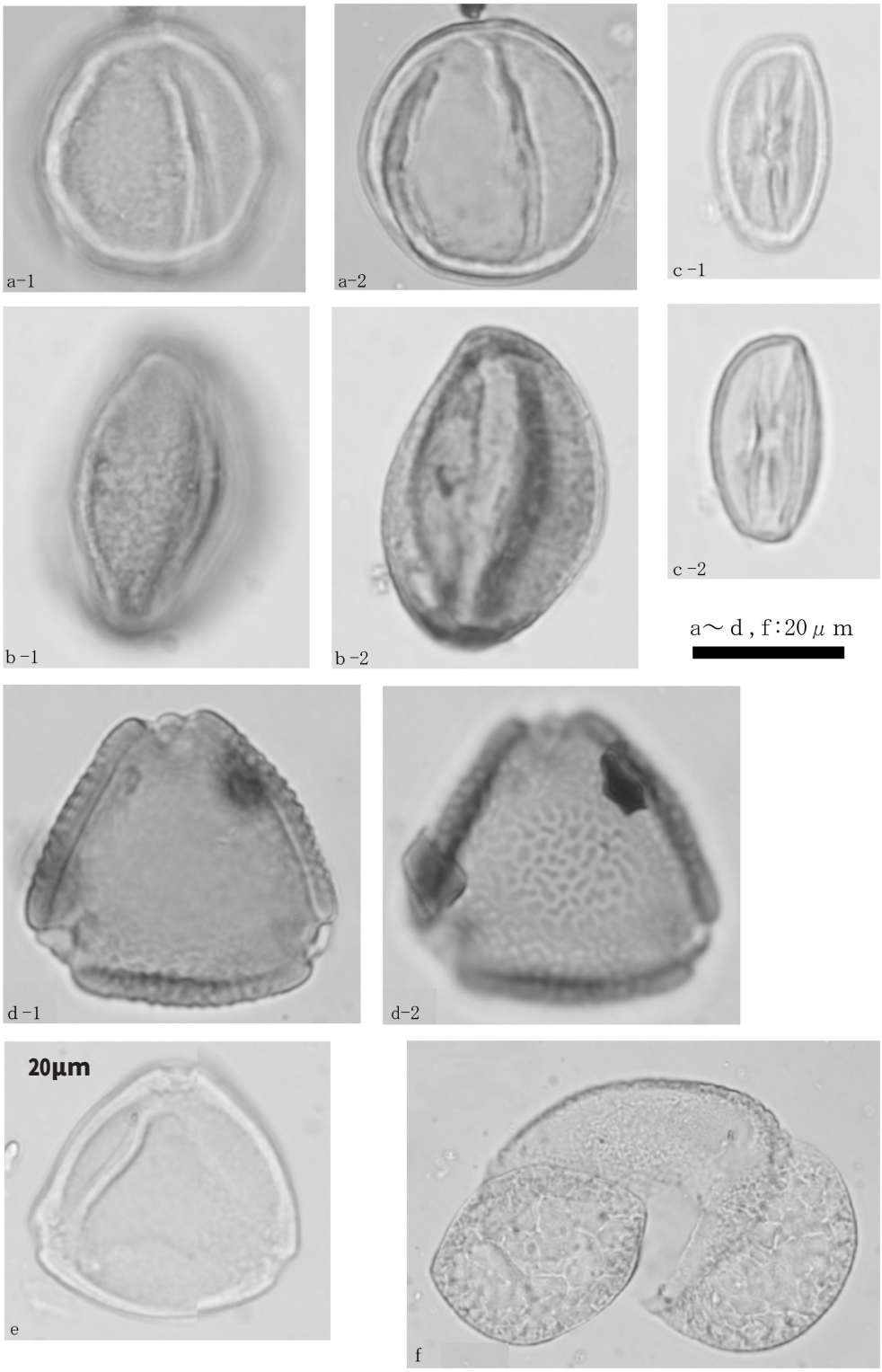


図１　香椎Ａ遺跡における花粉ダイアグラム

(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。)



a. コナラ属アカガシ亜属（PLC.220）
b. コナラ属コナラ亜属（PLC.219）
c. シイノキ属ーマテバシイ属（PLC.222）
d. ノアズキ属（PLC.217）
e. ヤマモモ属（PLC.218）
f. マツ属複維管束亜属（PLC.221）

図版１　香椎Ａ遺跡 SD11(３層)から産出した花粉化石

香椎Ａ遺跡第７次調査Ｖ区の大型植物遺体

佐々木由香・バンダリスダルシャン（パレオ・ラボ）

１．はじめに

香椎 A 遺跡で行われた第7次調査で谷部より採取された土壌試料について、植生変遷や利用植物を検討する目的で、大型植物遺体の検討を行った。以下に、分析の結果および考察を記す。

２．試料と方法

試料は第7次調査 V 区の谷である SD10から採取された試料 No.1～4（1～4層）と SD11から採取された試料 No.5（3層）の計5試料である。各試料の層相については花粉分析の項を参照されたい。堆積物の時期は、試料 No.1が中世（14世紀)、No.2が弥生時代、No.3～5が縄文時代晩期前葉～中葉と考えられている。

大型植物遺体の検討は、堆積物を300cc 採取し、0.5mm 目の篩を用いて水洗した。大型植物遺体の抽出および同定は、実体顕微鏡下で行った。同定された試料は福岡市教育委員会で保管している。

３．同定結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のコナラ属アカガシ亜属（以下アカガシ亜属）果実・未熟果・殻斗とコナラ属－シイノキ属果実（臍)、クスノキ属核、クロモジ属核、マタタビ属種子、サカキ種子、ヒサカキ属種子、キイチゴ属核、カラスザンショウ種子、ブドウ属種子、タラノキ核、エゴノキ属核、ニワトコ核・炭化核の13分類群、草本植物ではイラクサ属果実とタデ属果実、エノキグサ属種子、スミレ属種子、キランソウ属果実、イヌコウジュ属果実、シソ属果実、オミナエシ属果実、ヘラオモダカ種子、オモダカ属種子、ヒルムシロ属核、イバラモ属種子、コキンバイザサ種子、イネ小穂軸、スゲ属 A 果実、スゲ属 B 果実、カヤツリグサ属果実、ホタルイ属果実の18分類群、計31分類群が得られた。このほかに、昆虫遺体が得られた。なお、イネは微細な籾殻も含まれていたが、計数が難しいため、小穂軸のみを計数した。

以下、産出した大型植物遺体を遺構別と時期別に記載する。

[SD10]

3～4層（試料 No.3, 4)：木本植物を主体とする組成で、3層と4層はほぼ同じ組成である。木本植物ではマタタビ属とヒサカキ属、キイチゴ属、ニワトコが多く、タラノキを少量含む。また、多くが破片のため完形個体数は不明だが、アカガシ亜属とクロモジ属、カラスザンショウが目立つ。ほかに、コナラ属－シイノキ属とクスノキ属、サカキ、ブドウ属がわずかに得られた。草本植物ではイラクサ属とタデ属、エノキグサ属、キランソウ属、オミナエシ属、ホタルイ属をわずかに含む。

2層（試料 No.2)：草本植物を主体とする組成で、木本植物ではヒサカキ属がやや多く、キイチゴ属とカラスザンショウ、エゴノキ属、ニワトコがわずかに得られた。草本植物では、スゲ属 A とホタルイ属が多く、オモダカ属とイネを少量含む。タデ属とスミレ属、ヘラオモダカ、イバラモ属、コキンバイザサ、スゲ属 B、カヤツリグサ属をわずかに含む。

1層（試料 No.1)：草本植物を主体とする組成で、木本植物では、マタタビ属とヒサカキ属、タラノキがわずかに得られた。草本植物ではオモダカ属とイバラモ属、ホタルイ属が多く、スゲ属 A を

表１　香椎Ａ遺跡出土の大型植物遺体（括弧は破片を示す）

	試料 No.	1	2	3	4	5
	遺構名	SD10				SD11
	層位	1層	2層	3層	4層	3層
	時期	中世	弥生	縄文晩期前葉～中葉		
分類群	部位/水洗量(cc)	300	300	300	300	300
コナラ属アカガシ亜属	果実			(2)		
	未熟果			3		
	殻斗			3(29)	1	
コナラ属－シイノキ属	果実			(7)		
	臍			6		
クスノキ属	核			(1)		
クロモジ属	核			(18)	(11)	
マタタビ属	種子	1 (1)		36(22)	49(21)	
サカキ	種子			1		
ヒサカキ属	種子	(13)	10(18)	33(13)	11 (5)	3
キイチゴ属	核		2	18 (6)	36(11)	3
カラスザンショウ	種子		(3)	(82)	1 (5)	(1)
ブドウ属	種子			(2)	3(10)	
タラノキ	核	(1)		10 (6)	9 (3)	(1)
エゴノキ属	核		(1)			
ニワトコ	核		1	16(17)	34(45)	(1)
	炭化核				1	
イラクサ属	果実			2		
タデ属	果実	(1)	(5)	(3)		(1)
エノキグサ属	種子			1		
スミレ属	種子	1 (6)	(2)			
キランソウ属	果実			1		
イヌコウジュ属	果実	3				
シソ属	果実	2 (2)				
オミナエシ属	果実				1	
ヘラオモダカ	種子		1			
オモダカ属	種子	25	12			
ヒルムシロ属	核	(1)				
イバラモ属	種子	42(11)	1			1
コキンバイザサ	種子		1			
イネ	小穂軸	(3)	(11)			
スゲ属 A	果実	16(16)	39(8)			
スゲ属 B	果実		1			
カヤツリグサ属	果実	7	6			
ホタルイ属	果実	56(45)	52(63)	1		1(2)
昆虫		+	+	++	+	

+:1-9, ++:10-19

少量含む。タデ属とスミレ属、イヌコウジュ属、シソ属、ヒルムシロ属、イネ、カヤツリグサ属をわずかに含む。

[SD11]

3層（試料 No.5）：全体的に大型植物遺体の産出量が少なく、木本植物のヒサカキ属とキイチゴ属、カラスザンショウ、タラノキ、ニワトコ、草本植物のタデ属とイバラモ属、ホタルイ属がわずかに得られた。

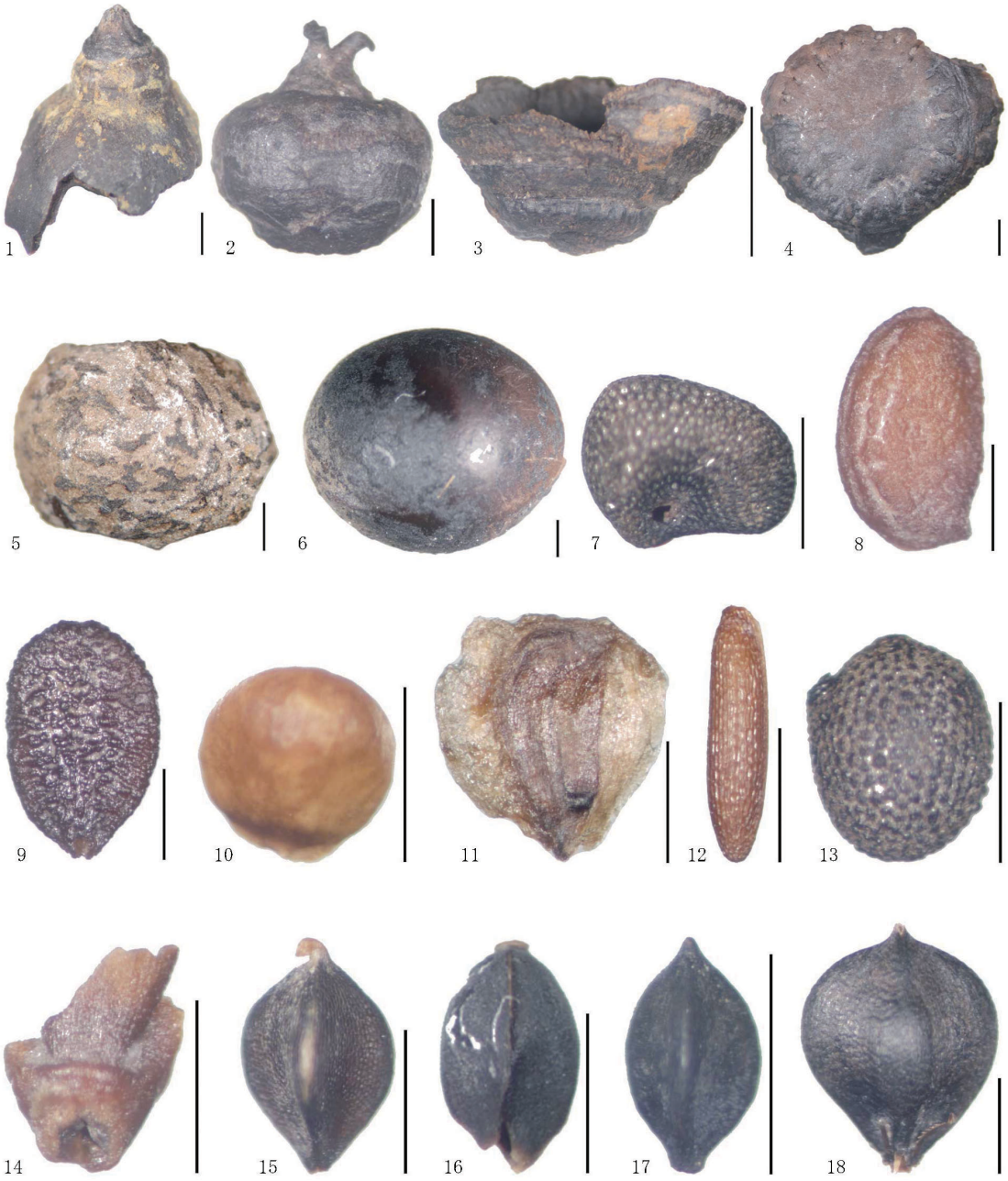
４．考察

縄文時代晩期前葉～中葉と考えられるSD10の4層と3層の堆積時期には、アカガシ亜属やクスノキ属、クロモジ属、ヒサカキ属などで構成される照葉樹林が広がっていたと推定される。プラント・オパール分析ではクマザサ属型のプラント・オパールが検出されており、ササ類（スズタケやミヤコザサなど）が照葉樹林の下草的存在で分布していたとみられる（プラント・オパール分析の項参照)。ただし、カラスザンショウやタラノキ、ニワトコといった明るい陽地を好むパイオニア植物も目立ち、これらの落葉樹は開けた谷筋にモザイク的に生育していたと考えられる。これらの樹木にはつる性植物であるマタタビ属やブドウ属が絡まり、下草には日当りの良い場所を好むキランソウ属やオミナエシ属などの草本植物や、プラント・オパールが産出したネザサ節型やウシクサ族（ススキやチガヤなど）が生育していたと推測される。花粉分析では、4層から3層にかけてアカガシ亜属が増加しているが（花粉分析の項参照)、大型植物遺体では大きな変化はみられず、谷の近くの植生はさほど変わらなかったと考えられる。産出した種実のうち、アカガシ亜属やコナラ属－シイノキ属、マタタビ属、キイチゴ属、ブドウ属、ニワトコは食用可能な種実であるが、この時期に人間が利用した痕跡をもつ種実や栽培植物は産出していない。アカガシ亜属などは利用しない殻斗や未熟果が含まれていることから、谷のごく近くに生育していたと推定される。

弥生時代の2層の堆積時期になると、木本植物は激減し、草本植物が主体となる。抽水植物のオモダカ属やホタルイ属が目立つことから、谷の中の水はほとんど流れがなかったと推定される。この時期には、イネの籾（計数は小穂軸のみ）やイネのプラント・オパールが産出することから（プラント・オパールの項参照)、谷中もしくは周辺で水田が営まれていたと考えられる。谷はカラスザンショウやエゴノキ属の産出から、明るく開けていたと推察され、ヒサカキ属やニワトコのような低木が主体で、下草にはコキンバイザサやスミレ属などが生育していたと推察される。木本植物の種実が谷中に多く堆積するような環境ではなかったと考えられる。

中世（14世紀）の1層は、基本的には2層と同じ組成であるが、2層と比べてオモダカ属やため池などの水草であるイバラモ属が多産し、浮葉植物のヒルムシロ属がみられるなど、谷中はより滞水環境になったと推察される。花粉でもサジオモダカ属やオモダカ属、ヒルムシロ属が産出する（花粉分析の項参照)。プラント・オパールではウシクサ族（ススキやチガヤなど）が多産し、この時期に谷周辺の陽地が拡大したことが推察される。イネも小穂軸とプラント・オパールの双方で得られており、産出した種実の組成をみても、谷を利用して水田が営まれていた可能性が高い。

SD11の3層の時期は縄文晩期前葉～中葉とされている。大型植物遺体はあまり産出していないが、わずかにイバラモ属やホタルイ属が産出し、木本植物も少ないことから、SD10の3，4層とは大きく環境が異なっていたと考えられる。イネのプラント・オパールも検出されており（プラント・オパール分析の項参照)、全体の組成はSD10の2層に近い。時期については堆積物中の試料を用いて年代測定を行うなど、慎重に検討する必要があろう。



スケール 1,2,4-18:1mm,3:5mm

1.コナラ属アカガシ亜属果実（SD10、3層）、2.コナラ属アカガシ亜属未熟果（SD10、3層）、3.コナラ属アカガシ亜属殻斗（SD10、3層）、4.コナラ属－シイノキ属臍（SD10、3層）、5.クスノキ属核（SD10、3層）、6.クロモジ属核（SD10、3層）、7.ヒサカキ属種子（SD10、4層）、8.タラノキ核（SD10、3層）、9.ニワトコ核（SD10、3層）、10.シソ属果実（SD10、1層）、11.オモダカ属種子（SD10、2層）、12.イバラモ属種子（SD10、1層）、13.コキンバイザサ種子（SD10、2層）、14.イネ小穂軸（SD10、1層）、15.スゲ属 A 果実（SD10、1層）、16.スゲ属 B 果実（SD10、2層）、17.カヤツリグサ属果実（SD10、1層）、18.ホタルイ属果実（SD10、1層）

図版１　香椎Ａ遺跡から出土した大型植物遺体

香椎Ａ遺跡第７次調査Ｖ区の植物珪酸体

米　田　恭　子（パレオ・ラボ）

１．はじめに

香椎Ａ遺跡で行われた第7次調査で谷部より採取された土壌試料について、稲作の有無やイネ科植物の植生変遷を検討する目的で、植物珪酸体分析を行った。以下に、分析の結果および考察を記す。

２．試料と方法

試料はＶ区のSD10より採取された試料No.1～4（1～4層）、とSD11より採取された試料No.5（3層）の計5試料である。各試料の層相については花粉分析の項を参照されたい。時期については、試料No.1が中世（14世紀）、No.2が弥生時代、No.3～5が縄文晩期前葉～中葉とみられている。

植物珪酸体分析は上記した5試料について、下記に示した手順にしたがって行なった。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

３．観察の結果

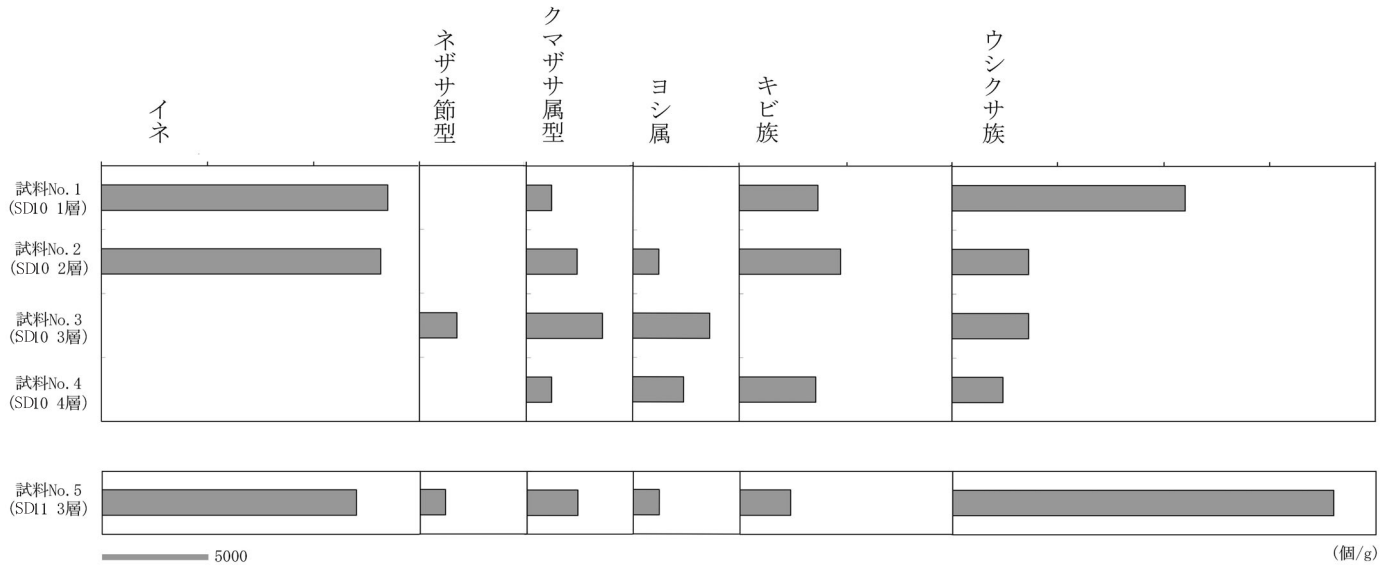
同定・計数された各植物の植物珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料1gあたりの各植物珪酸体個数を求め（表1）、これらの分布を図1に示した。以下に示す各分類群の植物珪酸体数は試料1gあたりの検出個数である。

表１　試料１ｇあたりの植物珪酸体個数

試料№	調査区	遺構	層位	時期	イネ（個/g）	ネザサ節型（個/g）	クマザサ属型（個/g）	ヨシ属（個/g）	キビ族（個/g）	ウシクサ族（個/g）	樹木起源珪酸体（個/g）	不明植物珪酸体（個/g）
1	Ｖ区	SD10	1	中世(14c)	13,500	0	1,200	0	3,700	11,000	39,100	13,500
2			2	弥生	13,200	0	2,400	1,200	4,800	3,600	26,400	16,800
3			3	縄文晩期前葉～中葉	0	1,800	3,600	3,600	0	3,600	134,100	12,500
4			4		0	0	1,200	2,400	3,600	2,400	59,200	3,600
5		SD11	3		12,000	1,200	2,400	1,200	2,400	18,000	26,400	20,400

検鏡の結果、3試料（試料No.1，2，5）からイネの機動細胞珪酸体が検出された。個数的には3試料とも10,000個体を超えて得られた。ウシクサ族は、試料No.5では18,000個体、試料No.1では11,000個体が観察された。その他ネザサ節型、クマザサ属型、ヨシ属、キビ族、不明植物珪酸体が検出された。

また、広葉樹に見られる各種細胞タイプの珪酸体（近藤，2010）が多く観察された。



図版１　香椎Ａ遺跡第７次調査Ｖ区の植物珪酸体分布図

４．稲作について

稲作の有無について遺構ごとにみていくと、SD10では縄文晩期前葉～中葉にあたる4層（試料 No.4）と3層（試料 No.3）からイネの機動細胞珪酸体は検出されなかった。よってこの時期には稲作は行われていなかったとみられる。弥生時代の2層（試料 No.2）と中世（14世紀）の1層（試料 No.1）からは多くのイネの機動細胞珪酸体が検出された。イネについては、機動細胞珪酸体が試料1g あたり5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査成果とがよく対応する結果が得られており（藤原，1984)、稲作の検証に際しては、この5,000個を目安に、さらに機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断がなされている。香椎 A 遺跡では1，2層ともに13,000個体を超えるイネの機動細胞珪酸体が検出されている。同試料を用いて行われた花粉分析結果をみると、イネ科花粉の増加が認められ、オモダカ属などの水田雑草を含む分類群も確認されている(花粉分析の項参照)。こうしたことから少なくとも弥生時代や中世（14世紀）において、水田稲作が行われていた可能性は高いと判断される。

SD11の3層（試料 No.5）については、時期は縄文晩期前葉～中葉とされている。分析を行った結果、上記した稲作の検証の目安を超えるイネの機動細胞珪酸体が検出されており、検出個数からは遺跡周辺で稲作が行われていた可能性が高いと判断される。しかしながら、SD11の3層におけるイネの機動細胞珪酸体の検出結果は、同時期とされる SD10の3，4層とは全く異なる結果を表しており、むしろ SD10の1，2層に近い検出個数を示している。また、イネの機動細胞珪酸体のみならず、樹木起源珪酸体やウシクサ族の検出状況も、SD10の1，2層に類似している。また同試料を用いて行われた花粉分析においても、SD11の3層の古植生が SD10の1，2層の古植生に類似していることが指摘されている（花粉分析の項参照)。このように、SD11の3層（試料 No.5）においては、時期とともに香椎 A 遺跡における縄文時代晩期の稲作の可能性について慎重な検討が必要と思われる。

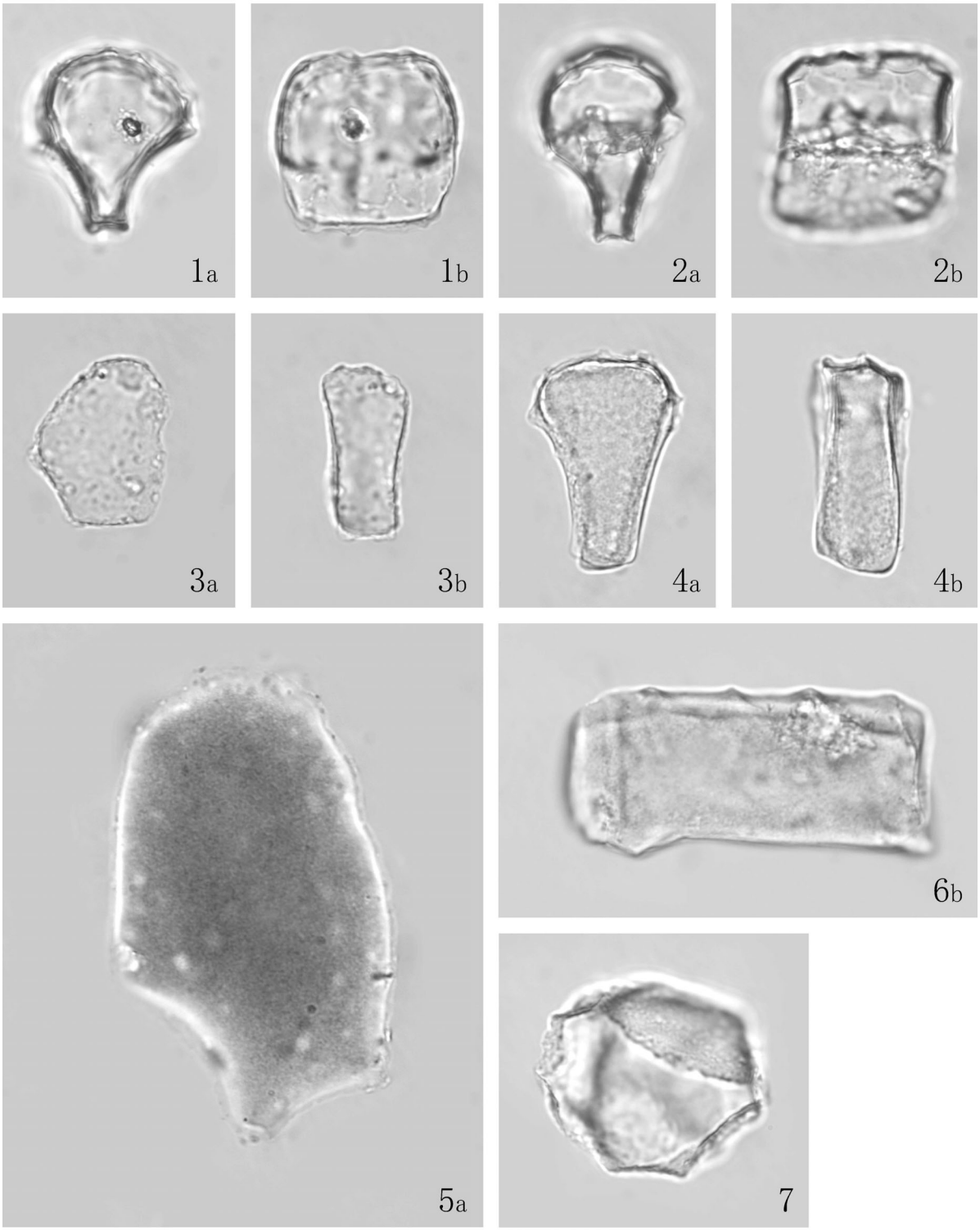
５．イネ科植物の植生変遷

縄文晩期前葉～中葉のSD10の3，4層から、樹木起源の珪酸体が非常に多く検出された。同試料を用いて行われた花粉分析においては、アカガシ亜属やシイノキ属を中心とした照葉樹が鬱蒼と茂る森林が遺跡周辺に広がっていたと推測されている。特に3層からは樹木花粉が多く検出されており（花粉分析の項参照)、本分析でSD10の3層から樹木起源の珪酸体が多く検出されたのは、こうした環境を反映していると思われる。また、谷周辺ではクマザサ属型のササ類（スズタケ，ミヤコザサなど）が森林の下草的存在で分布を広げていったとみられる。3層ではネザサ節型のササ類（ケネザサやゴキダケなど)、4層から3層にかけてやや増加してウシクサ族（ススキやチガヤなど）が検出されており、谷周辺の森林の林縁部など日のあたる開けた場所に、これら植物が生育していたと推測される。4層で検出されたキビ族については栽培植物（アワやヒエ、キビなど）と雑草類（イヌビエやエノコログサなど）との区別が難しく、今回の分析で観察されたキビ族が栽培植物かどうかは不明だが、ここではネザサ節型のササ類やウシクサ族と同様に日のあたる開けたところに生育する雑草類ではないかと思われる。またヨシ、ツルヨシといったヨシ属については、湿地化した場所で生育していたと推察される。

弥生時代や中世には、遺跡周辺において水田稲作が行われていたと推測される。この水田稲作に伴って遺跡周辺の照葉樹林は切り開かれたとみられ、樹木起源の珪酸体の検出が大幅に減少したことはこうしたことを反映しているのではないかと思われる。この結果、縄文時代晩期前葉～中葉に比べて日当たりが良くなり、特に中世にはススキやチガヤなどのウシクサ族がより分布を拡大したものと推察される。なお、この時期のキビ族については水田稲作に伴う雑草類（タイヌビエなど）ではないかと思われる。

引用文献

近藤錬三（2010）プラント・オパール図譜，167p. 北海道大学出版会.
藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－．考古学ジャーナル，227，2-7.



1・2：イネ（1：試料 No.2、2：試料 No.5）、3：クマザサ属型（試料 No.4）、4：ウシクサ族（試料 No.4）、5：ヨシ属（試料 No.3）、6：キビ族（試料 No.2）、7：広葉樹起源珪酸体（試料 No.2）
a：断面、b：側面

図１　香椎Ａ遺跡第７次調査Ｖ区の植物珪酸体

香椎Ａ遺跡出土土器胎土中の炭化種実同定

佐々木由香・バンダリ　スダルシャン（パレオ・ラボ）

１．はじめに

福岡県福岡市東区に位置する香椎Ａ遺跡では、縄文時代晩期の土器種実圧痕が多数検出されている。ほとんどの種実は土器焼成時に失われ圧痕のみが残存していたが、1点の土器胎土中には、種実が炭化して残存していた。ここでは、この炭化種実を同定した。

２．試料と方法

試料は、縄文時代晩期（岩田4類）の深鉢胴部内面の胎土中に入っていた炭化種実1点である。炭化種実は別項で報告されている土器圧痕探索中に見いだされ、胎土中より取り出されたものである。炭化種実の同定は、実体顕微鏡下で行った。同定された試料は福岡市教育委員会で保管されている。

３．結果

同定の結果、木本植物のクロモジ属炭化核と同定された。大きさはクロモジに近いが、ヤマコウバシやヒメクロモジと大きさの区別がつかないため、クロモジ属とした。現状では核が割れており、内部の果実が確認できた。以下に記載と図版に写真を示し、同定の根拠とする。図版には当社所蔵の現生のクロモジ核も併せて掲載した（標本番号：Twtw-25447、長さ6.2mm、幅5.5mm）。

（1）クロモジ属　*Lindera* spp.　炭化核　クスノキ科

球形。表面は平滑。断面の柵状構造は屈曲しない。径5.5mm。内部の果実は長さ4.7mm、幅4.9mm。

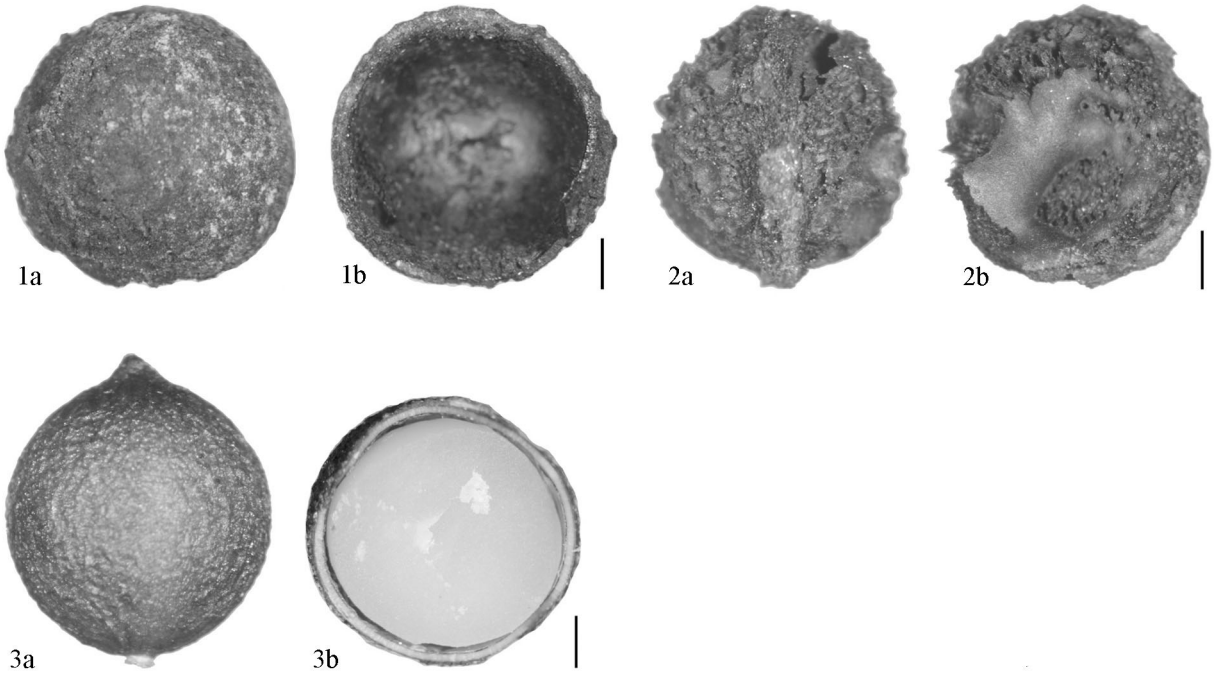
４．考察

通常、土器焼成前に粘土中に含まれていた種実は焼成中に灰となり、圧痕のみが残存する。しかし、本試料のように、燃焼温度が低かった場合、まれに炭化種実として胎土中に残存する場合がある。クロモジ属は土器製作時に偶発的に入ったか、意図的に入れられたと考えられる。あるいは、粘土が有機質粘土ならば、粘土中に元々入っており、それが残存した可能性もある。その場合、種実の年代は粘土が生成された年代となる。

クロモジはクスノキ科の落葉低木で、九州では低山や疎林の斜面に分布する。果実は食用としないが、民俗例では油を採るために利用された。果実は10月頃に熟すため、土器製作時にその年に熟した果実が入ったならば、土器は秋頃に製作された可能性がある。

謝辞

本報告は、平成20～23年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）「レプリカ・セム法による極東地域先史時代の植物栽培化過程の実証的研究」（研究代表者：小畑弘己）の研究成果の一部である。同定にあたり、福岡市教育委員会山崎純男氏、千葉大学園芸研究科百原新氏にお世話になった。記して感謝したい。



スケール1-3:1mm

1.クロモジ近似種炭化核、2.クロモジ近似種炭化種子、3.クロモジ核（現生、TWtw-25447）

図版１　香椎Ａ遺跡出土土器内から出土した炭化種実

香椎Ａ遺跡の圧痕資料

１．はじめに

香椎Ａ遺跡出土の縄文土器について、圧痕の悉皆調査を実施した。縄文土器の量は整理箱60箱におよぶ。圧痕を確認したのは次節に記した78点である。このほか土器の胎土中には堅果類の果皮・貝殻片が混入されていて、その圧痕がほとんどの土器に認められるが、これらについては、堅果類は形がわかるもの、貝殻については微小貝のみを圧痕として取り上げた。

２．圧痕資料

1	ドングリ類	深鉢形土器、底部、外底部に圧痕4点、	Ⅴ区 SD-11 3層
2	ドングリ類	深鉢形土器、底部、底部断面	Ⅴ区 SD-11 3層
3	シソ科	深鉢形土器、口縁部、外面・口唇部各1点	Ⅴ区 SD-11
4	イネ科	浅鉢形土器、頚部内面	Ⅴ区 SD-11
5	ダイズ？	深鉢形土器、底部、胴部内面1点	Ⅴ区 SD-11 3層
6	コクゾウムシ	浅鉢形土器、胴部、外面	Ⅴ区 SD-10 3層
7	コクゾウムシ	深鉢形土器、胴部、内面2点	Ⅴ区 SD-10 3層
8	？	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅴ区 SD-10 3層
9	微小貝	深鉢形土器、胴部屈曲部、内面	Ⅴ区 SD-10 3層
10	シソ科	浅鉢形土器、口唇部、内面	Ⅴ区 SD-11 3層
11	シソ科	浅鉢形土器、胴部、上半断面	Ⅴ区 SD-11 3層
12	昆虫の幼虫？	深鉢形土器、口縁部、内面	Ⅴ区 SD-10 4層
13	微小貝	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅴ区 SD-11 3層
14	？	浅鉢形土器、胴部、断面	Ⅴ区 SD-10 3層
15	ミズキ核	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅴ区 SD-10 3層
16	？	浅鉢形土器、口縁部、内面	Ⅴ区 SD-10 3層
17	シソ科	深鉢形土器、胴部、内面　3点	Ⅴ区 SD-11 下層
18	ドングリ類	深鉢形土器、外底部	Ⅴ区 SD-11 下層
19	微小貝	深鉢形土器、口縁部、内面	Ⅴ区 SD-10 3層
20	？	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅴ区 SD-10 3層
21	モミ（多数）	深鉢形土器、胴部、内外面　弥生土器？	Ⅴ区 SD-10 3層
22	シソ科？	深鉢形土器、外底部、3点	Ⅴ区 SD-10 3層
23	ドングリ類	深鉢形土器、外底部、	Ⅴ区 SD-11 下層
24	ダイズ（臍）	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅴ区 SD-10 下層
25	不明種？	深鉢形土器、胴部、外面	Ⅰ区 SD-01 下層
26	ドングリ類	深鉢形土器、外底部、4点	Ⅰ区 SD-01 下層
27	？	浅鉢形土器、口縁部、内面	Ⅲ区 SD-10 下層
28	？	浅鉢形土器、頚部、内面	Ⅲ区 SD-10 下層
29	木の芽？	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅲ区 SD-10 下層
30	シソ科？	深鉢形土器、胴部、外面	Ⅲ区 SD-10 下層

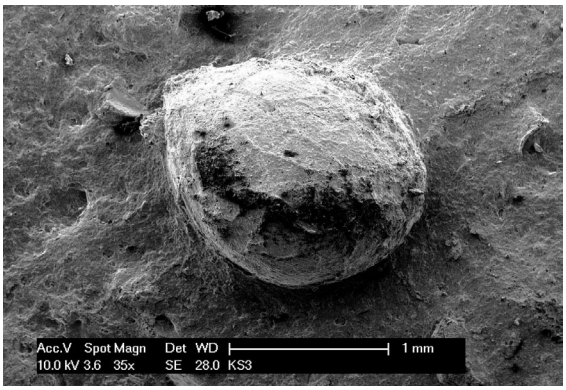
31	ドングリ類	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅲ区 SD-10 下層
32	?	浅鉢形土器、胴部、内・断面、各1	Ⅲ区 SD-10 下層
33	?	浅鉢形土器、胴部、内面	Ⅰ区 SD-01
34	?	深鉢形土器、胴部、外面	Ⅰ区 SD-01
35	?	浅鉢形土器、胴部、外面	Ⅰ区 SD-01
36	?	深鉢形土器、胴部、外面	Ⅰ区 SD-01
37	?	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅰ区 SD-01
38	?	深鉢形土器、口縁部、内外面各1	Ⅲ区 SD-10 下層
39	クロモジ属	深鉢形土器、口縁部、内面	Ⅲ区 SD-10 下層
40	?	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅲ区 SD-10 下層
41	ミズキ核	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅲ区 SD-10 下層
42	?	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅲ区 SD-10 下層
43	?	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅲ区 SD-10 下層
44	?	浅鉢形土器、胴部、外面	Ⅲ区 SD-10 下層
45	ドングリ類	深鉢形土器、外底部、多数	Ⅰ区 SD-01 下層
46	ドングリ類	深鉢形土器、外底部、多数	Ⅰ区 SD-01 下層
47	?	深鉢形土器、底部、内面	Ⅲ区 SD-11 下層
48	?	深鉢形土器、口縁部、内面	Ⅲ区 SD-11 下層
49	ドングリ類	深鉢形土器、外底部、2点	Ⅲ区 SD-11 下層
50	?	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅴ区 SD-10 3層
51	ミズキ核	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅴ区 SD-10 3層
52	?	深鉢形土器、胴部、外面	Ⅴ区 SD-10 3層
53	?	深鉢形土器、口縁部、内面	Ⅴ区 SD-10 3層
54	タデ科	浅鉢形土器、胴部、内面	Ⅲ区 SD-11 下層
55	?	浅鉢形土器、頚部、外面	Ⅲ区 SD-11 下層
56	?	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅲ区 SD-11 下層
57	ダイズ	深鉢形土器、外底部	Ⅲ区 SD-11
58	?	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅲ区 SD-11
59	?	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅲ区 SD-11
60	?	浅鉢形土器、胴部、内面	Ⅲ区 SD-10 下層
61	?	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅲ区 SD-10 下層
62	ドングリ類	深鉢形土器、外底部	Ⅲ区 SD-11
63	?	深鉢形土器、胴部、外面	Ⅲ区 SD-11
64	?	深鉢形土器、胴部、外面	Ⅲ区 SD-11
65	ドングリ類	深鉢形土器、外底部	Ⅲ区 SD-11
66	?	浅鉢形土器、胴部、外面	Ⅲ区 SD-10 下層
67	ドングリ類	浅鉢形土器、胴部、外面	Ⅲ区 SD-11 下層
68	ヌスビトハギ	深鉢形土器、胴部、外面	Ⅰ区 SD-01 下層
69	?	深鉢形土器、胴部、外面	Ⅰ区 SD-01 下層
70	?	深鉢形土器、胴部、外面	Ⅰ区 SD-01 下層

71	？	深鉢形土器、胴部、外面	Ⅰ区 SD-01 下層
72	？	深鉢形土器、口縁部、内面	Ⅴ区 SD-10 3層
73	？	浅鉢形土器、口縁部、内面	Ⅴ区 SD-10 3層
74	？	深鉢形土器、胴部、外面	Ⅲ区 SD-11 下層
75	ドングリ類	深鉢形土器、口縁部、外面	Ⅲ区 SD-11 下層
76	ドングリ類	深鉢形土器、口縁部、外面	Ⅲ区 SD-11 下層
77	？	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅲ区 SD-10 下層
78	シソ科ほか	深鉢形土器、胴部、内面	Ⅳ区

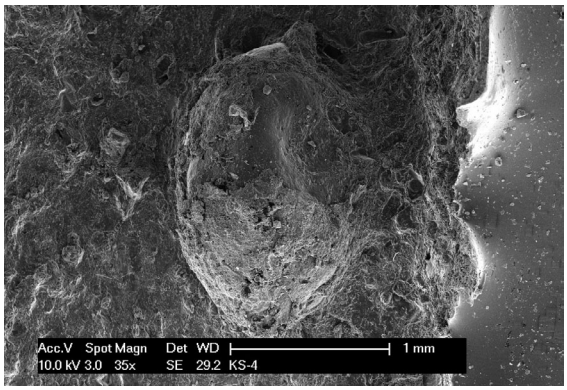
３．主要な圧痕について

２はシソ科の分果である。SEM 写真は第１図１に示した。大型の網目文様が明瞭に確認できる。4はタデ科植物の種子とみられる。１mm より若干大きい。第１図２に SEM 写真を示した。６はコクゾウムシであるが半欠した資料である。SEM 写真は第１図３に示した。７はコクゾウムシの圧痕である。同一の土器に近接して２匹が向かい合っている。横倒しにあっているのをコクゾウムシ①、正位にあるものをコクゾウムシ②とする。①は第１図４に示した。吻と足を欠損しているが、吻はレプリカに反映していないと考えられる。全体に点刻列が明瞭に残っている。②は第１図５に示した。吻の先端と足を欠損している。全体に点刻列が明瞭に残っている。第１図６に実体顕微鏡による２匹の全体図を示した。９は微小貝である。腹足綱の陸産の微小貝と考えられる。SEM 写真は第1図７に示した。10はシソ科の種子である。部分的に大型の網目文様が確認できる。SEM 写真は第1図8に示した。11もシソ科の分果と考えられる。大型の網目文様が確認できる。SEM 写真は第2図9に示した。13は微小貝である。殻頂部を欠損している。腹足綱の海産の微小貝と考えられる。SEM 写真は第2図10に示した。15はミズキ核である。SEM 写真は第2図11に示した。17はシソ科の種子である。大型の網目文様は明確である。基部の着装部は円形をなす。21はモミガラの圧痕である。顆粒状突起列が明瞭に残っている。この土器には多量のモミガラを混入していて、土器の表面には無数のモミ圧痕がある。層位的には縄文時代の層からの出土であるが、胴部破片のため器形が不明であり土器自体の時期は決め難い。ただし、土器の胎土、焼成、色調は同層から出土した縄文土器とは大きく異なる。上層から混入した弥生土器と考えられる。SEM 写真は第2図13に示した。24はダイズの臍の圧痕である。第2図14に示した。25は種子圧痕であるのは間違いないが、種不明。大型の網目状の浅いくぼみがある。SEM 写真は第2図15に示した。29は木の芽と考えられる圧痕である。芽の先端部分が幾重にも重なっているのが確認できる。SEM 写真は第2図16に示した。

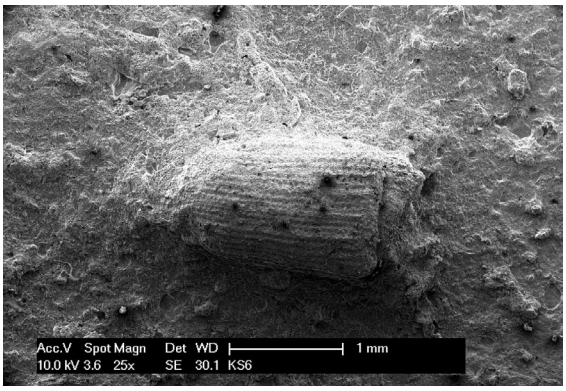
39は胎土中に種実が炭化物として遺存していた。炭化種実を取りだしたあとの圧痕は良好な状態で残っている。別稿で述べるように炭化種実はクロモジ属炭化核と同定されている。全形がわからないので第3図17に実体顕微鏡写真を示した。54はタデ科の瘦果と考えられる。扁平である。SEM 写真は第3図18に示した。57はダイズの圧痕である。第3図19に示した。SEM 写真はダイズの臍の拡大である。全形は第3図20に実体顕微鏡写真を示した。68はヌスビトハギの圧痕である。ほぼ全形を残している。SEM 写真は第3図21に示した。78はシソ科の分果である。表面に大型の網目文様がある。SEM 写真は第3図22に示した。



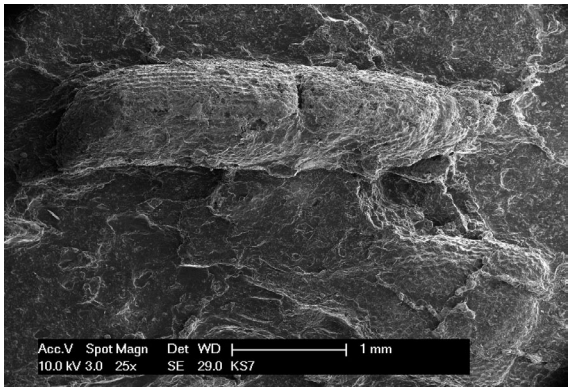
1. シソ科（圧痕2）



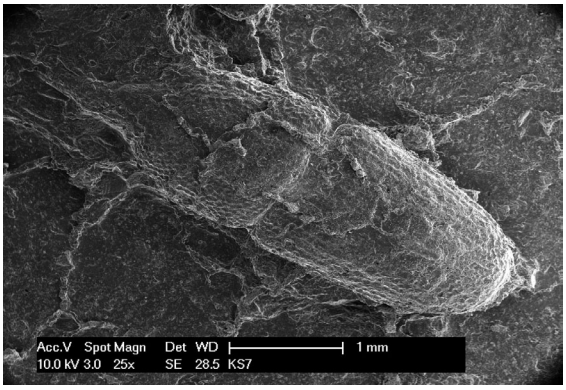
2. タデ科（圧痕4）



3. コクゾウムシ（圧痕6）

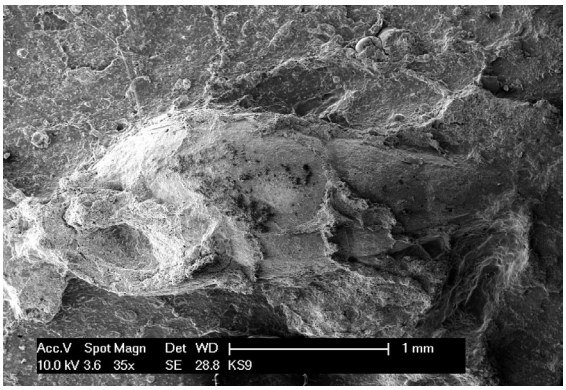


4. コクゾウムシ①（圧痕7）

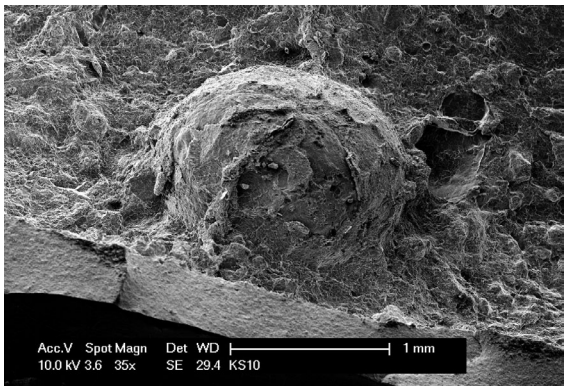


5. コクゾウムシ②（圧痕7）

6. コクゾウムシ①②（圧痕7）

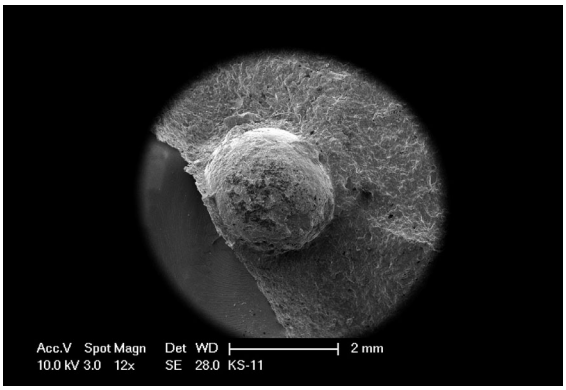


7. 微小貝（圧痕9）

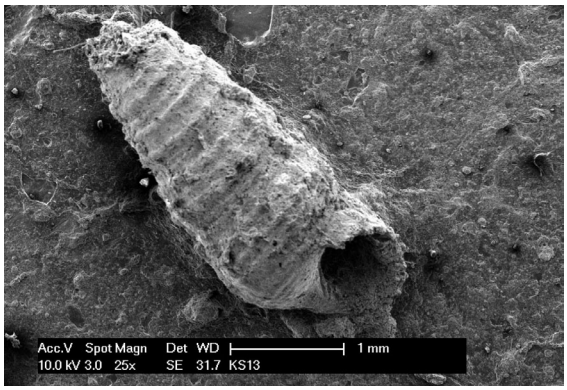


8. シソ科（圧痕10）

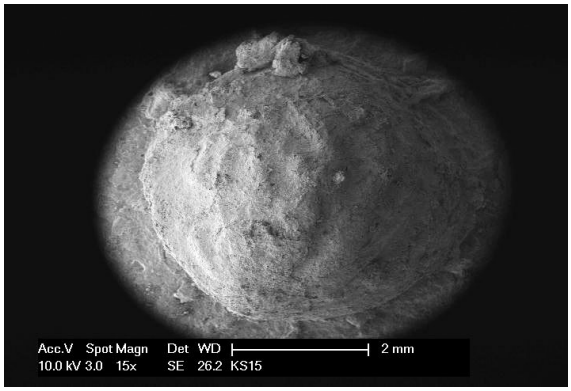
第1図　SEM **写真** I



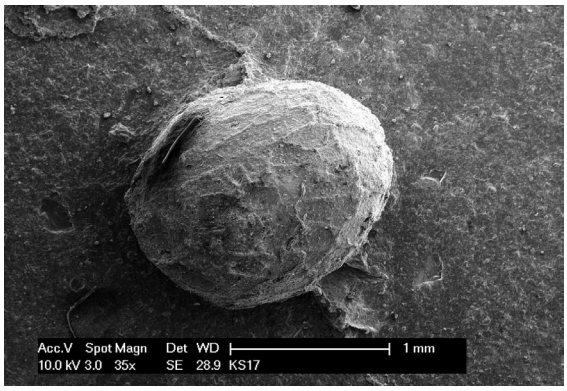
9. シソ科（圧痕11）



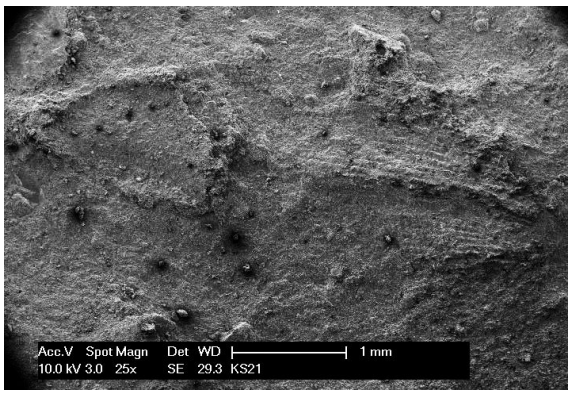
10. 微小貝（圧痕13）



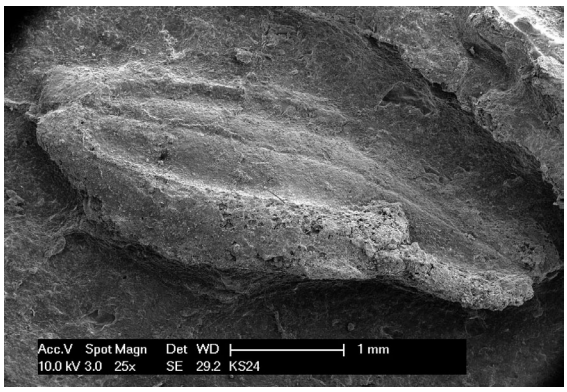
11. ミズキ核（圧痕15）



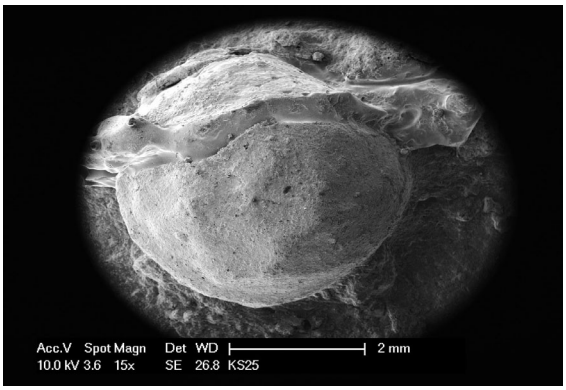
12. シソ科（圧痕17）



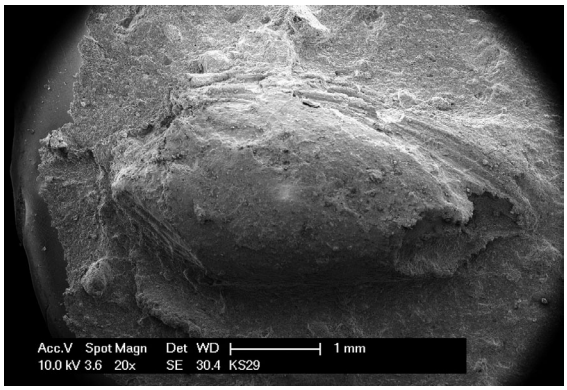
13. モミ（圧痕21）



14. ダイズ臍（圧痕24）

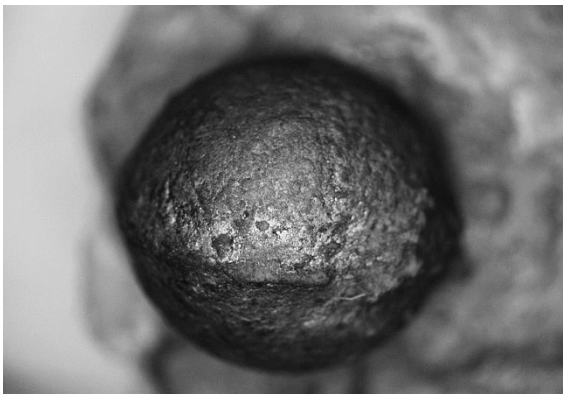


15. 種不明（圧痕25）

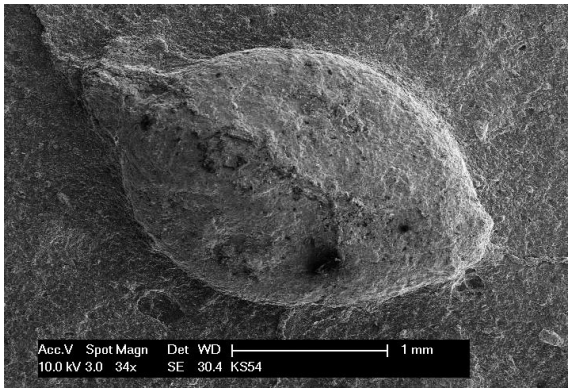


16. 木の芽（圧痕29）

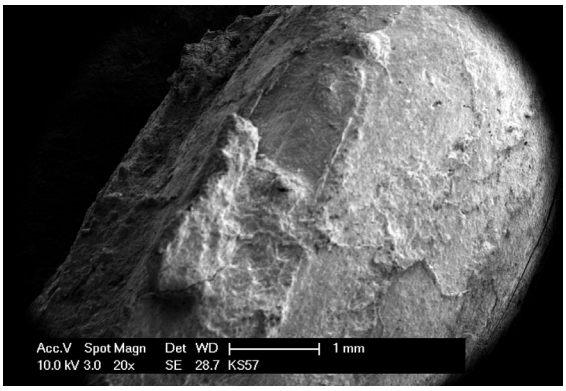
第2図　SEM **写真Ⅱ**



17. クロモジ属（圧痕39）

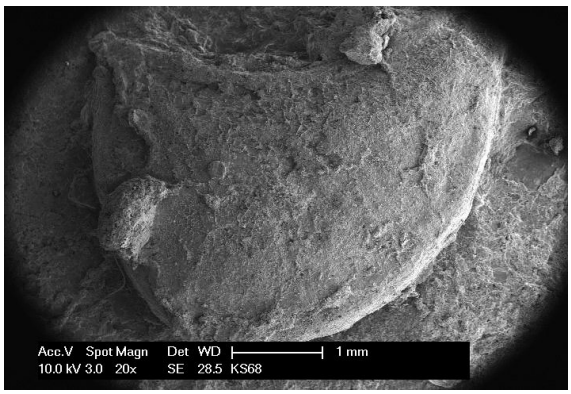


18. タデ科（圧痕54）

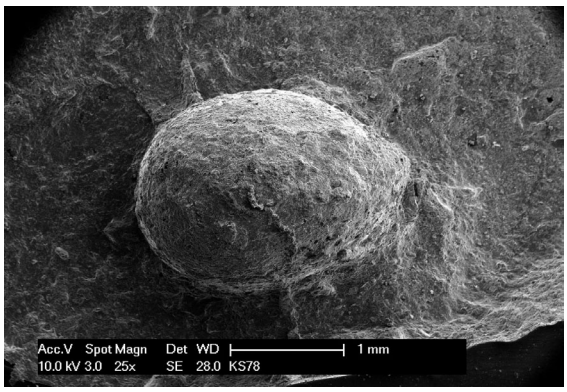


19. ダイズ臍（圧痕57）

20. ダイズ全形（圧痕57）



21. ヌスビトハギ（圧痕68）



22. シソ科（圧痕78）

第3図　SEM **写真Ⅲ**

４．若干のまとめ

以上が香椎Ａ遺跡の圧痕の概要である。代表的な圧痕の SEM 写真を示した。現在、SEM で精査中であるので、詳細な報告は別稿に譲ることにする。ここでは、注意した点を列記し、まとめに変える。

１、イネ、ダイズ、シソ科等の栽培植物が含まれる。イネは弥生土器に見られ、他は縄文土器の圧痕である。２、圧痕には現物が炭化物として遺存した例が２例存在する。３、ヌスビトハギ等のひっつきむしの圧痕が存在する。４、ドングリ類の圧痕は多いが今回は省略した。

図版１

香椎地区空中写真 1948/01/09，高度2438m より米軍撮影（撮影縮尺 1：15958）

図版２

1　香椎Ａ遺跡第６次調査　Ⅰ区全景（南西から）

2　香椎Ａ遺跡第６次調査　Ⅰ区全景（北から）

1　SD02（南から）

2　SX03（北東から）

図版４

1　香椎Ａ遺跡第６次調査　Ⅰ・Ⅱ区全景（南西から）

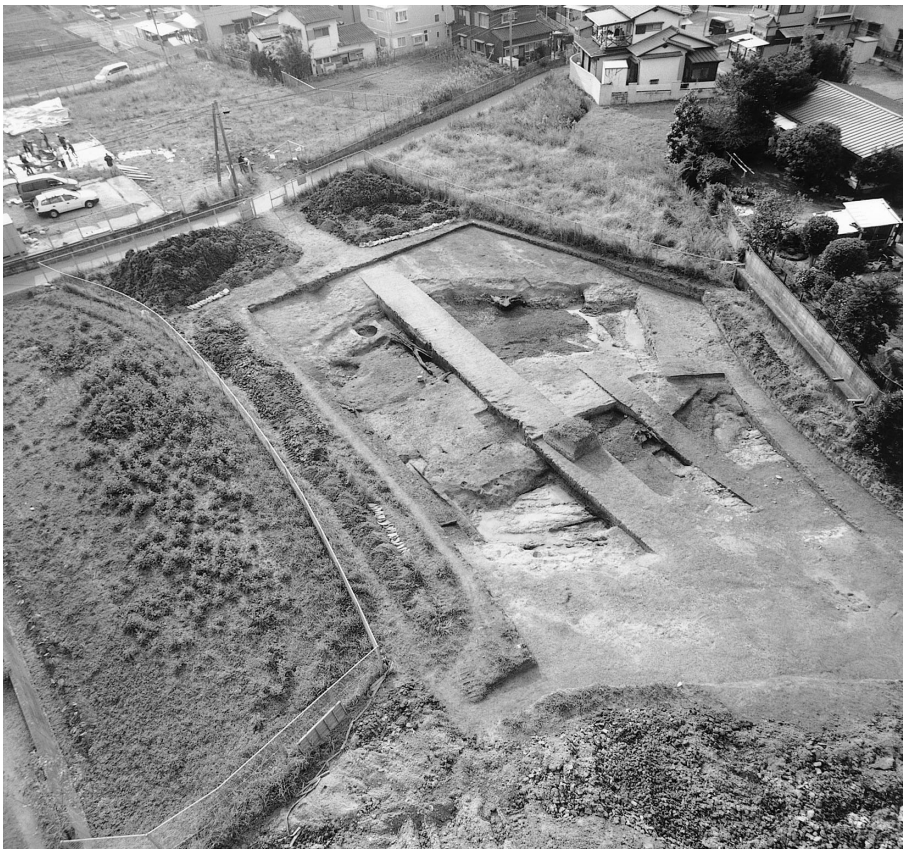
2　香椎Ａ遺跡第６次調査　Ⅱ区全景（北東から）

1　杭列１(西から)

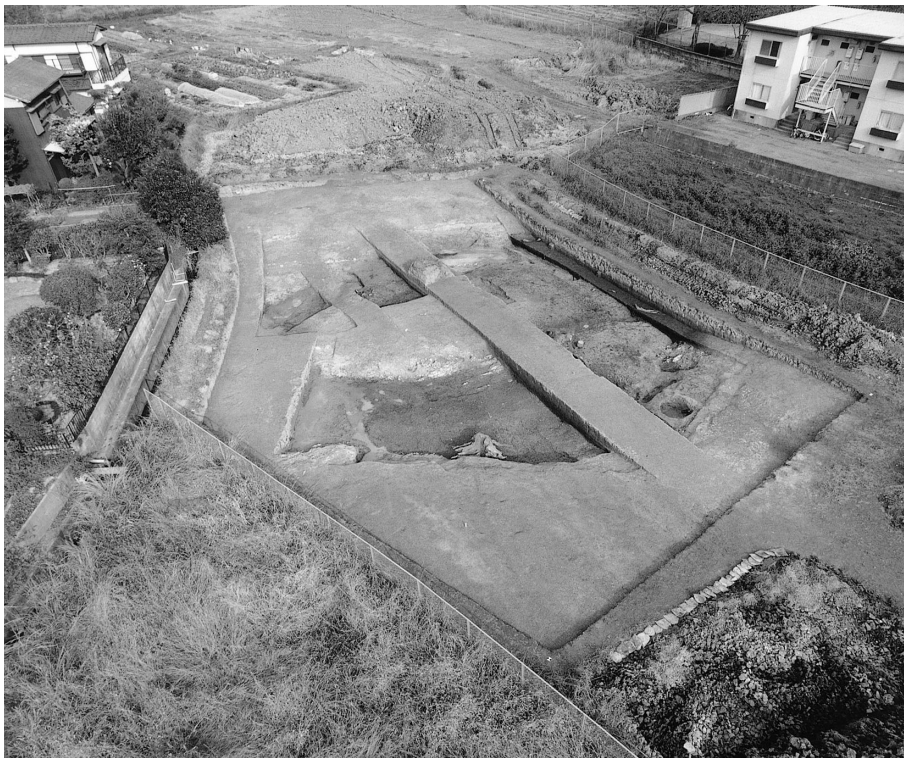
2　杭列３(北から)

図版６

1　香椎Ａ遺跡第６次調査 Ⅲ区全景（南東から）



2　香椎Ａ遺跡第６次調査 Ⅲ区全景（北東から）

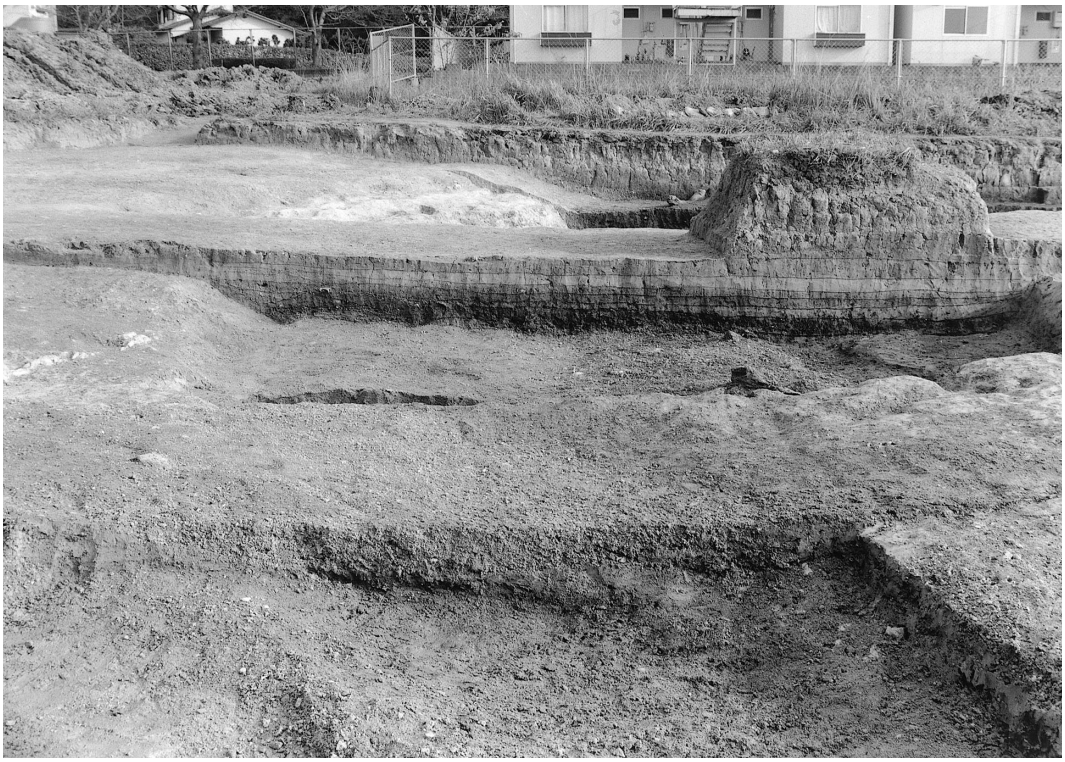


1　香椎Ａ遺跡第６次調査 Ⅲ区全景（南西から）

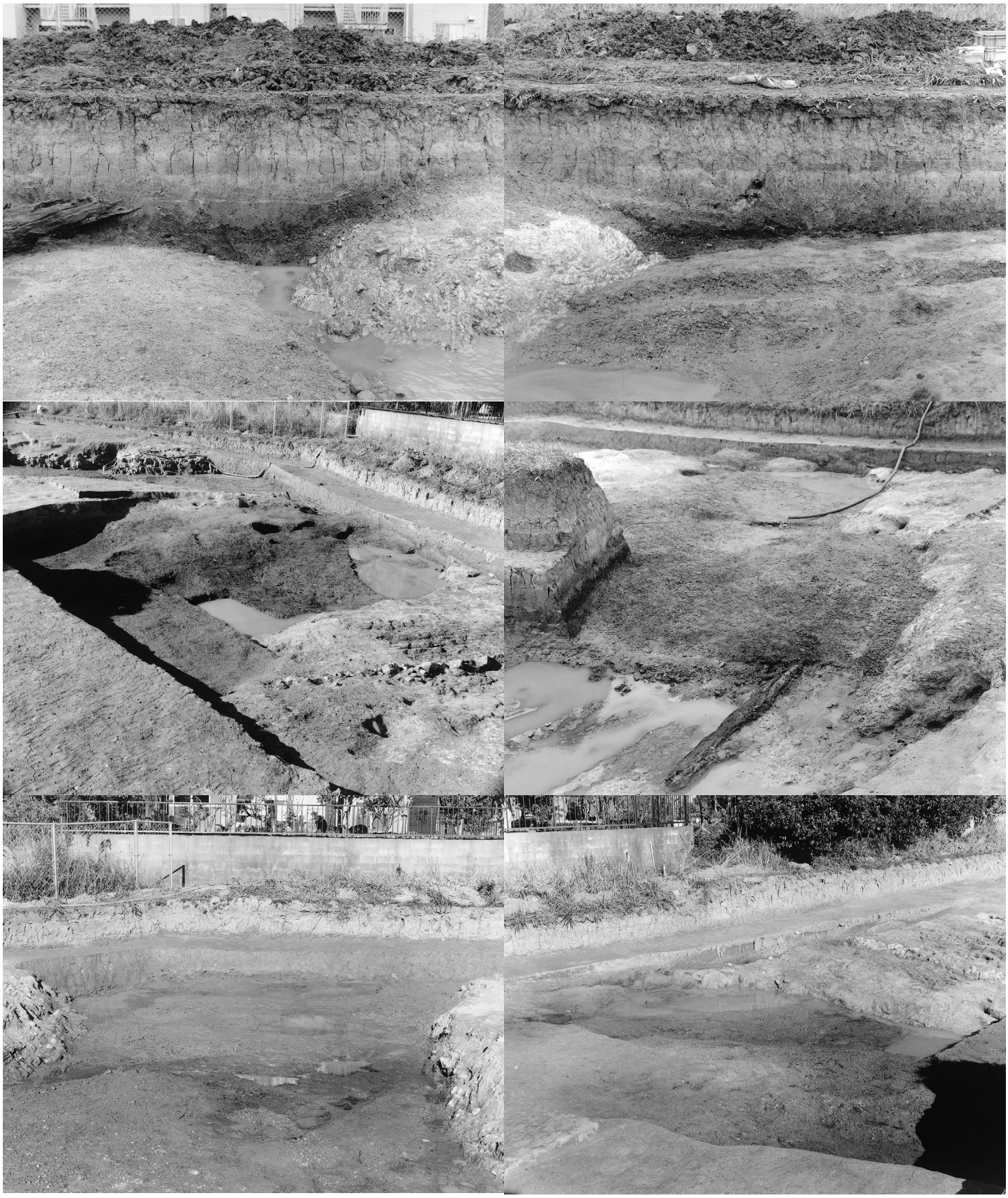
2　香椎Ａ遺跡第６次調査 Ⅲ区全景（上空から）

図版８

1　SD**10土層（北西から）**



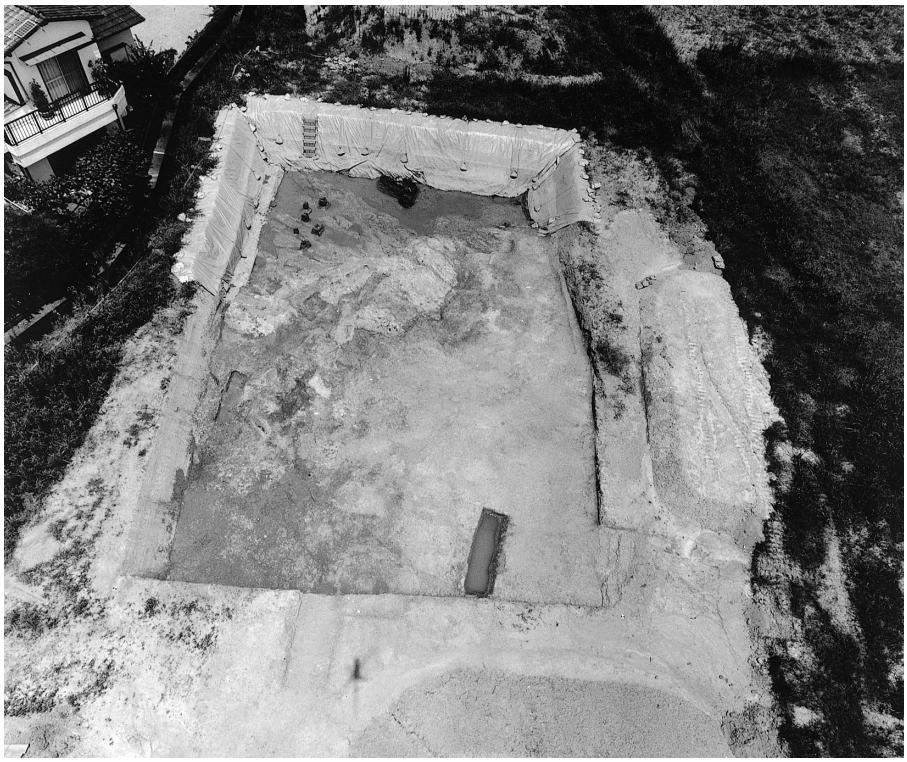
2　SD**11土層（北西から）**



1　SD10南東壁面土層（北西から）
2　SD10南東壁面土層（北西から）
3　SD11東半部（北東から）
4　SD11土層観察畦取払い（南東から）
5　SD10北西壁面土層（南東から）
6　SD11北西壁面土層（南東から）

図版10

1　SD10下層土器2出土状況
2　SD11下層土器1出土状況
3　SD11下層土器1出土状況
4　SK12（北から）
5　SD14（南から）
6　SD13（南西から）



1　香椎Ａ遺跡第７次調査 Ⅳ区全景（南西から）

2　香椎Ａ遺跡第７次調査 Ⅳ区西壁土層（東から）

図版12

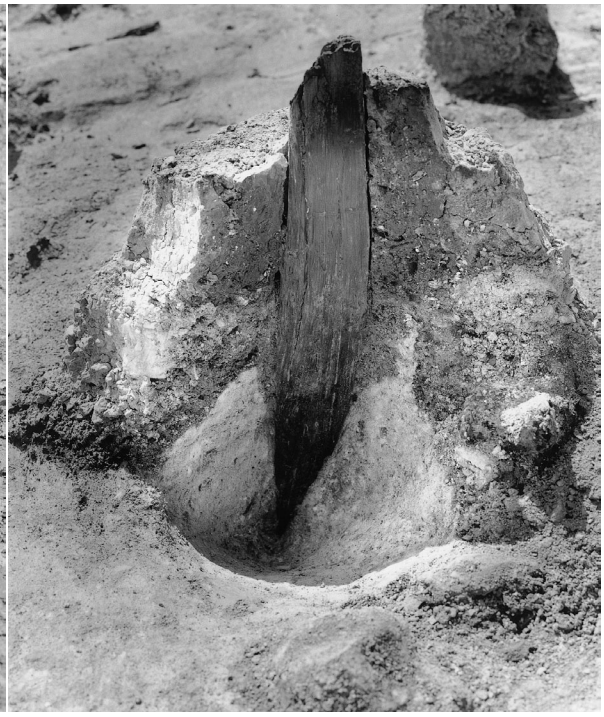
1　香椎Ａ遺跡第７次調査 Ⅳ区全景（上空から）

2　SD21土器出土状況（北東から）

3　SD21（北東から）

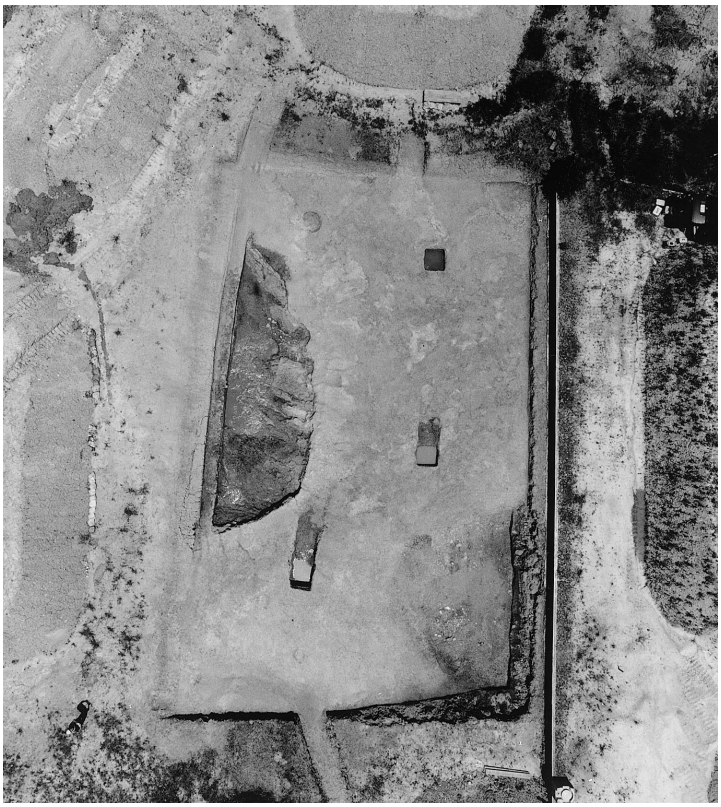
1　杭列４(南東から)

2　杭列５　RW01（北西から）



3　杭列５　RW02（西から）

図版14



1　香椎Ａ遺跡第７次調査　Ｖ区全景（上空から）

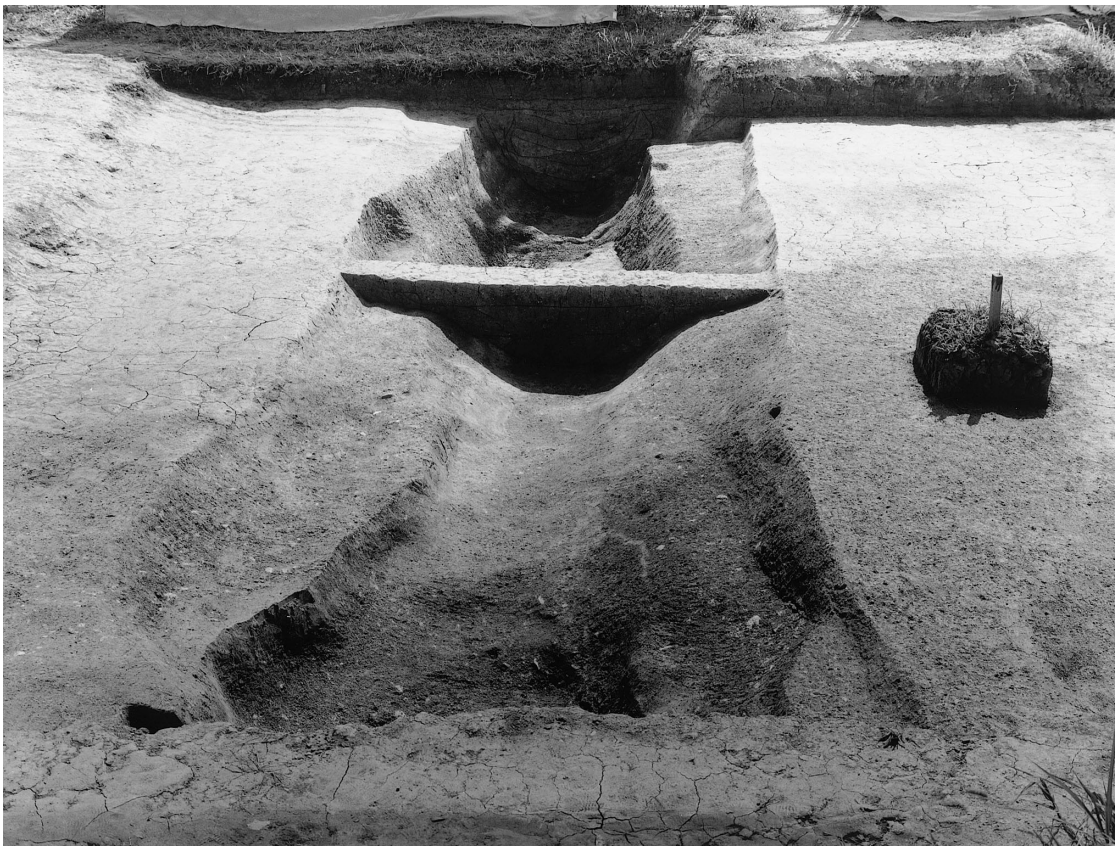
2　香椎Ａ遺跡第７次調査　Ｖ区西壁土層（北東から）

1　SD11下層２群（北東から）
2　SD10下層１群（西から）
3　SD11下層１群（北東から）
4　SD11下層４群（北西から）
5　SD11下層３群（西から）
6　SD10下層２群（北東から）

図版16

1　香椎Ａ遺跡第７次調査 Ⅵ区全景（東から）

2　香椎Ａ遺跡第７次調査 Ⅵ区全景（南から）



1　SD36（北東から）

2　SD36南壁土層（南東から）

図版18

1　香椎Ａ遺跡第７次調査 Ⅶ区北側（南東から）

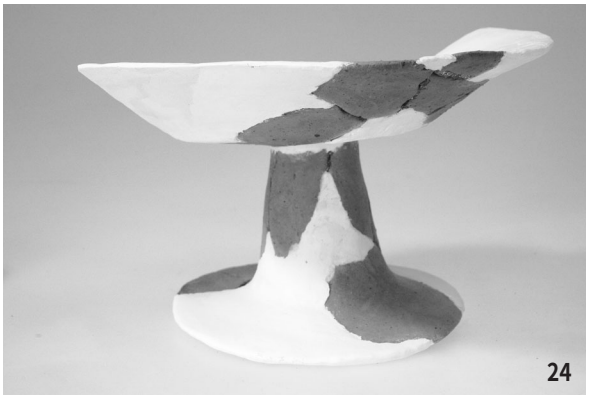
2　細型銅矛出土状況（北東から）

1　香椎Ａ遺跡第７次調査 Ⅶ区南側（南東から）

2　SD38（南東から）

図版20 第６次調査

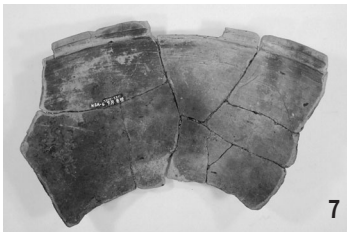
SD**01・02出土土器**

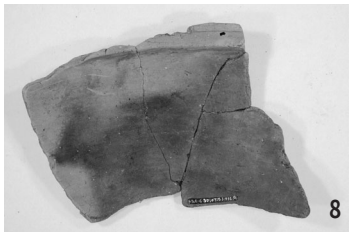


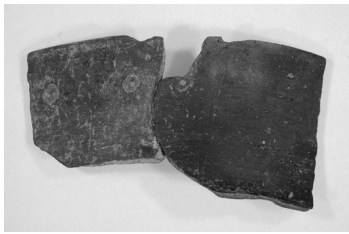
SD02出土土器

図版22

SD02・05・SK03出土土器

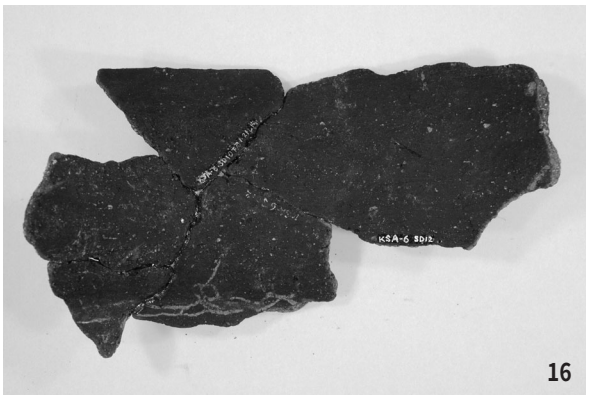


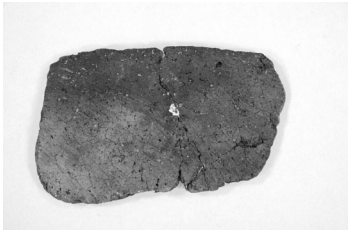


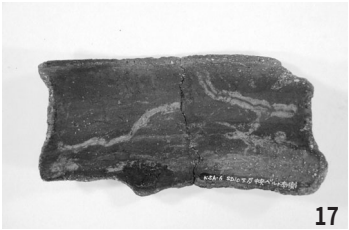


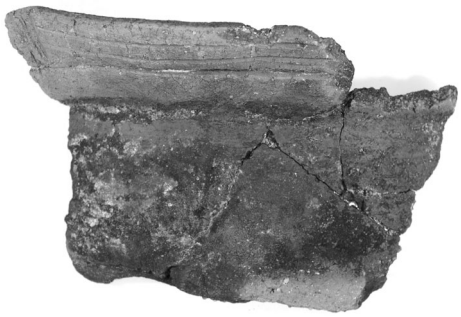
SD10（Ⅲ区）下層出土土器１

図版24



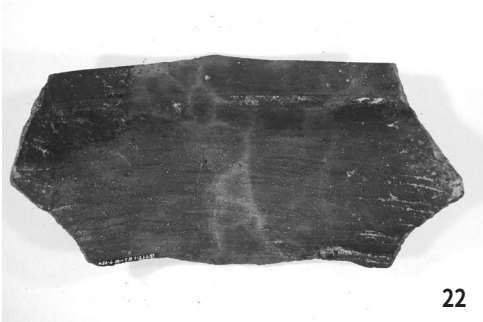


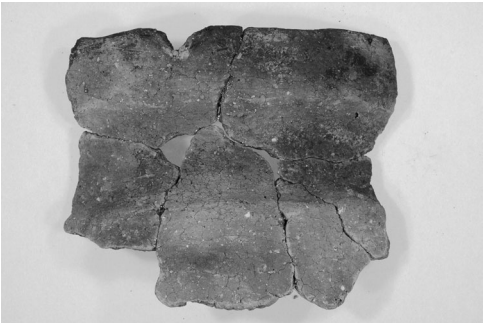




SD**10（Ⅲ区）下層出土土器２**

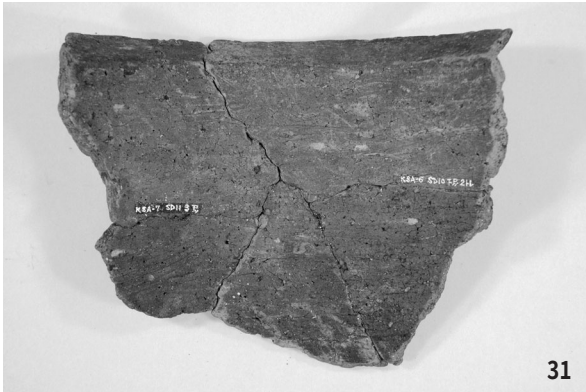
図版25





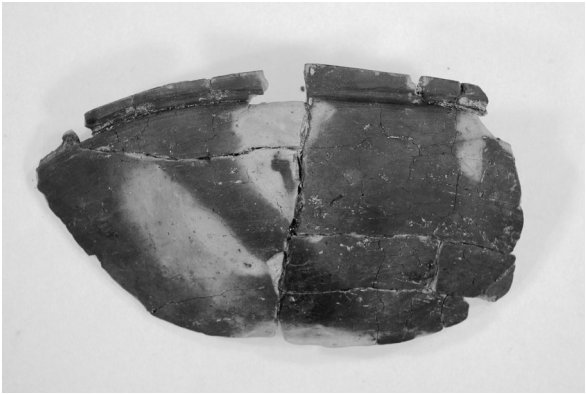
SD10（Ⅲ区）下層出土土器３

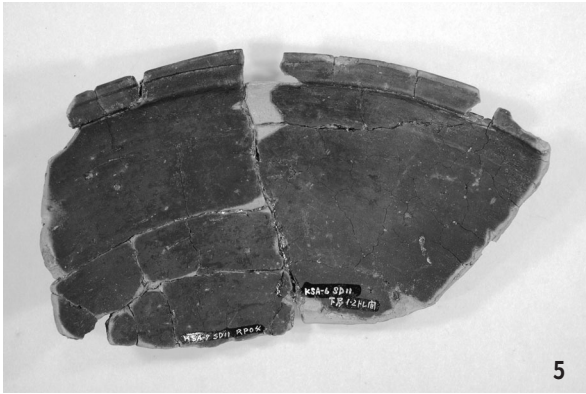
図版26



SD**10**（Ⅲ区）下層出土土器４

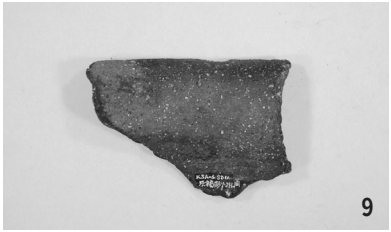
SD**11**（Ⅲ区）下層出土土器１





SD**11**（Ⅲ区）下層出土土器２

図版28



SD11（Ⅲ区）下層出土土器３

SD11（Ⅲ区）下層出土土器４

図版30

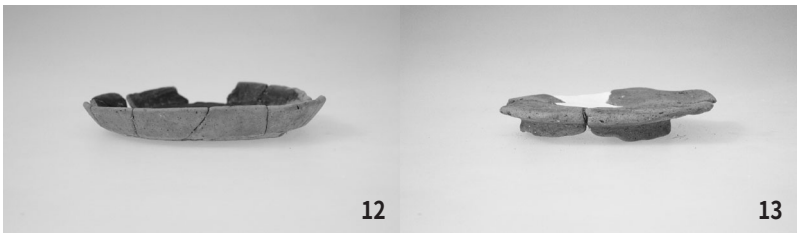
SD**11（Ⅲ区）下層出土土器５**

SD11（Ⅲ区）下層出土土器６

SD05（Ⅳ区）出土土器

図版32 第７次調査

SD**21**（Ⅳ区）出土土器

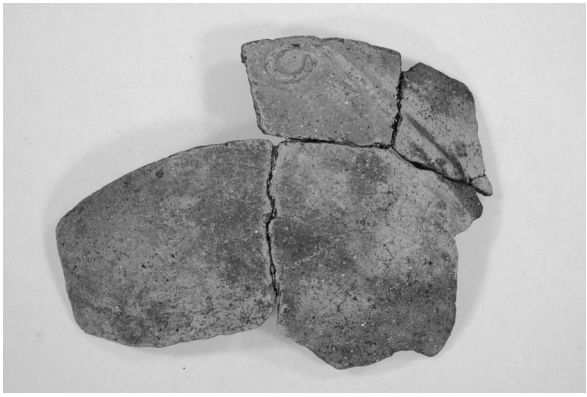


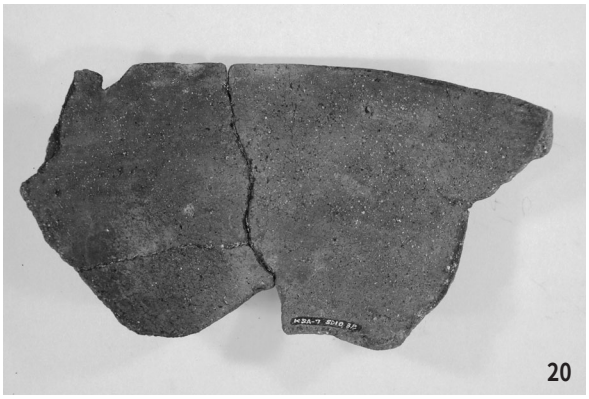
SD**26** 他出土土器

SD11（Ⅴ区）３層出土土器１

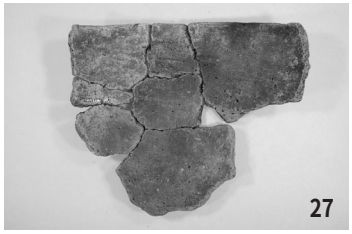
SD10（Ⅴ区）３層出土土器１

図版34



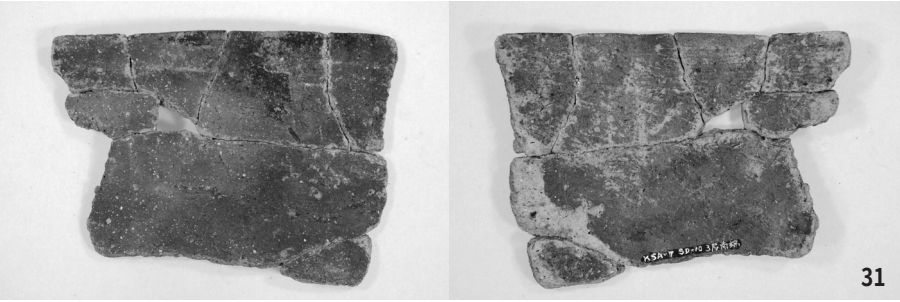


SD**10（Ⅴ区）３層出土土器２**

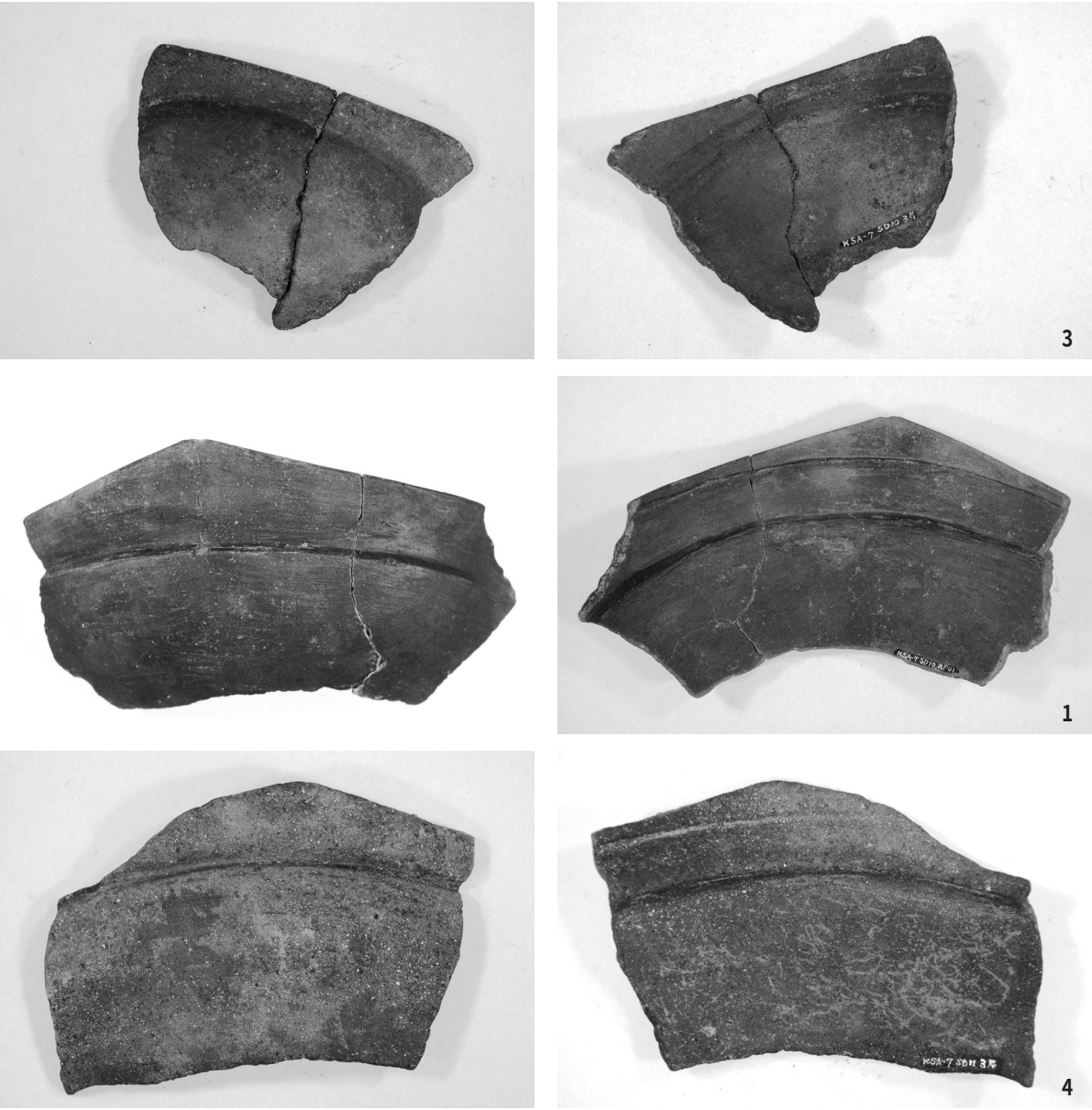


SD10（Ⅴ区）3層出土土器３

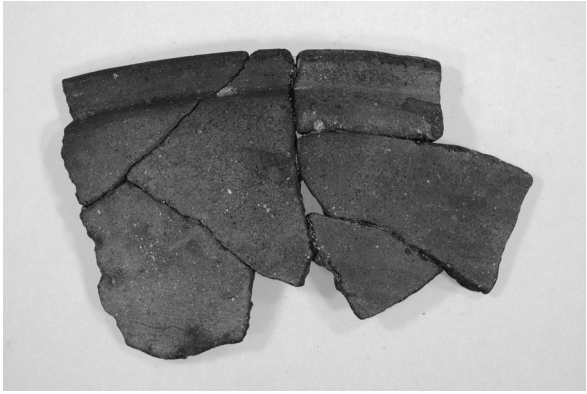
図版36



SD**10**（Ⅴ区）３層出土土器４

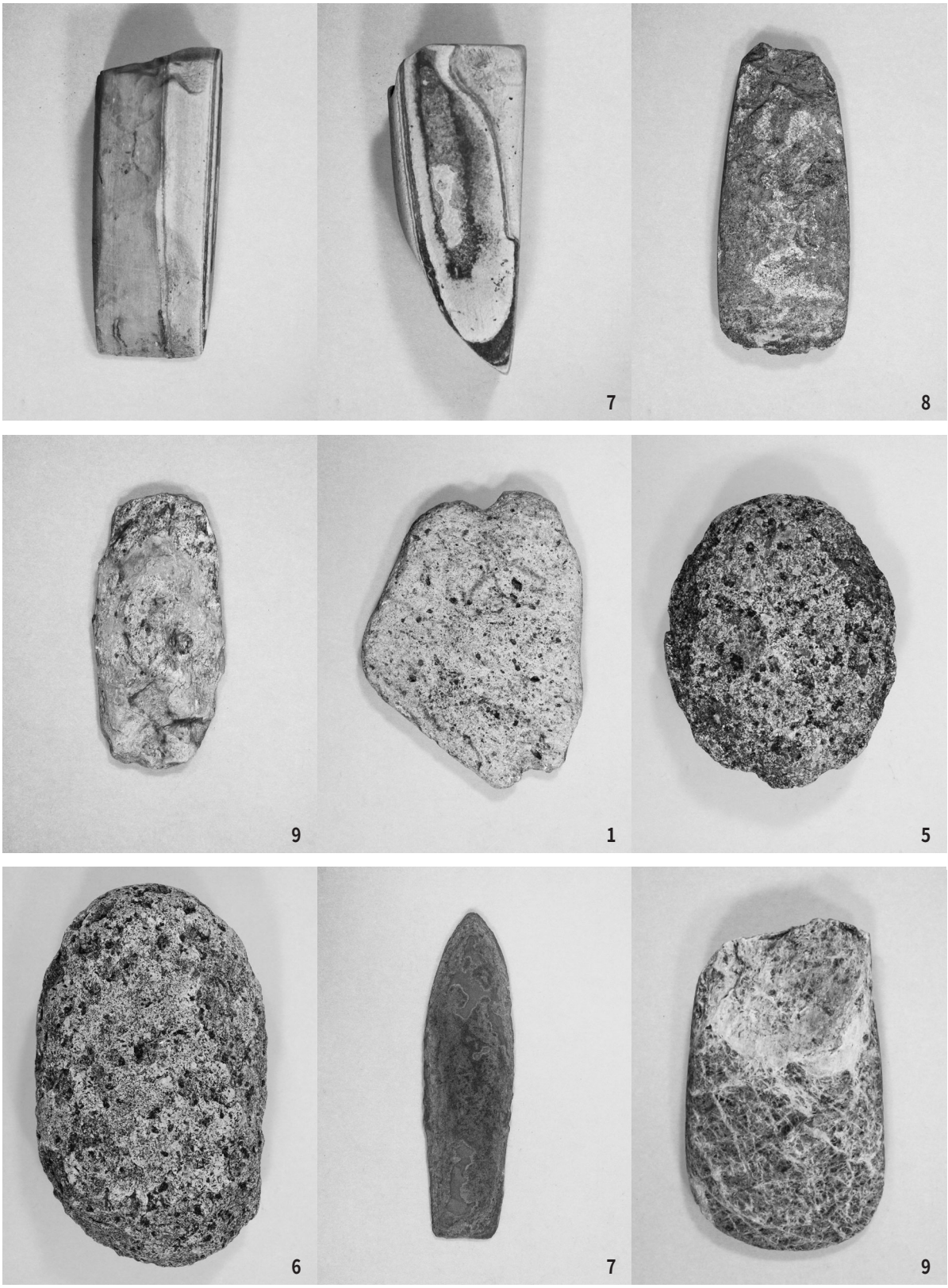


SD**11**（Ⅴ区）３層出土土器２

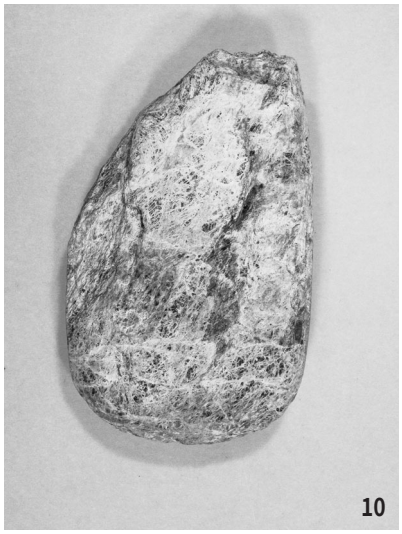


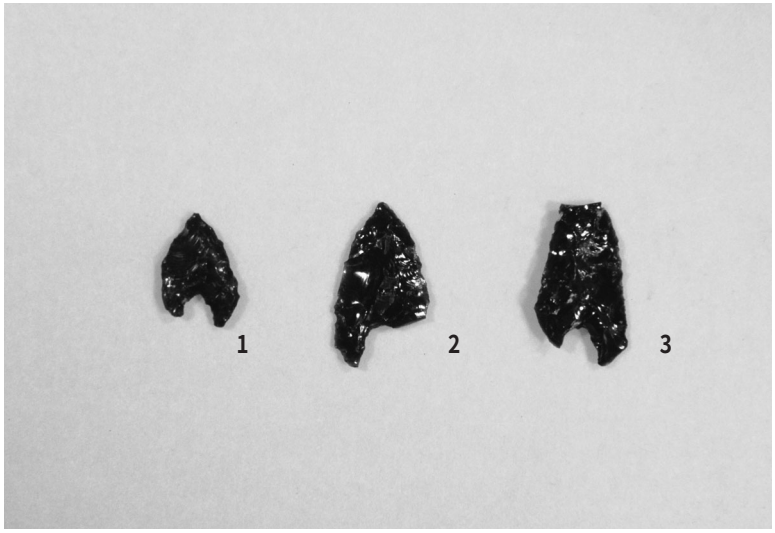
SD**11**（Ⅴ区）３層出土土器２

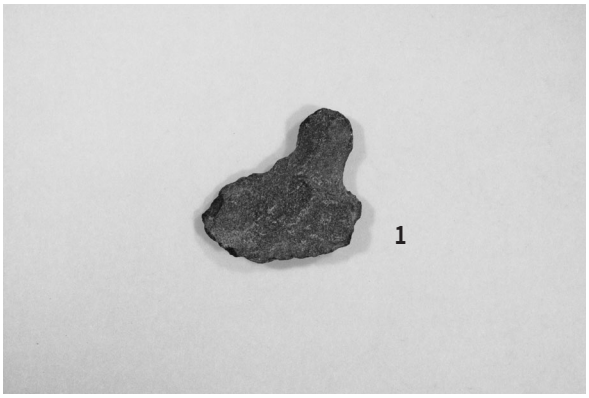
図版38



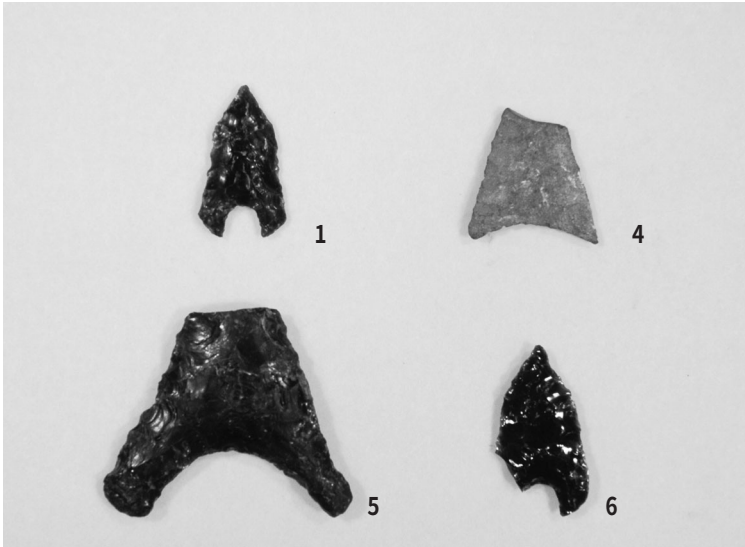
香椎Ａ遺跡第６次調査出土石器１





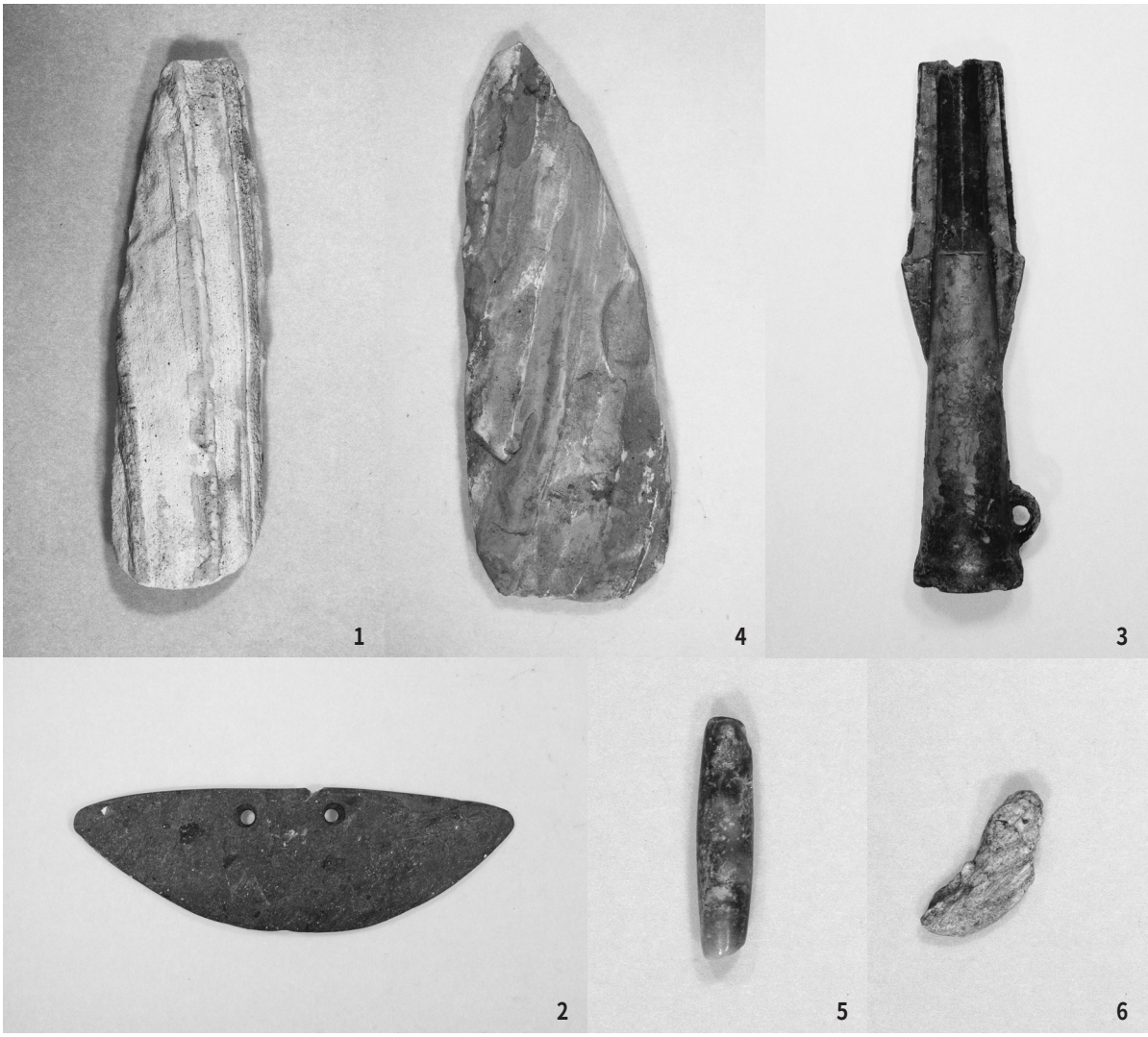


香椎Ａ遺跡第６次調査出土石器２



香椎Ａ遺跡第７次調査出土石器１

図版40



香椎Ａ遺跡第７次調査出土石器２

報　告　書　抄　録

ふりがな	かしいAいせき　4
書　　名	香 椎 A 遺 跡 4
副　書　名	一般国道３号博多バイパス建設に伴う調査４
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1145集
編 著 者 名	佐藤一郎
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1　TEL 092-711-4667
発行年月日	2012年（平成24年）3月16日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
かしいAいせき 香椎A遺跡 （第6次調査）	ふくおかしひがしくかしい2ちょうめちない 福岡市東区香椎2丁目地内	40130		33°　39′29″	130°　27′00″	20090825 ～20091221	1429㎡	記録保存
かしいAいせき 香椎A遺跡 （第7次調査）	ふくおかしひがしくかしい2ちょうめちない 福岡市東区香椎2丁目地内	40130		33°　39′29″	130°　27′00″	20100506 ～20101026	1548㎡	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
香椎A遺跡	集落	縄文時代・弥生時代・古代・中世	土坑・溝・古河川	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器	

要　約	調査地は後世の開墾により大きく改変され、削平を免れた谷部から古墳時代中期、縄文時代晩期前半を主とする時期の遺物が多く出土した。